

強・行・遠・足・年・表

コース	年度	回	参加者数	制限時間	実施期日	特 記 事 項
※(1)	大正13 (1924)	1	不明	男子:12時間 女子:不参加	11/3	最高到達地—上野原駅(70.0km)14人 ※(1)彦出の磯・御岳金桜神社・新府城・東京方面から各自コースを選び実施
※(2)	大正14 (1925)	2	不明	男子:24時間 女子:不参加	11/4	最高到達地—松本(120.4km)到着者数不明 24時間制で実施。
	大正15 (1926)	3	588人	男子:24時間 女子:不参加	11/4~5	※(2)松本方面へコース変更 最高到達地—松本(120.4km)14人
※(3)	昭和2 (1927)	4	666人	男子:24時間 女子:不参加	11/4~5	最高到達地—木曾福島(158.0km)3人 ※(3)木曾福島方面へコース変更
	昭和3 (1928)	5	786人	男子:24時間 女子:不参加	11/5~6	最高到達地—贅川(124.0km)3人
信	昭和4 (1929)	6	858人	男子:24時間 女子:不参加	11/4~5	最高到達地—豊科(128.9km)2人
	昭和5 (1930)	7	853人	男子:24時間 女子:不参加	11/4~5	最高到達地—松本(120.4km)5人 ●実施要項初めて作成される ●最優秀者に金メダル授与
濃	昭和6 (1931)	8	859人	男子:24時間 女子:不参加	11/4~5	最高到達地—有明(135.9km)1人
	昭和7 (1932)	9	859人	男子:24時間 女子:不参加	11/4~5	降雨のため先頭上諏訪にて中止
大	昭和8 (1933)	10	892人	男子:24時間 女子:不参加	11/4~5	最高到達地—有明(135.9km)1人
	昭和9 (1934)	11	875人	男子:24時間 女子:不参加	11/4~5	最高到達地—梓橋(122.7km)2人
町	昭和10 (1935)	12	891人	男子:24時間 女子:不参加	11/4~5	最高到達地—会衆(140.4km)1人
	昭和11 (1936)	13	890人	男子:24時間 女子:不参加	11/4~5	最高到達地—有明(135.9km)1人
方	昭和12 (1937)	14	890人	男子:24時間 女子:不参加	11/5~6	降雨のため先頭辰野にて中止 辰野到着7人(86.0km)
	昭和13 (1938)	15	871人	男子:24時間 女子:不参加	11/4~5	最高到達地—豊科(128.9km)1人
面	昭和14 (1939)	16	914人	男子:24時間 女子:不参加	11/4~5	最高到達地—豊科(128.9km)2人
	昭和15 (1940)	17	936人	男子:24時間 女子:不参加	11/13~14	降雨のため先頭松本にて中止 松本到着59人(117.5km)
	昭和16 (1941)	18	1,046人	男子:24時間 女子:不参加	11/4~5	最高到達地—有明(135.9km)2人
	昭和17 (1942)	19	1,184人	男子:24時間 女子:不参加	11/4~5	最高到達地—有明(133.7km)2人
	昭和18 (1943)	20	1,255人	男子:24時間 女子:不参加	11/4~5	最高到達地—松川(141.3km)2人 ●強行遠足20周年記念行事 ●記録映画撮影、厚生省関係者来校
	昭和19 (1944)	21	685人	男子:24時間 女子:不参加	11/4~5	戦時中につき、1・2年のみ小野まで実施 小野到着111人(91.7km)
	昭和20 (1945)					第二次世界大戦終戦につき中止

コース	年度	回	参加者数	制限時間	実施期日	特 記 事 項
信	昭和21 (1946)	22	1,743人	男子：24時間 女子：不参加	10/29～30	最高到達地—穂高（131.5km）4人
	昭和22 (1947)	23	1,429人	男子：24時間 女子：不参加	11/4～5	最高到達地—松川（141.3km）2人
	昭和23 (1948)	24	1,160人	男子：24時間 女子：不参加	11/29～30	最高到達地—松川（141.3km）1人 ●併設中学と新制高校合同参加のもとに実施される
	昭和24 (1949)	25	1,240人	男子：24時間 女子：不参加	10/26～27	最高到達地—信濃大町（152.6km）1人 ●当回より定時制生徒希望者89人参加
濃	昭和25 (1950)	26	1,548人	男子：24時間 女子：6時間	10/31～ 11/1	男子：最高到達地—信濃大町（152.6km）1人 女子：学校から穴山（距離不明）104人参加 ●当回から女子が参加する ●創立70周年記念記録映画撮影
	昭和26 (1951)	27	1,657人	男子：24時間 女子：8時間	10/25～26	男子：最高到達地—木崎（156.9km）1人 女子：学校から台ヶ原（28.6km）206人到着
	昭和27 (1952)	28	1,638人	男子：24時間 女子：8時間	10/25～26	男子：最高到達地—松川（141.1km）2人 女子：学校から日野春（距離不明）338人到着
	昭和28 (1953)	29	1,555人	男子：24時間 女子：8時間	10/25～26	男子：最高到達地—信濃大町（152.6km）1人 女子：学校から日野春（距離不明）到着者数不明
大	昭和29 (1954)	30	1,206人 ※(4) 男子のみ	男子：24時間 女子：8時間	10/25～26	男子：降雨のため先頭川岸（76.6km）で中止、川岸到着3人 女子：学校から日野春（距離不明）314人到着 ※(4)女子参加者数不明
	昭和30 (1955)	31	1,322人	男子：24時間 女子：8時間	10/25～26	男子：降雨のため先頭岡谷（77.5km）で中止 岡谷到着6人 女子：学校から富士見（45.2km）132人到着
	昭和31 (1956)	32	1,421人	男子：24時間 女子：8時間	10/25～26	男子：最高到達地—松川（142.8km）1人 女子：学校から富士見（45.2km）182人到着
	昭和32 (1957)	33	1,437人	男子：24時間 女子：8時間	10/14～15	男子：最高到達地—築場（167.1km）1人 【当コースの最高記録となる】 女子：学校から富士見（45.2km）86人到着
方	昭和33 (1958)	34	1,494人	男子：24時間 女子：8時間半	10/29～30	男子：最高到達地—木崎（160.2km）1人 女子：学校から富士見（45.2km）156人到着 ●記録映画「若き驕の記録」を撮影
	昭和34 (1959)					伊勢湾台風による道路欠損多く中止
	昭和35 (1960)	35	1,507人	男子：24時間 女子：8時間半	10/28～29	男子：最高到達地—信濃大町（152.6km）1人 女子：学校から富士見（45.2km）96人到着 ●創立80周年記念行事の一環として実施される
	昭和36 (1961)	36	1,378人	男子：24時間 女子：8時間半	10/19～20	男子：最高到達地—信濃大町（152.6km）1人 女子：学校から富士見（45.2km）126人到着
小 諸 方 面 (終点地制)	昭和37 (1962)	37	1,403人	男子：15時間 女子：7時間	10/16～17	男子：終点松原湖（66.0km）267人到着 女子：箕輪新町から松原湖（38.0km）14人到着 ●佐久往還コースに変更
	昭和38 (1963)	38	1,576人	男子：17時間 女子：5時間	10/10～11	男子：終点中込（87.0km）72人到着 女子：箕輪新町から海ノ口（32.0km）18人到着
	昭和39 (1964)	39	1,787人	男子：17時間 女子：5時間	9/30～ 10/1	男子：終点中込（87.0km）127人到着 女子：若神子から野辺山（26.0km）146人到着
	昭和40 (1965)	40	1,959人	男子：20時間 女子：5時間半	10/15～16	男子：終点小諸（100.0km）235人到着 女子：三軒屋から小海（32.0km）146人到着 ●創立85周年記念行事として実施 記念記録映画撮影 ●NHKスタジオ102出演

コース	年度	回	参加者数	制限時間	実施期日	特 記 事 項
小	昭和41 (1966)	41	1,810人	男子：20時間 女子：5時間半	10/17～18	男子：終点小諸(103.0km)170人到着 女子：三軒屋から小海(33.0km)253人到着 ●水道道、敷島金属、ガソリンスタンドのコースを採用
	昭和42 (1967)	42	1,796人	男子：20時間 女子：5時間半	10/16～17	男子：終点小諸(102.1km)191人到着 女子：三軒屋から小海(33.0km)272人到着
	昭和43 (1968)	43	1,564人	男子：20時間 女子：5時間半	10/7～8	男子：終点小諸(102.1km)188人到着 女子：三軒屋から小海(33.0km)276人到着 ●二校選抜入試開始 ●女子学年別ユニフォーム着用
	昭和44 (1969)	44	1,439人	男子：20時間 女子：5時間半	10/7～8	男子：終点小諸(102.0km)163人到着 女子：降雨のため野辺山で中止
	昭和45 (1970)	45	1,352人	男子：20時間 女子：5時間半	10/6～7	男子：終点小諸(103.0km)213人到着 女子：三軒屋から小海(33.0km)310人到着 ●創立90周年記念行事
諸 方 面 (終点地制)	昭和46 (1971)	46	911人 男子のみ	男子：21時間 女子：5時間半	10/13～14	男子：終点小諸(103.0km)21人到着 降雨のため途中中止 女子：雨天中止 ●小諸コース10周年 ●定時制生徒最後の参加 ●男子反射テープ使用 ●団体乗車方式採用
	昭和47 (1972)	47	1,304人	男子：21時間半 女子：6時間	10/17～18	男子：終点小諸(107.1km)219人到着 女子：高根東小から海ノ口(32.0km)412人到着 ●松原湖迂回、原ロータリー、上の山コース採用 ●NHKカメラリポート取材
	昭和48 (1973)	48	1,290人	男子：21時間半 女子：6時間	10/17～18	男子：終点小諸(106.0km)306人到着 女子：高根東小から海ノ口(32.0km)417人到着
	昭和49 (1974)	49	1,320人	男子：21時間半 女子：6時間	10/16～17	男子：終点小諸(105.0km)404人到着 女子：高根東小から海ノ口(32.0km)446人到着 ●現在と同型の検印カード採用
	昭和50 (1975)	50	1,347人	男子：21時間半 女子：8時間	10/14～15	男子：終点小諸(105.0km)455人到着 女子：高根東小から小海(42.0km)447人到着 ●創立95周年 ●三校選抜入試開始 ●記録映画「今青春を行く」(YBS16ミリ50分カラー)制作 ●NHK同行取材「よーいどん」
	昭和51 (1976)	51	800人 男子のみ	男子：21時間半 女子：8時間	10/13～14	男子：終点小諸(105.0km)347人到着 女子：雨天中止
	昭和52 (1977)	52	1,334人	男子：21時間半 女子：8時間	10/5～6	男子：終点小諸(105.0km)436人到着 女子：高根東小から小海(42.0km)293人到着 ●四校選抜入試開始
	昭和53 (1978)	53	1,248人	男子：21時間半 女子：8時間	10/3～4	男子：終点小諸(105.0km)438人到着 女子：高根東小から小海(42.0km)499人到着 ●須玉バイパス使用 ●NHK新日本紀行「八ヶ岳青春譜」放映
	昭和54 (1979)	54	1,157人	男子：21時間半 女子：8時間	10/3～4	男子：終点小諸(105.0km)378人到着 女子：高根東小から小海(42.0km)452人到着 ●安全運転依頼標識作製 ●「フォト」「週刊サンケイ」記者同行取材
	昭和55 (1980)	55	1,191人	男子：21時間半 女子：8時間	10/1～2	男子：終点小諸(105.0km)442人到着 女子：高根東小から小海(42.0km)521人到着 ●創立100周年記念行事 男女で好記録続出

コース	年度	回	参加者数	制限時間	実施期日	特 記 事 項
小 諸	昭和56 (1981)	56	1,173人	男子：21時間半 女子：8時間	10/6～7	男子：終点小諸(101.0km)394人到着 女子：高根東小から小海(41.5km)535人到着 ●佐久往還20周年記念行事 ●反射タスキ使用(男子)
	昭和57 (1982)	57	1,173人	男子：21時間半 女子：8時間	10/6～7	男子：終点小諸(101.0km)415人到着 女子：高根東小から小海(41.5km)543人到着 ●テレビ朝日「モーニングショー」で全国に放映
	昭和58 (1983)	58	1,196人	男子：21時間半 女子：8時間	10/5～6	男子：終点小諸(101.0km)414人到着 女子：高根東小から小海(41.5km)533人到着 ●五校選抜入試開始
	昭和59 (1984)	59	1,191人	男子：21時間半 女子：8時間	10/4～5	男子：終点小諸(101.0km)342人到着 女子：高根東小から小海(41.5km)538人到着 ●小諸終点20周年記念 ●女子：松原湖～小海間新コース
	昭和60 (1985)	60	1,148人	男子：21時間半 女子：8時間	10/2～3	男子：終点小諸(101.5km)391人到着 女子：高根東小から小海(41.5km)535人到着 ●創立105周年・強行遠足60回記念 ●女子：高根東小～長沢間新コース
	昭和61 (1986)	61	1,055人	男子：21時間半 女子：8時間	11/4～5	男子：終点小諸(101.7km)281人到着 女子：高根東小から小海(41.5km)487人到着 ●かいじ国体のため11月実施
	昭和62 (1987)	62	1,044人	男子：21時間半 女子：8時間	10/7～8	男子：終点小諸(102.0km)295人到着 女子：高根東小から小海(41.5km)446人到着 ●研数学館の記者同行取材
	昭和63 (1988)	63	1,084人	男子：21時間半 女子：8時間	10/6～7	男子：終点小諸(102.0km)272人到着 女子：高根東小から小海(41.5km)497人到着 ●雨天のため1日順延 ●女子：出発時刻を1時間繰り下げる
	平成元 (1989)	64	1,140人	男子：21時間半 女子：8時間	9/27～28	男子：終点小諸(102.0km)292人到着 女子：高根東小から小海(41.5km)516人到着 ●TBSテレビ「ギミアブレイク」 ●NHK教育「青春スクランブル」取材
	平成2 (1990)					雨天中止 ●創立110周年
方 面 (終点地制)	平成3 (1991)	65	1,085人	男子：21時間半 女子：8時間10分	10/2～3	男子：終点小諸(103.6km)257人到着 女子：須玉小から小海(46.0km)318人到着 ●若神子～三軒屋間新コース ●女子：出発を須玉小に変更
	平成4 (1992)	66	1,038人	男子：21時間半 女子：8時間40分	10/13～14	男子：終点小諸(103.6km)220人到着 女子：須玉小から小海(46.0km)281人到着 ●北見北斗高校との交流開始、代表4人参加
	平成5 (1993)	67	999人	男子：21時間半 女子：8時間40分	10/6～7	男子：終点小諸(103.6km)237人到着 女子：須玉小から小海(46.0km)360人到着
	平成6 (1994)	68	964人	男子：21時間半 女子：8時間40分	10/4～5	男子：終点小諸(103.6km)197人到着 女子：須玉小から小海(46.0km)343人到着
	平成7 (1995)	69	928人	男子：21時間半 女子：8時間40分	10/3～4	男子：終点小諸(103.3km)148人到着 女子：須玉小から小海(45.8km)335人到着 ●創立115周年記念 ●北見北斗高校代表4人参加
	平成8 (1996)	70	916人	男子：21時間半 女子：8時間40分	10/1～3	男子：終点小諸(103.3km)124人到着 女子：須玉小から小海(45.8km)291人到着 ●北見北斗高校強行遠足へ本校代表4人参加

※参加者数は全日制・定時制・通信制の男女生徒の統計。



江口俊博校長

■ 全国体育日

大正13年の秋、明治節（11月3日）を中心に、全国一斉に体育週間が設立され、文部省からは、各中学校に、11月3日を全国体育日として何か体育的な行事を催すようにとの通達が発せられた。それに応えながら、しかも、一部選手のスポート体育ではなく、全員だれにでも容易にできる運動、すなわち「歩く」ことが提唱され、実施されることになったのが、本校の強行遠足である。

その「強行遠足」の名は、第1回目（大正13年）は全国体育日の「遠足運動」、第2回目（大正14年）は全国体育日「強遠足」、第3回目（大正15年）は全国体育日「強行遠足」となっており、第3回目から「強行遠足」の名が出てくる。昭和12年版、昭和17年版の『本校における強行遠足の意義と其の実際』には、表彰状の文面として、「本年体育日ニ挙行セル鉄道沿線強行遠足」とある。

そして、「敢えて強行遠足と名づけたのは、自分の体力に応じて歩けるだけ歩くという事を強調せんが為である。」と、この小冊子は述べている。さらに、「由来人情の弱点は安易なものとの妥協である。歩く場合でも少しく疲労を感じずと乗り物の事を考える。或はある程度で止めてしまうという事になり勝である。之等一切の妥協と怠慢とを排して、精根限り歩くという事を重視したのである。今一つは今迄何処の学校でも、遠足の翌日は休日にするという事が不文律の習慣になっていたが、この慣習を打破

して、平常通り午前9時始業で、授業を行って行くという事を建前にした。

「こうした所謂真剣勝負に因って、剛毅不屈の精神を養いたいと思ったのである。」という。

■ 江口俊博校長

強行遠足を提唱し、実施した江口校長は、『強行遠足20周年記念誌』（昭和19年発行）に、次のように寄稿している。

「私が甲府中学校に赴任したのは大正12年即ち関東大震災の時でした。兼ねて電車や何かに乗り慣れていた東京人士が突然足を奪われてドノ位迷惑したのか実情を聞かされた私は歩くことの必要を一人痛感したのです。而して私は少し以前から東京に出ると少し時間の余裕を持つ折は態々電車通りを電車の行く方に徒歩で歩いて何台も何台も電車に乗り越される修練をして居たのです。初めは何とも馬鹿臭くて幾度が初心を翻して飛び乗ってしまったのですが、段々慣れてしまって追い抜く電車に無関心になって悠々歩ける様になり、そして歩いてみると全然電車に支配されない独立の世界を東京市中に発見したうれしさに鼓舞されて益々歩きたくなり、歩けば歩く程に粘り気が出てくるのを感じつつあった際のこと故大震災の此話を聞いた時、一歩歩く教育をして置く必要を感じ、先生方の御同意を得て強行遠足を実施した次第です。

初めの内は生徒諸君も喜びばかりは感せず、年々同じみちを歩くのはツマラナイとか遠く歩けば歩く程、帰りの電車賃が損だから補助のみちを講じたがよいのかと様々の注文がありましたが、年百年中米の飯を繰返しても馬鹿氣で来ないし、春夏秋冬の四時の序は百年経っても少しも替らぬ。それが人生の一面故に人間は繰返し繰返し同じみちを踏み得る根氣を持つ必要があると応酬し、中学卒業より大学卒業の方が学資がいる。遠く歩けば歩いただけ汽車賃が余計にいるのが当たり前だと慰諭してツイツイ現在の型を守り立てたのでした。

歩く位平凡な事はない。誰だって出来る。従って芸当をやった感じがしない。多くの人はどうも芸当

がしたい、人目に立つことがして見たい。併し芸当が手に入るのは容易のことではない。従って誰にもと云うわけには行き兼ね。それを多くの人が芸当を心掛けては物にならずに無駄骨を折り苦む「小人は人目に立つべき大善ならばせんと思ひて小善を目にもかけず—君子は小善を積んで徳を為す。徳は美の淵源なり、徳あれば無心にて美限りなし」という蕃山先生の名句に鼓舞されて、壮年時に横超した私は雀百まで踊り忘れず、雄大高遠の論理よりも目前身近の始末を^{せうじ}忽せにしない生き方に曳きつけられた。」

江口先生と強行遠足

嶋 田 武

秋が^{あき}催ると共に、どこの学校でも運動会が催され、父兄も参加して秋の陽を浴びながら、心ゆくばかり手足を伸ばして跳ね歩くのは、健康的ではた目にも微笑ましい光景である。

秋の催物として運動会と並んで強歩大会とか剛健遠足とか、または強行遠足などと銘打って、歩く行事がしきりに行われているのは、山梨県の一つの特色だろう。よその県の学校では、脚を鍛えるべく、これはど力^{ちから}補を入れようとはしない。本県では高等学校はむろん、中学校でも強歩大会を行っている学校が少なくない。戦前には、今の山梨大学の前身の山梨高等工業学校では、沿線の中央線に沿って東京方面に向って歩き、文部省の玄関をゴールとして歩み続けたものだから、さすが帝都人士もどきもを抜かれたものであったが、その山梨高等工業学校の健脚者は、甲府中学で5ヶ年間鍛練した^{もへ}猛者であることに不思議はない。

甲府中学が大正13年の11月3日の明治節に、体育行事を行うべしとの文部省の命令に従い、「強行遠足」を計画したのは、時の校長江口俊博先生であった。一昼夜を歩き続けたら、人間はどのくらい歩けるものだろうか。歩き続けることによって不^こ撓不屈の根性を植えつきたい——これが江口先生のねらいとするところであった。

24時間歩き続けるということは、大変な忍耐力を必要とする。孤独との戦でもあり、睡魔との戦であり、疲労、空腹、苦痛との戦でもある。それ等のすべてと戦いながら、それに堪え抜く精神——ガンバリズムの涵養になると信ずればこそ、江口先生は強行遠足を立案されたのであった。

けれども世間を挙げて賛成したわけでは決してない。一部からは反対の声もあった。秋も深い信濃路を夜をこめて歩くなどと言うことは、夜露が体にさわらぬ^{さわ}苦がない。病人が続出したらどうするつもりか、無暴なことだと言うのである。併し江口校長は周到な準備の下に実施なされた。その結果は、すべての心配は杞^き憂に終って、大成功であった。生徒たちは精根を尽して歩み、健脚の者も脚弱の者も、快い満足にひたっていた。江口校長が引退なされた後の歴代校長は、先生の御意志を引継がれて今日に至っている。戦時中一時中断されたが今年（昭和42・1967年）は42回目になる。

甲府中学が選んだ強行遠足の舞台は、国鉄中央線に沿った国道を、長野県に歩むコースであった。1年生で上諏訪まで到達した者は、健脚者として草鞋を型どったメダルを与え、上級生は塩尻をメダル線として表彰した。メダル線に達してもなお、余力のある者は102キロの塩尻からさらに15キロ先の松本を目ざした。強行遠足の合言葉は117キロの「松本へ、松本へ！」であったが、更に松本を通過して152キロの^お大町に到着する者があって驚かされたが、今迄の最高記録は大町を越えて167キロの^な築場に行き着く者を生んだ。24時間内に167キロを歩くことが出来たのである。おそらく高校生としての世界最高記録ではなかろうか。驚くべき健脚者が生れたものである。

終戦後甲府一高でいち早く復活しようとしたところが、進駐軍の教育担当者は、軍国主義に通じる疑ありとて、許可を渋っていたが、学校当局の熱心な要求と実施内容の説明で、許可が下り21年（1946）の秋には食糧不足に苦しみながら、実施することができた。

昨今の自動車の激増は、信州往還を千人もの生徒

が、歩行することは極めて危険であることから、止むを得ず佐久往還にコースを変更し、小海線に沿い小諸を終点とせざるを得なくなってしまったので、「松本へ！」の魅力が消え失せてしまったことと、24時間を歩けるだけ歩くことが不可能になってしまったけれども、時勢の移り変りでいたしかたのないことである。

一昨年の秋(40年10月16日)第40回の強行遠足が、NHKの「スタジオ102」の番組に取りあげられて、全国へ放送されて話題を呼んだ。世は一万歩運動が提唱されて歩くことを奨励しているが故に、今や強歩は時代の脚光を浴びて、もてはやされている。甲府一高の強行遠足40年の歴史を省みると、無暴なことで批判され、野蛮な行事とののしられたかと思うと、戦時中には戦場につながる健脚だともてはやされたこともあった。

世間の批判がどうであれ、信念に基き黙々と40年間歩み続けてきた歴史こそ貴い。強行遠足の創始者の江口校長は、生徒に歩くくせをつけようと専ら鼓舞激励されたが、先生御自身も必ず生徒に悟して歩み、50歳を越えておられた老体で、毎年上諏訪までは歩行されて実践垂範された。秋深い甲府盆地に展開されている歩け歩け運動を、地下の江口先生はあの温顔に笑をたたえながら、じっと眺めていられるにちがいない。(元甲府一高教諭 昭和42年10月16日・1967 甲府放送局から放送)

たわ 撓まずひるまずたじろがず

——江口先生と私——

小 尾 鳩 三

一、山岳部創設のこと

(略)

二、強行遠足発足のこと

その夏も終つてのある夜、先生のお宿をお訪ねした時「人間は一体1日にどのくらい歩けるだろうか。」という話題になり、それから「あるけるだけあるいて見たい。」という話になった。その数日後の夜。

有泉亭さんが寄宿舍から許可を得て私の宿の橋町一番地の当時の小宮山圭助さんの宅に來られた。そこには当時山岳部長の矢島種次先生もご厄介になっておられたのである。

私どもはそこで秋の遠足にぜひあるけるだけあるくという案を一つ加えていただくように矢嶋先生にお願いし、それから江口校長にも校長室でお願いした。実はそれは実に虫のいいわがままのお願いで、今考えると身のちぢむ赤面汗顔のものであった。

恐らく職員会議では多くの異論も出たろうと思う。実はそのころはいい気なもので先生方におたずねもしなかったが、だんだん年をとって来ると恥かしくなってくる。先輩の先生方、もう時効期間は過ぎていよう。思い出してお洩しをお願いしたい。

その虫のいい案なるものは——希望者は足にまかせて東京方面に午前8時から夕方まであるけるだけあるく、それで道が不案内なので道しるべをするという意味で我々9名には午前4時に先発をゆるすというものである。よく学校で許可したものだと思う。

昇仙峡方面など遠足もあったが、私どもは箕子峠で道を迷ったりして、夕やみ迫るころに上野原駅で帰って来たが、後続の人達も同駅までは多勢来た。

それにしても、整然たる立案もなくてあんな遠足をよくやらせたものだ。今ならば、ソレ県がどうのこうのと、心配することだろう。こう踏み切った江口先生はやはり大きかった。これが第1回の強行遠足である。

第2回からは信州方面に向かったが、成績は毎年先生から関西の私のところにとどけて下さった。

甲府中学に奉職してからも私は先生が生徒と一緒にあるかれるのを拝見しておどろいた。甲府駅で生徒がビッコをひいているのに、ご自分は足かろがろと、いたわっておられたのが目に浮かぶ。

強行遠足は先生の一つの信念の現れである。

(元甲府一高教諭『江口俊博先生追悼集』昭和44・1969)

強行遠足沿革

※『佐久往環強行遠足20周年記念誌』の「強行遠足
事始め」および『強行遠足綴』から」を底本と
し、事項を整序しながら、諸資料から補足した。

※明らかな誤字と思われる部分は訂正し、旧字体・
旧仮名遣いは新字体・現代仮名遣いに直した。
また、片仮名文は平仮名表記に改めた。



三枝茂雄
画

東京方面コース 第1回（大正13年・1924）

第1回（大正13年・1924）

● 遠足運動

11月3日、全国体育日に際し、当校では全校職員生徒を各自の脚力と希望に応じて、次のように分類し、遠足運動を行った。

第1班 差出の磯 往復7里（27.5km）

第2班 御岳本社 同8里（31.5km）

第3班 新府城跡 同9里（35.4km）

第4班 最健脚者を選抜し、各自の実力を充分に発揮する目的を以て、中央線に沿い、甲州街道を東京に向かって行ける所までぐんぐん行き、帰途は汽車に拠る事にした。（『校友会誌』第49号、大正13年12月20日発行・1924）

● スタートは午前6時、校庭の第4班のみは、12時間制を定めた。結果は、最高記録は上野原駅（64km）であった。検印方法は現在と違い、乗車する国鉄駅の駅長の印によった。

● この日、職員は、一部は生徒と共に歩き、一部は自転車を使用し、共に生徒に付き添って救護の任に当たった。

● 実施後の反省

実施後の第4班のコースの反省から、次のような点が今後にかされることとなった。

1 東方面は途中に笹子小仏等の坂路があり、且つ道路上に険悪な場所があって、全校1000の生徒の運動舞台としては不適當である。

2 新コースとして西方面、即ち信州往還を選ぶ。

3 体育日の意義を徹底させ、真に自己の持つ力量を遺憾なく発揮させ、学校が期待する目的を達成するには12時間では物足らぬ、故に時限を延ばして一昼夜24時間とすること、而してその出発の時間は午前零時とする。

4 救護監督上に就ては、更に一段の考慮を払い、過失その他の事故を生じないように注意する。

（『本校に於ける強行遠足の意義と其の実態』

昭和12・1937）。

松本方面コース 第2回～3回（大正14・15年・1925・1926）

第2回（大正14年・1925）

● 強遠足

11月3日、全国体育日に当り、我が校では、例の徒歩主義に即して昨年とおりの強遠足を挙行した。即ち、全校生徒を脚力に応じて二分し、比較的弱者組は御岳千歳滝へ、強者組は信州往還を松本へ向かって脚の続く限り、努力のあらん限り行ける所まで歩いて、帰途は中央線を利用することにしたのである。

● てんでんに出発

夕方の甲府の町は草鞋を提げて歩く者、脚絆を持って走っている者、菓子や果物を買っている者、三々五々逢う者は異口同音に、貴公何時に出る、ウウ俺は2時だぞ、オマアンは、僕はKと3時に立つ事に決めた、馬鹿、俺なんか1時だぞ、Hは零時だとよ、なあに追い越してやるから見ろ、我輩は台ヶ原で朝食だぞ。こんな応答で持ち切っていた。……いよいよ当日が来た。猛者連は夜の12時から学校事務所へ証印を貰うべく犇々押しかけて来る。事務員から証印を貰っては点々と出かける。午前6時までに全部発足した数、実に六百数十人。外に職員も相前後して発足した。

● 上諏訪87名、下諏訪10名、岡谷6名、川岸3名、塩尻3名 （『校友会誌』51号より）

第3回（大正15年・1926）

● 制限時間は前回同様、24時間で松本駅終点指定制とした。

● 体力に余力充分あり

11月3日、午前0時スタート、参加者588人、そのうち211人は県内にて中止。松本到着は14人。「彼らの体力には余力充分ありと認める」ということから、次年度のコース変更となる。尚、足弱者のためには、①新府城跡コースと②御岳昇仙峽

強行遠足沿革

コース（4回まで利用）が用意された。平均距離49.5km。

● 優秀者

全国体育日強行遠足の成績佳良賞状受領者は、1年は茅野上諏訪で23名、2年は上諏訪下諏訪岡谷で22名、3～5年は下諏訪岡谷で13名。成績優秀のメダル受領者は、1年下諏訪1名、2年川岸3名、3年塩尻2名、4年塩尻村井7名、5年辰野塩尻2名。最優秀メダルと国民新聞社寄贈のメダル受領者は、2年村井1名、あと松本到着者14名である（『校友会誌』第53号）。

木曾福島・松本方面コース 第4回・5回（昭和2・3年・1927・1928）

第4回（昭和2年・1927）

- コースを木曾福島方面の29里半（115.8km）コースと、従来の松本方面コースの2方面に行ける方式を採った。前年健脚余力ある者多い為に、24時間制で終点制なしとし、およその目標地を木曾福島町を目途とした。

● 木曾へ、松本へ

木曾路の難所は鳥居峠であるが、それを越えて終点に到着したのは3名。峠の手前、奈良井駅に着いた者が3名。計6名が木曾路に入った。

一方従来の松本方面は塩尻以北前進者27名、内21名が松本駅到着。前年参加者の34%が長坂どまりだったが、10%になった。

第5回（昭和3年・1928）

- コースは前年同様、木曾と松本コース。足弱者コースは新府コースを残し、他は廃止した。記録によると、木曾路には8人で、鳥居峠の手前の奈良井5人、^{上ノ川}賛川に3人。松本方面は、松本を越えてなんと篠井線の田沢駅（松本から約7km先）15km先の明科駅方面にまで行った者もあらわれた。松本以北は43人（うち松本着33人）の到達をみた。

信濃大町方面コース 第6回～36回（昭和4～36年・1929～1961）

第6回（昭和4年・1929）

- 木曾路は鉄道に沿ってはいたが、駅と駅との間隔が長く、乗車指導が困難であったという理由から、松本以北を大糸線沿線の信濃大町方面と定めた。
- 時間制限は24時間制、スタート0時、参加者は858人と800台を越した。最高は豊科（128.9km）2人、松本も56人と新記録。

第7回（昭和5年・1930）

- 強行遠足の実施要項が初めて作成された。今回は、松本到着は僅か5人と低迷。
- 「実施要項」
 - 1 天候 出発時に降雨ありたる場合は中止。
 - 2 コース 辰野迂回で国道に沿い、松本方面に至る。近道は不可。
 - 3 カード 出発時に組監督より受け取って出発する。但し遅刻者後発隊は事務にて受取る。穴山行は午前6時迄に学校に集合。
 - 4 配布場所 5年・講堂前、4年・控所前、3年・玄関前、1年・西側自転車置場。
 - 5 審判検印 コース上適当な場所数箇所にて検印す。審判腕章ある先生にカードを示すこと。カードは翌日組監督に提出。
 - 6 メダル (1年) 下諏訪以遠。(2年) 川岸以遠。(3年) 辰野以遠。(4年) 小野以遠。(最優秀) 賞状及び額縁。
 - 7 賞状 (1年) 茅野以遠。(2年) 上諏訪以遠。(3年以上) 下諏訪以遠。
 - 8 無効 検印漏れ。カード紛失者は無効。時間外出発、又は不正行為は之を認めず。
 - 9 救護班 途上各区间に先生数名配置。
 - 10 持薬 ^{なまぐさ}可成生徒各自救急薬を用意すること。

11 服 装 制服制帽、靴又は草鞋。下駄は禁ず。
防寒具、ゲートル着用。

12 弁 当 2食又は3食分

13 そ の 他 途上にて火を燃やさないこと。他人
に迷惑をかけぬこと。乗車割引券を
持参すること。

第 8 回 (昭和 6 年・1931)

- 市街道路（下諏訪一岡谷、辰野一小野、小野一塩尻）は自由に近路を通ることを許す。ただし鉄道沿線・鉄道鉄橋を渡ることは絶対不可。
- 検印所は㊸
途中救護所の場所は示すが、検印場所は秘密とする。㊸検印所は、白須、富士見、青柳、辰野、小野、村井北又は島田村の計6ヶ所とした。
- 最高到着地、有明（135.9km）1人。
- 先生方に脳貧血の手当法を前もって教授。
- 入賞のメダルはメッキにすべしとの意見あり。

第 9 回 (昭和 7 年・1932)

- 強行遠足準備委員会を教師8人にて初めて構成した。降雨のため先頭が上諏訪にて打切り中止とした。

第 10 回 (昭和 8 年・1933)

- 前年の雨による中途中止もあってか、要項の“出発時降雨中止”は、“降雨順延”となる。
- 救護自動車を手台チャーターし、甲府一ヶヶ原間の最後尾を随行することになった。
- 「松本駅ではうどんを与えん、塩尻峠ではキャラメルを与うること」と委員会で決める。
- 本部を上諏訪の吉田屋に置く。
- 出発に際してカードを順次一人ずつ渡す方法を採用する。

第 11 回 (昭和 9 年・1934)

- 準備係も細部に亘るものが出てきて、中でも風紀係、電燈設備係、草鞋係など特筆される。

第 12 回 (昭和10年・1935)

- 道路距離調査を初めて行う。
- 松本到着は5人、松本以北3人、中でもトップは会染（140.4km）で、新記録である。
- 【注意事項】

道路事情も悪く、千松橋（千塚一台風により流失）が仮橋で2人以上で並ぶと危険につき教師を1人置いて整理に当たること。橋の両側には焚火をしないように。

帰途についた生徒達のうち、列車にて、脳貧血を起こすものがあるので、乗車監督の職員は必ず水筒、茶呑茶碗2個以上或は薬ビンの準備を行うこと。特に年少生徒は疲労せるにも拘らず遠慮して座席に坐らずにいるので、鉄道乗務員と協力し生徒の座席配当に遺憾なきを要す。

- この年、中途より雨になったが続行した。わらじもはきつぶし、近くのはき物店からは、アシダや赤のはなおの草履を買った者も出たが、やむなく歩行させた。
- 救護自動車のチャーター代、15円。5万分の1の地図の値段・38銭。
- 未刊の『意義と実際』

東京で世界教育大会が開かれるにあたり、隈部以忠校長の発案で、強行遠足の沿革と統計とを英文で印刷、配布しようと計画して『本校に於ける強行遠足の意義と其の実際』の和文原稿が作成される。出版に至らず、職員室の戸棚にしまいこまれる。

第 13 回 (昭和11年・1936)

- 初めて記録映画を残した。
- 松本駅に信濃民報社、時事新聞社、東京朝日松本支局から、キャラメルの提供あり。
- 検印所救護所の任務
- 1 台ヶ原救護所（30km）。朝食用の麦湯を用意し焚火をなし、特に身体故障ある者のみ検印をなす。毎年之を置く。
- 2 瀬沢大橋検印所（47km）。固定番号検印。㊸。

強行遠足沿革

- 3 上諏訪、青柳間逆行移動番号検印 (68km—51.4km)。㊟。
 - 4 上諏訪救護所 (68.0km)。蜆汁^{しじみ}を用意し、毎年之を置く。
 - 5 下諏訪救護所 (72.4km)。湖畔道路指導、麦湯の用意。
 - 6 湖畔道路検印所 (82.0km) 固定番号検印、検印㊟。
 - 7 辰野、川岸間検印所 (82.0km) 固定番号検印、検印㊟。
 - 8 辰野救護所 (86.0km)。麦湯の用意。
 - 9 小野検印救護所 (94.3km)。麦湯、固定番号検印。検印㊟。
 - 10 善知鳥峠救護所 (99.0km)。菓子を与う。
 - 11 塩尻検印救護所 (103.7km)。固定認印検印、検印は㊟。毎年之を置く。宿泊の準備をなす。
 - 12 広岡救護所 (108.0km)。菓子を与う。㊟。
 - 13 松本救護所 (117.1km)。うどんを与え宿泊の準備をなす。毎年置く。
 - 14 大町方面予備救護所、必要ある時之を置く。
- 以上であるが、上諏訪以西に於ては、事故に備えて、救護所も亦、到着順番を記しておく。

第 14 回 (昭和12年・1937)

- 降雨の為中途中止 (2回目)、先頭辰野にて打ち切り。
- 茅野—青柳の金沢村に最近腸チフスとパラチフスが発生、流行しきたり。生水を飲まぬこと。
(【要項】)
- 検印位置は極秘
適当なる地点に固定し、又は一定の区間を逆行しつつ、生徒所持のカードに番号又は認印によって検印をなす。これは生徒の反則行為を防止するとともに、道路の指導と救護の任務をも行う。従ってその位置は極秘に付せられ、たとえ救護をも兼ねた処でも、必要以外は明示しない。故に年によってその位置を変更する。標識は「甲中」名入れの提灯。

(【強行遠足の意義と其の実際】昭和12年・1937)

● 【本校に於ける強行遠足の意義と其の実際】出版

大野芳麿校長の指示で昭和10年作成の【本校に於ける強行遠足の意義と其の実際】を出版、日本一の行事として一躍有名になる。以後、教育界ばかりでなく、医学・体育学の分野の研究者、問い合わせが増える (資料翻刻を参照)。

第 15 回 (昭和13年・1938)

- メダル線を優秀線と称し、ハガキサイズの賞状を与える。
- 草鞋の概数を会食時に調査する。1足7銭又は8銭。「高田村 (市川大門町) を紹介しておく」との記事あり。
- 松本の夜は不便
松本に於ては午後10時後は商店法実施により夜食等の注文は不便にして且つ通行人も少なく生徒の道をたずぬるの便を欠き且つ店頭の電灯も消され大いに不便なりき。

第 16 回 (昭和14年・1939)

- 参加生徒数、900人を越し914人。
- ガソリン統制のため自動車の通行が極めて少なくなり不正の恐れうすれる。
- 櫛^{くし}の掲示が流行する。学校にて検閲の上許可したるものを貼らしむること。
- 上諏訪本部・吉田屋閉店し湖月館に変更。
- この程度の雨は元気持続に適す
本年の強行遠足は昨年^{こぞ}の好天氣にひかえ早朝から可成^{かなり}の降雨あり、これが続行は案ぜられたるも、事実^{じじつ}に徴してこの程度の降雨は明らかに元気持続に適するものなるを認め得たり、加之雨天^{こゝろにくみ}の為^{ため}に剛健^{かうけん}の氣性を發揮する機会を得たるは心身の鍛練とより観て、何年の強行遠足に比し一層の意義深きものありたるを覚ゆ。

第 17 回 (昭和15年・1940)

- 打切り (前進停止時間) 上諏訪 6 時 30 分、下諏訪 7 時 30 分、岡谷 8 時 30 分、辰野 8 時、小野 8 時 30 分、塩尻 8 時 30 分、6ヶ所の救護所に初めて打切前進停止時間を実施。
- 氏名票 (自作させたもの) を検印所に置いて行かせる方式を採用。
- 途中降雨で前進中止。先頭松本60人到着。
- 風紀上の注意事項
 - 1 上級生中に学校出発後まもなく下級生 の前進を妨げるものがあるので注意するよう。
 - 2 焚火をしないよう。
 - 3 荷車を引張り出したり看板を掛け換えたりその他の悪戯をしないよう。大声を放ったり余り騒いだりして町民の安眠を妨害しないよう。
 - 4 台ヶ原から本当の病人以外のものが偽って帰ることのないよう。
 - 5 上諏訪での蜆汁は1人1杯なのであるからそれを守って2杯も3杯も吸うことのないよう。
 - 6 岡谷から小野までの間で線路を通らぬよう。
 - 7 夜は夜明方へかけて極寒い時は別で、昼間歩行中は頬かぶりをしないよう、又下駄をはかないよう。
 - 8 喫煙しないよう、又途中他家の柿などをもぎ取らぬよう。
 - 9 途中で先生を追い越す場合は挨拶をするよう。
 - 10 汽車内等で使用するたために新聞紙を携帯するよう。(使用後は各自にて必ず持ち帰ること)。
 - 11 本年は殊に防寒の準備に注意するよう。
 - 12 油紙を携行するよう。

(オリエンテーション原稿より)

第 18 回 (昭和16年・1941)

- 50m尺により全コースを実測。
- 救護自動車、甲府・台ヶ原間を巡行する。(電燈用の電池・電球共に2個用意することと要項にある)
- 参加生徒1,000人を越し、松本へ111人。松本10

0人突破時代来る。

- 砂糖、薬品の特別配給を県に申請する。

第 19 回 (昭和17年・1942)

- 意気盛んなるも救護は困難
松本勤務の渡辺大蔵先生の勤務感想より
「大東亜戦下、強行遠足に対する一段の認識の深められたると自身の自覚とに依り、生徒の意気大いにあがり何れも溢れるばかりの元気を持って終始全力を尽くして敢闘し、ために松本に到着する者184人の数多きを数えたり。されど途上にて疲労困憊の極に達し無意識のうちに路上に横たわり寝入る者多くその救護には大いに困難を感じたり。」
- 生徒は弁当3食分とは言え、なかなか持たない者が多く、その為に倒れる者が多い。
- 第1回「集団強歩練習会」
初の第1回「集団強歩練習会」を行う。
〔コース〕
学校—千松橋—塩崎—塩川橋—舟山橋—御勅使川橋—六科—信玄橋—東竜王—貢川学校—荒川橋—相川堤—学校 (30km)
〔日程〕午前8時出発、午後4時で終了とする。低学年より5分間差で出発する。
- 前日の11月3日、講堂で明治節式を挙行。
- 鉄道乗車許可証を持参すること。割引券の利用に際し記入法を年少学年によく教えておくこと。(【要項】)
- 空襲ありたる場合
実施前に空襲警報ありたる場合は適当な日まで延ばす。実施後空襲警報ありたる場合は強行遠足続行。ただしこの場合は各地の警防団員の命令を守るべし。(【要項】)
学校勤務員は警察署及び朝日防護団の方へ学校職員生徒不在の旨を通報しておくこと
(校長命令として)。
- 臨戦体制の折、キャラメルはなく、砂糖を紙包に少量ずつ分けて配った。
- 国民備礼

強行遠足沿革

出発式に国民儀礼を行って出発した。

〔次第〕

- (一) 校長先生に面して敬礼
- (二) 宮城の方向に向かって宮城遙拝
- (三) 靖国の英霊に感謝、皇軍将士の武軍長久、傷病将士の平癒祈願の為、黙祷
- (四) 出発合図

- 松本到着160名、松本以北は23名となり、松本の旅館の収容能力に限度をきたし、飯田屋旅館その他を探す。

● 失格者

検印漏れありたる者。カード紛失者。定刻以外の出発者。カードに乗車駅長の捺印なき者。

第 20 回 (昭和18年・1943)

- 強行遠足『20周年記念誌』作製
- 強行遠足16ミリ記録映画作製
- 警戒警報発令の場合 (空襲警報の場合も同じ) は、
 - ① 出発前発令せる時は中止
 - ② 出発後発令せる時は、付近の駅より即刻帰宅に向う
- 参加者1,255人、うち松本277人、以北38人、松川に2人 (133.7km)
- 春季強歩練習会 (5月1日)

団体歩行にて強歩。コースは第1回と同じ。教室の縦列を1班 (7～8名) として、採点制を取り、組対抗戦とする。生徒を激励のため職員チームを2組作って参加。ツベルクリン陽転者は途中無理をしないよう届け出をさせる。
- 東京で強行遠足を説明する

嶋田武先生、東京にて強行遠足説明。日本体育会及び厚生省関係の者6～7名が出席。

 - ・歩行の弱き者は何処が原因か。
 - ・足長き者と歩行との関係。
 - ・体力章検定と歩行との関係。
 - ・松本突破生徒の運動状況は。
 - ・健民修練生の昨年と本年度との進歩程度関係。
 - ・各所の温度・気候・風力など。

● 秋季強歩練習会 (10月5日)

春季が団体歩行であるのに対して、個人競争。服装は上着なしのランニング、ゲートル着用。裸は厳禁。ツベルクリン陽転者は届け出をさせて不参加。

- 自転車にて全線巡視、10月24日 (日)、25日 (月) の2日間に亘る。保科太郎先生と丸茂義光先生。
- 上諏訪以北に向かう先生方は米1合5勺持参のこと。
- 北巨摩出身の奥水老人の参加を許可する。
- 生徒のうち、陽転者を救護係として任命。
- 空襲警報発令の場合

途中空襲警報発令されたる場合は、特別警備隊甲号表要員たる職員及び生徒は直ちに学校に参集。其他の職員は残り生徒を帰宅せしめ或は状況の如何によりては適宜待機せしむる等の処置を取り、状況が許すに至れば、帰宅するものとす。
- 同窓会より記念品 (万年筆)、また応援行軍もあった。
- スポーツ医学の大家・多島保氏視察の感想
 - 1 穴山橋付近に救護所を設けること。
 - 2 川岸・辰野・小野・塩尻等の辺の救護所に力を入れること。
 - 3 汗を流した濡れたる者が、シャツの準備なき為、松本辺では特に寒さを感じる者多し。
 - 4 今後は重量を負う様になると考えられるが此の点も考慮研究を要す。
 - 5 充分睡眠をとらせること、早々疲労せる者の多くは十分眠っていない者が多い。疲労甚だしき時は、熱い茶飲がよい。
 - 6 ブドウ糖の注射は非常に効果がある。
 - 7 血液の調査も必要である。
 - 8 砂糖を多く食べさせることは、将来の国民として考えるべき。糖分多きは骨を悪くする。自然医学から考究して砂糖を少なくして、強い生徒でありたい。
- 初めての交通事故

3年のF君、小野検印所手前の踏切で通過する

列車から帰甲する友人が手を振り励ますのに応答中、後方からきた、微発用のトラックにはねられ、脳震盪を起こして人事不省。そのトラックはすぐ検印所に運んできた。たまたま列車の中でこの様子を目撃していた出張帰りの小野の村長が駅より小野病院に電話しておいてくれており、医師が検印所におもむいて診察してくれた。病院のタンカにて入院、一昼夜頭を冷やして回復した。

● ねむ気対策

- ・出発時が夜中であると、疲労してから再び夜中になるので、実力を十分発揮することはできない、との反省あり。
- ・道路事情はよいが、物資欠乏などによって宿泊が困難。
- ・松本以北にも係職員の配置をする。
- ・豊科への道は田圃道等も多く、ねむけで危険が伴うため、次の物を必要とする。
- ・自転車用電灯（携帯用の電灯のこと）
- ・軍歌集の如きもの（眠気防止のため）
- ・引行のための縄（麻縄がよし）1・2本
- ハイヤーで全部松本に收容したようであるが、豊科にも電話がなく不便だが旅館があるので、利用した方がよい。
- 記念の年ということもあり成績は群をぬいた。参加者1255名内松本227名、以北28名、松川に2名（33.7km）

第 21 回（昭和19年・1944）

- いよいよ厳しい戦時体制となる。
- 職員不足
本年は例年より職員不足をなし、なお、上級生徒等がいがないため、又当日帰宅させるを原則とするため、小野をもって打切りとする。直ちに帰甲する方式で行った。
- 1・2年生のみにて実施。
- 小野到着者111人。（91.7km）
- 印刷物は全て生徒のテストの答案の裏に印刷した。
- 春季練習会（5月5日）

1人1貫匁（4kg）の砂を、靴袋を使用して負重するものとする。

〔点数制評価〕

点	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
評語	甲上	甲	甲下	甲下	乙上	乙	乙下	丙上	丙下	丁
到着時間	20分	40分	60分	80分	100分	120分	140分	160分	180分	200分
1着より何分以内か										

● 秋季練習会（11月4日）

学校—千塚—敷島—登美—塩崎—荊崎—竜岡—百田—飯野—小笠原—豊—今諏訪—玉幡—貢川—相川堤—帰校

〔スタート〕8時半

〔帰 校〕4時

〔参加人員〕約800名

昭和20年（1945年）

8月15日、終戦につき中止。

第 22 回（昭和21年・1946）

● 日中がやるなら甲中だって

9月下旬、甲府駅管理部に松本方面に向かっての強行遠足許可を申し出たところ、10月上旬になっても何等の回答もなく、再度申し出たところ混雑のためと許可してくれず、止むをなく、甲府—荊崎—小笠原—青柳—南湖—石和—等々力—塩山—日下部—山崎—甲府の巡還コースを定め、尚余力のある者は二周することにした。

しかし生徒は不満で、生徒有志は管理部に交渉して上野原を終点とするならば許すとの内容を得たという。それで、上記巡還コース一周後に中央線に沿って上野原に向かう案を生徒にはかったところ、4・5年生合計の賛成者は半数に達せず、この案は取り止めとなる。

10月23日、日川中学が松本方面に実施し、管理部は「一人たりとも日中生は乗車させず」と答弁しているのかかわらず何等支障なく無事汽車利用を行ったので、本校は11月に入ると列車が削減

強行遠足沿革

され経費が高騰するため、10月中の実施に踏み切り、10月29日正午出発と決定した。そして10月26日、内田・窪田両先生が上諏訪～台ヶ原間、今村先生が上諏訪～辰野間、嶋田先生が小野～松本間の道路調査を行い、決行のはこびとなったのであった。

- 10月29日の正午出発、24時間制。
- 参加生徒数1,743人。やっとの復活で張り切る。松本96人。松本以北23人。

第 23 回 (昭和22年・1947)

- 各票を利用しなくなったので、まごつく。
- 特記なし

第 24 回 (昭和23年・1948)

- 新制高校となる。併設中学と合同で実施。中3、高1、高2、高3。在籍1,413人中、253人不参加。
- 定時制高校生20余人初参加。
- 10月25日正午、スタート。
- 同窓会理事の檄あり。
- 高2のW君、岡谷付近にて犬にかまれ辰野にて医者に診察を願う。
- 慈恵医科大学大学生が参加して疲労の研究(出発前、上諏訪、松本の3箇所にて)を行う。
- 教師歩行の最高記録、島津吉雄先生、梓橋まで歩行。
- 「甲府一高新聞」強行遠足特集号を発行。

第 25 回 (昭和24年・1949)

- 女子初参加
定時制89人・通信制1人の生徒が参加。うち女子4人初参加し日野春まで25km走破。
- 最高到着地信濃大町(152.6km)1人。

第 26 回 (昭和25年・1950)

- 10月31日、12時出発。女子生徒参加、出発9時、穴山を4時58分列車にて帰宅。104人参加。
- 創立70周年記念記録映画を撮影する。
- 1年生H君、小野駅手前にて急性盲腸になり、

父を呼び0時20分甲府着、甲府小宮山医院にて手術。

- 富士見地区にて悪戯あり、軍政部へ報告すると注意された(生徒文中から)。

第 27 回 (昭和26年・1951)

- 最高は木崎1人、松本201人(このうち松本以北へ40人)
- 女子終点制、台ヶ原にする。206人が到着。
- 10月25日正午、スタート。
- サッカー部国体出場のため公欠。女子は8時。
- リンゴ畑の警戒について注意あり。
- 男子応援の女子、帰らず
女子終点制、台ヶ原にする。206名が到着。トラックにて日野春に輸送したり、韭崎まで定期バスにて帰らせたりする。しかし、なかなか動こうとせず男子の到着声援をしたいため、約3時間以上台ヶ原に止まり、その指導と男子の指導が重なり一苦勞であった。
- 上諏訪で600名近く止める。中には入浴する者もいるがこれは禁止せよ。
- 下諏訪・富士見間にて悪戯あり、悪評。

第 28 回 (昭和27年・1952)

- 実施要覧が印刷物となる。「遠足当日の諸係と其の任務明細書」
- 女子コースを牧の原から日野春駅へ変更。
- 本部を岡谷に移動。
- トップは木崎(156.9km)

第 29 回 (昭和28年・1953)

- 高等学校共済組合山梨支部からトヨベツトを借用し、1泊2日で道路調査を行う。
- 当時の救護所用薬品
仁丹、ノーシン、ヨーチン小、ガーゼ1m、脱脂綿小、包帯6裂1コ、絆創膏小、メンソレータム小。
- 飲食店開店
上諏訪地内に生徒の空腹をあてこみ、いかがわ

しい飲食店が2、3軒開店していたので、市警パトロールにたのみ2時頃閉店した。

- 青柳―富士見間で杖に稲かけ用のものを取り出して使用するもの多く注意。
- 本校強行遠足の前に他校が行い、連夜12時以後未明にわたり生徒の喧騒はなほだしく、岡谷・富士見地内で安眠妨害との抗議あり。

第 30 回 (昭和29年・1954)

- 台風のため路面流出され、大小礫が突出、凹凸が甚だしい。穴山橋流出。
- 10月25日(月)正午、校庭よりスタート。
- 降雨のため午前0時をもって中止(先頭は川岸)
- 乗車証明書の個人票、駅長証明によるものとする。
- 警察から道路使用許可制が初めて出る。
- 甲府模範社(竜王)からトヨベツト車借用し、10日、11日、12日で道路調査。
- 女子、日野春終点より男子応援のためふたたび徒歩やバスで牧の原に向かう者多く注意を与えた。
- ビニールが世に出はじめたので雨具に使わせることよし。
- 急性胃けいれんにて、3年T君入院(牧の原)。
- 疲労度測定係が設置される。

第 31 回 (昭和30年・1955)

- 10月25日(火)正午、校庭よりスタート。
- 降雨のため午後11時をもって中止(先頭は岡谷)。
- 行程計画グラフ表
「強行遠足行程計画グラフ表」が配布され、予定を青線で、実際は赤線で記録させ、実施後は感想文を提出させた。
- 女子コースを富士見まで延長。午前8時から午後4時までとする。
- 山梨大の血液検査
山梨大学の測定班、血液検査を行う。血液を耳からとるため、いささか時間がかかった。検査対象者の腕にマークをつけた。
- 失格規定

台ヶ原に19時までに到着し得なかったとき。所定の道路以外を通過したとき。検印が欠けていたとき。途中乗物を利用したとき。途中検印所及び移動検印係によりカードに検印を受けて進む。但しカードを紛失した場合は失格となることがある。

第 32 回 (昭和31年・1956)

- 教育庁経理課のジープを借用して道路調査、甲府一高―木崎間、2日かかりで行う。
- 運賃、松本―甲府間 250円(学割125円)
- 台風通過の後遺症が各地にみられた。又各地にて新道新設工事が盛んになる。
- 「強行遠足行路地図」及び「標高差図」が配布され全体の見通しが前もって理解できるようになった。
- 恐喝に遭う
不良3人に襲われる。青柳―茅野間で1年生6名が11時30分頃～0時40分頃の間、3回にわたり金品を恐喝で奪われる。警察署員全員非常召集され警備にあたる。
- 信州大学OB7名、星影会(定時制OB)3名が松本以北の生徒歩行を援助。

第 33 回 (昭和32年・1957)

- 10月14日午後4時出発(初の試み)、24時間制。
- 「主旨」文章化
実施要項に「主旨」が文章化される。
〈主旨〉綿密な歩行計画に基づいて心身の鍛練に資し、特に疲労・足痛・寒気などの苦難を克服して目標の達成に突き進む不屈の精神力を養い、あわせて各自の体力・精神力を自覚させ自信を得させる。
- 救護班編成
救護班が初めて編成される。台ヶ原・富士見・上諏訪・岡谷・松本に校医の許山先生他父兄の医師6人及び国立病院から看護婦2人が援助。
- PTA役員による手伝いが初めて行われた。
- 道路も主要のところは舗装されるようになってきたので標識方法を研究。

強行遠足沿革●●●●●●●●●●

● 最長走破記錄

岩間孝吉君が最長走破記録を樹立。

到着地：築場 (167.2km)

● 道路調査

1班 岡谷—松本（山梨トヨベツト車借用）

2班 甲府—岡谷（山梨日産車借用）

第 34 回 (昭和33年・1958)

● 映画自主製作

いつ強行遠足廃止になるかわからない昨今のため、映画撮影をしておいた方が良く、ということで、16ミリを3台使って、予算10万円位で作成した。予算を捻出するために、映画「十戒」の前売券販売による収入を当てた。入場券は200円、前売160円。前売1枚につき10円の益金で2万枚は売ってみようとなった。(撮影者：小木曾・土橋 両先生、ナレーター：斎藤操先生 音楽：山岸先生)

● 出発時刻アンケート

出発時刻を4時にするか正午にするか、3年生にアンケートをとる。

〔4時出発のメリット〕

- 1 交通量を考慮に入れたこと。
- 2 比較的地理に明るい県内を夜間歩くことにしたこと。

〔4時出発の問題点〕

- 1 はじめ汗をかき、冷えてきて、夜に入るので富士見の落伍者が増えた。
- 2 富士見には休憩した者の収容力がない。汽車の時間に間がありすぎる。
- 3 交通の頻繁なところ（県内）を通るには明るい方がいい。
- 4 正午スタートだと準急の乗車が可能になる。

〔結 論〕 正午スタート

- 氏名票を学校から支給する。
- 駅長の証明方式は必ずしも必要ではない。
- わらじを使用しなくなってきたので、購買部での販売を見合わせてはどうかの意見あり。
- 豊科のおやつ
豊科の黒崎長作氏、バターボール1貫、モナカ、

まんじゅうを提供していくる。それを目指して
いる生徒多し。

- 義務距離制度の検討あり。
- 実施後一週間の健康状況の調査

対象：男子1083名、女子259名。（）内は女子

1	正常に戻った	64.3% (60.2%)
2	ほとんど回復した	22.4% (30.5%)
3	まだかなり疲労が残る	4.2% (1.6%)
4	その後病気をした	8.6% (7.4%)
5	風邪	31.7% (46.1%)
	筋肉・関節痛	33.6% (23.0%)
	足指爪	7.6% (15.3%)
	捻挫	7.6% (7.7%)
	まめ	7.6% (7.7%)

昭和34年（1959年）

伊勢湾台風による道路欠損のため中止。

第 35 回 (昭和35年・1960)

- 創立80周年記念強行遠足

10月28・29日実施

- ### ● 義務距離

(事故のない限り必ず歩行を必要とする。)

男子 富士見 (45.2km) 22時30分までに通過する。
(10時間30分)

女子 台ヶ原 (28.6km) 14時30分までに通過する。
(6時間)

- 全線巡視車6台起用。そのうち先頭車・本部車・後尾車・全線車の4台に無線機をのせた。自衛隊に応援を依頼した。

第 36 回 (昭和36年・1961)

- 10月19日～20日実施
- 実施要項から（特に変更になった点）
 - 出発時間11時（富士見発・松本発の列車時刻がダイヤ改正に伴い変更）
 - 優秀記録のクラスにはカップを与える。
- 交通量激しく、右側歩行を指導するも不安なり

との反省あり。やがて、コースが「佐久往還」に変わる事となる。

● 注意事項追加内容

- ・何時変事が起こらぬとも限らない。後尾の先生が来てすぐ見易いところにいることが大事である。笛を携行して非常の際は合図に使用することもよい。
- ・出発後の行動は実施要項通りとし、それ以外の行動（良識判断）はいちいち係の先生に連絡すること。
- ・歩行中といえども服装は常に端正に心掛けねばならない。

● 交通量激化—反省事項抄録

- ・上諏訪……道路、駅等でゴロ寝する者多し、適当な休憩所の設置を望む。
- ・長地……街灯の設備がないので、提灯を一個余分に道路標識として必要である。
- ・岡谷……しじみ汁は15貫目位、味噌は7、8貫目位必要である。
- ・川岸……湯茶の設備が必要である。
- ・辰野……辰野・小野間の距離が長いので、検印所親切の要あり。
- ・小野……辰野・小野間、善知鳥峠・塩尻間に1名巡視員増員の必要あり。
- ・塩尻……燃料の入手が困難なので、あらかじめ現地に調達方を依頼しておく必要あり。空腹を訴える者多し。夜中で買うことができないから業者にパンのようなものを販売させたらどうか。
- ・村井……交通量が多いので旧道が望ましい。
- ・村井巡視……最も混雑した7時～10時の間は非常に交通量がはげしい（約10分間に十数台）ので、強行遠足の可否を検討する必要がある。交通量激しく、右側通行を指導するも不安なり。
- ・松本地区の交通量激化に伴い、種々問題が起こりはじめ、次のような意見が出た。

広い範囲に生徒が散在しているので教師の目も届かない場合もあり、交通事故の心配がある。99人成果があっても1人の事故者があれば問題である。交通事情を考慮すれば、現行のコースを同

方法でやるとすれば問題があると思う。

● 安全対策

甲府商業高の強行遠足に事故があり、事前の健康管理や参加の強要、体育科の成績に影響があるかという3点をジャーナリズムから問われた。●

小 諸 方 面 コ ー ス 第37～70回（昭和37年～平成8年・1962～1996）

第 37 回（昭和37年・1962）

男子は松原湖（66km）を終点地とし制限時間15時間、女子は箕輪新町を出発点、松原湖（38km）を終点地とし制限時間7時間とした。

- 男女共全日制は全員参加、定時制・通信制生徒は希望者参加。

● 清泉寮でフォークダンス

新コースの初の試みとして次のように実施された。

清里清泉寮を本部とし、ここを^{ねり}概ねの目標地とし、当所には模擬店を設け、プラスバンド等の準備もなし、フォークダンスその他のレクリエーションをなして楽しい一日を過ごすべく計画された。尚、歩行したい者はここより前進してもよいこととした。しかし実際にはここに残留した生徒は少なく、大部分の生徒は歩くことに意義を感じてか最終地点松原湖へ向かって出発した。

（この試みは不評に終わり、次回からはこれを廃し、本部も野辺山に移し専ら歩くことを本旨とした。）

● 自由に歩かせる（？）

かた苦しい規定を設けずに自由に歩かせたらどうかとの意見もあったが、しかし大集団歩行をなすについては野放しにすることは非常に危険であり、やはりルールを設けて安全に歩行させるべきであるとの見解をとった。

● 走ることを禁ず

走ることを禁じ絶対に歩行すべきことが規定された。従ってこれを守らせるために特に先頭停止時刻を各地点に設けた。この理由は走って早く到

強行遠足沿革

着しても、この時刻のくるまでは前進させない、
従って走ってきても無駄であることを知らせると
共に歩行してきても十分に間に合う時刻を勘案し
て設定したのである。

先頭停止時刻が設定されていたため、歩行ベ-
ースに余裕を持った一部の生徒が、葦崎一若神子間
で悪質ないたづらを起こし、新聞に報道され、伝
統行事に汚点を残した。

● 保護者の車で区間巡視

甲府一葦崎間の交通量が多いことから、正午の
出発を夜中の午前0時出発とした。また県内自家
用自動車台数がまだ2877台という時代で、教師の
マイカー保持者もわずかであったので、保護者で
車を保持している方を中心に協力方を依頼し、区
間巡視係としてご協力いただいた。

第 38 回 (昭和38年・1963)

● 男子は学校を出発点とし、中込(87km)を終点
地、制限時間は17時間とした。女子は箕輪新町を
出発地とし、海ノ口(32km)を終点地、制限時間
は5時間とした。

● 前回の先頭停止時刻は廃し、生徒の体力に応じ
た歩行速度が5.5km/hならば、終点の中込に行
けると指導した。

● 中込の大歓迎に感激

駅前には大歓迎の横断幕、宣伝カーで市内巡回
して紹介に努めてくれた。地元婦人会では白エブ
ロン姿で生徒の接待などに当たってくれ、多量の
リングを寄贈してくださった商店もあった。翌年
も同様。

● 松本コースに戻せ

同窓会役員及び職員の一部から松本コースに復
してはとの意見が出されたが、昨年見直したばか
りなので取り上げられなかった。

● レクリエーション廃止

清里清泉寮でのレクリエーションの試みを中止
する。本部を野辺山に移す。歩くことを重点とし、
生徒の要望で男子の終点を中込にする。
先頭停止時刻制を廃止。自己の体力に応じたベ-

ースで歩行し得るようにした。

● 避難場所を小学校に依頼

荒天の急病発生の折の避難場所を沿道の小学校
に依頼(南牧小学校ほか4校)。一度も利用なく、
その後依頼せず現在に至る。

● 真の強行遠足

新コース実施に伴い色々な試みがなされたが結
果はやはり長い伝統の線に沿った本来の強行遠足
の姿に立ち戻らざるを得なかったことに對し、真
の強行遠足の意義を再確認した。

第 39 回 (昭和39年・1964)

● 男子のコースは前回どおり、学校一中込。女子
は若神子小を出発地点として野辺山本部を終点地
(26km)、制限時間5時間とした。

● 女子終点を野辺山に変更した理由

1 距離が延びすぎること(前年37km)。

2 野辺山の先の市場は交通不便のため、ここで
の落伍者の輸送が困難であること。

終了後、女子の間から距離延長の声が上がった。
ちなみに女子の完走率は約50%146名だった。

● 男子の出発時刻は9月30日午後9時、終了は10
月1日午後2時。

● 10円玉が消えた

中込一甲府間の国鉄乗車賃300円。野辺山一甲
府間180円。各自持参し、係の先生から団体乗車
証明書をもらって乗車。野辺山では20円のおつり
に困り、駅周辺の商店から10円硬貨が一切なくな
った。保護者が清里の郵便局まで両替に走った。

● 自家用車の応援は迷惑

保護者の自家用車保有が多くなり、子供の応援
激励に来るなどで歩行の妨げが心配された。

● あてにならない天気予報

天気予報のあたりはずれ多く、気象係の職員が
気象台から天気図をもらって検討した。

第 40 回 (昭和40年・1965)

● 生徒の要望に応え、男女のコースをさらに延長
した。

- 男子は小諸駅(100km)を最終地。
- 女子の出発地を三軒屋とし、最終地を小海(32km)まで延長。

● 男子終点小諸到着者は予想に反して多く235人(全・定を合わせ)に達した。全日制うち228人、平均生徒歩行距離62.8km。参加率も初めて95%台になった。

● 沿革誌刊行

創立85周年記念行事の一環として、記録映画(UTY制作)を作成、強行遠足沿革誌を刊行。又、NHK「スタジオ102」で全国に放送されると大きな反響があり、これを機会に学校訪問が急激に増加した。

● 参加生徒、関係者全員に記念メダルを贈る。

● 予行コース

予行コースも、今までの平坦地コースから、山道の多い学校一金桜神社方面コースに変更。男子35km、女子16km。制限時間は男子8時間、女子5時間で実施。

強行遠足の諸規定、方式への熟達と事故の体力、精神力の予知を兼ね、歩行計画作成に資することを主眼とした。

● 男子日程

16時30分 体育館集合
17時00分 出発式(女子は正門前で応援。出発式には参加しなかった。)

17時30分 出発
翌日13時間30分をもって終了。

・制限時間を20時間とする。

● 新設の救護検印所

岩村田……一三屋旅館
三岡……柏木宇三郎氏宅
小諸……ひしや旅館

● 女子日程

5時30分 学校正門前道路に指定グループごとに集合し、カードの配布を受けてバス7台に乗車し、三軒屋に向かう。

7時30分 三軒屋出発(出発行事なし)
13時00分 終了。

・制限時間5時間30分とした。

● 君島一郎氏(東京都中野区)から来信。

「今16日朝、NHKテレビ拝見。100キロ徒歩運動とは愉快ですな、近頃のスポーツもよろしいが、或る距離を何分何秒で、走ったとか、泳いだとか、これは、スポーツが墮落して見せ物となり、競技する個人個人は競馬の馬や競犬の犬扱いなり。最近は万歩会などの提唱あるが、貴校のこの企画は何歩も進んでいるものというべく、やがては全国に広がらん事を期待するものですな。一高(現東京大学教養学部)入学、寄宿舎寮同窓の友に宮沢源吉あり、甲府中学卒業、老生60余年。貴校この企ての益々の隆盛を祈る。」

〔註〕宮沢源吉氏は明治39年本校卒業。

第 41 回(昭和41年・1966)

● 男子は小諸駅前まで100km。前年と同じコース。女子は前年に同じく、三軒屋-小海。

男子の出発を1時間早め、午後4時出発式、4時30分出発。翌日12時30分終了。

・制限時間20時間とした。

● コースの一部変更

湯村街道の渋滞を考慮して、美和田旅館を西折-北中裏通り-湯村-水道路-敷島金属-(南下して)-ガソリンスタンドを西に-登美の坂コースを採用。荊崎の救護検印所「秋月」を荊崎高校に変更。

● 満月なれど寒さ厳しく

10月17日、18日と満月の日を選んで実施したが、寒さ厳しく、長沢・清里での中止者増加、救護所に収容しきれず、付近の民家を借用して休ませた。

● 実施の可否の連絡放送をNHKと山梨放送に依頼し、ニュースの末尾に放送した。

● 寝過ごした

帰宅の際、塩山・大月下車予定の生徒2名(別々の車両)が寝過ごし、立川駅で発見され、保護された。

● 沿道風景

・佐久街道は市内を除き80%が未舗装で土ほこり

強行遠足沿革

- がひどく、女子にマスクを着用させた。
- 街道に移動食物販売の軽トラックが出現。おでん、梨、ジュースを販売。空腹の生徒が買ったが、ほとんどが気分が悪くなって吐いた。
- 沿道の家でテーブルを出し、湯茶を自由に飲めるようにしてくれた家が登場し始めた。

第 42 回 (昭和42年・1967)

- 男女共前年と同じコース。
- OBの参加希望者を許可した。大学生8人が参加した。
- 旺文社「高二時代」の記者が同行取材し、12月号にグラビア5ページを使つての紹介記事が掲載された。
- コースの一部変更
学校一滝坂下バス停までのコースを一部変更。数島金属から数島中学南の通りを西に進んだ。女子の終点を小海駅手前の与志本林業空き地に変更した。
- 女子の小海到着率が74%となる。
- 車に乗って前進した不正行為者2名。厳重な反省を求められ、厳しく処分。

第 43 回 (昭和43年・1968)

- 「実施要覧」がタイプ印刷になる。
- 雨天のため1日順延。
- 塩崎―葦崎の交通渋滞を避けるため、男子の出発時刻を30分早め、午後4時スタート、翌日12時打ち切りの20時間制とした。
- 葦崎の救護検印所を葦崎高校から白百合幼稚園に変更。バイパスが完成したため、葦崎警察署の前を右折して現コースに入った。
- 2校選抜制入学試験第1年。予行は1年生だけが現在の形式で8km行うこととした。
 - 体育の授業用の服装を、この年から、上を白、下を学年カラーの色分けのジャージと定めた。女子は、今まで男子と同じ白であったのを、体育用の下を使用することも可とした。
 - 野球部の甲子園出場などで校内が盛り上がり、

- り、学園紛争で東大安田講堂が占拠されたなどの暗い話題をはねかえした。
- 男女共にコースは前年と同じ。
- 男子参加率96%台になるが、野辺山以前の中止者が45%もあった。
- 女子の小海到着率が77.5%と伸びた。
- 保護者の中の医師の方と学級役員の方々合わせて、75人の協力をいただいた。

第 44 回 (昭和44年・1969)

- 女子は出発後降雨にみまわれた。雨中の前進は無理であると判断、野辺山本部で前進停止とした。しかし、全員が野辺山に到着した。
到着率100%。平均生徒歩行距離11.8km。
男子も降雨の中を頑張り、小諸到着は163人。全体の15.9%と、前年同様の立派な成績を取めた。
- 小諸の救護所を市民会館に移す
小諸の救護所のひしや旅館、休憩所の駅ホールを市民会館に変更した。駅と小諸市教育委員会の配慮による。
- コース内の工事多し
コースのあちこちで道路拡副工事や舗装工事が行われ、所によっては交通渋滞を起こして、夜間歩行には特に神経を使った。
- 強行遠足実行委員会が職員30名で構成され、事前準備を幅広く検討した。
- 無線愛好家の協力
この年から昭和46年まで、県内のアマチュア無線愛好家グループ・クリスタルクラブが協力、生徒の安全確保のために大いに役立った。
- 「信州民報」のコラム「火星人」欄に強行遠足を讃える記事が載り、励ましの手紙が多数寄せられる。

第 45 回 (昭和45年・1970)

● 本校創立90周年記念

創立記念の意味をこめて、強行遠足参加者全員に記念メダルが同窓会から贈られた。創立記念式典が盛大に挙行され、白田のお婆さんのほか、強行遠足にご協力いただいている救護所関係の皆様感謝状を贈呈する。

● 男子……小諸市民会館までの103km。

女子……三軒屋一小海の33km。

● 男子の小諸到着率20%台の成績を初めて収めた。 (現在では60%台に達している。)

● 歩行の危険増す

道路事情は車のためにはよくなったが、歩行には危険が増してきた。中込付近はバイパスが完成、横断に際し地下道利用を2箇所取れ入れた。市場一海ノ口も新道工事が開始され、松原湖手前は岸壁工事などで危険箇所が増えた。

女子のコース……三軒屋一小海 (33km)

● 全学年の保護者に協力依頼

2月、保護者に協力者を募っていたのを全学年に拡大、約150名の協力があつた。保護者の自動車提供者に回転式警告灯の購入あっせんをした (1台2000円)。

● 生徒殴られる

若神子一箕輪新町で歩行中の生徒が自動車の通行妨害をしたため、怒った運転手が殴打。生徒1人は前歯2本を折る。

● 初めて小諸到着率20%台の成績をおさめる。女子も昨年の雨天中止に発奮してか82%の到着率をおさめる。

● バン、リンゴの差し入れ

小諸のえびす屋食品、松井農園からバンやリンゴを差し入れてくれる。以来、平成8年 (1996)、本校からご辞退するまで続けていただいた。

● 佐久市の強行遠足

佐久市教育委員会社会教育課の紹介で、同市市民運動推進委員が特別参加。佐久市はその後、荊崎市一佐久市間で市民の強行遠足を実施。

第 46 回 (昭和46年・1971)

● 佐久往還コース10周年

佐久往還にコースを変えて10周年ということもあり、生徒もはりきったが、男子出発時の夜半すぎから雨になり、男子は途中で中止。女子はスタート地点、三軒屋までバスで行ったが雨が激しくこれも中止。

11月3日、UTYから長編ドキュメンタリーが放送された。又、NHK甲府放送局「今週の問題」の座談会に生徒4人。教師1人出演。

その他、日本経済新聞の全国版をはじめ、毎日新聞「甲斐週評」のコラムで支局長が賞讃。県内各社がマスコミ面で大きく取り上げ、希少価値的存在になった伝統行事を讀えてくれた感が深かった。

● ラッシュを避け出発を早める

荊崎の交通ラッシュを避けるため、男子の出発時刻を1時間早めて、午後3時出発とする。女子も30分早めて、午前5時バスで出発。

● 夜間の安全、事故防止のために、帽子に夜光テープをつけるようにした。

● 帰りは国鉄

清里以遠到着者の帰りの輸送は、すべて国鉄 (現JR) を利用することにした。これと共に会員券方式が特例として認可され、全ての列車に団体乗車ができるようになった。また、小海からは2両が増結されることになった。

● 定時制最後の強行遠足

定時制生徒は次年度から中央高校に編入されることになっており、最後の強行遠足となった。例年、参加は自由だったが、この年、男子12名が参加、うち1名が小諸に到着した。

● 東京教育大の研究

東京教育大学 (現筑波大学) の小川新吉教授を中心に、長距離歩行中における生体の諸変動について調査した。生徒を被験者とせず、同大学生7名が生体実験者となって参加。

(強行遠足研究報告の項目を参照)

強行遠足沿革

第 47 回 (昭和47年・1972)

- 男子出発時間を30分繰り上げ午後2時30分にし、翌日12時までの制限時間21時間30分に変更する。
- 女子のコースを高根東小—海ノ口駅前の32kmに変更。昨年の雨天中止の鬱憤を晴らすかのように、91.8%の最終到着率をみた。90%台に初めてなり、女生徒の平均距離31.3kmの大記録を生んだ。
- NHK「カメラリポート」が取材。朝の番組で全国に放映された。又毎日新聞の全国版にこれまた大きく「死闘100km!」を報道、学習研究社(学研)もレポーターがコースに同行し、「高二コース」に紹介した。
- コース変更
 荻崎までのコースで、登美—塩崎—荻崎の間が県内産業の基幹道路でもあるため交通量が多く、渋滞もひどかった。そのため、登美—新田—笠石—原ロータリーを経て山の上を通過するコースに変更。海ノ口—松原湖が道路工事中のため、松原湖畔を迂回する。

第 48 回 (昭和48年・1973)

- コースは男女共前年どおり。
- 帰甲列車には必ず看護婦さんが添乗する。
- 日赤甲府支部より救急用の毛布を借用。
- 救護所変更
 野辺山—市場が道路拡幅・改修工事を大々的に行っているため、迂回路を利用。市場の救護所を「りんどうがらす」から「ハケ岳荘」に変更。
- OBを含む部外者の参加を断ることとする。
- 雨天順延のため、保護者の協力者の確保に苦労する。

第 49 回 (昭和49年・1974)

- 小海線に限り急行小淵沢行に別途個人負担で乗せることになり、しかも急行停車駅でない海ノ口に、当日だけ臨時停車をしてくれた。
- 検印カードを現在のものと同型のものに変更した。

● 経費3割増—オイルショック後遺症

前年10月下旬に見られたオイルショックの後遺症が続く。買い占め、売り惜しみに狂乱物価や悪徳商法が問題となる。強行遠足の経費も3割増え、頭を痛める。保護者の協力も110名と必要最小限度の数に減り、安全歩行の対策に苦心した。

● 検印所変更

三軒屋……小清水商店から小清水次平氏宅へ
 岩村田……駅前の一二三旅館から浅間ヘルセンターへ

● 仮設道路を走る

野辺山—市場の道路拡幅工事のため重機が入り、一方通行の箇所が多く危険のため、工事関係者が強行遠足のための専用道路を道端に仮設してくれる。

中央自動車道の工事現場へのダンプカーが増加し、須玉町地域も危険地区となる。

- 検印カードを現在のものと同型のものに変更した。

第 50 回 (昭和50年・1975)

● 創立95周年記念

○ 記念式典を県民会館で挙行。強行遠足関係者も多数臨席され盛大に行われた。

- 女子コースは生徒の希望もあり、コースを延長し現在実施の高根—小海(42.5km)にて実施されるようになった。

- 記念の16ミリ記念映画「今・青春をゆく」をYBSに依頼して制作する。カラー50分の映画である。

- これとは別に、NHKから、イラストレーターの黒田征太郎氏が同行取材し、若者たちはいま「よーい・どん」(22時間100キロレース)が、全国に放映された。

● 盛り上がる創立95周年

女子の希望もあり、高根—小海に延長(42.5km)。しるこの差し入れがあった。平均走破距離40.8kmと好記録をつくった。

男子も創立95周年の年で発奮したのか、平均走

破距離87.3km、小諸到着率54.3%と大記録をマークした。

第 51 回 (昭和51年・1976)

- 男子は途中雨に遭ったが、完全実施。
女子はバスで学校を出発したが、降雨のため高根東小学校からバスで帰校した。
- 小諸市民会館が長野図書館会議のため使用できず、本年に限り公民館を終点の検印所に借用。
- 男子が1名足りない！
松原湖の係職員が氏名票を数えたが、2年生男子の1名分が足りず、松原湖—小海を探し回る。
同行の生徒の申立て、同生徒は検印を終えて、カードを持ったまま電車に乗り、帰宅したものと分かる。校長訓戒。
- 都留文大の研究
都留文科大学の一木教授生徒20名を対象に出発地と小諸の2箇所です尿検査を実施。助手の女子学生は雨のなかを濡れねずみになって走り込んでくる生徒の姿に胸うたれ、採尿もそこそこに救護手伝いに加わる。「教育実習のつもり」とか。

第 52 回 (昭和52年・1977)

- 甲府東高等学校を加えての4校総合選抜制になる。
- 男子の小諸到着率が60%台に突入した。
- 夜光テープ
白田警察署の指示によって男子の白ズボンの裾に夜光テープを付けることになった。これは夜間の自動車事故防止と休憩中の生徒の確認とに大いに役立った。
- 女子のバス発着所を一高前通りから緑が丘総合グラウンド野球場付近にした。
- 女子は昨年雨天で中止したため、1、2年生とも初参加。海ノ口での前進停止者が半数を占めた。
- 野辺山周辺の道路拡幅工事が盛んで危険を伴ったため、工事関係者が夜間歩行のための専用路をつくってくれる。
- 走行中の回転灯が警察から警告を受けたために、

巡視車にステッカーを貼り、赤い三角旗をつけることとした。

第 53 回 (昭和53年・1978)

- 生徒全員に対し、また、自動車による協力の父兄に対し、損害保険をかけるようにした。
- NHKが同行取材。「新日本紀行・八ヶ岳青春譜」を10月18日午後10時より全国に放送した。「年間の新日本紀行のアンコールは多いが、中でも八ヶ岳青春譜のアンコールは特に多かった。」
- コースの一部変更
葦崎—若神子では、須玉町内の百観音コースから、桐の木橋以北に完成したバイパスのコースに変更。
- 救護検印所の変更
若神子……須玉町役場から日石須玉給油所へ。
箕輪新町……木次油店から魚竹旅館へ。
長沢……長田旅館は本年に限り、大門ダム工事関係会社は長期契約をしたため借用ができず、旧道のO B・興水氏宅を借用。
海ノ口……鳩屋商店から南牧村役場前庭へ。
- スタート方式の変更
女子の出発式を当日の朝、高根小学校で挙行することにした。一斉スタート方式から学年別に時差をつけてスタートさせることにした。

第 54 回 (昭和54年・1979)

- 体育館増改築、格技場改築、竣工
- 道路の大工事はほとんど終了して道路は良くなったが、交通事故の心配が増える。
- 「フォト」記者同行取材し、グラビア4枚を発表、全国官公庁へ配布されていたためか、社会体育関係者からの問い合わせが増えてきた。又、「週刊サンケイ」の記者が体験レポート・シリーズの一つとして、強行遠足に自ら歩行したが、野辺山にて落伍した。
- 市場—海ノ口新道が完成、コースに使う。
- 事故防止のために看板を10本作り、野辺山—箕輪新町に取り付けたが、2本が盗まれる。

強行遠足沿革

- 八千穂・海ノ口に仮設電話を設置。
- 生徒のモラルが課題
生徒総会で、強行遠足中、生徒の気分がうわずり、お祭り気分が見られ、モラルも希薄になったことが反省され、翌年の創立百周年を控え、職員・生徒で心構えを新たにした。

第 55 回 (昭和55年・1980)

- 本校創立100周年記念
記念式典は県民会館大ホールに全校生が出席し、長駆、来賓の皆様を県内外から迎えて行われた。式中、感謝状贈呈の折に強行遠足関係者の代表者にも臨席していただいた。又、永年救護検印所としてお世話いただき今も多大なご迷惑になっている皆様には、学校長が出向いて感謝状を贈呈した。
- 小諸コースに変更されてから、すべての記録を更新する意気込みがみられた。
- 救護検印所の変更
中込救護検印所となっている清水屋旅館が都市計画工事のため2年間使用不能となり、千曲川近くの柏屋旅館に変更。
- 検印所主任者連絡会議を事前に実施、安全管理のための方策を研究し合う。
- 創立百周年の好記録
男子 参加率 98.2%
平均キロ数 93.9km (3年生の100.2kmは新記録)
平均到達率 69.2% (3年生の85.8%は新記録)
女子 参加率 93.4%
平均キロ数 41.6km (3年生の41.5kmは新記録)
平均到達率 94.4% (2年生の97.7%は新記録)
- 無制限前進はどうか
強行遠足委員会で甲府一小諸の佐久往還コースを前提として、男子の24時間内の無制限前進について検討され、次の結論を得る。
 - 1 現在の交通事情から安全が確保されにくい。救護体制も現状ですでに限界である。
 - 2 小諸という目標に意義がある。生徒にも現在のコースに不満はない。
 - 3 各方面から暖かな支援を得ているのは伝統と

既成事実があるからで、無理をして昔の松本方面コースの方式の取り入れは慎むべきだ。

第 56 回 (昭和56年・1981)

- 男女共コースに変更なし。
- 距離測定を正確に行うために、係の教師延べ8人が数回に分けて測定した。
男子……101km 女子……41.5km
- 夜光反射タスキ
白田署の指導によって、男子の歩行には、全員夜光反射付のタスキを使用した。帽子とズボンにもテープを使用して、夜間の安全歩行に万全を期した。
- 走る仲間のスポーツ・マガジン「ランナース」の記者が同行取材し、生徒と一緒に小諸までを完全歩行して踏破。
- 事前指導の充実と安全歩行の徹底を図るため、事前指導係を新設した。
- 職員の配置希望調査が復活する。
- 野辺山本部前が舗装され、しじみ汁を作るのに薪の使用ができなくなり、プロパンガスバーナーを購入した。

第 57 回 (昭和57年・1982)

- 8月の台風により国鉄小海線が不通になったが、国鉄の努力により予定を大幅に縮めて開通し、強行遠足実施に事なきを得た。
- 朝日テレビが「モーニングショー」に本校の強行遠足の状況を全国に放映した。

第 58 回 (昭和58年・1983)

- 長野県白田警察署の好意により、一般ドライバーに対する強行遠足歩行者への安全運転呼びかけ用のたれ幕掲場を本年より実施した。
- PTA協力者との全職員による合同反省会を本年より開催。

第 59 回 (昭和59年・1984)

- 女子コース一部変更 (松原湖一小海間、新道一

旧道)＝距離は不変＝

- 小諸コース設定20周年記念行事として講演会開催〔平沢弥一郎「足の裏からみた人生」(PTA研修会を兼ねる)〕
- 20周年記念「生徒体験記文集」発刊

第 60 回 (昭和60年・1985)

- 女子コース一部変更(高根東小～長沢間)
＝距離は不変＝
- 出発式を男女合同で実施
- 女子出発前のトイレ使用を学校で済ませる方法がとられた。
- 国道18号線の不通によりコースの交通量が激増した。そのために警察の指導もあり、女子コース一部変更(市場～海ノ口間、新道→旧道)＝500m短縮＝があった。同じく男子コース一部変更(松原湖～小海間、女子と同じ)があった。
- 第60回強行遠足
60回強行遠足を記念して以下のことが計画実施された。

- (1) 小諸市長出発式に出席
- (2) 60回記念誌刊行(強行遠足要覧)
- (3) 記念式典において功労者に感謝状贈呈
- (4) 小諸・小海ゴール到着者に記念文字入りメダル授与
- (5) 創立105周年と合わせて記念品(アクリルを使用した文鎮)の製作頒布
- (6) 強行遠足記念像の建立(須藤鏡氏作品)

記念像銘文

「君よ走れ

新たな歴史を創る道程」が決まる。

第 61 回 (昭和61年・1986)

- コース2ヶ所変更(男女共通で距離が500m短縮)(清里～野辺山間・市場～海ノ口間)
- 11月上旬の実施に伴い、相当な気温低下が予想されたので、高地(清里・野辺山・市場周辺)の気温調査を試みるも、実施当日は暖かく、好条件に恵まれた。

- 市場～海ノ口間の歩道の不整備がひどく、生徒有志・教師による清掃隊が出動し、空き缶回収や雑草除去を行った。

第 62 回 (昭和62年・1987)

- 昨年同様のコースで実施。
- 緊急連絡用としてポケットベルを全線巡視車に携行する。
- 研数学館の記者が同行取材する。

第 63 回 (昭和63年・1988)

- 雨天のため、初めて1日順延された。そのため、JR小海線の増結・臨時列車が依頼できず、女子の輸送については、貸切りバスを急遽チャーターした。
- 女子の出発時刻を1時間遅らせ、又最終制限時刻も1時間遅らせた。(制限時間8時間は変わらず)
- 「月刊高校教育」(学事出版)・「キャリア・ガイダンス」(リクルート出版)に紹介される。

第 64 回 (平成元年・1989)

- 大学入試センター試験(従来の共通一次試験)が早まったために、9月の最終週に実施。
- TBSテレビ「ギミアブレイク」で取り上げられ、全国ネットで放映される。又NHK教育テレビ「青春スクランブル」でも放映される。

平成2年(1990年)

台風18号のため中止。

- 創立110周年

10月31日(水)創立110周年記念式典を県民文化ホールで挙行。強行遠足関係功労者に記念品・感謝状を贈呈する。又「臼田のおばあちゃん」こと依田トミ子さんから本校生徒に「コリアーズエンサイクロペディア」全24巻が寄贈され、全校の職員・生徒が感激した。

強行遠足沿革

第 65 回 (平成 3 年・1991)

- コース一部変更 (若神子-三軒屋間)、女子の出発地を須玉小学校に変える。又女子の出発時刻を10分繰り上げ午前6時30分とし、制限時間を8時10分とする。
- コース変更に伴って男子103.6km・女子46.0kmの行程となる。
- 従来の「箕輪新町」「長沢」検印所を廃止し、新たに「津金」検印所を設置する。

第 66 回 (平成 4 年・1992)

- 校舎改築工事始まる。
- 北見北斗高との交流始まる
北海道北見北斗高等学校との交流を始めた。北見北斗高等学校からの代表男女各2人が参加した。又、本校代表男女各2人も北見北斗高等学校の強行遠足に参加した。
- 女子制限時間を30分延長した。
- 女子終点小海でコンピューターによる記録処理を始める。

第 67 回 (平成 5 年・1993)

- 校舎改築竣工式
- 天候に恵まれ無事終了した。
- オーストラリアからの女子留學生が参加した。
- 初めて校長車等に携帯電話を使用する。

第 68 回 (平成 6 年・1994)

- 出発当日午前中まで雨模様、決行したが途中はとんと雨に降られず無事終了。
- 当日夕方TBSテレビから明朝「ザ・フレッシュ」で小諸付近で中継取材したい申し入れがあり、緊急協議して許可したが、その直後、北海道東北沖地震が発生し、取材クルーが北海道へ取材に行くため急遽キャンセルになる。

第 69 回 (平成 7 年・1995)

- 創立115周年記念

記念式典において強行遠足関係代表者に感謝状贈呈。

永年救護検印所等でお世話になっている皆様に学校長が出向いて感謝状を贈呈した。

- 北海道北見北斗高等学校より代表男女各2人参加。男子は4位5位、女子は2位3位と健闘した。
- 係が全コースをウォーキングメーターにより実測した。

第 70 回 (平成 8 年・1996)

- 全職員・生徒に対し、蘇生法講習会を実施。
- 東日本旅客鉄道株式会社小海線営業所と覚所を交わす。(本校独自のJR団体乗車券を廃止し、学生団体特別契約乗車票を使用)
- 小諸市長の人事異動により、小諸到着者上位30名に贈られる色紙の廃止。
- 必要なものはみずから背負っていくという行事の本旨に戻すために、小諸到着者に無料で提供されていたパン(えびす屋)・牛乳(小諸市役所)・りんご(松井農園)を丁重にお断わりする。
- 北海道北見北斗高校の強行遠足に(第3回交流)本校生徒男女各2名参加、女子2名は3位入賞。
- 29人乗りマイクロバス購入、強行遠足の準備、有事の際の利用が可能になる。
- 名物であるしじみ汁を30年以上作り続けて下さった丸山良雄氏ご逝去。
- 山梨放送報道制作局テレビ制作部取材。
- 第70回強行遠足記念誌「歩け、心のかざり」発行。



三枝茂雄 画

強行遠足70回の記録

コース変遷略図

強行遠足練習会コース変遷略図

第1回～第39回

大正13年・1924—昭和39年・1964

実施の概要

各地到着者数の記録 I

各回の最長到達記録

第40回～第70回

昭和40年・1965—平成8年・1996

各地到着者数の記録 II (男子)

同 (女子)

参加率の変遷

最終地点到達率の変遷

平均走行距離の変遷

変わらないからこそ、貴い

表彰の歴史

「強行遠足新聞」より《縮刷》

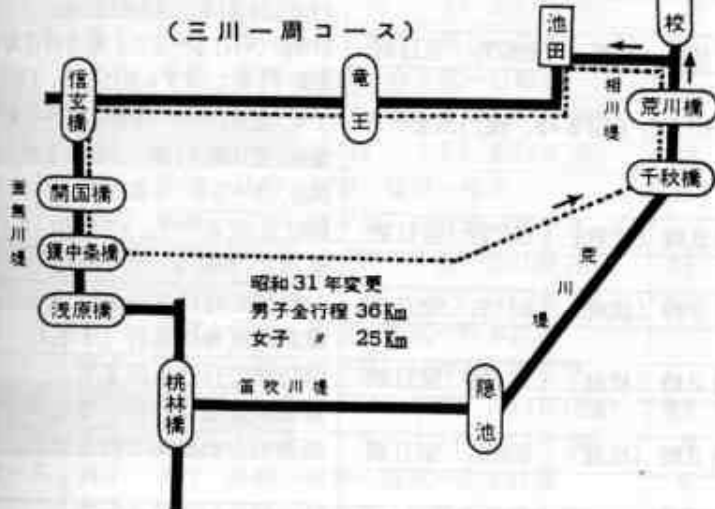
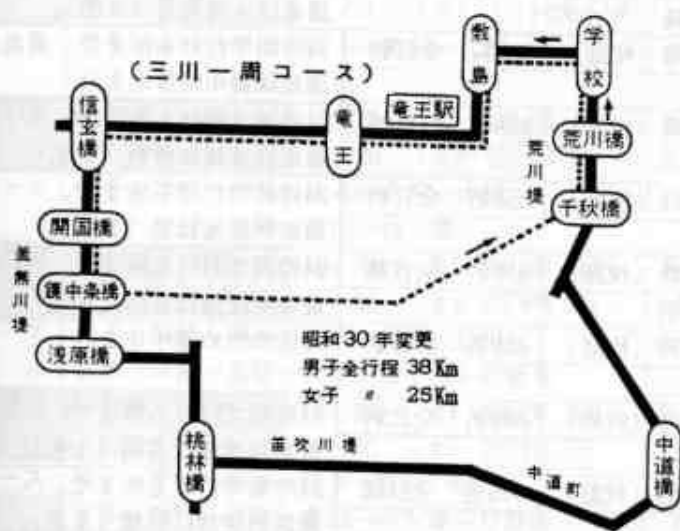
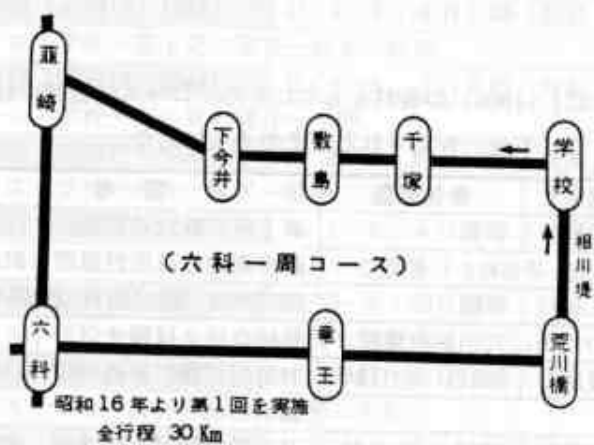
強行遠足Q&A

コース変遷略図

回数	方面	変更の理由
第1回 (大正13年)	東京方面コース	実施の理由 文部省より「11月3日(旧明治節)を祝して何等かのスポーツを実施せよ」との通達があったので、校訓「質実剛健」の目標に則り、心身の練磨をこなすことを目的として11月4日に強行遠足を実施した。
コース略図 第1回 東京方面コース 第2回 穴山新府城跡コース 第3回 御嶽昇仙峯コース		
回数	方面	変更の理由
第2回-3回 (大正14・15年)	松本方面コース	変更の理由 前回のコースは途中笹子峠と、小仏峠と言う難所があり、歩行するには不適當であることにより、鉄道沿線であり平坦でもある信州街道が選ばれ、終点を松本として実施された。
コース略図 別に足利者のために 穴山新府城跡コース 御嶽昇仙峯コースとがあった。		
回数	方面	変更の理由
第4回-5回 (昭和2・3年)	松本・本島 曾福方面コース	変更の理由 前回コースの終点松本到着者は相当数に及び歩行の余力充分ありと認め、木曾福島方面にコースを延長して実施された。(24時間制として行けるところまで)
コース略図 別に足利者のために 穴山駅までのコースを残し、 御嶽昇仙峯コースは第5回から廃した。		



強行遠足練習コース変遷略図



— 男子
..... 女子

第1回—第39回

第34回 (昭和33・1958)	10/29—30	男子 29日12時 (校庭) 女子 29日7時30分 (同)	男子 1235名 全日制 女子 259名 全日制	男子—24時間で行ける所まで。 最高到達地は木崎 (1名)。 女子—8時間30分 指定終点制 終点の富士見到着者156名。
コース	男子 学校—荻崎—岡谷—塩尻—松本以遠 女子 学校—荻崎—台ヶ原—日野春—富士見			
第35回 (昭和35・1960)	10/28—29	男子 28日12時 (校庭) 女子 28日7時30分 (同)	男子 1191名 全日制 同 28名 定時制 女子 228名 全日制	男子—24時間で行ける所まで。 最高到達地は大町 (1名)。 女子—8時間30分 指定終点制 終点の富士見到着者96名。
コース	男子 学校—荻崎—岡谷—塩尻—松本以遠 女子 学校—荻崎—台ヶ原—上諏訪—富士見			
第36回 (昭和36・1961)	10/19—20	男子 19日11時 (校庭) 女子 19日7時30分 (同)	男子 1091名 全日制 同 17名 定時制 女子 254名 全日制 同 16名 定時制	男子—24時間で行ける所まで。 最高到達地は大町 (1名)。 女子—8時間30分 指定終点制 終点の富士見到着者126名。
コース	男子 学校—荻崎—岡谷—塩尻—松本以遠 女子 学校—荻崎—台ヶ原—上諏訪—富士見			
第37回 (昭和37・1962)	10/16	男子 16日17時 (体育館) 女子 16日8時 (箕輪新)	男子 1108名 全日制 同 18名 定時制 女子 264名 全日制 同 11名 定時制 同 2名 通信制	男子—15時間 終点指定制 終点の松原湖到着者267名。 女子—7時間 指定終点制 終点の松原湖到着者14名。
コース	男子 学校—荻崎—清里清泉寮—野辺山—松原湖 女子 箕輪新町—長沢—清里清泉寮—野辺山—松原湖			
第38回 (昭和38・1963)	10/16—17	男子 16日21時 (体育館) 女子 17日7時30分 (箕)	男子 1236名 全日制 同 21名 定時制 女子 288名 全日制 同 31名 定時制	男子—17時間 終点指定制 終点の中込到着者72名。 女子—5時間 終点指定制 終点の海ノ口到着者18名。
コース	男子 学校—長沢—野辺山—小海—中込 女子 箕輪新町—清里—野辺山—海ノ口			
第39回 (昭和39・1964)	9/30—10/1	男子 30日21時 (体育館) 女子 1日7時30分 (若)	男子 1424名 全日制 同 19名 定時制 女子 318名 全日制 同 26名 定時制	男子—17時間 終点指定制 終点の中込到着者127名。 女子—5時間 終点指定制 終点の野辺山到着者146名。
コース	男子 学校—荻崎—野辺山—海ノ口—中込 女子 若神子—箕輪—長沢—清里—野辺山			

月	日	曜日	休	出	入	1	2	3	4	HR	5	6	7	HR
3	1					10	10	10	10	10	10	10	10	10
3	2					10	10	10	10	10	10	10	10	10
3	3					10	10	10	10	10	10	10	10	10
3	4					10	10	10	10	10	10	10	10	10
3	5					10	10	10	10	10	10	10	10	10
3	6					10	10	10	10	10	10	10	10	10
3	7					10	10	10	10	10	10	10	10	10
3	8					10	10	10	10	10	10	10	10	10
3	9					10	10	10	10	10	10	10	10	10
3	10					10	10	10	10	10	10	10	10	10
3	11					10	10	10	10	10	10	10	10	10
3	12					10	10	10	10	10	10	10	10	10
3	13					10	10	10	10	10	10	10	10	10
3	14					10	10	10	10	10	10	10	10	10
3	15					10	10	10	10	10	10	10	10	10
3	16					10	10	10	10	10	10	10	10	10
3	17					10	10	10	10	10	10	10	10	10
3	18					10	10	10	10	10	10	10	10	10
3	19					10	10	10	10	10	10	10	10	10
3	20					10	10	10	10	10	10	10	10	10
3	21					10	10	10	10	10	10	10	10	10
3	22					10	10	10	10	10	10	10	10	10
3	23					10	10	10	10	10	10	10	10	10
3	24					10	10	10	10	10	10	10	10	10
3	25					10	10	10	10	10	10	10	10	10
3	26					10	10	10	10	10	10	10	10	10
3	27					10	10	10	10	10	10	10	10	10
3	28					10	10	10	10	10	10	10	10	10
3	29					10	10	10	10	10	10	10	10	10
3	30					10	10	10	10	10	10	10	10	10
3	31					10	10	10	10	10	10	10	10	10



物品をトラックに積み込む。
後姿は岩波校長 (昭和56・1981)

参加者数を職員室に書き出す (昭和54・1979)

各地到達者数の記録

※作成に当たり、『創立八十五周年記念強行遠足沿革誌』（1966）の資料をもとにした。コースの記載の仕方など統一がとれていないがそのままにした。

年度 回数	大正13 第1回	大正14 第2回	大正15 第3回		昭和2 第4回		昭和3 第5回		昭和4 第6回	
各地 到着者	不明	不明	韭崎		韭崎		韭崎		韭崎	1
			長坂	201	長坂	72	長坂	42	穴山	21
			小淵沢	10	小淵沢	17	小淵沢	13	長坂	39
			富士見	162	富士見	231	富士見	166	小淵沢	3
			青柳	57	青柳	82	青柳	98	信濃境	20
			茅野	46	茅野	56	茅野	111	日野春	134
			上諏訪	65	上諏訪	118	上諏訪	164	富士見	115
			下諏訪	10	下諏訪	15	下諏訪	57	茅野	74
			岡谷	7	岡谷	9	岡谷	33	青柳	93
			川岸	3	川岸	14	川岸	7	上諏訪	138
			辰野	1	辰野	3	辰野	17	下諏訪	99
			村井	3	塩尻	16	塩尻	12	塩尻	48
			塩尻	9	村井	1	洗馬	2	村井	13
			松本	14	辰野迂回塩尻	5	小野	8	松本	56
			計 588		松本	21	日出塩	4	豊科	2
					辰野迂回奈良井	3	村井	1	計 858	
					木曽福島	3	松本	33		
					計 665		田沢	6		
							迂回松本	3		
							奈良井	5		
				明科	1					
				迂回費川	3					
				計 786						
年度 回数	昭和5 第7回		昭和6 第8回		昭和7 第9回		昭和8 第10回		昭和9 第11回	
各地 到着者	韭崎		韭崎		降雨のため途中中止	韭崎		韭崎		
	穴山	12	穴山	29		穴山	12	穴山	8	
	台ヶ原	26	日野春	1		台ヶ原	51	台ヶ原	69	
	長坂	10	台ヶ原	33		富士見	150	信濃境	13	
	小淵沢	58	長坂	1		青柳	72	富士見	120	
	信濃境	9	小淵沢	9		茅野	70	青柳	80	
	富士見	141	信濃境	2		上諏訪	173	茅野	81	
	青柳	71	富士見	97		下諏訪	145	上諏訪	178	
	茅野	77	青柳	83		岡谷	30	下諏訪	116	
	上諏訪	83	茅野	58		川岸	82	岡谷	19	
	下諏訪	112	上諏訪	151		辰野	5	川岸	7	
	岡谷	30	下諏訪	32		小野	34	辰野	65	
	川岸	66	岡谷	128		塩尻	52	小野	55	
	辰野	75	川岸	22		松本	12	塩尻	43	
	小野	76	辰野	74		有明	1	松本	15	
	塩尻	2	小野	56		計 892		島高松	4	
	松本	5	塩尻	68				梓橋	2	
	計 853		村井	1				計 875		
		松本	13							
		有明	1							
		計 859								

年度回数	昭和10 第12回		昭和11 第13回		昭和12 第14回		昭和13 第15回		昭和14 第16回	
各地到着者	葦崎		葦崎		葦崎		葦崎		葦崎	
	穴山	6	穴山	5	穴山	5	穴山	6	台ヶ原	12
	台ヶ原	51	台ヶ原	14	台ヶ原	8	台ヶ原	23	葛木	3
	信濃境	6	小淵沢	2	富士見	76	富士見	73	富士見	139
	富士見	91	富士見	2	青柳	151	青柳	110	青柳	156
	青柳	100	青柳	88	茅野	274	茅野	124	茅野	55
	茅野	75	茅野	61	上諏訪	282	上諏訪	237	上諏訪	292
	上諏訪	271	上諏訪	240	下諏訪	45	下諏訪	147	下諏訪	63
	下諏訪	99	下諏訪	184	岡谷	21	岡谷	14	岡谷	32
	岡谷	6	岡谷	22	辰野	7	川岸	21	川岸	17
	川岸	27	川岸	39	計 890 雨天中止	辰野	46	辰野	61	
	辰野	76	辰野	62		小野	33	小野	39	
	小野	62	小野	56		塩尻	26	塩尻	29	
	塩尻	10	塩尻	18		松本	8	広丘	1	
	松本	5	松本	16		梓橋	1	松本	8	
	豊科	2	豊科	2		豊科	1	島内	2	
	会染	1	有明	1		計 869	梓橋	1		
その他	4	計 890	立石	2						
計 891	豊科		2							
							計 914			
年度回数	昭和15 第17回		昭和16 第18回		昭和17 第19回		昭和18 第20回		昭和19 第21回	
各地到着者	葦崎		葦崎		葦崎		葦崎		葦崎	
	台ヶ原	2	穴山	1	台ヶ原	2	台ヶ原	2	台ヶ原	2
	富士見	35	台ヶ原	3	富士見	8	富士見	2	富士見	24
	青柳	35	富士見	21	青柳	19	青柳	2	青柳	31
	茅野	85	青柳	22	茅野	32	茅野	9	茅野	48
	上諏訪	308	茅野	43	上諏訪	129	上諏訪	22	上諏訪	73
	下諏訪	115	上諏訪	122	下諏訪	201	下諏訪	171	下諏訪	157
	岡谷	54	下諏訪	266	岡谷	53	岡谷	83	岡谷	41
	川岸	44	岡谷	36	川岸	145	川岸	160	川岸	39
	辰野	92	川岸	141	辰野	242	辰野	265	辰野	158
	小野	53	辰野	185	小野	56	小野	152	小野	111
	塩尻	32	小野	49	善知鳥峠	10	塩尻	121	計 685	
	広丘	1	塩尻	31	塩尻	98	村井	1		
	村井	1	広丘	1	村井	1	松本	227		
	計 936	村井	3	松本	160	梓橋	14			
		松本	111	梓橋	18	豊科	19			
		梓橋	8	豊科	3	穂高	2			
豊科		1	有明	2	有明	1				
穂高		1	計 1184	松川	2					
有明		2		計 1255						
計 1040										

年度 回数	昭和21 第22回		昭和22 第23回		昭和23 第24回		昭和24 第25回		昭和25 第26回	
各地 到着者	葦崎		葦崎	1	葦崎		葦崎		葦崎	2
	台ヶ原	10	台ヶ原	1	台ヶ原	3	台ヶ原	16	台ヶ原	16
	富士見	61	富士見	32	富士見	21	富士見	36	富士見	61
	青柳	57	青柳	55	青柳	12	青柳	37	青柳	45
	茅野	22	茅野	22	茅野	26	茅野	47	茅野	21
	上諏訪	351	上諏訪	437	上諏訪	337	上諏訪	479	上諏訪	639
	下諏訪	202	下諏訪	57	下諏訪	68	下諏訪	15	下諏訪	17
	岡谷	357	岡谷	180	岡谷	161	岡谷	157	岡谷	183
	川岸	77	川岸	52	川岸	56	川岸	16	川岸	19
	辰野	228	辰野	157	辰野	87	辰野	63	辰野	61
	小野	132	小野	94	小野	133	小野	25	小野	19
	塩尻	121	塩尻	136	塩尻	148	塩尻	165	塩尻	141
	村井	6	広丘	7	広丘		広丘	5	広丘	9
	松本	96	村井	1	村井		村井	1	村井	5
	梓橋	14	松本	168	松本	80	松本	133	松本	185
	豊科	5	梓橋	12	梓橋	20	梓橋	21	田沢	1
	穂高	4	豊科	11	豊科		豊科	5	梓橋	9
	計 1743		穂高	2	柏矢町	1	柏矢町		南豊科	2
			有明	2	穂高	4	穂高	2	豊科	1
			松川	2	有明		有明	2	柏矢町	
			計 1429		追分	2	細野	2	穂高	4
					松川	1	松川	1	有明	1
					計 1160		杓掛	1	追分	1
							大町	1	細野	
							計 1240		松川	1
									杓掛	
									大町	1
									計 1444	
年度 回数	昭和26 第27回		昭和27 第28回		昭和28 第29回		昭和29 第30回		昭和30 第31回	
各地 到着者	葦崎		葦崎		葦崎		葦崎		葦崎	3
	台ヶ原	4	穴山	1	台ヶ原	8	台ヶ原	10	穴山	6 30
	富士見	19	牧ノ原	1	富士見	94	富士見	205	台ヶ原	19 46
	青柳	48	台ヶ原	16	青柳	52	青柳	185	国界橋	3
	茅野	43	富士見	101	茅野	54	茅野	399	瀬沢大橋	6 132
	上諏訪	41	青柳	48	上諏訪	380	上諏訪	259	富士見	233
	下諏訪	481	茅野	46	岡谷	240	下諏訪	6	青柳	355
	岡谷	384	上諏訪	337	川岸	20	岡谷	139	茅野	227
	川岸	22	岡谷	388	辰野	66	川岸	3	上諏訪	220
	辰野	40	川岸	12	小野	6	計 1120		下諏訪	36
	小野	20	辰野	62	塩尻	70	雨天中止		岡谷	6
	塩尻	141	小野	14	広丘	1	女子の日野春到着		川岸	
	南松本	1	塩尻	93	南松本	1	314		男 女	
	松本	143	松本	114	松本	90			(男子) 計 1111	
	梓橋	37	梓橋	40	鳥内	1			(女子) 計 211	
	豊科	2	豊科	8	梓橋	22				
	柏矢町	1	穂高	4	豊科	8				
	穂高	2	有明	4	柏矢町	1				
	大町		松川	2	有明	1				
	木崎	1	計 1288		大町	1				
	計 1426				計 1123					

年度 回数	昭和31 第32回			昭和32 第33回			昭和33 第34回			昭和35 第35回			昭和36 第36回		
各地 到着者	葦崎	4	1	穴山		39	葦崎			葦崎	1	9	葦崎	4	1
	穴山	4	18	台ヶ原	44	22	穴山	8	2	穴山	5	7	穴山	7	5
	台ヶ原	36	32	国界橋	14	100	台ヶ原	24	31	台ヶ原	12	33	台ヶ原	16	4
	国界橋		14	瀬沢大橋		2	国界橋	7	65	国界橋	13	77	国界橋	12	128
	瀬沢大橋	1	3	富士見	230	86	瀬沢大橋	6	2	瀬沢大橋	7	1	瀬沢大橋	3	
	富士見	177	181	青柳	42		富士見	129	156	富士見	185	96	富士見	137	126
	青柳	43		茅野	61		青柳	29		青柳	11		青柳	31	
	茅野	102		上諏訪	200		茅野	80		茅野	75		茅野	66	
	上諏訪	155		下諏訪		3	上諏訪	284		上諏訪	198		上諏訪	147	
	下諏訪	8		岡谷	254		下諏訪	3		下諏訪	17		下諏訪	8	
	岡谷	324		川岸	18		岡谷	289		岡谷	321		岡谷	298	
	川岸	17		辰野	105		川岸	7		川岸	39		川岸	35	
	辰野	111		川島	1		辰野	127		辰野	103		辰野	91	
	小野	22		小野	22		小野	29		小野	1		小野	41	
	塩尻	52		塩尻	64		塩尻	41		塩尻	29		塩尻	48	
	松本	83		広丘	1		村井			村井	26		村井	6	
	梓橋	3		村井	1		松本	104		松本	131		松本	118	
	豊科	8		松本	76		梓橋	9		梓橋	33		梓橋	20	
	穂高	2		梓橋	6		豊科	5		豊科	7		豊科	15	
	北細野	1		豊科	7		穂高	4		穂高	2		穂高	2	
	松川	1		穂高	4		有明	1		有明	2		有明	2	
	男女 (男子)計 1164 (女子)計 249			有明			追分	3		大町	1		細野	3	
				松川	1		木崎	1		男女 (男子)計1291 (女子)計 223			大町	1	
				梁場	1		男女 (男子)計 1190 (女子)計 256						男女 (男子)計1112 (女子)計 264		
				(男子)計1157 (女子)計 246											
年度 回数	昭和37 第37回			昭和38 第38回			昭和39 第39回								
各地 到着者	葦崎	7		葦崎	15		葦崎	43							
	若紙子	25		若紙子	19		若紙子	30							
	箕輪新町	11		箕輪新町	13		箕輪新町	25							
	長沢	3		長沢	27		長沢	40	3						
	三軒屋	8	1	三軒屋	4	1	三軒屋	8							
	清泉寮本部	607	70	清里	471	36	清里	292	169						
	野辺山	146	125	野辺山	442	263	野辺山	355	146						
	市場	8	6	市場	21	1	市場	36							
	海ノ口	44	61	海ノ口	93	18	海ノ口	179							
	松原湖	267	14	松原湖	141		松原湖	154							
	男女 (男子)計1126 (女子)計 277			小海	19		小海	84							
				八千穂	13		八千穂	31							
				羽黒下	4		羽黒下	10							
				三反田	3		三反田	10							
				中込	72		中込	127							
				男計1257	女計540		男計1424	女計318							

第40回—第70回

昭和10年・12月1日—昭和40年・12月1日

各回の最長到達記録

第1回（大正13年）

記録不明

但し最長到着地上野原

第2回（大正14年）

記録不明

但し最長到着地松本

第3回（大正15年）

松本（120k）

川口多治郎、加藤和平、三井正夫、浅川 栄、沢田栖巖、藤田甚太郎、土屋甲子策（5年）藤田義治、矢崎千勝、望月信一郎、網倉志朗、佐野東徳、松尾敏夫、小林一雄（4年）

第4回（昭和2年）

木曾福島（142k）

小林一雄、松尾敏史（5年）

第5回（昭和3年）

賛川（124k）

鈴木秀彦（5年）清水文人、白倉芳行（4年）

第6回（昭和4年）

豊科（115.4k）

日高吉郎、茂手木元蔵（5年）

第7回（昭和5年）

松本（120k）

笹本重雄（5年）三枝 林、久保寺恒夫、志村利雄（4年）樋泉睦雄（3年）

第8回（昭和6年）

有明（135.9k）

雨宮正二（5年）

第9回（昭和7年）

降雨の為上諏訪にて中止 上諏訪23名

第10回（昭和8年）

有明（135.9k）

斐場孝明（5年）

第11回（昭和9年）

梓橋（122.7k）

山本勇造（5年）田草川実（3年）

第12回（昭和10年）

会楽（140.4k）

岩下竜一（4年）

第13回（昭和11年）

有明（135.9k）

田草川実（5年）

第14回（昭和12年）

降雨の為辰野にて中止 辰野7名

第15回（昭和13年）

豊科（128.9k）

石川隆次（5年）

第16回（昭和14年）

豊科（128.9k）

大芝玄五、大森 等（5年）

第17回（昭和15年）

降雨の為松本にて中止 松本着59名

第18回（昭和16年）

有明（135.9k）

堀内逸雄、石川祐夫（4年）

第19回（昭和17年）

有明（135.9k）

小野貞二（5年）野沢竜朗（4年）

第20回（昭和18年）

松川（141.3k）

野沢竜朗、溝部正恒（5年）

第21回（昭和19年）

戦時中につき1、2年生のみ小野まで、111名

第22回（昭和21年）

穂高（131.5k）

飯田哲二（5年）中村啓信、丸山 功、丹沢和重（4年）

第23回（昭和22年）

松川（141.3k）

志村道雄、中村啓信（5年）

第24回（昭和23年）

松川（141.3k）

堀内清英（3年）（以下新制高校3年制度）

第25回（昭和24年）

大町（152.6k）

大塚敬三（3年）

第26回（昭和25年）

大町（152.6k）

今福利重（2年）

第27回（昭和26年）

木崎（160.2k）

今福利重（3年）

第28回（昭和27年）

松川（141.3k）

中村信也、今村厚雄（3年）

第29回（昭和28年）

大町（152.6k）

広瀬一郎（3年）

第30回（昭和29年）

降雨のため川岸にて中止、川岸3名

第31回（昭和30年）

降雨のため岡谷にて中止、岡谷6名

第32回（昭和31年）

松川（142.3k）

鈴木国博（2年）

第33回（昭和32年）

築場（167.1k）

岩間孝吉（3年）（最長到達記録保持者）

第34回（昭和33年）

木崎（160.2k）

横森一三（3年）

第35回（昭和35年）

大町（156.0k）

関口亜彦（3年）

第36回（昭和36年）

大町（156.0k）

乙黒勝弘（2年）

第37回（昭和37年）

松原湖（68k）267名

第38回（昭和38年）

中込（87k）72名

第39回（昭和39年）

中込（87k）129名

◎松本以遠主要地点到着者総数

（但し1、2回及び降雨中止を除き、全日制男子のデータ）

松本（120k）2,283名、梓橋（122.7k）290名、賛川（124k）3名、豊科（128.9k）116名、
穂高（131.5k）39名、有明（136.9k）23名、松川（141.3k）11名、木曾福島（142.0k）3名、
大町（152.6k）5名、木崎（160.2k）2名、築場（167.1k）1名。



佐野智子 画

第40回－第70回

昭和40年・1965－平成8年・1996

各地到着者数の記録 (男子)

年 度	昭和40	昭和41	昭和42	昭和43	昭和44	昭和45	昭和46	昭和47	昭和48	昭和49	昭和50
回 数	第40回	第41回	第42回	第43回	第44回	第45回	第46回	第47回	第48回	第49回	第50回
並 崎	48	66	47	21	20	13	18	2	9	3	4
若 神 子	14	23	19	18	23	16	17	7	11	15	3
箕 輪	24	30	26	13	13	16	19	4	1	6	5
長 沢	27	72	25	33	24	37	27	20	11	6	12
三 軒 屋	16	7	10	2	9	4	5	12	12	12	7
清 里	165	186	190	111	154	43	109	94	59	34	49
野 辺 山	343	297	263	226	247	194	142	113	97	73	71
市 場	5	10	4	14	10	6	59	4	1	4	13
海ノ口	115	141	154	135	94	68	109	104	64	46	40
松 原 湖	50	69	23	32	11	5	69	9	24	25	8
小 海	227	157	193	160	71	37	44	71	53	18	9
八 千 穂	49	11	49	66	48	149	45	31	33	23	40
羽 黒 下	50	53	21	5	11	5	5	14	9	5	0
白 田	58	37	60	87	80	56	46	102	113	128	56
中 込	62	82	58	62	32	70	33	39	21	30	46
岩 村 田	5	22	9	3	4	10	92	7	9	13	11
三 岡	6	8	4	6	13	8	39	3	4	6	9
小 諸	228	170	191	188	163	213	21	219	306	404	455
在籍者数(人)	1,562	1,511	1,397	1,233	1,085	990	930	875	860	877	858
不参加者数(人)	70	70	51	51	58	40	31	20	23	26	20
参加者数(人)	1,492	1,441	1,346	1,182	1,027	950	899	855	837	851	838
参加率(%)	95.5	95.4	96.3	95.9	94.7	96.0	96.7	97.7	97.3	97.0	97.7
到達率(%)	15.3	11.8	14.2	15.9	15.9	22.4	2.3	25.6	36.6	47.5	54.3
総走行距離(km)	93,705	86,961	84,544	78,225	65,695	67,810	56,917	65,507	67,494	72,906	73,132
平均距離(km)	62.8	60.3	62.8	66.2	64.0	71.4	63.3	76.6	80.6	85.7	87.3
実施距離(km)	100.0	103.0	102.1	102.1	102.0	103.0	103.0	107.3	106.0	105.0	105.0

年 度	昭和51	昭和52	昭和53	昭和54	昭和55	昭和56	昭和57	昭和58	昭和59	昭和60	昭和61
回 数	第51回	第52回	第53回	第54回	第55回	第56回	第57回	第58回	第59回	第60回	第61回
並 崎	1	1	3	17	16	(1) 2	1	1	22	13	2
若 神 子	7	5	2	1	3	1	8	2	7	0	3
箕 輪	6	2	3	4	1	4	0	1	2	1	1
長 沢	10	5	6	2	5	5	4	4	5	4	3
三 軒 屋	14	6	6	4	4	7	4	6	14	7	5
清 里	41	23	8	6	3	17	9	10	16	14	16
野 辺 山	82	15	21	23	16	17	14	14	25	37	46
市 場	33	28	24	3	18	17	6	5	6	8	10
海ノ口	104	36	14	22	12	18	33	61	40	28	40
松 原 湖	52	12	7	4	4	0	4	7	15	1	12
小 海	8	6	2	5	15	35	24	2	4	1	9
八 千 穂	18	16	33	31	13	25	17	11	32	6	51
羽 黒 下	4	9	4	5	4	3	3	6	11	10	1
白 田	31	73	49	68	49	26	27	36	40	40	43
中 込	19	31	36	24	17	25	10	5	11	14	7
岩 村 田	12	8	9	17	8	9	7	4	4	1	4
三 岡	11	14	9	13	9	3	13	13	14	8	12
小 諸	347	436	438	378	442	394	415	414	342	391	281
在籍者数(人)	821	742	695	655	651	639	622	622	629	607	572
不参加者数(人)	21	16	21	23	12	30	23	20	19	23	26
参加者数(人)	800	726	674	632	639	609	599	602	610	584	546
参加率(%)	97.4	97.8	97.0	96.5	98.2	95.3	96.3	96.8	97.0	96.2	95.5
到達率(%)	43.4	60.1	65.0	59.8	69.2	64.7	69.3	68.8	56.1	67.0	51.5
総走行距離(km)	64,753	66,540	60,767	58,018	59,978	54,128	54,387	54,385	51,180	51,759	46,130
平均距離(km)	80.9	91.7	90.2	91.8	93.9	88.9	90.8	90.3	83.9	88.6	84.5
実施距離(km)	105.0	105.0	105.0	105.0	105.0	101.0	101.0	101.0	101.0	101.5	101.7

回05第一回04第

昭和・平成の足跡をたどる

年 度	昭和62	昭和63	平成元	平成2	平成3	平成4	平成5	平成6	平成7	平成8	合 計
回 数	第62回	第63回	第64回	一	第65回	第66回	第67回	第68回	第69回	第70回	(備考)
若 崎	1	4	20	雨	1	4	3	1	1	1	
若 神	4	3	3		5	3	1	3	8	4	
若 輪	4	7	6		-	-	-	-	-	-	65回より廃止
長 沢	0	5	0		4	5	3	3	8	3	65回より津金
三 軒	1	2	0		1	5	1	7	11	13	
清 里	2	19	17		15	20	15	23	28	26	
野 辺	50	41	24		42	48	46	46	57	51	
市 場	10	11	16		7	7	2	1	3	12	
海 ノ 口	48	51	38		15	35	27	35	3	10	
松 原	9	28	17		25	5	22	7	11	10	
小 海	3	11	29	中	19	16	6	39	43	50	
八 千	35	15	23		47	28	30	18	34	36	
羽 黒	3	1	3		8	21	2	11	4	4	
白 田	51	45	52		70	80	72	49	62	65	
中 田	13	17	9		7	4	14	16	27	35	
岩 村	3	2	11		6	9	9	8	7	5	
三 岡	7	7	0		12	11	5	32	1	3	
小 諸	295	272	292		257	220	237	197	148	124	
在 籍 者 数 (人)	560	578	584	-	551	529	508	481	465	466	24,155
不 参 加 者 数 (人)	21	37	24	-	10	8	13	14	9	14	844
参 加 者 数 (人)	539	541	560	-	541	521	495	467	456	452	23,311
参 加 率 (%)	96.3	93.6	95.9	-	98.2	98.5	97.4	97.1	98.1	97	96.5
到 達 率 (%)	54.7	50.3	52.1	-	47.5	42.2	47.9	42.2	32.5	27.4	34.4
総 走 行 距 離 (km)	46,548	44,969	46,885	-	46,847	43,743	42,766	38,747	35,977	35,392	1,816,796
平 均 距 離 (km)	86.4	83.1	83.7	-	86.6	84.0	86.4	83.0	78.9	78.3	77.9
実 施 距 離 (km)	102.0	102.0	102.0	-	103.6	103.6	103.6	103.6	103.3	103.3	-



ゴミ処理用の穴を掘る
(昭和59・1984)

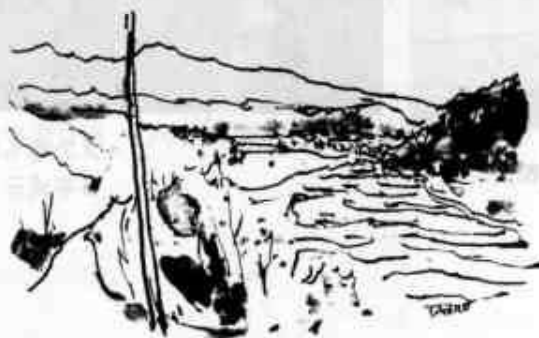
コースを清掃する
(昭和61・1986)



各地到着者数の記録 II (女子)

年 度	昭和40	昭和41	昭和42	昭和43	昭和44	昭和45	昭和46	昭和47	昭和48	昭和49	昭和50
回 数	第40回	第41回	第42回	第43回	第44回	第45回	第46回	第47回	第48回	第49回	第50回
高根東小	—	—	—	—	—	—	女子 の み 中 止	0	0	0	(1)
長 沢	—	—	—	—	—	—		0	0	1	0
三軒屋	0	0	0	0	0	0		2	3	3	1
清 里	0	0	2	3	0	1		6	6	4	0
野 辺 山	3	11	7	2	351	1		23	19	8	6
市 場	4	0	0	2	途 中 中 止	0		6	8	7	2
海ノ口	30	14	34	18		17		412	417	446	32
松原湖	171	91	51	55		46		—	—	—	20
小 海	153	253	272	276		310		—	—	—	447
在籍者数(人)	388	392	398	389	398	417	—	479	493	500	540
不参加者数(人)	27	23	32	33	47	42	—	30	40	31	31
参加者数(人)	361	369	366	356	351	375	—	449	453	469	509
参加率(%)	93.0	94.1	92.0	91.5	88.2	89.9	—	93.7	91.9	93.8	94.3
到達率(%)	42.4	68.6	74.3	77.5	0	82.7	—	91.8	92.1	95.1	87.8
総走行距離(km)	10,653	11,281	10,910	10,838	4,142	11,970	—	13,923	14,061	14,711	20,792
平均距離(km)	29.5	30.6	29.8	30.4	11.8	31.9	—	31.0	31.0	31.4	40.8
実施距離(km)	32.0	33.0	33.0	33.0	33.0	33.0	—	32.0	32.0	32.0	42.0

年 度	昭和51	昭和52	昭和53	昭和54	昭和55	昭和56	昭和57	昭和58	昭和59	昭和60	昭和61
回 数	第51回	第52回	第53回	第54回	第55回	第56回	第57回	第58回	第59回	第60回	第61回
高根東小	女子 の み 中 止	0	0	0	0	0	(1)	0	0	0	0
長 沢		1	0	1	0	0	1	0	0	6	2
三軒屋		0	0	0	0	0	1	0	2	0	0
清 里		2	5	5	0	2	1	1	1	1	1
野 辺 山		8	8	7	3	3	2	1	3	7	4
市 場		20	11	11	4	2	1	4	3	0	1
海ノ口		232	20	17	7	6	4	10	12	4	1
松原湖		52	31	32	17	16	20	45	22	11	13
小 海		293	499	452	521	535	543	533	538	535	487
在籍者数(人)	—	627	611	555	591	609	624	636	627	603	549
不参加者数(人)	—	19	37	30	39	45	50	42	46	39	40
参加者数(人)	—	608	574	525	552	564	574	594	581	564	509
参加率(%)	—	97.0	93.9	94.6	93.4	92.6	92.0	93.4	92.7	93.5	92.7
到達率(%)	—	48.2	86.9	86.1	94.4	94.6	94.6	89.9	92.6	94.9	95.7
総走行距離(km)	—	22,466	23,354	21,302	22,642	23,129	23,501	24,212	23,697	22,936	20,711
平均距離(km)	—	37.0	40.7	40.6	41.0	41.0	40.9	40.8	40.8	40.7	40.7
実施距離(km)	—	42.0	42.0	42.0	42.0	41.5	41.5	41.5	41.5	41.5	41.5



佐野智子
画

年 度	昭和62	昭和63	平成元	平成 2	平成 3	平成 4	平成 5	平成 6	平成 7	平成 8	合 計
回 数	第62回	第63回	第64回	—	第65回	第66回	第67回	第68回	第69回	第70回	(備考)
高根東小	0	0	0	雨 天 中 止	0	0	0	0	(1)	0	松崎より鹿王小
長 沢	1	4	0		1	1	0	0	1	4	65回より津金
三 軒 屋	0	0	2		4	0	2	2	3	5	
清 里	0	5	4		11	0	1	12	8	14	
野 辺 山	5	1	9		79	6	1	2	13	5	
市 場	3	1	1		64	10	9	2	14	19	
海ノ口	14	10	6		12	68	61	83	61	70	
松 原 湖	36	25	42		55	151	70	53	36	53	
小 海	446	497	516		318	281	360	243	335	291	
在 籍 者 数 (人)	555	586	617	—	569	546	532	522	499	494	15,346
不 参 加 者 数 (人)	50	43	37	—	25	29	28	25	27	30	1,017
参 加 者 数 (人)	505	543	580	—	544	517	504	497	472	464	14,329
参 加 率 (%)	91.0	92.7	94.0	—	95.6	94.7	94.7	95.2	94.6	93.9	93.4
到 達 率 (%)	88.3	91.5	89.0	—	58.5	54.4	71.4	69.0	71.0	62.7	68.0
総走行距離 (km)	20,479	22,013	23,450	—	21,602	22,214	22,054	21,351	20,005	19,163	543,562
平均距離 (km)	40.6	40.5	40.4	—	39.7	43.0	43.8	43.0	42.4	41.3	37.9
実施距離 (km)	41.5	41.5	41.5	—	46.0	46.0	46.0	46.0	45.8	45.8	—

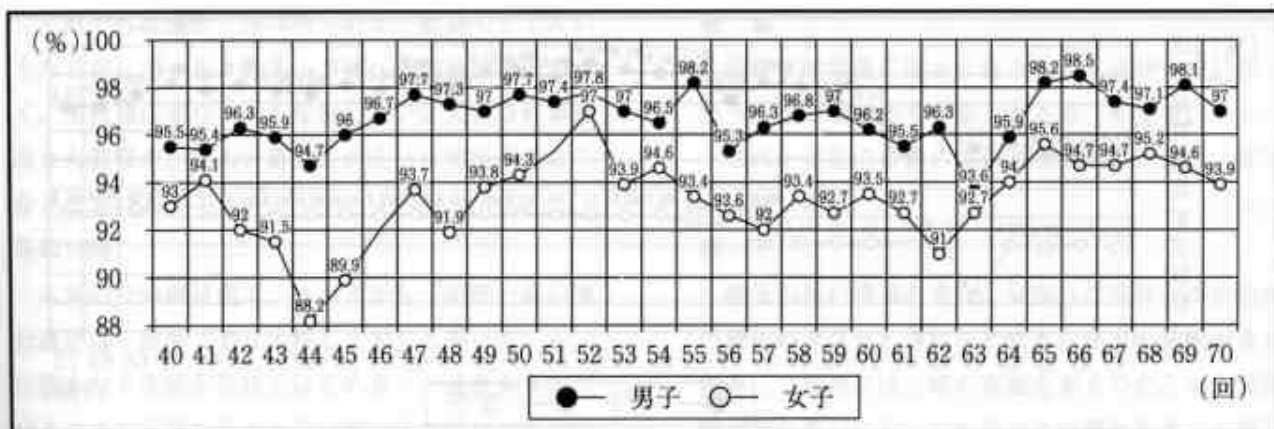


コースわきの除草をする望月校長
(昭和61・1986)



コースの落ち葉をとり除く
(平成元・1989)

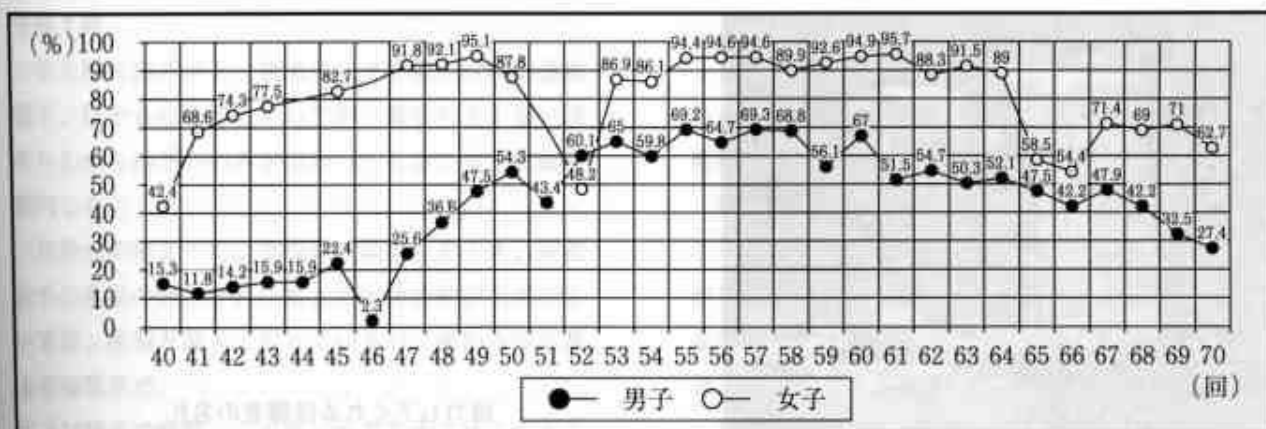
参加率の変遷



【解説】 女子46回・51回は中止。

男子平均96.5%、女子平均93.4%である。

最終地点到達率の変遷

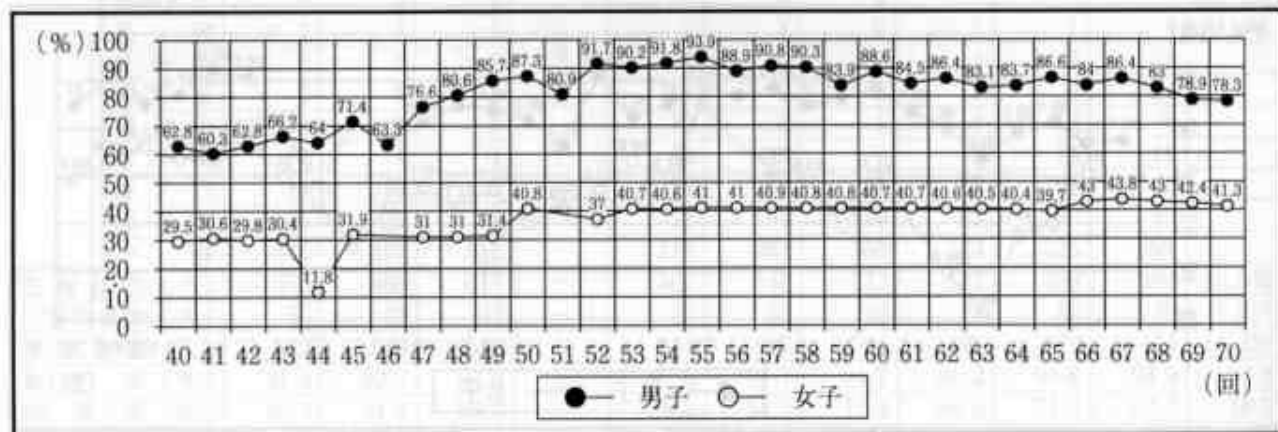


【解説】 女子44回は途中中止、46回・51回は中止。

男子は52回から60回にかけてほとんど60%以上の到達率であったが、ここ6年間は50%にも達せず低下現象が続いている。平均すると参加者の34.4%が最終地点小諸に到達したことになる。

女子は、42km前後で実施していた頃には90%以上の到達率であったが、65回以後距離が延びたため低下した。しかし、ここ4年間でコースに慣れてきたため60%以上の到達率に回復した。平均すると68.0%が最終地点小海に到達したことになる（うち3年間は海ノ口が最終地点）。

平均走行距離の変遷



【解説】 女子46回・51回は中止、44回は野辺山にて降雨中止。

男子は52回から58回にかけてほとんど平均90kmを越えた。31回の平均は77.9kmになる。

女子は65回以後到達率は低下したが、距離が伸びたため平均距離は反対に延びている。29回の平均は37.9kmになる。



簡易トイレも設置した
(平成6・1994)

協力してくれる保護者の名札
(昭和62・1987)

62甲第一巡行区 三岡 3-3 小内欣二郎	62甲第一巡行区 岩村田-三岡 巡視 3-7 河野義政	62甲第一巡行区 岩村田-三岡 巡視 1-1 末木岩夫
62甲第一巡行区 三岡 2-3 神宮寺 茂	62甲第一巡行区 岩村田-三岡 巡視 1-4 青木利男	62甲第一巡行区 三岡 1-4 青木弘子
62甲第一巡行区 三岡 2-1 渡辺悦子	62甲第一巡行区 岩村田-三岡 巡視 2-4 佐藤博美	62甲第一巡行区 三岡 1-6 望月 明

変わらないからこそ、貴い

— ある年、出発から帰路まで —

男子

学校・午前11時

それぞれ救護所、検印所へ向かう職員やPTAの人たちが、三々五々集まっては、任務地へ散ってゆく。生徒達はまだ一人も登校しない。大きな行事を迎えた緊張が、しんと静まりかえった学校全体にみなぎっている。

午前12時

人気のない職員室で、ラジオから「甲府一高の強行遠足は、計画どおり実施します」と鳴っている。

間もなく生徒が登校しはじめる。一昼夜歩き続けるための必要な品々を思い思い小さなバックにつめて、軽快な足とりでくる。

1年生の顔は心なしか緊張している。2年生は興奮を抑えかねてか、普段よりずっと臆舌になっている。3年生は余裕だろうか、あまり動きまわらない。出発係の先生方もそろった。挨拶は一樣に天候のことだ。

午後1時

学生服に白ズボン、夜光テープを縫い付けた運動帽子、はやる心を抑えかねてか、集合の上手な一高生らしからぬざわめきが伝わってくる。女子生徒も整列した。

出発式が始まった。学校長の訓辞、PTA、同窓会長の激励の辞。それに答えて生徒会長が元気のよい宣誓。準備万端ととのっているのが係からの注意も至極簡単だ。

「14時まで解散、この間に用事をすませること」屋上から吊された激励幕。クラスのものあればクラブのものもある。年々カラフルに趣向を凝らした傑作ぞろいだ。正面玄関に3階から地上まで大きく垂れ下った「質実剛健」のたれ幕はこの行事のシンボルだ。

午後14時30分

出発地点に集合、いよいよスタートだ。女子生徒が日新ホールの前から正門へと並んだ。校長先生の腕が挙がった。ピストルが鳴る。太鼓が打ち鳴らされる。3年生が、そして2年、1年の順に5分間隔で出る。

最終的な出発時の人数が確認されると、全線巡視の車で、新たな任務へ職員も出発だ。

数 島

滝坂下で県道に出る。行き交う人達が一樣に珍しそうな顔でながめている。走る者、歩く者。

これから先の苦難の道のりなどこへやら、元気いっぱいだ。

岩 下

穂坂の長い農道を進む。見慣れた風景ながら山梨の景色のすばらしさにみとれる。夕方の気配が身を包み、これからは、暗い夜道を歩くのだという緊張感がだれの心にも、このあたりの景色を美しく感じさせるものだろうか。

生徒の列が随分と長く伸びた。ここまでくると3年も2年も1年も、もう殆ど一緒だ。

葦 崎

最初の救護検印所。道路をへだてた葦高のグラウンドではまだサッカー部が練習している。

PTAのお母さんたちが、麦茶の接待に懸命だ。1年生にとっては最初の麦茶だ。どんな味がするだろうか。

若神子

帰りを急ぐ自動車の列、そろそろ足がいたみだす。すっかり夕闇が濃くなって、若神子の救護所の電灯がまぶしい。目をやれば、高根の坂のあたりまで、車のライトに光る夜光テープの列。

箕 輪

高根の坂は、歩く生徒たちにとって最初の難関だ。肩の荷物も重く感じる。自分の体調を自覚し始め、小諸までの行程を描きはじめる。この辺りから、生徒は急に寡黙になる。

長 沢

歩く生徒にとって弘法坂は最初の恐怖。仲間とはぐれた生徒が、新たな仲間を待っている。検印所の人たちは、気弱く泣き言をいう生徒を追い立てるのに懸命だ。

弘法坂

旧道入口にじっと立って勤務するPTAの人。ぐっと冷えこみが伝わってくる。もう先頭の生徒が通っ

て何時間になるだろう。好天に恵まれるほど冷え込みは強い。

三軒屋

弘法坂を上りつめた生徒にとっては懐かしい感じのする救護所だ。ここでも休もうとする生徒を追い立てるのが苦勞の種。

清里

一高生にとって「清里」は強行遠足と結びついて印象深い土地だ。救護・検印所がフル回転する時間は真夜中に近い。道路に出した机の上は夜露でしっとりしている。足の痛む生徒がもうすっかり疲労困ぱいして「蜂の茶屋」へ倒れ込む。明朝の女子の到着まで不眠不休の勤務が続く。

野辺山

国鉄最高地点の踏切から夜目にも真っすぐな国道が続く。プラスバンド部のOBたちが、ここで声援をするようになったのはいつの年からだろうか。野辺山勤務の職員たちは、各検印所・救護所との連絡調整からはじまって全行程の把握のために多忙の徹夜勤務となる。

男子生徒の最も多く到着する真夜中ともなると検印を待つ生徒の列が「かがり火」の周囲に出来る。職員は自分の持ち場のことでいっぱいだ。

P.T.A.の方々も大いそがしだ。最初のうちこそ名物の「しじみ汁」だが時間が経つに従って永平寺の粥よろしく、だんだん薄められて、僅かに香りだけの「しじみ汁」となるのも毎年のことだ。

野辺山から市場まで、道幅も広い立派な国道が完成して、下り坂で歩き易い。生徒の心には、もう一つ先までという欲が湧くのだろうか。元気に出発する。

市場

夏の高原野菜の集散基地。大型のトラックが何台となく集まり、無線や電話で全国各地に八ヶ岳山麓の高原野菜を運んで行く。近年は立派なドライブインも出来て、不夜城のように明るい。

小海線の駅が近くにないために、生徒は先に進むか、野辺山へ戻るかしなければならない。

真夜中の冷気の中で、少数の職員が奮闘する救護、

検印所である。

海の口

市場を出発した生徒たちに、最初は楽だが次第に苦痛な長い下り坂が続く。惰性で前に出る脚。踊る膝。僅かな荷物、それはすっかり夜道に慣れて不用となった懐中電灯や軍手、最初のうちこそ汗も拭いたタオルだが、今となっては、それすらも邪魔と思う。

小海線の踏切を渡った。もう海の口の救護・検印所も間近だ。

南牧村役場の広場。昨日の到着以後、生徒らの到着を待ち兼ねて、ほんの僅かの眠りしかとれなかった職員が、まだ先頭の生徒の到着まで何時間も間があるというのに、寒さも厳しい天幕の下でストーブを囲んで勤務についている。

一体にこの強行遠足では、各救護・検印所とも勤務に就く時間が早くなる傾向にある。もちろん生徒の無事到着を願って万全を期す気持ちが、そうさせるのだろうが、各旅館の布団に入っている職員の数や時間といったら、ほんの僅かであろう。

松原湖

10月の夜明けは遅い。夏なら午前4時、5時といったらもう白みはじめる東の空も、まだ、星空である。もう救護・検印所となった「泉屋」さんの店先は昨夜からひき続いて明るく電灯が輝き、まだ到着するはずもない生徒を、何度か係の人たちが国道まで出ては、むなしく帰って、明け方の最盛時まで休まず勤務についている。

小海

女子の終着地でもある小海。前日（出発の日）午後3時には現地に集合した職員や父兄が救護所の設営やら近所へのあいさつまわりを終わって仮眠にしていたのが午後7時すぎである。3時間ほどして午後10時にはもう起床して勤務につく。

湯茶の接待の準備にとりかかる。例年男子のトップが11時台に到着する。もう一度「馬流橋」の交差点まで確認に出るP.T.A.の係の方々。

盛大な拍手が寝静まった街に響く。それも一時、第二の集団まで焦れたい位に時間がかかる。

午前4時、5時ともなって男子の最盛期を迎える。女子のスタートの時間だ。この救護所の合言葉は「女子に迫り着かれるぞ。」

さすがに男子の活券にかかわるのか、近年ここでの落伍者は少ない。

八千穂

小海で国道とわかれて旧道に入る。あたりの風物はいかにも信州佐久の落着きにみちている。

たわわに実った稲穂が波うち、千曲川を渡る風も疲れきった足どりの生徒達をなぐさめてくれる。

羽黒下

せまい旧道は検印所のあたりで、朝の出勤の車に苦しめられる。昨夜来の勤務で疲れを感じはじめる頃に男子のピークがやってくる。くっきりと稜線を描く山々に朝日がまばゆい。

白田

疲れている筈なのに生徒の食欲というのはすさまじい。この救護所で歓待されるという一高生の伝説がそうさせるのか。用意された牛乳もリンゴもおにぎりも、先頭のグループの頃はまだしも、次々と大勢の生徒が到着するとみるまに消えていく。検印にあたる職員が、もしや疲れに甘えた生徒が、白田のおばさんに失礼な言動はないかとはらはらしながら横目で見ている。白田のおばさんも昨夜からの接待でいささか疲れている様子。

お礼を言ってさっと立ち去って行くもの、じっと腰をすえてしまい手作りの味をかみしめているもの。救護所は生徒でいっぱいだ。

中込

夜が白々と明ける頃から千曲川の岸辺の道に立っていると「イナゴ」の死骸が土手添いの道に点々と見られる。恐らく自動車に潰されたのだろうか、傍らの田圃に入ると、もう甲府の近辺では滅多に姿を見なくなった「イナゴ」が沢山いる。

思わず夢中で獲っていると「先生、そこで何してるでー」と元気に先頭グループが走っていった。

佐久は鯉の本場、養殖のために農薬も使わぬために、こんなにいるのだろう。

中込のラッシュは、通勤者のラッシュと重なる。

道行く人も自動車も声援を惜しまない。

岩村田

中込を越えると一段と交通量も増えた国道の地下道を潜って旧道に出る。もうここまで来れば目指すのは小諸まで…、岩村田や三岡に落伍者が少ないのは、せっかくここまで頑張ったのに、ゴール直前で落伍したら、今までの努力が水泡に帰すという気が働くからか。

佐久市役所の好意も忘れられない。早朝から市の職員だけで湯茶の接待をしてくださる。1年生の中には、救護検印所と間違えて無意識にカードを差し出す生徒もいる。沿道の人々の声援は誰もが経験することだろうか、励まされそれに応えることもできない程疲れ切った生徒たち、励ますことが無償の美しい行為であることをしみじみと感じる。

三岡

岩村田の検印所を通過すると、道が佐久高校のすぐ傍を通ることになる。無心で黙々と歩いて行く姿は、佐久の生徒たちになんと映るだろうか。

1年生には、おのれの意のままにならない自分の姿がとても恥ずかしく感じられる時だ。先輩たちはもう解っている。この地域の人たちが「よくここまで」と畏敬の念で迎えてくれていることを。努力した者たちへの限らない賞賛。

概して、強行遠足は＜騙し、騙される＞ことの多い行事だ。救護・検印所の先生達も、要所要所のPTAの人たちも、そして沿道の人たちも異口同音に「あと1キロだ、頑張れ!」「あの角を曲れば検印所だ」と言う。「あと5分位だ」とも言う。しかし1キロだったためしも、5分だったこともない。生徒自身も2年生の時には十分そのことを心得ていながら自分でも尋ねることによって自分を騙し、錯覚することで疲労からの苦痛を逃れようとする。自ら作り出す錯覚の作用ということが思われる。

小諸

いよいよ小諸の町だ。四ツ谷の交差点を左折して生徒はどんな思いであろうか。沿道の視線も今は気にすることなく、今まで引きずってきた足も心なしか軽い。「もうすぐだ。がんばれ」街角の人々や、

巡視の車からも大きな声援がとぶ。トラックの運転手が「よく来たな」と通りすぎる。

市役所への坂道だ。ゴールも近い。走り出す生徒もいる。市長さんも出迎えて下さる。「よく来たな」最後の激励の言葉だ。カードを渡すのもどかしく、コンクリートの上に横になってしまう。

市役所の広場は一高生でいっぱいだ。生徒1人1人がこの大きなドラマの主人公だ。ドラマは終わった。ごろっと横になっている姿は、全身をうつ疲労感と、その底から湧きあがるさわやかな快感を味わっているものようだ。

高く澄んだ秋空に生徒達の心は吸いこまれていつているにちがいない。

女子 出発

緑が丘野球場前を、4時30分、甲府一高女子生徒564人を乗せたバス10台が、次々と発車、まだ覚めやらぬ甲府盆地を後にする。

高根東小学校着午前5時20分、空がようやく白みかけてきた。

不安と緊張をいっぱい詰め込んでいたのだろうか。各号車から吐き出された生徒達がそれぞれの思いをそれぞれの胸に秘めながらどっと降り立つ。

高根小の運動場に北面して、西から3・2・1と学年順にクラスごとに番号順に整列する。

澄んだ高原の冷気が生徒達をつつむ。周囲の家々はまだ静まりかえっている。

いよいよ出発式だ。

キーンと張りつめる空気。出欠点呼の後、教頭先生から諸注意。がんばれ！の激励がとぶ。秒読み開始、5時40分、3年生がスタート。号砲が、朝のしじまを破る。5分ずつ遅れて2年生、1年生と続く。太鼓の響きが無いのも、女子らしい地味なスタートだ。前日の出発式に男子と一緒に参加できるようになったのも、つい最近のことだ。男女同数、否、女生徒の生徒の在籍数の方が、今年あたりは上回っているというのに、不思議な話だ。甲府一高＝男子高…のイメージが、戦後30数年余経過した今、やっと解

消されたというのだろうか。

10月初旬とはいえ、北巨摩地方の朝の冷え込みようは、また格別だ。

「無事であれかし」と、検印カードを一人一人に手渡す職員の手が折りが込められ、思わず力が入る。足ぶみしながら、もどかしげに、受け取る生徒達、かじかんだ指と指が触れ合い、いやが上にも、競争心がかきたてられる。検印カードを手にした彼女達のほとんどがすぐ走り出す。目標は「小海！」。のろのろ歩きは、全体の内の10人程度だ。全員がスタートした後、駅のない救護所の落伍者達を乗せるための一台のバス以外は、すべてUターンしはじめる。

グラウンドのあとをかたづけ、2階や、3階のトイレの清掃もすませた、箕輪新町勤務の職員達は、学校、甲府駅前、その他の場所の二重勤務にと、各自そそくさと出かける。

生徒の流れが長く続く。走るもの、歩くもの、さっきのあれほどのあせりと熱気は、もうどこにもない。皆各自の冷静な計画とベースに従って、41.5kmの行程を後になり、先になりしている。全コースの所要時間8時間。長くて、苦しい。一步ずつ前に進めば、必ず終点だ。すごい信念。着実な歩みだ。

昨夜来、級友が、先輩が、後輩が歩き進めた同じ道を、今こうして彼女達が前進する。ただ黙々と小海を目ざして。

長 沢

長沢救護検印所を無事通過。いよいよ弘法坂にさしかかる。旧道ほどではないにしても、これから続く三軒屋、清里、野辺山までの行程は急勾配だけに苦しい。

男子も女子も、この難関を登り切った時、自己の体力を知り、それが次の自信へとつながるのである。

坂の両側に、とびとびに溝蓋がある。とても危険だ。そこに立ってのぞくと、すいこまれそう。切りたった崖に思わずぞっとする。坂道をひたすら登ってゆく。

胸の鼓動が激しく、息づかいが荒くなる。汗がふき出る。背中の弁当が、にくらしい程重い。カーブが、いくつにも重なりあうこの坂を、男子は夜通る

のだ。高原野菜をはこぶダンブとダンブの交錯に目がくらみ、襲って来る空腹感と疲労と睡魔との戦いで、精力の大部分を使い果してしまうのではないだろうか。

清里・野辺山

女生徒はまだいい、明るさで救われるから…。

朝日に光る清里高原地帯のロマンチックな雰囲気も、汗に湿った彼女達の瞳には映らない。

この坂道を登りきれば、日本国有鉄道最高の、標高1375mの地点だ。

紅葉が痛いほどまぶしい。眼も開いた。汗も引いた。しかし、昨夜からの奮闘ぶりが如実にあらわれていて、野辺山救護検印所の父母も、職員も顔色がさえない。しじみ汁の香りが、そこかしこに漂っている。

広々とした耕地に栽培されている秋野菜。ホルスタインものんびり草を食んでいる。野辺山台地から、市場へのらくな道は、41.5km行程のうちいちばん平坦だ。校歌や、応援歌がおもわずとび出そうというものだ。

市場・海ノ口

次いで、市場救護検印所から海の口へと、ころがり落ちそうな、くねくね道が続く。弘法坂とは反対につま先が痛む。生徒達のほとんどの親指のつめが、この坂道で死ぬ。第二の関所だ。坂道を登る筋肉と降りる時の筋肉が同一なのだからたまったものではない。ひざが、がくがくと笑い全身がくたくたになる。海の口が女子の終点であった時期があった。あの頃の南牧村役場の協力はすごかった。男子生徒のほとんどが通過して行く海の口では、小口切りにされた白菜の塩づけが、幾樽も幾樽も用意されていて、惜しげもなく封切られていく。これは村長さんから、これは〇〇さんから等々……。次々と皿に盛られていった。女子もその恩恵をこうむった。貧血をおこした生徒、豆だらけで立ってられず、膝で歩いてきた生徒もいて、公民館の大広間はそんな女生徒を皆むかえいれ、ゆっくり休養と治療を与えてくれた。

婦人会や役場の職員の方々の暖かい手当てと、ごちそうが何よりもありがたかった。

夜通し店舗を借してくれて、夜つゆにぬれずに検印できたのも、鳩屋さんのおかげであった。本部や前後の救護所への電話連絡のため夜通しの通話にも、いやな顔一つ見せず、家族ぐるみで協力してくれた。今は役場の軒下にテントを張って、広場を利用させていただいている。道路から5～6m入りこんでいるので自動車の轟音は少なくなった。

白田の依田のおばさん、小諸の市長さん、いや沿道のすべての人々の好意と温情をいっぱい受けて甲府一高の強行遠足は続いているのである。

無償の奉仕を惜しまず続けてくれる佐久の人々にただ感謝するばかりである。

松原湖

だらだらと、少しずつ上り道が続く。この起伏のなさがかえって疲れを増すのが海の口から松原湖である。海の口よりすこし高台にある松原湖救護所で休む女生徒は少ない。

あと4.3km先のゴールを目前にしては、ゆっくり休む気には勿論なれないのであろう。だから松原湖救護検印所で前進を断念しなくてはならなくなった生徒達は泣いてくやしがる。

男子の三岡救護検印所でも、これと全く同じ現象がおきるのではないだろうか。あと1区間のことで「完走」という目標達成の充実感を味わえるか否かだから残念がるのも無理はない。

小海をめざして、父母職員の励ましの声を背に、生徒達は最後の全力をふりしぼって頑張る。本当は、これからの4.3kmが、気力と体力への限界への挑戦となる、いちばん苦しい道程だ。

千曲川がきらきらと流れ、焦る心を和ませてくれる。水面を渡る風もさわやかで、やさしい。生徒達の最後のあのキャッキャッといった声と勢いはもうどこにもない。ただぜいぜいと肩で苦しそうに息をし、小海、小海とゴールをめざすだけ。先に行った友を気ばかりが追いかける。後に残した友を思っては心がとがめる。

澄んだ空気が心地よい千曲川を横切って渡ると、鳩屋さんの角が見える。左に折れると、小諸行き、右に曲がればもうすぐゴールだ。夢中で走る。

ゴール（小海）

ゴールに向かって懸命にかけこんでくる。しかし足どりは重い。一人一人その手を取り肩や顔をなでてやりたい。「えらい、えらい、よく頑張った。」とほめてやりたい。

「まめ」の上に足があるのか、足の下に「まめ」があるのか感覚がまったく鈍ってしまうと生徒はいう。「もういかにいいんだな。もう歩かにいいんだな。」と言って終点の「小諸」に倒れるように着く男子生徒とは、多少の距離の差こそあれ、女子も男子も一高生はまさしく強行遠足という厳しい洗礼を受けたのである。

夕鶴の「つう」は与ひょうのために精魂こめて光る織物を織った。生徒達はげっそりとやせながら、自己確立という目に見えない、青春の大きな充実感と自信と誇りとを自らの手で、自らのために織りなした。なんともいえない感動の場面だ。

甲府学区総合選抜入試制度により、高校が画一化、同色化しがちであるが、少し濃い目の「伝統」に輝く部分がこの県立甲府第一高等学校の頭上にあってもよいのではないだろうか。

周到な準備と重厚な土台の上に「強行遠足」という雄大な交響曲は、深い余韻を残しながら今年も無事に奏でられた。

帰路につく生徒たち

帰りの小海線の電車は、ぐったりと疲れ切っている一高生でいっぱいだ。小諸から乗車した生徒達は、椅子にもたれかかり、ぐっすりと寝こんでしまっている。いつものあのにぎやかに談笑している若者たちの姿はそこにはない。深く顔にかぶせた帽子を横にし、ときどき目を細くあける生徒もいるが、何を見るのでもなく、ただぼんやりと放心したように車窓を見つめているだけである。おしゃべりの声はまったくない。自分の全精力を使い果たし、まったく悔いのない満ち足りた生徒達の横顔は美しい。途中でダウンし、野辺山あたりから救護所の先生に見送られて乗りこむ女生徒がいても、まったく無関心である。

小諸到着を果たし、ついさっき感涙にむせんだ者も、途中で断念しなければならない無念さに唇をかんだ者も、この列車の中では全く区別がつかない。そこにいるのは、自己の体力、精神力の限界に挑み、全力を出しきった後の、疲れ切ってはいるがさわやかな一高生の姿ばかりだった。

やがて列車は乗り換えの駅に着く。重い足を引かずって一歩一歩しっかりと確かめながら階段を昇り降りする生徒の姿は痛ましい。見守る側としては、思わずやさしいいたわりの声をかけてしまう。

まったく足の自由がきかなくなってしまった生徒を、父兄や先輩、先生方がかいかいしく手や肩をかって歩かせ、中央線のホームへと送り届けるのに忙しい。ホームにどっかり腰をおろし、動こうともしない生徒達も、近づいてくる列車にやむなく次の行動にうつる。

やっと中央線の列車に乗り換えを終えると、安堵感が一気に出てくるのか、深いねむりについてしまう。しかし中には、元気を回復したのか、残りのおにぎりを食べたり、友達と感激を語りあったりしている姿も目にうつる。

やがて甲府駅到着だ。気ばかり焦っても足腰が全く自由がきかない。甲府駅の係の先生方や協力者の方々の温かい出迎えをうけながら、重い足どりで改札口を一人一人出て行く。黒の制服に、砂はこりでよごれた白ズボンが、二日間の試練を乗り越えてきた若い生徒らしくき然とした姿に見えて好ましい。構内やバス停あたりでは、道ゆく人々から温かい言葉をかけられ、今生徒達は、伝統の行事に参加できた喜びをかみしめながら家路を急ぐ。

私達職員は、生徒達の無事の帰甲に安堵しながらも、翌朝の元気な登校姿を期待する気持でいっぱいだ。

一夜明けて

一夜明けて、9時頃から学校はいちだんとたくましくなった顔つきで登校してくる生徒達を迎える。身体の方はまだ自由がきかないで、地面に足をひきずって歩いてくるものや、かに股で身体をななめにしながらくるもの、足の指やかかとかが豆だらけで靴

がはけず、仕方なくサンダルをはいてくるもの等……。

しかし、自転車で軽やかに登校してくる生徒もいる。女生徒には、重い足どりの生徒はあまり見うけられない。

41.5キロ、101キロという道のりは私達にとっては気の遠くなるような長さだ。生徒達は羨ましいほど若い。2日間の苦しみぬいた姿などまったくない。

「君、どこまで行った」「やったぞ！小諸さ」「俺は臼田でダウンだ」

こんな会話が教室の中でかわされる。室内が若人の明るいはずんだ声で満ちている。

やがて、学校長の「これで第56回強行遠足を終了します」と言う放送を、全校生はそれぞれの感慨をこめて聞くのである。

これですべて終わった。私達職員も、この伝統行事が今年も無事終了したことを一同心からよろこび、協力していただいた多くの方々に対する感謝の気持ちでいっぱいになる。

(昭和56・1981)



たき火で牛乳をあたためて生徒を待つ
(昭和54・1979)



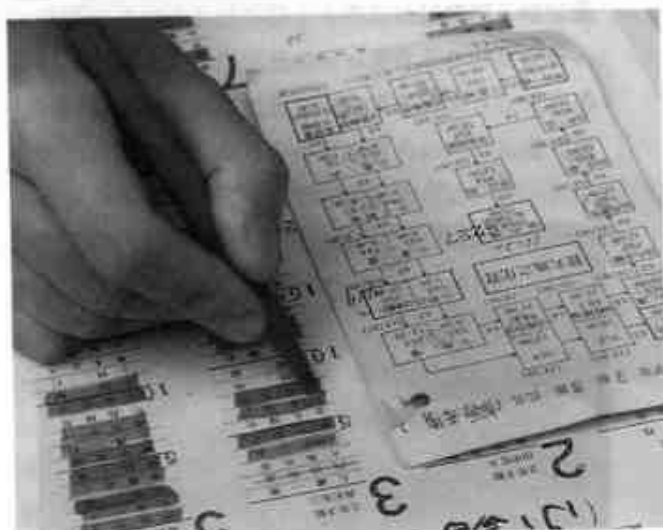
野辺山のしじみ汁
(昭和57・1982)



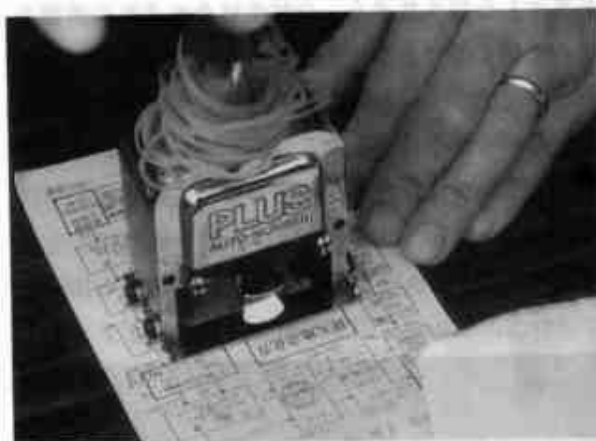
ブラスバンド部OBの激励—野辺山
(昭和63・1988)



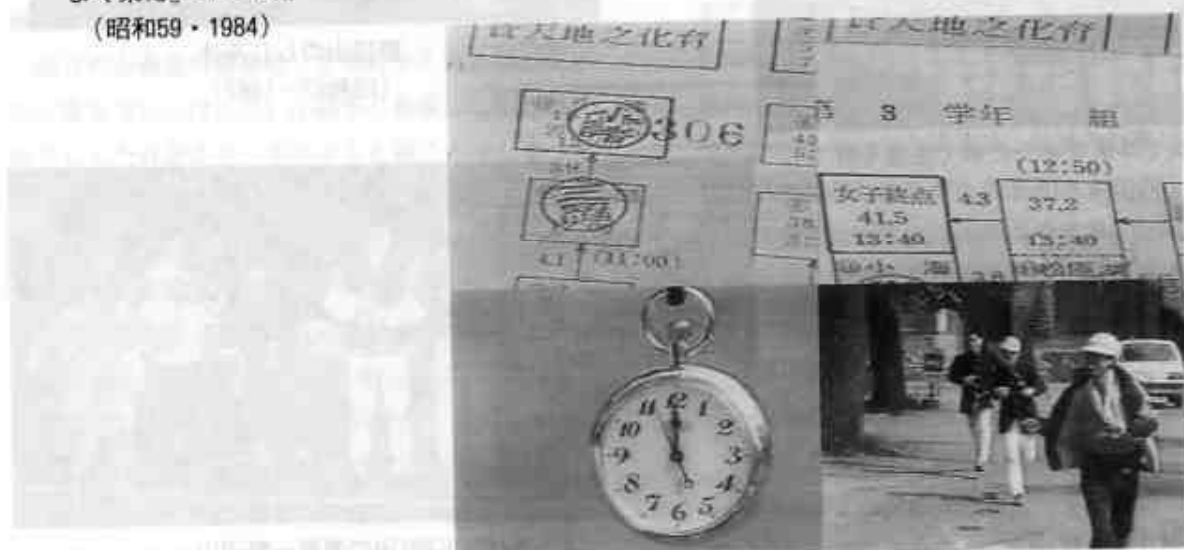
巡視車に強行遠足の表示灯
(平成5・1993)



よく来た。ゴールだ
(昭和59・1984)



よく来た！○番だ
(昭和59・1984)



まもなく制限時刻だ。いそげ、いそげ (昭和59・1984)

表彰の歴史

表彰に就いては大体の規定があったが、これも当日の天候とかその時代の情勢によって屢々変更されたのである。

例えば第10回に於いては、2年生のメダル線を川岸に引き上げた。この理由は、前年降雨のため2年生は強行遠足に対しては未経験である点。又第12回13回とも午後降雨のため全学年のメダル線を一駅引き下げた等である。

賞については四つの段階を置いたが次の通りである。

○ **佳良賞** 1年は茅野以上、2年は上諏訪以上、3・4・5年は下諏訪以上。ただし第16回以後は廃止された。

○ **優秀賞** 1年は下諏訪以上、2年は辰野以上、3年は小野以上、4・5年は塩尻以上。

かつては賞状の外に銅メダルを附したのでこの限界をメダル線と呼んでいた。現在はメダルは附せられない。

かつてのメダルは銅に校章の桜を銀色にて浮かし、中央に草鞋を組み、下に優の字を配し、裏側に「強行遠足」「甲府中学校」の文字を浮かせてあった。

○ **特別優秀賞** 松本以北に到達した者に与えられ、これにもメダルが添えられたが今はない。

○ **最優秀賞** その年に於ける最高記録者及び各学年中、従来の記録を破った新記録者に与えた。

この外特典としては5ヶ年の中に銅メダル5ヶを獲得した者には、卒業時に金メダル又はこれに準ずる記念品を授与した事もある。

○ **特別賞** 職員、順行者は年令によって1年又は2年の優秀線を以って優秀者として賞状を授与した。

(以上「強行遠足の意義と其の実際」より抜記)

終戦世相も一変し、11月4日の体育の日も自然消滅の形となり、適当日時を選び、出発時刻も第36回までは正午に変更された。そしてメダル線もいつしか姿を消したが、時代によっては参加賞、又は優秀賞として与えた。しかし学年別、組別の成績は引き続き作成され発表されたのである。

昭和37年(37回)小諸コースに変更された際、表彰制度は廃された。この理由は「表彰制度があると生徒はついに無理をする。現今の生徒は昔の生徒と違って医学的に見ても諸機能が弱っている者が多い。したがって無理から起る弊害があってはならない。」と云うことから走ることを禁じ歩行することを原則としたのである。成績も単に記録に止めた程度である。

昭和40年(40回)には創立85周年記念行事の一環として実施したので参加者全員に記念メダルを授与した。

以後、5年毎の節目の年に創立記念行事の一環として同窓会より記念メダルを参加者全員に授与している。

他の年には最終地点到着者のみに終点到着(小諸・小海)記念賞としてメダルを同窓会より授与している。

○小諸市長からの色紙の授与

小山威雄市長(昭和47~51年在任)の頃から小諸に一着で到着した生徒に対し、「小諸なる古城のほとり雲白く遊子かなしむ」という鳥崎藤村の詩の一節が書かれた色紙が授与された。

塩川忠巳市長(昭和51~平成8年在任)時代にも継続された。また、塩川市長は、自筆の色紙を小諸発(JR小海線)の最初の列車(一番列車)に乗ることが可能な時間に到着した生徒全員に授与した。



女子終点—小海
(昭和57・1982)



検印カードを組ごとに分ける
(昭和53・1978)



検印カードも汗でぐちゃぐちゃ
(昭和54・1979)



一高生の勲章。検印カード
(昭和55・1980)



オレの氏名票はどこだ? 記念にするんだ
(平成元年・1989)

感想文特集

今年もまた、強行遠足の季節がやってくる。

今年は一回目ということもあってけっこう余裕があった。友達から「今年は上位をねらうのか?」と聞かれ、「いや、今年はゆつくり楽しむよ。」とはほ笑みながら余裕を見せておいて、心の中ではけっこうねらっていた。みんな僕の態度に、「本当に?」とはほ笑みかけてくれたが、心の中では、「何いてんだ。下心は見え見えだ。」と思つていたに違いない。

今年は昨年にくらべて時期が早かったためか、昼間はとても暖かく、汗をかく量も多かった。そのためか寝れるのも早かった。そんな時、父兄の方々に大変お世話になった。検印所で「足がすりそう」と言ったら、「スポンを脱いで。」と言われちゃつと恥ずかしかったが言われる通りにした。一生懸命マッサージをしてくれた。こん

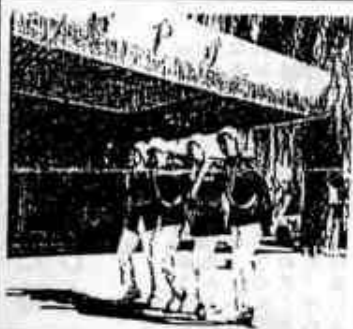
なことは親にもしてもらったこと
はないし、初めての経験だった。
また、他にも大勢の方々に世話
になった。僕が無事に小諸まで走
り切ることが出来たのも、こうし
た方々のおかげだと感謝している
心から、どうもありがとうござい
ましたと言いたいと思っている。
強行遠足にかかわっているのは
僕たちだけではない。父兄の方々
救護所を提供して下さった地元
の方々、医師や看護婦の方々、先
生方やOBの皆さん、これらの方
々の献身的な協力と努力によって
強行遠足は続けられてきたのだ。
二百二十キロという遠方もない距離
を走ることは、ばかげたことかもし
れないが、自分にとってはとても
良い経験になった。自己の限界
に挑戦しながらも、強行遠足にか
かわる多くの人の心に触れたよう
に思う。参加した人は皆、心に思
うことがあったに違いない。強行
遠足が今後ますます続いてほしい
と思っている。

(編纂發行人)
甲府第一高等学校
磯行達是
生徒指導係

九月二十七日午前十時、つまり
強行遠足の出発四時間半前、僕は

（いよいよ廻行足達か。いやだなあ。）と思いつつ朝御飯を食べ、箸を持ちを落し置かせた。そして十二時過ぎ、ついに僕は一高に足を向けた。緊張と不安でいっぱいだった。そしてそれと同時に（何としても最後まで頑強なぞ。）という氣持ちも芽生えていた。

午後二時四十分いよいよ横濱は小諸に向けて出発した。天気は曇りぐらゐで絶好のマラソン日和。気温もちょうど良い。僕は一番最後のグループだったが、走り出すと自然とやる気が出て、知らず知らずのうちに真ん中辺りのグループに追いついていた。そして最初の検印所である荏嶋に着いた時、僕は百七十九番だった。(これな



らかなりいい成績で小諸まで行けるぞ。」僕はそう思った。僕は快調なペースで順位を上げ市場ではついに九十七番になっていた。

しかし、僕の体力はもうほとんど限界に近づいていた。疲れすぎて、足が上がらなかつた。足を引きずりながら歩いた。（もうやめよう。）（羽黒下に着いたらやめよう。）僕はそう考えはじめていた。ところが、羽黒下で僕は担任の先生に強引に出発させられてしまった。何が分かるからなかつたが白田まで行くことになってしまった。白田に着いた僕は（今度こそ本当にここでやめよう。）と決心していた。しかし今度は僕は出発した。それは友達達の「ここま

年度	氏 名	学 年	到 留 時刻
元	小俣 梯彦 末木 均	3・2	3:47
63	末木 均	1	2:46
62	原崎 森	2	1:48
61	林 宏之	2	3:09
60	小山 晃市	3	3:51
59	小田 切充	3	3:37
58	今堀 勝 赤池広昭	3・3	
	堀内勇示 古屋友章	2・2	4:29
	小田 切 充	1	
57	今堀 勝 萩野利和	2・1	3:42
	古屋友章	1	
56	野沢清次	3	3:26
55	数野雅則	3	3:43
54	保坂 仁	3	5:37
53	小松敬人	3	3:32
52	雨宮 弥太郎	2	5:07

で来たんだから、小諸まで行かな
きゃ損だよ。」というような言葉
だった。僕には小諸までもうひと
頑張りだ、頑張り、という言葉に
受け取れた。

ついに最終地点の小諸に着いた
その時今まで味わったことのない
喜びが僕の胸にこみ上げてきた。
そして心の中で「やったぁ」と叫
んだ。

僕は十六年間の中で最高の努力
をした。周りの人の温かい言葉や
好意をこんなに身近に感じたのも
初めてだった。最高の苦しみと喜
びを感じさせてくれた強行遠足。
強行遠足が終わった今、僕はこの
行事の素晴らしいさをつくづくとか
みしめている。

昨年度全校の女子生徒で二番目に小池に到着した三井さんから今年初めて挑戦する一年生にアドバイスをおねがいしました。

三年三出 三井 真壁

ない人、とくに一年生にとつて四
の旅行遠足をまだ経験したことの
二キロメートルという距離がどの
くらいのものか、見当もつず不安
な人も多いのだと思います。男
子の距離に比べれば半分以上なの
で大したことはないように思うか
もしれません。しかし辛くて長い道
のりにかかりありません。

私が一年の時のことを思い出
てみると、小海に着いてまず思っ
たことは「二度とこんなことはや
りたくない」でした。予想より
だいがきつくて長かったという
ことがそのように思つた理由の一
ですが、最大の理由は水を飲むと
腹痛になると思い、出発してから
到着するまで水を一滴も飲まずに
いて、かえつてそのために腹痛
になつてしまったことです。そこ
で気持ちをかえて同じ失敗を繰り返
さぬよう二年次には水の補給に
掛けました。そのおかげか腹痛
経験することなく行けたのは幸
でした。

他にも辛いことはたくさんあ
りますが終わってしまうと思
ふ力が湧いてきます。確かに辛
だけならこの行事は無意味なも

でしう。昨年私は途中までずっと一人でした。孤独のランナーという感じで前にも後にも友達が見えませんでした。しかし野辺山の手の登り坂で先を走っていた先輩が立ち止まって、「頑張ろうね」と言葉をかけてくれた時、今までの疲れが急に何処かへいってしまっ大変勇気づけられたことを思い出します。普段とくに話しかけてもことの無い先輩後輩であつてもこんなときに勇気を与えてくれた先輩がいてくれたことを大変感謝しています。

もう一つうれしかったことがあります。本校OBのブラストンの演奏です。行く手の方から校歌や応援歌が聞こえて来た時の、あの感動は言葉では言いようもありません。孤独な自分との戦いのながに他人の動きが分を受けたありがたさを痛感するおおいでした。

三〇キロを過ぎる頃から確かに苦しくなるもので歩みもゆつくりのペースとなりますが着けぱそれなりの価値があることに気がきます。

これから準備にとりかかる一年生に二年間の経験から一言。がむしやらの練習は必要なのと思ひますが、体力をつけるために今から歩いて学校に来るのもよいことです。靴を履くためにも心掛けるひつようがあります。今年は距離もよえたとききました。多分山道が増えた分坂道も多くなっているので私もその対策を立てようと考えています。文で読んだだけでは解らないかも知れませんが、何しろ自分に挑戦するつもりで頑張っている状態まで行けるよう一緒に頑張らましよう。

二年四組 名取千恵

「ああ、もう疲れた。もう歩きたくないよ。なめていたみたいだ。あれ、この四〇キロを。」これが海の口を過ぎた辺りの私の心の叫びだった。もうやめたくてやめたくていられた。けれどもここでやめたらもうたいたいような気がして、気持ちをひきしめた。

やめたいなどと思った自分が情ないとも思った。ただそれはどうしようもないことだった。その文を書いている今となつては、あの時やめなくて良かったと思う。やめていたなら根性なしの愚図になつていただろう。走ったり歩いたりしていた時、自分の力の弱さをつくづく感じた。口では簡単そんなことを言つてみても実際に歩いてみて困難なことに驚いた。まだまだ子供だ。しかしこの強行遠足は私にいろいろのことを教えてくれた。この体験をどうして少しは考えが変わり、大人になつたかもしれない。

清里までは悪気掻揚とハイペースで走つた。距離はまだ短いことも幸いしてそれほど疲れを知らずに換印所に差し掛かった。手帳に來ていた母の姿があるとと思うについ良い所を見せたいとオリーブス気味となり力みがでていたようだった。換印所を通過すると張り詰めていた糸が切れたかのようにはペースダウンに陥りあれよ

れよという間に二五人道い越されてしまった。最初の大きな怪折であつた。何故あんなに走つてしまつたのか。最後まで計画的に走るべきであつたと、悔やまれた。その後は自分の足と心との戦ひの連続であつた。途中の案内や横印判のおじさん、おばさん、先生達の激励を受け勇気づけられ、やつとの悪いで小海に着いた。

男子は自分達の倍以上走るのだから、もちろん体力的に差はあるとも小海までなら大したことはないという開りがあつたのではないかつこよく見せたかつた私を反省した、また苦しいだけでなく感激を鼓立てくれた独行遠足であつた。



※63年から出発が1時間遅くなった。

強行遠足新聞

(編集発行人)

甲府第一高等学校

強行遠足

生徒指導係

第六十六回

『強行遠足』を迎えるにあたって



校長 廣瀬重雄

『強行遠足』は、自分自身との闘いの場である。それは、甲府一高の門を出た時から、小諸市役所のゴールにとび込むまで一分たりとも休むことなく続く。スタートするまでは、いろいろな思いを巡らせていても、太鼓の音を聞き、掛け声とともにスタートすると、とにかく最後まで走り続けようという心で頭が一瞬になる。そして、『もう止めたい』とか『どうしてこんなことをするのか』という気持ちとの十数時間の闘いが始まるのである。ほんとうに不思議なこと、にだれがどこを走っているかと全く情わなくなってしまう。順位というものは、まったくの精進に過ぎないものだと思ふ。『功をせせらず、マイペースで、そして決して止めないこと』を私は強行遠足から学んだ。と卒業生の一人は語っている。彼は、『強行遠足』で学んだこのことを支えに生活してきた。『強行遠足』を体験できなかったら、このような心の支えは得られなかったのではないかと回想している。

彼のように人生の支えとなるような考えを、『強行遠足』を通して学んだ生徒は多いだろう。昨年の東京同窓会で二十数年経前に、本校で担任をした卒業生に会った。すでに四十才前半になり、それぞれ職場の中堅として活躍している。お互いに久しぶりに会った同級生もいて、話題はそれからそれへと尽きないが、強行遠足は、新しい話題の一つだった。青春の一面であった一行事が、それほど深く彼らの心の中で生きていたのだと思ふ。

この強行遠足は、『強行遠足』に青春を思い切りぶつけ、頑張った若人によってのみ支えられてきたものではない。沿道へ出て激励の声をかけてくださる人々、数護衛や検印所で徹夜で通夜の接待や介護を始め、夜通し交通指導と安

全確保に当たってくださる保護者の方々、白田で男子生徒が来るのを毎年心待ちにして、心のこもった款待をしてくださる依田さん一家の方々などのお力添えを忘れてはならない。また、歩行の安全のため可能な限りの手配をしてくださる白田の南宮久雄医師(昭和二十年卒)や白田警察署の方々、増結の輸送を確保してくださっている交通機関の方々もいる。有り難いことである。仮にもそれらの方々の厚意を無にするようなことがあってはならない。

先日、強行遠足の下見とお願いをかねて、佐久街道を小諸まで行った。『甲府一高の強行遠足が終わると、秋が深まるのを感じます』とある町の教育長さんがおっしゃっておられたが、この行事は、この七十年の間に『甲府一高の強行遠足』であるとともに、『沿道の方々への強行遠足』にもなっていることを実感した。昨年強行遠足のお礼に伺った時、小諸の市長さんは、『素晴らしい行事ですね。ぜひ今後も継続してください。』と励ましてくださったが、これらの方々のことを大切に、有意義な行事としていきたい。

第六十五回強行遠足では、君達の歩いた距離は、合計六万八千四百一十七キロとなった。わが国の最北端北海道の稚内から琉球諸島の与那国島までが約四千キロだそうであるから、先の数字は、わが国縦断を八往復半したことになる。一人一人の歩みは、大きな重荷の大きさ、大切さを知るのである。今年も、その歩みは、自らの可能性に挑戦しようではないか。今年は、北海道北見北斗高校の代表生徒も参加する。

かきみ



○あなたもなげ走ったの

『意味がなかったですね、昨年の強行遠足は』。『地元の人たちから抗議されたことだね』。『ええ、空き缶が散らばっていたり、自動販売機がいたずらされていたという事件です』。『強行遠足が、どれほど多くの人の協力や負担を強いているのかを真剣に考えてほしい』。『つまり、自分は走らせてもらっているんだ、という感謝の気持ちを忘れてしまった』。『そう。自分はこのなげに走っているんだもの、余計なことは検印所がしてよーい』。『と思つてしまふ』。『しみじみ汁が飲めるのは当たり前、塩むすびが食べられるのも、りんごをもらえるのも当たり前。散らかすだけ散らかして、あとは人に任せ』。『心身の疲労をマナーの悪い一言一語にはしてほしくない』。『他人に迷惑をかけないという、その程度の常識すら身につけていない人たちが大半で押し寄せてきたとしたら、地元の人はどう思うか、考えただけでも恐ろしい』。『だが、空き缶やゴミを拾ってくれた生徒もかなりいた』。『ああ、それは救いでしたわ』。『だから、今は強行遠足の廃止を考えるのではなく、強行遠足を通してマナーと感謝の気持ちに一人でも多く気づいてくれたらいいと思う』。『ところで先輩は、何のために走ったんですか』。『今思えば強行遠足は人生の如しで、精一杯やれば必ず目標へ到達できるという自信を僕に教えた』。『なるほど。』。『一切の妥協と我慢を排して、精進限り歩け』。『と発案者の江口先生も話されたそうですね』。『ええ、やるときはやる一高生』。『といわれているんだ。しっかりやってくれよ』。



強行遠足新聞

感謝の思いをもって

強行遠足に新たな一頁を

校長 伊藤嘉雄

今年も間もなく、強行遠足の秋がやってくる。

本校伝統の強行遠足は、大正十三（一九二四）年、文部省が、十一月三日を全国体育日として、各中学校（旧制）においては体育的行事を実施することとしたのに応え、当時の山口俊博校長が、だれでも容易にできる運動、すなわち「歩く」ことを提唱して生まれたものであるという。

第一回は、差出人の磯・御岳金蔵神社・新府城址・甲州街道を東への四方面に分かれて実施されたが、後の「強行遠足」の母体となったのは、この中の甲州街道コースであった。

その後、方面も松本から本館員、さらに信濃大町へと変更されてきたが、昭和三十七（一九六二）年、第三十七回の強行遠足からは、交通事情等を考慮して佐久往還・小諸方面コースに変更することとなり、方法等も工夫改訂されて今日に至っている。

昭和十二年、および十七年頃の「本校における強行遠足の意義とその裏側」では、「散策強行遠足と名づけたのは、自分の体力に比べて歩くだけ歩くということを強調せんがためである」と述べ、さらに、「一切の妥協と無情とを排して、精進めり歩くということを重視したのである」と記している。

青春の情熱を思い切りぶつけ、自己の体力と精神力の限界

近づく強行遠足

事前の準備を万全に！

上着・ズボン・帽子・防寒具・夜光たすき・持ち物については二ページを熟読のこと。



に挑む強行遠足。過去六十六回の強行遠足に六万九千八百三十八人の若人が参加し、四百七十一万七千六百五十五キロメートルの距離を歩き抜いてきた。

強い道程を果敢と踏みしめ、困難に耐え、苦痛を忍んで、黙々と歩き続ける強行遠足は、まさに人生行路の縮図であると言えるだろう。多くの卒業生は、他に代えることのできない貴重な体験だったと言ひ、また、そこから人生の指針を得た多くの教訓を学びとったことを語り、甲府一高がこの世に在る限り、守り続けていってほしいとも願っている。

しかし、このような本校の伝統行事である強行遠足は、これに参加した生徒諸君の努力によってのみ支えられてきたのではない。沿道に出て応援をしてくださる人々、夜を徹して、教壇後印所や沿線の要所にあつて救護活動や安全確保に努めてくださる保護者の方々、家族ぐるみで練習も及ばぬ暖かい介助に当たってくださる方々をはじめ、警察や関係機関の方々など、この行事の無事遂行を願い、ご支援下さる人々の数は余りにも多い。有難いことである。

第六十七回の強行遠足に参加する生徒諸君は、これら多数の方々のご厚意を忘れることがあってはならない。一人一人がこの行事の意義をしっかりと受けとめ、強行遠足の長い歴史に、自らの手によって、かけがえのない新たな一頁を書き加えてほしい。

すべての諸君が感謝の気持ちをしっかりと持ち、「自己への挑戦」にたくましく立ち向かうことを心から期待する。

鍛えてますか？

一足・二足

男子一〇キロ、女子四六キロの走破、二、三年生はすでに身体にのびているとおり、きつい一足だ。いずれにせよ、大変な距離だ。強行遠足で、途中に一度や二度は「もう苦しいからやめてしまおうか」と思わぬことはない。言われるのは本音だ。体育館に所属しているものでも並大抵ではない。ましてふだん体を鍛えていないものには、事前の準備の不可欠なことは言うまでもない。足にマメが出来やすい。筋肉痛になりやすい。今のところ体調が思わしくないという者には、強行遠足は特別きつい。十分な準備と覚悟をしてほしいものだ。

ゆっくりでいい。本道で使う予定の靴を足に慣らすために、今から走ってほしい。多少の過学距離なら、あるいは多少の外出距離なら、できるだけ徒歩で「一」を心掛けたい。ディバックを背負って走って往復する姿が数年前から少なくなってきた。遠くから通学する者で、自転車をもつて走っている姿もあった。走るのは脚力ばかりでなく、自分の「こころ」も鍛えていたのだらう。

強行遠足で、あるいは説明に近く、自分に負けてしまふ者もある。昨年に記録を更新したものが、準備不足と体調不良でリタイアし、泣いて悔しがっていた光景は忘れられない。

後悔はしたくない。不完全な準備で終わらたくない。足と「こころ」を、それに装備（靴・服装など）の準備を、今日から始めよう。

件に大きく影響されるので単純比較はできないが101kmで実施した昭和57年には70%近い者が到着した。ここ5年間は実施距離が約2kmほど長いものの、男子の到達率が50%にも達していなことから見るとすごい記録である。

女子は41.5kmで実施した年の記録。現在のコースでは71.4%が最高である。

Q 8 : 参加者の平均走破距離が最高なのはいつ、どのくらいの距離だろうか？

A : 男子 第55回の93.9kmが最高
(岩村田の手前1.6km付近まで到達)

※今年度は78.3km

(八千穂付近まで到達)

女子 第67回の43.8kmが最高

(小海の手前1.8km付近まで到達)

※今年度は41.3km

(松原湖手前付近まで到達)

【解説】 昭和55年は到達率でも69.2%と最高の昭和57年と0.1%しか変わらず、平均距離では3km以上長い。つまり途中中止者もかなり遠くまで行った頑張りがうかがえる。

Q 9 : 現在のコースでの最高記録はどのくらいだろうか？

A : 男子 第62回の記録が最高

所要時間 11時間18分(到着時刻 1時48分)

走行距離 102.0km(平均速度 9.03km/h)

※今年度は

所要時間 14時間40分(到着時刻 5時10分)

走行距離 103.3km(平均速度 7.22km/h)

女子 第64回の記録が最高

所要時間 3時間34分(到着時刻 10時14分)

走行距離 41.5km(平均速度 11.65km/h)

※今年度は

所要時間 5時間13分(到着時刻 11時43分)

走行距離 45.6km(平均速度 8.8km/h)

【解説】 これも年によって実施距離が違い、天候等の条件に大きく影響されるので単純比較はできないが、所要時間(到着時間)で見ると上記のとおり。

昭和62年の男子の最高記録は以前の記録(3時09分到着)を大幅短縮した大記録であり、各救護検印所の予想をはるかに上回るペースで走行した。そのため小諸寄りの救護検印所ではまだ仮眠しており、トップの者が職員を起こして検印をしてもらったエピソードが残っている。

女子の出発時刻は、現在は第64回より10分早い。

Q 10 : 小諸コースでの記録を合計するとどのくらいになるのだろうか？

(注) 第40~70回までの全日制の記録

A : (1)参加総数 男子: 23,311人

女子: 14,329人

(2)参加率 男子: 96.5%

女子: 93.4%

(3)総走行距離 男子: 1,816,795km

女子: 543,562km

(4)平均走行距離 男子: 77.9km

女子: 37.9km

【解説】 男女合計すると総走行距離は2,360,357kmになり、地球と月を約3往復相当の距離になる。参加者の平均走行距離は、男子は現在のコースでいうと八千穂付近に、女子は松原湖の手前付近になる。

第1回から第39回まで正確な記録が全部確認できていないが、確認できる範囲の記録を合計すると参加者は81,255人、総走行距離は5,117,523kmになる。したがって、実際はそれ以上の参加者、総走行距離ということになる。すごい数字で歴史の重みを改めて感じる。

***昭和37年小諸コース変更後の記録について**

(注) 昭和37~39年は記録が正確に確認できないので、昭和40年以後の記録の集計。

※印は、今年度(第70回)の記録

思いを結ぶー強行遠足交流

北見北斗高校 — 甲府第一高校



※この章は、北海道北見北斗高等学校「強行遠足六十年史」（平成5年刊）から転載させていただいた資料に、本校の資料を補足した。

※なお、役職名、生徒の学年等は、資料が作成された当時のものである。



甲府第一高等学校—北見北斗高等学校強行遠足交流事業確認事項

- 1 3年に1度交互に派遣する。
派遣—受入年度は別表のとおり。
- 2 交流にかかる経費
一切派遣する学校の負担とする。
宿舎は、受入側が手配するが、経費は派遣校が負担する。
- 3 日 程
日程は、互いに参考にするが、自校の年間計画に従い、派遣—受入のために日程変更は行なわない。
それぞれの日程は、独自の経緯があって確定したものであって、交流のために変更はしない。
- 4 派遣（受入）人数
生徒男女各2名を原則とし引率者等についてはその都度協議する。

（別表）今後の派遣、受入予定

年度	甲府第一	北見北斗	備 考
平成4年	受入	派遣	北見北斗〈第60回〉 第1回交流実施
5年	派遣	受入	第2回交流実施
6年			
7年	受入	派遣	第3回交流予定
8年	派遣	受入	甲府第一〈第70回〉
9年			
10年	受入	派遣	
11年	派遣	受入	
12年			
13年	受入	派遣	
14年	派遣	受入	北見北斗〈第70回〉
15年			
16年	受入	派遣	
17年	派遣	受入	
18年			甲府第一〈第80回〉
19年	受入	派遣	
20年	派遣	受入	

平成6年11月6日

北見北斗高等学校 校長 齊藤 博久
甲府第一高等学校 教頭 田中 晴美
野澤 恒夫
野澤 一三

思いを結ぶー強行遠足交流

北見北斗高校ー甲府第一高

これこそが正夢

北見北斗高等学校 校長 斉藤 静之

平成5年(1993)1月22日、甲府市飯田1丁目の「シティプラザ紫玉苑」の一室で、本校史に残る「甲府第一高等学校との強行遠足による交流」のテープが切られることになった。

その場には、甲府第一高等学校から廣瀬重雄校長、太田源一郎同窓会長、跡部廣・石倉正身両教頭、山寺一三事務長の各氏と本校側からは近藤博同窓会長と小生の2人で、午後6時に協議が始まり、同じ思いの両校にとっては話がスムーズに流れ、30分程で同意がなされた。

その後の懇談会には、平成3年に視察員として来校した穂坂勝命・薬袋武雄両教諭と、昨年生徒引率として来北した五味武彦・鈴木正雄両教諭も加わり、昨年10月の交流の様子や、将来のことについて話が弾み、時間の経過を忘れての会となった。

思えば遠い道程だった。

* *

昭和29年(1954)、原宿に下宿していた同じクラスの小林健次君をたずねた。合成酒を呑みながら、出身高校の話になった。彼の口から「僕の学校は、ワラジを履いて長い距離を夜中をかけて歩く行事があるのだ……。」その瞬間、私は思わず立ち上がって「同じだ。」とさげんだ。東京教育大学1年のことであった。40年程前のことであるがあの日のことはまだ鮮明に残っている。

いよいよ卒業式となった。講堂での式が終わると校庭に張られた大テントの内でのパーティーが行われ、その最後は朝永振一郎学長と握手することであった。私の順がきたとき、学長の側で学生の名前を学長に告げていた教育学部長の石三次郎教授(父が旭川師範時代に教えを受けていた方)が「この男は、北海道出身です。」と紹介してくれた。朝永学長はすかさず「北海道のために、郷土のために頑張るなさい。」と私の手を固く握って激励を与えていた。

その頃から、私の脳裏に「小林君の出身校と強行遠足の交流を始めたい。」という夢がふくらんで来た。それが今回への道の第一歩であり、夢を描く動機であった。しかし、甲府第一高等学校であるということは、あと長い間知らなかった。うかつにも、彼の出身校を記憶しなかったためによるもので、大いなる失態であった。小林君は都立小平高等学校で数学の教師をしており、まぎれもなく甲府第一高等学校出身であることを昨年10月甲府に出かけたときに、卒業証書台帳で確認していただいた。彼からの一言がなかったならば、この交流のことも存在しなかったことになる。ただ感謝のみである。

この夢を実現するためには、まず母校の校長になることが必要条件となる。到底、無理なことだと思いつつも、年に一度はその日が来る夢を描いていた。

* *

平成元年(1989)4月、突然、普通科高校長に転出を命ぜられた。長年、農業高校の水にしか馴染んでいなかった私にとっては、驚きと困惑であった。しばらくの間、うろうろした生活が、女満別高等学校では続いた。そんな日のある夜、北海道放送テレビになにげなく目をやっていると竹下景子と大橋巨泉の司会による「ギブ・ミー・ア・ブレイク」の1時間番組に、なんと「甲府第一高等学校の強行遠足」が放映され始めたのである。遠くの方に去ってしまっていた夢が、急に身近にズームインされた感激が体の中を走り廻った。「甲府第一高等学校と北見北斗高等学校との強行遠足を可能にしよう。」と決意した興奮の瞬間であった。

平成3年(1991)全く予期せぬことに本校への赴任が発令された。38年振りに母校の校門をくぐりながら、創立70周年記念行事のことに思いを馳せた。いろいろなイベントを頭に浮かべたが何とんでも「甲府第一高等学校との強行遠足の交流」しかないという結論に達した。

自分でも驚くほどの熱意で、協賛会関係者や教職員へ同意を求める努力をした。その年の5月29日に東京の普門館で開かれた第44回全国高等学校長研究協議会の席上、甲府第一高等学校の廣瀬重雄校長を

訪ね、その主旨を説明することになった。

「交流というすぐ国際間のことを考えるが、同一行事を通して、山梨と北海道の高校が交歓することは素晴らしいことである。」「甲府第一高の生徒に夢を与えてくれた。」の言葉が即座に寄せられた。「いよいよ夢の実現がなされる。絶対に成功させねばならない。」と決心させられた。廣瀬校長の温かい態度に心から感謝の念を抱いた。

* *

その年の秋、甲府第一高等学校から穂坂勝命・薬袋武雄両教諭が、本校から浅利吉雄・田中晴美両教諭が事前視察として相互に派遣された。この任に当たられた4人の報告が、実施に踏み切らせる大きな力と自信になった。

* *

平成4年(1992)10月、いよいよ「北見北斗高等学校創立70周年記念行事の一つである甲府第一高等学校との強行遠足交流」が行なわれた。廣瀬校長は交流の意義を出発式で本校生徒に訴えてくれ、同行の中村信雄PTA会長は本校の吹奏楽局の演奏に合わせて甲府一高の校歌を高唱して涙をぬぐっていた。参加した4人は全力を尽くし全員完走した。美しい情景を生み、数々の足跡を残して離北した爽やかな4人に感謝した。

本校の4人も死力をふりしほって参加した。途中でまでトップグループに入っていた河合正重君は最高点の野辺山付近で、古傷の足に故障が出、完走することに目標を切りかえ、52位で、本校にきた山口君と一緒にゴールした。冷静な判断力と粘りに感服した。

前夜、私は4人に「全力を尽くすことが、甲府の皆様さんへの感謝であり、礼儀である。」ことを説いた。小池奈津子さんと本間久美子さんのデッドヒートはものすごいものがあった。ゴールまでの10キロはまさに女の戦いの様相を呈した。遠くから来た、しかも同一校の生徒が凌ぎを削る姿を見た甲府の人達は感動にふるえたと私に話をしてくれた。

沢野修一君は泣きながら14位で小諸市の終着点に着いた。出発点から10位以内にいた彼も、70キロ過

ぎになると、本校での強行遠足の疲れが出て、片足が丸太のようになって動かなかった。その苦痛がうなり声になり、その表情は見るに忍びないものであった。ゴールまでの5キロを彼の後ろを歩いた。とりとめのない話をしながら、激励にもならないことを口にし、只々、彼が無事にゴールインしてくれることだけを祈って、朝もやの中に輪郭を現わした佐久の山脈をぼんやりと眺めて、小諸の市内を右に左に揺れながら足を進めた。

私も苦しかった。私の40年前に抱いた夢を実現するために、多くの人が苦勞し多くの時間を費やしていることへの苦悩である。

しかし、夢は捨てられなかった。この夢は、後輩達の手で大きく花を咲かしてくれることであろう。

(北見北斗高校 28期生)



三枝茂雄 画

1. 0.01 0.02 0.03 0.04 0.05 0.06 0.07 0.08 0.09 0.10 0.11 0.12 0.13 0.14 0.15 0.16 0.17 0.18 0.19 0.20 0.21 0.22 0.23 0.24 0.25 0.26 0.27 0.28 0.29 0.30 0.31 0.32 0.33 0.34 0.35 0.36 0.37 0.38 0.39 0.40 0.41 0.42 0.43 0.44 0.45 0.46 0.47 0.48 0.49 0.50 0.51 0.52 0.53 0.54 0.55 0.56 0.57 0.58 0.59 0.60 0.61 0.62 0.63 0.64 0.65 0.66 0.67 0.68 0.69 0.70 0.71 0.72 0.73 0.74 0.75 0.76 0.77 0.78 0.79 0.80 0.81 0.82 0.83 0.84 0.85 0.86 0.87 0.88 0.89 0.90 0.91 0.92 0.93 0.94 0.95 0.96 0.97 0.98 0.99 1.00

校長 廣瀬 重雄

今回、縁あって北見北斗高校の強行遠足60周年記念行事の一環に参加させていただきましたが、互いに隔たる地で行っている、この「強行遠足」という素晴らしい共通体験を分かち合うことによって、知見を広め、連帯の心や友情を育てることによって心の世界を広げるとともに、互いに切磋琢磨し、新時代を背負う若者に成長することを、この交流に、期待したいと思います。

「**「あんなにいいものを、あんなに安く、あんなに簡単に手に入れたらいいな。」**」

小梨園文庫第 一 卷

PTA会長 中村 信雄

平成4年(1992)10月2日、甲府駅を發した。

女満別空港は北海道のどこと地図を抜けて家中の者は「ここに有る」と位置の確認をし、共に良い結

果が出るようにと念じてくれました。

空港に到着する迄、北海道は日高山脈の西の都市見物旅行でしたので女満別迄のその拡大なスケールを機内で感じ降りた時又見させて頂きました。

ロビーにて齊藤校長先生、田中先生、PTA会長金崎幸雄氏の出迎えを得、まずは道東のラーメンを食べさせて頂きその温さの中に安ど感と充実感を持ちました。

車にて北見北斗高等学校の全体歓迎会への出席となり、北斗の70年北の大地の校舎の重みと広々とした校庭に感嘆しつつ校内見学を終りました。

講堂に北見北斗の全員が待ち受ける中、訪問者全員舞台の人となり女生徒の司会で始められました。

さて、私も横内君も甲府一高の卒業生です。北海道の北斗高校の大プラスバンドの演奏で母校の校歌を聞いた事は今迄感じ得ることのできなかった感動と身震いの中、甲府一高校歌の言葉の一つ一つが新鮮に聞こえてきます。「甲斐の国み中に立ちて」を聞き入るうち自分の年令とも関係しますが少々のセンチメンタルな気持となり心よりその音色を確めながら聞き歌い始めてしまいました。人生の中でこれからも感ずることがないだろう感激を受け今の心の有りようの大切さをこころに刻みこみつつ終り迄声を出して歌わせていただきました。歌い終えて私はこの北見北斗との自分自身の交流は満足感を十分に得ることが出来ました。

私と横内君は所期の目的の視察はこの時終った様です。2人共この感激を「甲斐の国」にまで持ち続けています。

両校の質実剛健の中に今の時節にこの感激を伝えていく一人となり、両校の交流行事の第一歩となったことの喜びを以後の両校の生徒諸兄に一日たりとも忘れることなく話し伝えていこうと念じつつこの訪問記を閉じさせて頂きます。

60回記念誌によせて

山梨県立甲府第一高等学校

PTA保体委員長 横内 敏昭

“北見の国の風晴れて、日は輝かし丘の上へ”旧制高校寮歌を思わせる、シンコーペーションのきいた北見北斗高校の校歌のあと、はからずも、我が甲府第一高等学校の校歌の吹奏をうけた。編曲の妙、演奏の上手さもさることながら、思わず背筋をのぼし、“甲～斐～の国、み～な～かにあり～て～”と口づさみつつ、「こんなに厳かに、晴れがましく母校の校歌を聞いたことはあったか?」「否」「何故だ」と自問自答し、そのあとを歌うのをやめ、聞き惚れた。平成4年(1992)10月3日、両校の強行遠足交流本番を明日にひかえた、北見北斗高校体育館での開会式のことである……。

これだけ文明の発達した現在に、およそ自分の脚力だけに頼って長い距離を歩き続けること自体無意味だとする人の少なからぬ今、距離の長短、地形の違いこそあれ、同じ“強行遠足”という名前のもとで、ほぼ同じ回数を重ねている学校があろうとは。そして、その源がどうやら同じところにあろうとは。前夜の歓迎会の折、熱っぽく、これまでの経過を話していただいた齊藤校長先生の、青年期もかくやと思われるキラキラした目を見ながら、歴史のひだに隠された縁の不思議さと、積年の夢の実現を追い続けた“男の浪漫”を感じたことを思い出す。

自己の体力と気力の限界に挑むという行為を、徒歩という、いたって単独な行動で現す故に、強行遠足の思い出は、いつまでも色あせることなく鮮烈である。行程の途中で起こった数々の苦難のドラマは、まさに自分自身が主人公であり、後年、往時の澁刺とした自分の姿に、辛くも支えられた経験を、誰しも、一度や二度は持っているのではないだろうか。今にして思えば、強行遠足は人生の縮図そのものである。喜びもあり、悲しみもある。出逢いもあり、別れもある。期待もあり、落胆もある。楽しみもあり、苦しみもある。助けることもあれば、助けられることもある。何よりも、自分一人ではないと教え

られることが有り難い。これほど見事に一日の中に人生が凝縮されている行事を他に知らない。それ故に尊い。そして、このまたとない経験を享受できるのは、幸せなことに、北見北斗と甲府一高の生徒だけだということなのである。いま校歌を聞いて感じたら誇らしさ、みんなのことに気付くときが来るだろうか。公太郎、大介、美穂、あずさ……。

ふと我に返ると、晴れがましきの余韻をのこして校歌の吹奏も終わっていた。しわぶき声ひとつない会場では開会式の次第も進み、かれこれ1時間になろうとするのに、北見北斗の生徒達は立ったまま身動き一つしていない。人の話を聞くことに対して、これ程しっかり訓練させている様子を見るにつけ、この交流が強行遠足の行事だけにとどまらず、色々な形で発展することを祈らずにはいられなかった。

ともあれ、学校間の公式行事である今回の交流会に、担当のPTA役員というだけで押し掛けることはどうかとも思ったが、斉藤校長先生をはじめとする諸先生方、地元PTAの皆様の特段のご好意とご配慮に甘えて可能になった随行であり、役員としても見るべきところが多かった。

抜けるように澄んだ“北見ブルー”の青空と、厳しい風土に育まれた北国の人々の暖かい人情に酔い、両校の歴史の一頁に身を置くことができた幸せを感じた5日間である。

北 斗 を 目 指 そ う

山梨県立甲府第一高等学校教諭 五味 武彦

10月2日午前11時50分、私達甲府一高の強行遠足交流団一行は女満別の空港に降り立った。待ち構えていたNHKのカメラの前を照れながら通り過ぎると、ロビーには北見北斗高校の先生方が笑顔でお迎えくださった。用意されたとびきりおいしいオホーツクラーメンをいただくと、身も心もすでに北海道の一員である。初めての試みである強行遠足交流会ではあったが私の心に不安はなかった。昨年本校の職員が北見北斗高校に招かれ、諸事情はだいたい解っ

ていたので、とても楽しみであった。

はたして北見北斗高校の校門に立つと、白樺やトドマツの見上げるほどの大木が林をつくっており、甲府一高の3〜4倍はありそうなグラウンドが我々を圧倒した。それにもまして感心したのは生徒が誰かれとなく私達に声をかけ礼儀正しくあいさつしていることである。心地良い。あいさつ一つをとってみても、学校教育の充実していることや、北海道の名門に相応しい生徒の目的意識の高さを感じることが出来た。強行遠足に先立って行なわれた交流会での生徒の態度の立派なこと、プラスバンドによる甲府一高の校歌の演奏等、全員で私達を歓迎してくれたことにただ感激するばかりであった。

記念すべき60回強行遠足は10月4日行なわれ、小雨の降る中を全校生徒は出発した。暗やみから明け方に向かう出発は青年の意気を高めるために効果的である。北斗の生徒は一人一人が北海道の開拓者精神を持った力強い走りであった。参加した甲府一高生(4名)も暖かい歓迎と励ましを受けてせいっぱいの努力走をし、納得のいく成果を得た。沿道でPTAの方々への心づくしの接待(おしるこ、うどん等)も強行遠足が一学校行事に留まらず、学校教育全体をささえる大きな教育活動の一環であることを学ぶ機会となった。

北見北斗高校はラグビーの名門校であることを以前から新聞やテレビの報で知っていたが、今回の60周年記念強行遠足交流会に参加して、改めてそのバックグラウンドの大きさ・広さを知り、納得したのである。泰山北斗を目指す北海道の雄に大きな拍手を送り、これからますますのご発展を期待する。山梨には日本を代表する富士山が聳えている。私もその頂上を目指すよう生徒とともに精進する心を新たにしたい。

……最後に、北見北斗高校の皆さん、PTA・同窓会その他多くの関係者の方々に心暖まる歓迎をしていただき、心から感謝いたします。この大会を機に、両校の固い絆が強く結ばれることを願ってやみません……。

交流会に参加して

山梨県立甲府第一高等学校教諭 鈴木 正 雄

北見北斗高等学校創立70周年にあたり、北見北斗高校と甲府一高の強行遠足交流会が実現されたことは、誠に意義深いものであります。

思えば、北海道に行って只走るだけではない、生徒相互の交流がどのように展開されるか多少の不安を抱きながら、やや緊張した面持ちで北斗高校の門をくぐった時、ちょっとした挨拶に始まり瞬く間に気持ちを通じ合い、会話が広がっていった光景をまのあたりにして、胸がすく思いでした。北見北斗高校の生徒の人柄と心遣いに感激しながら、訪問して良かったことを実感し、今回の交流の成功を確信したものでした。

このことがあってか、翌日の強行遠足当日は晴れやかな気分で迎え（生徒達には気の毒であったが）全行程をゆっくり、つぶさに視察することができました。そして、この行事にかける生徒の意気込み、またこれに取り組む真剣な態度に接し、強行遠足の教育的意義を改めて思うところである。

私にとって、今回の訪問のすべての日程が糧となり、視野を広げるもので「人生観が変わった」と言っても過言ではない貴重な経験でした。この機会を与えてくださりました、心のこもったお世話を頂きました、斉藤校長先生を始め北見北斗高校の先生方、並びに学校関係者の皆様に衷心より感謝申し上げますと共に、この交流が更に継続、発展することを願う気持ちで一杯です。

北海道北見北斗高校の強行遠足参加

甲府第一高等学校3年 山口 公太郎

最初、北見北斗高校の強行遠足に参加できるという話を聞いたのは、ちょうど高校2年の、一高の強行遠足の前でした。この強行遠足で上位に入れば、もしかして北斗高校の強行遠足に参加できるかもしれない、ズボンにも「めざせ 北海道」とか友達

に書いてもらい、意気揚々と当日を待ちました。その結果、なんとか1位でゴールできました。そして今年、本格的に、北斗高校の強行遠足に参加する人を決める段階の時、上位でゴールして、北海道で、北斗高校の強行遠足に参加してみたいという希望者がかなりいた為、作文で、自分は何故この強行遠足に参加したいのか？又その意気込みなどを書いて、最終的に、2・3年、男女1人ずつを選出することになりました。このようにして、自分が選ばれた時、うれしさと同時に、一高の代表として参加するのだからと、気を引き締めることができました。

10月2日、北海道へ向けて、僕は山梨を出発しました。応援してくれる友達や先生の期待を受け、かなり緊張していたけど、全く知らない土地で自分がどれだけのことができるかと楽しみでもありました。

そしてその翌日、強行遠足の出発式で、僕は初めて北斗高校の生徒の前に立ちました。何をしても注目されていて、とても緊張しました。でも、ここでもものすごく嬉しかったことがあります。それは、北斗高校のブラスバンド部が、一高の校歌を演奏してくれたことです。曲もアレンジしてあって、僕は本当に感動しました。一高のみんなに、ぜひ聞かせてやりたかったです。この日の為に、本当にありがとうございました。

いよいよ、僕達の本来の目的である強行遠足の日がきました。朝、集合した時には、3年1組のみなさんをはじめ、近くにいる人がどんどん話かけてきてくれて、友達もたくさんでき、異郷で走るとは全く思いませんでした。そして小雨の降る中のスタートでした。いきなり、僕は一高のペースとは違うことに気付きました。一高では半分以上歩いているけど、そんなことをしていたら、どんどん抜かれてしまいます。でも、少し走っているうちに何とか自分のペースを見付けることができました。その中で、途中から、サッカー部の茶木君と一緒に走ることにになり、そして折り返し地点から、同じサッカー部の部員が、4～5人集まり、それらは、方言の話や、ラグビー部の活躍とかの話で和気あいあいと走って

3年1組の皆さん、短い間でしたがクラスの一員となることができて、本当に嬉しかったです。色紙をくださった女子の皆さんありがとう。

またいつか北見を訪れて、皆さんに会える日を楽しみにしています。

「強行遠足」ありがとう

甲府第一高等学校2年 佐藤 大介

北海道の広々とした大地を踏みしめて思いきり走りたい。これが北見北斗高校強行遠足への参加を希望した僕の気持でした。足には自信のある方でしたし、走るのが好きでした。ところがその後練習中に足のじん帯を伸ばしてしまった僕は、甲府一高生代表としての責任が果たせるか不安になり、深刻になりました。悩んだけれど走りたい思いが強かったので、医者に頼んで、テーピングや非常時の処置などを教えてもらい、参加させていただくことに決定しました。心の中で僕は「とにかく走って走って上位に入りたい。足がどうなってもいい」と思いました。運動もけがのためほとんどできませんでしたが、精神力では負けない気がしていました。

いよいよ北海道にわたり、強行遠足の朝をむかえました。実際に走ってみると、最初はテーピングの効果もあって快調でしたが、全く衰えきった筋力と、けがの痛みに敗北してしまいました。途中で、棄権もしなければならぬくらいの痛みで少し泣きたくなりましたが、お守りを握りしめて何とかゴール出来ました。走っている時、「この痛みを勝てば、僕は新しい答えが見つけれられるはず」と遠い空を見つめて歯をくいしばったりしました。上位入賞は出来ずに心残りでしたが、とても楽しく走ることが出来ました。今でもあの日のことを思い出すと、北見北斗高校の皆さんの心の温まる拍手や声援があったからこそ完走出来たのだと、感謝の気持ちでいっぱいです。

僕はあの日の経験を大切にしていきたいと思います。北見北斗の全ての皆さんに感謝します。そして、これからもずっと仲良くしていきたいと思います。一高代表として少し恥しい結果でしたが、北見北斗高校の先生方の人間性や生徒達の思いやりに触れる事が出来たことが、何よりすばらしい事です。強行遠足という絆を大切に、もっともっと発展していけたらいいと思います。強行遠足はつらく見えるけれど、本当の直接体験学習であり体裁を飾らない素直な心にさせてくれるような、不思議な力を持っている。本当にありがとうございました。

北見北斗高校・強行遠足に参加して

甲府第一高等学校2年 林 美穂

「北海道とはいったいどんな場所なのか。」「他の学校の同じ年代の人達と交流を深めたい。」また「この高校生活の中で自分自身の人間性を、いつもとは違う場所で確かめるためにも、非常に良い機会だ。」と、こんな気持ちで私は北見北斗高校の強行遠足に応募しました。

北海道に到着すると、予想以上に美しく広大でその風景に感動しました。しかしその感動をよそに、私の心の中に1つの影が現れました。「交流」ということです。「他の学校の人達と交流を深めると一口に言っても、交流とは抽象的でとても難しいものなのです。また、私は人と交わることに對して、とても不安を抱いていました。なぜなら私には転校経験があり、人間関係ではその度に何かとつらい思いをしてきたために、同じ年代の人達と接触することが、なんとなく自分にとって重荷になってしまいそうな気がしたからです。が、教室に入った瞬間、私の思いは遥か彼方へ飛び去ってしまいました。見ず知らずの私に、たくさんの人達が話しかけてくれました。まるで以前から北見北斗にいるように。私にとってそれがどんなにうれしかったかは、すべてを言葉で言い尽くすことができませんが、一言で言えば、一人ではとても越えることのできない高い山を

越えられた、そんな気持ちがしました。

いよいよ当日。出発の時間となり、緊張が高まってきたところでも、北見北斗高の人達は私を温かく迎え入れてくれました。「がんばろう!」と声をかけてくれたり、「ハチマキ作ったから付けて走って!」などと言ってくれたり、そして何よりその時の内面からの笑顔が私を「がんばって走り抜こう。」という気持ちにさせてくれました。ピストルが鳴ってからも、私を追い越す人も私が追い越す人も、すべてが私を励ましてくれました。すると私も「みんな苦しいんだ。それなのに自分だけがつらいなんて思っ

てはいけない。」と自分に言いかけ、一步一步、北海道の雄大な地を走って行くことができました。最後の関門を過ぎると私自身、精神的にも身体的にも限界が近づいて来ました。すると後ろから私の所属させていただいたクラスの友達が声をかけてくれました。その友達はまだ体力もあつただろうし、顔にも余裕があるのが私の目でも、はっきりわかりました。しかしそこで先に行ってしまうずに、私と伴走してくれたのです。ペースも私に合わせてくれたし、いろいろな話も聞くことができ、そしてそんな友達の伴走が私の精神的疲れを取り除いてくれました。そこで改めて、北海道に来てよかった、北見北斗高の強行遠足に参加できて本当によかった、と心から感じました。

今回、第60回の北見北斗高校の強行遠足に参加できたことは、私にとって大変重要なものとなりました。甲府一高の強行遠足だけではわからないことも数多く体験でき、本当によかったと思います。ここで自分自身に得られたものを、これからの生活に大いに取り入れ、それをステップとしていきたいです。貴重な体験をさせていただき、本当にありがとうございました。



三枝茂雄 画

北見地元新聞より

154

圖 2-1-10 月 1 日 圖 3 種 標 本 集 計 表

(自刊)

3人が1位でゴール

北斗高強行遠足·男子

60回目に花添える

甲府第一の生徒も健闘

北見北高校の生徒等、國行博見の四月、行かれた。今般同校の創立七十周年、行方決定の第六十回、ある名義大会、第三の博見博見とされる山梨の甲府、両校からも四人の生徒が参加し、北見の博見、民に花開いた。男子は三人が同時にトナリボールをとり、博見上りした大成功であった。

マイペースで開発を担う

本間が黙った

小世界

10

000000

000000

000000

000000

000000

.....

000000

000000

000000

00000000000000000000000000000000

.....

000000

000000

オホーツク

甲府第一高
と交流

北見北斗高の4生徒

強行遠足で全員完走

山梨の同窓生も応援

校長は、みんな頑張ってくれ、

強

行

速足

で全
の同

員 忍

走
も

援

たが、全山製薬にも生じたように、後日行いた

る同輩生

れた、
は誰
か、
さ
う
い
ふ

/ 思いを結ぶー強行

強行遠足縁で交流へ

来年にも互いに大会参加

伝統行事が結ぶ北見北斗・山梨・甲府一高

六十一年から学校の伝統行事として強行遠足を行っ

ている北見北斗高校が、同じく強行遠足を毎年続けてきた山梨県立甲府第一高校と交流を行うことになった。今年は互いの実情を教頭が視察し、来年は両校生徒の相互参加の形でもに歩くふれあいを表現したい考えだ。

来年創立七十周年を迎える北見北斗高校の第一回強行遠足は旧制野付牛中学校時代の昭和七年十一月十二日、三百六十六人が野付牛駅北見駅前を出発し、六三・四・先の遠征を目標し、二百九十八人が完歩している。

その後、この行事は旧制北見中学を経て北見高校から北見北斗高校と名称変更して男女共学になった昭和二十五年を除いて毎年実施。五十九回を迎えた今年も今月六日に北見から朝市町、厚岸方面へ男子七十二人が、女子四十人で行われることになっている。

一方、明治十三年(一八八〇年)に山梨県中学校として創立された甲府第一高校は、北見北斗より八年早い大正十三年(一九四四)に第一回の強行遠足を開催。これまで伊勢湾台風など災禍が荒れた一回と終戦の昭和二十年の合わせて三回を除いて毎年行っており、今年の十月一、二両日で六十八回を迎えた。男子生徒は甲府を午後二時半にスタートして、コースは小幡まで(一〇三・六)、到着は翌日の正午までとなっており、夜を徹して強行遠足を繰り返す。女子は四十六人。

交流は今年の六月の全国校長会で北見北斗の斉藤静之校長が甲府第一高の広瀬重雄校長に結を打ちつけたのがきっかけ。強行遠足が興っている学校は極めて少なく、今年は教師を八つづつ互いに派遣して実施状況を視察し、来年はいよいよ互いの行事に生徒を向入か参加させることだ。

広瀬校長は「同じ世代の若者が同じ目的で自分と挑戦することは素晴らしいことと考えると、斉藤校長の申し出に応じたに結とており、斉藤校長は「これまで続いたのは学校行事というより、地域の行事となっていたから、時代錯誤という面もあるが、実施後は三年生の勉強に取り組み姿勢も変わり、生徒の誇りや愛も高くなり、卒業生も教師も高まっている。関係を知り、自己への挑戦を促したという自信が得られる」と交流を一回限りにはせず、何らかの形で継続させることも考えていきたいと結している。

北見新聞

1991年(平成3年)10月2日(水曜日) 創刊大正元年 (日刊)

北見北斗高校の伝統行事「強行遠足」が、今ともしも六日に実施される。昭和七年を第一回に、こしが五十九回目。当時は五年制の中学、その五年間の学校生活に何か記憶に残ることを目指して、「へたはるまで歩こう、歩けるまで歩こう」の趣旨で始まった。昭和二十五年に男女共学の北見北斗高校になった年、女子の距離問題で中止されたほか、三十三年は降雪で途中中止のアクシデントもあったが、戦時中も続行。コースや距離の変更を見たものの現任は男子七十二人、女子はフルマラソン同様の四二・一九五。こうした異丁場の遠足は、山梨県甲府市の甲府第一高校が夜を徹して歩き続ける百二十人が日本一。北斗はこれに次ぐもの。その甲府一高生を招き、こころも元方へ行き強行遠足の交歓会が来年の七十周年記念事業に計画され、今日二日両校の甲府へ二人の先生が派遣された。帰りは甲府の先生を同行。六日の模様を見てもらう。来年の実務目標を決めるといふ。「是非実現させたい」と高橋静之校長は北見北斗だけにアイデアも奇抜。実現すると大きな話題となる。この強行遠足は高校生活の一冊の思い出と〇日は口をそろえる。また、これを契機に入学する生徒も多い。以前共通一時試験を取材した折、終了後の受験生が、「すごい体力の消耗。でも強行遠足で鍛えた忍耐力のおかげ、バッチリでした」と褒めも聞く。そして、「いまま大きな心の支え」と語っていたのが印象深い。だが、在校生の親の中には反対意見もあると聞く。ひ弱な子に育てようという気。

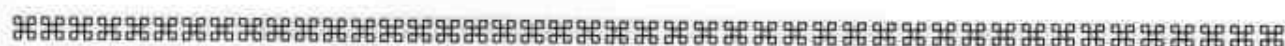
(元外)



展望台

北見北斗高校の伝統行事「強行遠足」が、今ともしも六日に実施される。昭和七年を第一回に、こしが五十九回目。当時は五年制の中学、その五年間の学校生活に何か記憶に残ることを目指して、「へたはるまで歩こう、歩けるまで歩こう」の趣旨で始まった。昭和二十五年に男女共学の北見北斗高校になった年、女子の距離問題で中止されたほか、三十三年は降雪で途中中止のアクシデントもあったが、戦時中も続行。コースや距離の変更を見たものの現任は男子七十二人、女子はフルマラソン同様の四二・一九五。こうした異丁場の遠足は、山梨県甲府市の甲府第一高校が夜を徹して歩き続ける百二十人が日本一。北斗はこれに次ぐもの。その甲府一高生を招き、こころも元方へ行き強行遠足の交歓会が来年の七十周年記念事業に計画され、今日二日両校の甲府へ二人の先生が派遣された。帰りは甲府の先生を同行。六日の模様を見てもらう。来年の実務目標を決めるといふ。「是非実現させたい」と高橋静之校長は北見北斗だけにアイデアも奇抜。実現すると大きな話題となる。この強行遠足は高校生活の一冊の思い出と〇日は口をそろえる。また、これを契機に入学する生徒も多い。以前共通一時試験を取材した折、終了後の受験生が、「すごい体力の消耗。でも強行遠足で鍛えた忍耐力のおかげ、バッチリでした」と褒めも聞く。そして、「いまま大きな心の支え」と語っていたのが印象深い。だが、在校生の親の中には反対意見もあると聞く。ひ弱な子に育てようという気。

平成4年度 甲府一高校交流会参加		10月13日
1. 期 日	平成4年10月12日(月)～16日(金)	北斗高生徒 ホームステイの本校生徒と 同一行動とする (男子の出発式にも参加する)
2. 参加者	校 長 斉 藤 静 之 引率教員 田 中 晴 美 * 出 町 良 一 生 徒 河 合 正 重(3年) * 小 池 奈 津 子(3年) * 澤 野 修 一(2年) * 本 間 久 美 子(2年)	13:00 登校(北見北斗高校一行は会議室で待機) 13:50 出発式 イ. 校長激励の言葉(写真 斉木) ロ. P会長・同窓会長激励の言 葉 ハ. 北見北斗高校一行の紹介と 挨拶 斉藤校長挨拶 生徒代表(河 合)挨拶 ニ. 生徒代表宣誓(歓迎の言葉 も含めて) ホ. 係からの諸注意
3. 宿泊先	12月14日 シティプラザ紫玉苑 (甲府市飯田1丁目2-4) 15日 ニューステーションホテル (甲府市北口1丁目4-15)	14:20 出発式終了 14:30 3年生出発 号砲 廣瀬校長 35 2年生出発 号砲 斉藤校長 40 1年生出発 号砲 斉藤校長
4. 日 程	10月12日 16:30 甲府駅出迎え(プラットホーム) (北見北斗歓迎の横断幕) 職 員 石倉、五味、薬袋 生 徒 生徒会長 小林 (簡単に歓迎の言葉) 山口、石川、佐藤、林 (北斗の強行遠足に参加した生徒) (4名の父兄にも駅に来てもら う。北見の生徒の荷物運搬) ホームステイ先 河合一山口公太郎宅 小池一石川あずさ宅 澤野一佐藤大介宅 本間一林美穂宅	10月14日 5:00 北見北斗高女子の生徒は本校生と共に登 校する 昼食はホームステイの家庭で用意 5:30 バス出発 6:10 須玉小学校到着 6:10 集合完了・諸注意 6:25 準備運動終了・出発準備完了 6:30 3年 須玉小学校出発 号砲P会長 35 2年 * 40 1年 *
	17:00 学校到着(校長室 近接の教室で待機) 17:10 北見北斗高校一行紹介 斉藤校長挨拶 17:25 終礼・最終打合せ終了 解散 北斗の先生案内 紫玉苑へ (24-4422)(鈴木) 北斗の生徒 それぞれのホームステイ先に	10月15日 [タクシー2台用意 北斗高校7名荷物 を持って登校] ※荷物は学校で保管する。 9:00 職員出勤 10:00 生徒登校(集合完了)(北見北斗一行は 校長室で待機)



10:10 終了宣言(体育館)

(北見北斗生徒は該当クラスの一番前に並ぶ)

・校長先生の話・終了宣言

・記念品贈呈

メダル 色紙など→本校生・北斗高校生に

・斉藤校長先生の話

・生徒の感想 男子・女子

(北斗高校退場)

講評・諸連絡

10:30 終了

10:40 LHR・到達地確認・健康調査

11:00 生徒下校

11:00 北見北斗一行 研修視察出発

・研修視察の方面

富士五湖方面・ブドウ狩り・ワイナリー

見学(勝沼)

その他 天候によりコース選定

10月16日

9:30 北見北斗一行出発

10:04 甲府発(出発時刻)

13:00 新宿着

15:00 羽田発→16:30 女満別着

平成4年度甲府一高強行遠足に参加して

平成3年度視察 平成4年度生徒引率

北見北斗高等学校教諭 田中晴美

平成3年10月1日(火)～10月4日(金)

甲府第一高校強行遠足事前視察

10月2日(水)

創立111周年、第65回強行遠足、昨年は台風18号のため中止となったが、生徒から延期してでも行てほしいと強い要望が出たため、今年は予備日まで設けての万全の態勢。

この日は前日からの雨も上り、秋晴れの強行遠足日和。

14:30

校庭での出発式後、号砲の合図とOBの打ち鳴らす太鼓に送られスタート。学生服、白いトレパン、ナップサック姿の集団が、重厚で風格のある歴史を感じさせる校舎を背に校門を出る光景は一瞬旧制中学にタイムスリップしたようである。

甲府から小諸市まで全行程103.6kmの長丁場、歩けるところまで歩き、走れるところまで走る。自己との戦い、がまん。がまん。

15:25

校長車に同乗、全行程を視察、小諸までの検印所(関門)17ヶ所。道路標示、交通整理、歩行状況の監察と指導、救護、検印所等、地域とPTAの協力によって運営、この行事の大きな支えになっている。

17:30

出発点から5～6km頃から急坂、若神子まで最先頭前後を並走するが、道路事情は想像以上に厳しい。狭いうえに交通量が多い。

19:00

出発点から35km登りの林道に入る。外灯も無く、月も星も無く、本当の闇夜の中、頼りになるのは懐中電燈一つである。ここから大門ダム堰堤を過ぎるこの辺りが難関と思われる。車でも気持が悪い所。

21:00

本部野辺山、スタートから51.6km、JR鉄道最高地点(海拔1375km)丁度中間点、名物のしじみ汁が疲れと寒さをやわらげてくれる。救護のテントで疲れ果てた生徒が深い眠りに入っていた。

22:00

各検印所に立ち寄り、白田のおばあちゃん(依田トミ子さん)を訪れる。昭和37年から今日までおにぎりで生徒の応援をし、強行遠足の支えともなっている。白田のおばあちゃんのおにぎりが食べたい一心で頑張る生徒も少なくない。心暖まる話に感動。

10月3日(木)

2:50

16の検印所を回り小諸へ到達。私も少々疲れを感じる。103.6kmの行程は言葉や数字等で理解することは不可能で、実際に関って見て、想像を絶する行

た膝の故障が再発しました。しかし、歩いてでも小諸まで時間内に到着できることを証明しました。最初好調だった沢野君も野辺山後の急な下り坂で膝を痛めました。その後一高の玄間君との感動的な交流があり、上位入賞して一番列車に間に合いました。女子の小池さんは自己のペースを守り、一度も歩くことなくあの高低差のあるコースを走り抜きました。その小池さんから5分後にスタートした本間さんは、最後に小池さんに追いつき、一緒に手を握って同着2位でゴールしました。4人とも実によくやりました。

甲府一高との強行遠足の交流第1回は、北斗ではスタート時に雨。甲府一高では終盤に雨。天候には恵まれませんでした。しかし、交流に参加した両校4名ずつの生徒とその周囲に数々の感動が生み出されました。一高生徒の心優しさと明るい挨拶、北斗の生徒の頑張り。私自身よい体験をさせて頂きました。トップでゴールした生徒のリュックサックの揺れ、終始お世話ご案内して下さいったPTA会長中村さんの温かい思いやり。いつまでも忘れることはできません。記念すべき最初の交流会に参加させていただいたことを感謝すると共に、今後、この交流が更に発展し、両校が互いに享受できるものが多くなることを切に願っています。

山梨県立甲府第一高校「強行遠足」に参加して

北見北斗高等学校3年 河合正重

僕が甲府第一高校の強行遠足を知ったのは、北斗に入学してすぐの英語の時間でした。とは言っても甲府第一高校という名はすぐ忘れ、ただ100km以上も2日間もかけて歩き、ゴールした人から列車に乗ってくるというのを聞いてとんでもないことを生徒にさせるものだと思っただけでした。

そのとんでもないことに自分が参加することになるとは知るよしもなかったのです。

実際に甲府の駅に着くと大げさなほどの出迎えがありとても恥ずかったのを覚えています。甲府の人

達はとても暖かく親切でした。僕のホームステイ先の山口君の家でもまるで家族の一員のように接してくれました。

当日、いつもより遅く起き数時間後に迫ったスタートへ向け準備をするうちに不安と緊張が高まってきました。開会式ではTVのインタビューを受け、代表挨拶をし、少し偉くなったようないい気分の中スタートしました。最初だけでした。20kmも走りあたりも薄暗くなった頃、僕はただ一人で歩いていました。走りたくても膝が曲らなかったのです。

甲府に出発する前、甲府から送られてきたビデオを見てこれなら余裕だなと思い、一位になったらどうしようと考えていた自分がかわいそうになりました。しかし、僕には北斗の生徒としての意地がありましたから絶対に棄権はしないぞと心に誓いました。というのは、最初だけ50kmあたりになると、次の関門に先生がいたら棄権しようと思うようになりましたが、決まって先生はいないのです。そして暗い夜道を一人で泣きべそをかき弱音をほき、足をひきずり歩き続けました。

父兄の皆さんや甲府の生徒に励まされ、辺りがうすうすらと明るくなってきた頃、自分がどこをどうやって歩いているのかわからなくなっていました。ゴールまであと十数kmという所で校長先生が応援しに来てくれました。あのときばかりは本当にうれしく思い、涙が出そうになりました。なぜか足どりが軽く元気が出てきたのです。その時自分は完走できると確信しました。

ゴールまであと数kmというところで、大げさかも知れませんが1つのドラマが起きました。甲府第一高校の山口君達に追いついたのです。やはり彼も北斗での強行が脚にきていたのです。心強い仲間ができました。そしてついに19時間半以上にも及ぶ死闘にビリオドを打つ時が来ました。

その時僕は4人でいたのですが、その4人で肩を組み、一緒にゴールしたのです。

これは今だから言いますが、僕はゴールしたら先生のところに行き泣こうと思っていましたが、山口君と一緒にいたために、泣くのを我慢しました。

(それに先生は一人もいなかった)

こうして103.6kmみごとに完走したわけです。

今、この強行遠足を振り返ってみると、自分の強さと弱さの両面がはっきりと表われていたように思います。先生方は僕のことをほめてくれたりもしましたが、それを素直に受け取ることができません。また自分に必要なことがありすぎるのが文字通り痛いほどわかりました。

この北斗での3回の72km、甲府での103.6km、どちらも自分にとって取り除くことのできない体の一部となって成長していくことと思います。

甲府第一高等学校強行遠足に参加して

北見北斗高等学校3年 小池 奈津子

10月14日。山梨県立甲府第一高等学校との初めての交流行事である強行遠足に参加した。北斗での強行遠足からわずか10日後のことである。

体調が回復しているかどうかともわからず、様々なプレッシャーだけを重く感じた。完走できるかどうかさえ不安だった。しかし、ここで弱音をはいては、この交流を成功させようと力を注いでくれている人々の期待を裏切ることになる。そう思い、自己の限界まで頑張ってみることにした。

コースは想像をはるかに絶する辛さだった。北見の平坦な道に比べ、甲府は土地の起伏が非常に激しい。自分で走っているつもりでも、実際には歩く速さと全く変わらない。何度もやめてしまおうかと思った。一体何のために走っているのかと自問自答も繰り返した。答えはでない。これは強行遠足に参加する度にいつもぶつかる壁だった。しかし、ここで負けるわけにはいかない。とにかく足だけは止めなかった。いくつかの検印所を過ぎ、朝の6時半から6時間程走り続けた頃やっとゴールが見えてきた。2年生の本間さんと一緒にゴールした。北斗のときにはなかった不思議な感動があり、やっと肩の荷が下りたような気がした。とても満足だった。

そして、甲府第一高校の皆も頑張っていた。実施

内容としては、北斗と異なる点もかなりあったが、強行遠足によせる強い思いは北斗と全く変わらなかった。皆、必死でゴールを目指していた。それを見ていると、強行遠足には何か不思議な力があるように思えてならなかった。きっとその力こそが60回にも渡るこの伝統行事を支えてきたのだろう。その不思議な力を維持するためには、広い視野をもち強行遠足の意義を確認しつづけなければならないと思う。そのためにはこれからの両校の交流が不可欠だろう。ぜひ、新しい伝統の一つとしてこの交流を続けていてほしい。

一生の思い出

北見北斗高等学校2年 澤野 修一

この甲府第一高等学校の第66回の強行遠足に第1回目の北斗高校からの交流生徒として選ばれた時、僕は本当にうれしかった。でもその一方では本当に百キロという長い距離を走り切ることができるのかという不安もあった。12日、僕は北斗高校での強行遠足によって痛めた足が完治しないうちに甲府に出発しました。あいにく甲府は天候が悪かった。駅に着くと甲府第一高等学校の先生や生徒が暖かく迎えてくれた。その日、僕は北斗強行遠足に参加した佐藤君の家にお世話になり、僕がベストの状態が強行に参加できるようにいろいろしてくれた。13日、天気もよくなりいよいよスタートのときがきた。スタートはダッシュというよりむしろ歩くというものだった。

最初は佐藤君がしてくれたアドバイスに従ってスローペースで走った。コースは半分が登りで残りが下りという北斗強行遠足よりもつらいものだった。夜には明りのない山道を一人で懐中電灯を照らし精神的にもつらかった。走るにつれ左足、右足と痛くなり何度もやめようと思ったがその時先生や父母の方、甲府の生徒に励まされ次の検問まで走ろうという気持ちで1つずつ検問をクリアしていった。順位の方も5位ぐらいまであがり上位入賞ができるという考えが頭をよぎった。

でも残り22キロの所で足が限界に達してしまい、とうとう残りを歩き続けることにした。でも左足は棒のような状態で、歩くにも必死だった。後では校長先生が僕を励ましながら一緒に歩いてくれた。ゴールに近づくにつれ、知らずに歩くピッチも上がってきた。あと200メートル、僕は思わず足のことを忘れ走り始めた。ゴールした途端、疲れとやり遂げたという満足感が何だかわからなくなった。しかしこんなに苦しかったことも今は一生の思い出として残っています。こんな思い出を作る機会を与えてくれた関係者の皆さんには大変感謝しています。本当に有難うございました。是非これからもこの交流を続けていってほしいと思います。

甲府で学んだこと

北見北斗高等学校2年 本間 久美子

甲府での5日間は、苦しみや喜びが入り混じった、今まで体験したことのないくらい充実した日々を過ごす事が出来ました。本当に良い旅をさせてもらえて嬉しく思うし、感謝しています。

今回、甲府に行った事で色々な事を学んだような気がします。それはこれから私が生きてく中でも、とても貴重な事、人とのふれあい、というか……そんなものだと思います。私は甲府に行った時から何だか不思議でしょうがないのです。私がホームステイした先の林美穂さんや彼女の友達と知り逢えたのも、このような交流があったからで……もしかしたら単なる偶然なのかもしれないけど、“運命の出会い”というのがあるのかなという事を感じずにはいられないでいます。美穂さんや家族の方も同じように言っていました。

話は変わって、甲府での強行遠足は北斗での強行遠足と同じようにとてもつらいものがありました。私は北斗の強行遠足で足首のあたりに炎症を起してしまい、完全に治った状態で甲府の強行に参加した訳ではなかったのです。走っている時もいつ痛み出すか、とてもヒヤヒヤしていました。ところが、ちょ

う度半分を過ぎた所で急に痛み出してきたのです。あの時は本当にどうしようかと思いました。何だか悔しくて涙が出てきそうでした。そんな時、心の支えとなったのは甲府の人達の温かい応援の声でした。どこかのトラックの兄ちゃんも応援してくれました。このような人達に見守られたからこそ、ゴールする事ができたんだと思います。そしてもうひとつ、一緒に甲府に来た河合さん、澤野くんが無事完走できたという朗報や途中で一緒になった小池さんと走った事、先生方の応援も私を頑張らせてくれました。私はそんなこんなで感激の余り、声を上げて泣いてしまいました。

甲府の人は本当になじみやすくて良い人ばかりでした。人生で出会う人すべてが“運命”で出会ったとすれば、今回知り逢えた人、今まで知りあった人、これから出会う人みんなを大切にしていきたい。そんな事を私に刻みつけてくれた旅でした。こんな貴重な体験をさせてくれて、改めてお礼を言いたいと思います。本当にありがとうございました。



佐野智子 画

平成7年(1995)第69回

甲府第一高校強行遠足

北見北斗高校来訪計画

北見北斗高校来校者 林 堯 教頭
田 中 晴 美 教諭
棧 邦 雄 教諭
参加生徒 男子 3年 新川和規
2年 伊藤勇也
女子 3年 田中かずみ
2年 辻 友恵

10月2日(月)

14:00 新宿発 あずさ65号
15:32 甲府駅着
出迎え(教頭・吉成)
16:30 終札・最終打ち合わせ
北見北斗高校一行紹介 林教頭挨拶
日程等の打ち合わせ(校長室・吉成)
宿舎(ニュー芙蓉)へ
18:00 歓迎会(ニュー芙蓉)
出席者 北見北斗高校一行 斉藤校長
ご夫妻
甲府一高 関口校長 吉岡教頭 千野教
頭 保坂事務長 酒井PTA
会長
20:00 歓迎会終了

10月3日(火)

午前中 午前中の過ごし方については、生徒の様
子を見ながら検討(場合によっては気分
転換に美術館研修等)
昼 食
13:00 登校(北見北斗高校一行は多目的ホール
で待機)
13:50 出発式
イ. 校長激励の言葉
ロ. P会長・同窓会長激励の言葉

ハ. 北見北斗高校一行の紹介と挨拶

(職員の紹介・・・関口校長)

(生徒の紹介・・・吉成)

林教頭挨拶 生徒代表挨拶

ニ. 生徒代表宣誓(歓迎の言葉も含めて)

ホ. 係からの諸注意

14:20 出発式終了

14:30 3年生出発(北斗高校2名は3年3組の
最後尾より出発)

35 2年生出発

40 1年生出発

出発式終了後 林教頭・棧先生は巡視車(吉成)
に同乗して出発

(夕食は、野辺山あたりで適宜)

田中先生・女子生徒は穂坂先生の車で出発

(女子生徒を宿舎に送り、巡視に出発)

(夕食は、野辺山あたりで適宜)

女子生徒の夕食は宿舎(ニュー芙蓉)で

田中先生、穂坂先生、女子生徒の朝食の手配…
ニュー芙蓉

10月4日(水)

5:00 田中先生・女子生徒は、穂坂先生の車で
学校へ
5:30 バス出発(5)号車に乗車
6:10 須玉小学校到着
6:10 出発式
6:20 出発式終了
6:30 3年出発(北斗高校2名は3年2組の最
後尾より出発)
35 2年出発
40 1年出発

※北斗高校生徒は、到着検印所からJRで甲府駅
へ

甲府駅から宿舎への輸送・・・中込(恵)先生
宿舎で休養し、先生方の帰りを待つ

全員そろって夕食

平成8年(1996)第64回

北見北斗高校強行遠足

山梨県甲府第一高等学校来訪計画

甲府第一高校来校者 関 口 稔 夫 校長

大 西 勉 教諭

藤 巻 敬 正 教諭

参加生徒 男子 3年 神宮寺将一

2年 大橋泰浩

女子 3年 中込祥子

2年 望月啓子

同窓会 太 田 源一郎 会長

P T A 奥 水 孝 樹 P T A 副会長

10月4日(金)

11:05 羽田空港発

12:45 女満別空港着出迎え(市川校長・今野事務長・棧・田中)

13:00 昼食(日程打合せ) 担当 田中

14:00 網走方面研修

18:00 宿舎到着(ピアソンホテル)

19:00 歓迎会 担当 横道・棧

サッポロビール園

出席者 甲府第一高校一行

北斗高校 市川校長・小野寺教頭・今野事務長・近藤同窓会長・酒井P副会長・齊藤先生・広澤・横道・旦尾・棧・田中・田中

21:00 二次会の予定

10月5日(土)

7:50

8:00 登校 棧迎え(甲府第一高校一行は校長室で待機)

8:15 職員打合せ(甲府第一高校一行の皆さんを紹介)

8:50 開会式(体育館) 担当 吉田

1. 開式の辞(小野寺教頭)

2. 市川校長挨拶

3. 生徒代表歓迎挨拶(伊藤勇也・辻友恵)

4. 甲府第一高校登壇(関口校長挨拶)

5. 甲府第一高校引率教員・参加生徒紹介

6. 甲府第一高校生徒代表挨拶(神宮寺将一)

7. 記念品贈呈

8. 生徒代表宣誓(宮城昭子・山田直樹)

9. 応援団エール

10. 閉式の辞

9:30 開会式終了後(関口校長・同窓会長・P T A副会長・大西・藤巻先生視察予定) 担当 小野寺教頭

9:45 生徒は各H Rで事前指導を受ける

3年 男子 神宮寺将一

担任 3年2組 高橋洋輔

2年 男子 大橋泰浩

担任 2年3組 武田久

3年 女子 中込祥子

担任 3年6組 浅田智子

2年 女子 望月啓子

担任 2年7組 佐藤満

10:35 事前指導終了後各H Rで歓談

11:00 生徒会主催交歓会(会議室)

担当 武田・佐藤

14:00 コース視察(広澤車・田中車でコース一巡) 担当 田中

16:00 視察終了

10月4日

※ 昼食については女満別空港で予定

※ 視察コース予定——網走方面

10月5日

※ 開会式終了後の先生方の視察については前回の佐呂間方面を参考に甲府の先生と打ち合わせる

10月6日

※ 夕食会を予定

10月7日

※ 見送りについては市川校長はホテルで

※ 小野寺教頭・棧・田中は女満別空港出発まで

10月6日(日)

- 2:55 ホテル出発(迎え 棧)
 3:00 北斗高校着(甲府一行校長室で朝食)
 3:15 職員打合せ
 3:30 男子生徒グランド集合(通過票・ゼッケン・反射板タックル)
 神宮寺将一(3年2組 担任 高橋洋輔)
 大橋泰浩(2年3組 担任 武田久)
 準備運動(各クラス毎)
 4:00 男子生徒スタート
 4:30 女子生徒グランド集合(通過票・ゼッケン配布)
 中込祥子(3年6組 担任 浅田智子)
 望月啓子(2年7組 担任 佐藤満)
 準備運動(各クラス毎)
 5:00 女子生徒スタート
 女子スタート後、コース一巡 関門挨拶回り
 今野事務長車(市川校長・関口校長・太田同窓会長)
 広澤車(奥水P副会長・大西先生・藤巻先生)
 8:00 女子トップゴールに合わせて北見ゴール地点(常盤公園)に戻る
 以後のスケジュール
 ※ 広澤車・棧車で甲府の生徒の応援に走る
 ※ 昼食はタイミングよく
 13:45 女子ゴール締切り時間
 16:30 男子ゴール締切り時間
 19:00 夕食会予定

10月7日(月)

午前中のスケジュールについては10月4日に打合せ

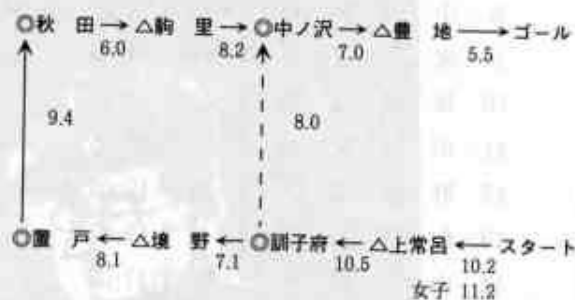
- 12:30 昼食
 14:20 女満別空港到着
 15:25 女満別空港発
 17:10 羽田空港着
 19:30 新宿発(かいじ117号)
 21:15 甲府到着

平成8年度(1996)第64回 北見北斗高校強行遠足概要

コース

1. 出発点 北見北斗高等学校グランド
2. ゴール 北見市常盤公園
3. 集合時間 ・男子 午前3時30分
 ・女子 午前4時30分
4. 出発 ・男子 午前4時00分
 ・女子 午前5時00分
5. ゴール締切 ・男子 午後4時30分
 ・女子 午後1時45分
6. 距離 ・男子 72.0km
 ・女子 42.2km

7. 略図(km)



各関門締切時間等

関門	上常呂	訓子府	境野	置戸
距離(km)	男女	男女	男女	男女
	10.2 11.2	20.7 21.7	27.8	35.9
締切時刻	男女	男女	男女	男女
	5:25 6:40	6:55 8:30	8:00	9:20
関門所要時間(分)	男女	男女	男女	男女
	85 100	90 110	65	80
時速(km)	男女	男女	男女	男女
	7.2 6.8	7.0 5.8	6.6	6.1
1位通過時刻(昨年)	男女	男女	男女	男女
	4:43 5:46	5:28 6:31	6:17	6:48

秋田	駒里	中ノ沢	豊地	北見
45.3	51.3	59.5 29.7	66.5 36.7	72.0 42.2
11:05	12:10	13:45 10:20	15:10 12:10	16:30 13:45
105	65	95 110	85 110	80 95
5.3	5.6	5.2 4.4	5.0 3.9	4.2 3.5
7:33	8:05	8:46 7:08	9:28 7:42	9:59 8:07

- ① 各関門間の距離は、上図に示した(単位km)。
- ② ◎印は正規関門、△印は通過関門を示す。
- ③ 豊地～北見ゴール間は、一部サイクリングロード(無加川堤防)を利用する。

男子 40歳 距離72.0km 午前4時出発

順位	氏名	年組	時間
1	森上 正和	(1-6)	6:39:48
1	宮越 昭	(1-7)	6:39:48
1	竹内 文洋	(2-4)	6:39:48
1	山田 直樹	(2-6)	6:39:48
5	白井 敬泰	(2-5)	6:45:33
6	谷 寿和	(2-7)	6:49:48
7	小堀 健介	(2-2)	6:51:36
8	中村 圭吾	(3-5)	6:52:39
9	北川 達也	(2-4)	6:54:03
10	岸田 和也	(2-6)	7:01:12
11	山口 和洋	(2-7)	7:06:55
12	野坂 信之	(2-8)	7:17:00
13	佐野 正樹	(2-4)	7:17:01
14	山田 行介	(2-5)	7:17:02
15	大西 俊秀	(3-3)	7:17:49
16	式地 雅人	(2-3)	7:18:22
17	奥田 紘平	(2-6)	7:25:24
18	日下 良一	(2-3)	7:28:09
19	井上 富男	(2-7)	7:29:33
20	浜田 恵吾	(3-8)	7:33:37
21	但野 祐二	(3-3)	7:36:21
22	五十嵐 走平	(2-7)	7:40:51
23	平田 欣矢	(2-6)	7:40:52
24	河田 英俊	(2-8)	7:42:48
25	細川 琢也	(2-7)	7:49:21
26	丹羽 勝彦	(2-3)	7:58:26
27	大武 徹洋	(2-7)	8:00:01
28	横井 健吾	(2-5)	8:00:02
29	名達 健介	(1-4)	8:04:17
30	西村 和雄	(2-7)	8:05:11
31	五十嵐 匡史	(1-6)	8:08:26
32	神宮寺 将一	(甲府第一)	8:09:31

33	金中 佳太	(2-2)	8:09:51
34	山崎 健太郎	(2-3)	8:10:51
35	中村 信雅	(2-8)	8:11:24
36	戸田 雄	(3-2)	8:12:06
37	河原 慶至	(3-5)	8:12:07
38	引地 隆之	(2-6)	8:12:32
39	田村 譲治	(1-4)	8:13:33
40	田尻 隆幸	(2-5)	8:13:53

女子 40歳 距離42.2km 午前5時出発

1	宮越 昭子	(3-7)	3:18:18
2	遠國 たか子	(2-8)	3:32:41
3	望月 啓子	(甲府第一)	3:39:11
3	中込 祥子	(甲府第一)	3:39:11
3	加藤 亜湖	(2-5)	3:39:11
6	植西 香織	(2-8)	3:44:16
7	南以 久子	(2-1)	3:46:25
8	木内 理麻	(2-3)	4:01:53
9	柴田 なつみ	(1-2)	4:02:44
10	本間 さおり	(2-8)	4:05:03
11	長尾 愛美	(2-5)	4:06:19
12	福井 雅子	(2-5)	4:07:19
13	大矢 若奈	(1-1)	4:08:24
14	大嶺 ひとみ	(2-7)	4:08:47
15	福田 睦美	(3-2)	4:10:37
16	中嶋 由佳	(1-5)	4:11:36
16	細川 慶子	(2-7)	4:11:36
18	矢崎 笑美	(2-3)	4:13:10
19	福田 あかね	(1-5)	4:14:05
20	置田 美樹	(3-7)	4:17:23
21	桑原 陽子	(2-4)	4:21:20
22	谷川 可奈	(2-6)	4:21:21
23	藤田 裕美子	(2-5)	4:21:58
24	清水 景子	(2-7)	4:23:50
25	田中 類子	(2-3)	4:24:35
26	高橋 郁絵	(1-2)	4:25:18
27	秋田 悠起子	(3-2)	4:26:02
28	坂下 由枝	(1-4)	4:26:41
29	畠山 由記	(3-6)	4:26:56

野辺山検印所

- 30 佐藤 亜葵子 (3-4) 4:27:23
- 31 梶谷 美保 (3-8) 4:27:53
- 32 藤川 理恵子 (3-2) 4:28:51
- 33 渡辺 有美 (2-5) 4:29:21
- 34 江上 華代 (2-3) 4:30:15
- 35 植西 佳奈 (1-5) 4:30:31
- 36 菊地 香江 (2-7) 4:31:10
- 37 能戸 真由美 (3-4) 4:31:16
- 38 竹倉 美樹 (3-1) 4:31:55
- 39 佐々木 宏美 (3-1) 4:32:35
- 40 今堀 愛 (3-2) 4:33:09



北海道北見北斗高校

校長 市川 元則 殿

山梨県立甲府第一高校

校長 関口 稔夫

初冬の候

甲府盆地では木枯らしが吹き荒れ、周囲の山並みも本格的な冬支度をとる頃となりました。御地は、いかがでしょうか。天気を報ずるテレビ番組で北海道を見るにつけ北見のことが話題となります。それにしても10月5日・6日の<キタミ・ブルー>の何と美しかったことでしょう。

さて、過般の御校の強行遠足では何から何まで厚い心のこもったおもてなしを受け、参加生徒・引率職員ともども心より感謝しております。

空港でのお出迎えから始まり、体育館での全校生徒・職員を挙げての歓迎、校長先生はじめ関係職員、斉藤静之元校長先生、同窓会、PTA、の皆様にご同席いただき、生徒までお招きいただいたの歓迎夕食会、コースの下見、大会当日の心のこもった細やかなご配慮の数々、お疲れにもかかわりませず、多忙な日程をぬっての網走、サロマ湖、阿寒など雄大な自然景観や開拓史の貴重な資料のある名所にもご案内いただくなど思い出すたびに感謝の念が増してまいります。

また過日は参加生徒に立派な楯をご恵贈いただき職員はハッカの銘菓を賞味させていただきました。重ね重ねありがとうございました。

十分訓練を積み、適切な指導を受けて大会に臨む生徒、厳しい長距離を走破し、己れの目標を達成せんとする強力な意志と忍耐力をもった生徒、甲府からの生徒を暖かい友情で包んでくれる生徒など、文武両道を地で行く心身ともに健全な北見高校生の活力ある姿のなかに本校の生徒に学ばせたい多くのものを拝見させていただきました。

また、生徒への深い理解と愛情、周到に準備された大会の企画や当日の運営、生徒指導など教職員の皆様の大会前日・当日の勤務振り、各関門での保護者・地域の人々の協力体制の様子など、私たち自身が学びたい多くの事項も体験させていただきました。

御地御校を訪問し、直接大会に参加させていただいて、斉藤元校長先生の拓いてくださった強行遠足の交流の大きな意義をあらためて実感し得た思いです。御校との交流から私たちのほうが学ばせていただくことがはるかに多く、交流から受ける恩恵は私たちの方がいっそう大きいというのが正直な感想です。私たちこそこの交流をきちんと受け止め、発展させる努力を続ける必要があると強く感じた次第です。

甲府に戻った4日後、体育館で参加した生徒、職員の全校生徒への交流報告会を持ちました。交流による感動、感激を全生徒のものにしたい、本校の無形の宝にしたいとの願いからです。この会では、いつもあまり行儀の良いくない生徒たちもたいへん熱心に耳を傾け、ここでも交流の教育上の効果が大きいことを確かめることができました。

今年は、米国アイオワ州フーバー高校との交流・中国四川省第七中学校との交流を含め、いくつかの内外交流がございましたが、御校との交流は私どもにとり特に豊かな稔りでありました。本当にお世話になりありがとうございました。厚く厚く御礼申し上げます。

お礼のご挨拶をすぐにといいながら2学期の校務多忙にかこつけ、この時期に遷延してしまいました非礼を深くお詫びいたします。

本年も余すところ僅かとなり、皆様2学期末の多忙な日々を送っておられることと存じます。寒気はますます厳しいようですが、ご自愛されご精励あらんことをお祈り申し上げます。

新年が御校の一層の発展の年でありますよう心よりお祈り申し上げます。

資料 1 公文書

平成3年8月20日

甲府第一高等学校 校長 廣瀬 重雄 様

北海道北見北斗高等学校

校長 斎藤 静之

強行遠足の実施状況相互視察について（お願い）

残暑が厳しい毎日と推察いたします。貴職におかれましてはいかがおすごでしょうか。

さて、明年創立70周年を迎えます本校の記念行事の一つに、強行遠足実施校としての貴校との交流を計画しております。

大変一方的な依頼で恐縮ですが、本校卒業生、在校生の期待も大きく、その実現が切望されておりますので、是非ご理解とご協力を賜わりたく心よりお願い申し上げます。

つきましては、この一大行事が成功するために両校の実施状況等につきまして事前に相互に視察することが必要と思いますので、貴校職員の派遣方と本校職員の派遣につきまして、特段のご高配をいただきますようお願いいたします。

記

- ・派遣依頼人数 2名
- ・費用 本校負担（航空機利用）
- ・日程 10月6日（日曜日）が実施日ですが雨天の場合一日順延
- ・旅程等 派遣いただく先生と後日連絡させていただきます（一ヶ月前ぐらいにお願いできれば好都合です）

他 略

平成3年9月6日

北海道北見北斗高等学校

校長 斎藤 静之 殿

山梨県立甲府第一高等学校

校長 廣瀬 重雄

強行遠足の実施状況相互視察について（回答）

二学期を迎えご多忙の毎日と拝察いたします。来年度の強行遠足相互交流のお誘い感謝申し上げます。

さて、8月20日付でご依頼のありました本年度の相互視察の派遣教諭が下記のとおり決定いたしましたので、よろしくお願いいたします。

記

- 1 派遣教諭 2名
- 2 出発予定

(1) 10/2-3実施の場合	10/4（金）貴校派遣職員に同行
(2) 10/3-4実施の場合	10/5（土）本校職員のみで甲府出発

強行遠足新聞

新聞題字は
関口校長先生

ゴールめざして北見北斗高校生が挑戦!

交流のきっかけ

今年で六十九回を数える強行遠足。今回は、北海道北見北斗高校から四名の生徒を迎えて行われる。この北見北斗高校との交流は三年に一度行われ、今年で二回目となったが、この交流が始まるきっかけとなった話を簡単に紹介する。

元北見北斗高校長の斎藤静之先生が、若い頃、本校の卒業生である友人と互いの母校の話をしたときに、一高の強行遠足のことを知った。斎藤先生自身、北見北斗高校在学中、七十三キロメートルの道のりを走った強行遠足を体験されていた。そんな斎藤先生が、「もし母校の校長に就任したならば、甲府一高との強行遠足による交流を実現しよう」と強く心に誓われたのである。その後、三十七年の歳月が過ぎ、はからずも北見北斗高校の校長に就任し、翌年は創立七十周年であることを知った。斎藤先生は、その年の記念行事の一つに、甲府一高との強行遠足による交流を考え、甲府一高の校長（広瀬重雄）に交流を提案された。広瀬校長は、国際化が叫ばれている現代、交流というすぐ「国際間」を考えがちであるが、同じ国内しかも同じ強行遠足という行事を通じての交流も、それに勝るとも劣らない、と同意。両校の教師により相互に相手校強行遠足を視察するなど、慎重な検討の後に、平成四年十月、ついに第一回の交流が実現するはじりとなった。

強行遠足参加にあたって

今回の強行遠足には北見北斗高校の生徒が参加する。三年前北見北斗高校が参加したときには、初めての道のりにもかかわらず大健闘を見せたが、今年はどういう走りを見せてくれるのだろうか。今年参加する新川和規君、田中かずみさん、伊藤勇也君、辻友恵さんの四名に甲府一高の強行遠足にむけての決意を述べてもらった。



三年 新川 和規
甲府一高のことは、志願したものの採用されないのではないかと半分以上諦めていました。また、不安もありました。部活動の練習が交流参加中ではできないというのが一つ目の理由であり、昨年一昨年の北見北斗の強行遠足で三十キロ付近で足がつかないというのが二つ目の理由です。甲府の場合その距離から残りが七十キロ以上もあり、完走できるかどうかという不安が大きくなってきていました。しかし、今の文章を書きながら、頑張ろうという決意をしています。

三年 田中 かずみ
私は三年に一度しかないこの甲府第一高校の強行遠足にぜひ参加したい。そう思う理由を一言で言うと、自分の限界に挑戦したいと思ったからだ。今までには二回北見北斗高校の強行遠足で走ってきた。毎回途中で何度も何度も歩きたい、休みたいと思つた。その時に自分で自分に「がんばれ、負けるな」と励ました。そうやって負けそうなのは体力よりも精神力、自分自身に勝つことだということも学んだ。

甲府のことは正直言って本当に何もわかっていないし、知っている人もいない。北斗の強行遠足よりも条件は厳しいことは間違いないだろう。自分はずっと部活も引退し体力も衰え、最後まで走り切れるかは今でも不安であるが、そういう状況で私は自分の力を試してみたい。こういうチャンスは自分の一生にきつともう二度とないと思う。だからもし参加すること



とができたならばそれは二つのことに挑戦したい。一つはたくさんの人々と交流を深めること。初めて訪れる場所、初めて会う人との貴重な出会いを大切にしたい。もう一つは、自分の弱みに負けないこと。甲府のコースは時を越えていくので、北斗の平坦なコースとは全く違う、私が想像しているよりもきつとほろかに苦しいものだと思う。きつと何度も立ち止まりそうになるだろうが、北斗の強行で学んだ精神力で自分に負けずに走り切りたい。

二度の自校の強行遠足から得たものは私にとって決してマイナスではなかった。だから甲府の強行遠足においても、きつと自分自身にすばらしいものを得ることができると信じている。

去年はじめて強行遠足を走って来て、予想以上の七位という成績を残すことができて大きな自信がついた事。残りわずか三キロ程になった時の、あのフツと体が軽くなる不思議な感じが忘れられない事。もうだめだと思

い。最後に、一番の動機は、やはり、他の学校との交流と、自分の知らない地域へ行き、色々な経験をしたいと思ったからです。三年に一度という、このようなめったにない機会を逃すことは、とても残念に思いました。ならば、思い切ってこの強行遠足に参加して、むこうで様々な事を知り、そして、多くの甲府第一高校の生徒さんたちと仲良くなりたいたいと思ったのです。また、強行遠足という伝統を通じて北斗との交流を深めていきたいと思いました。

二年 伊藤 勇也
僕が参加を希望した動機というのは、まず僕自身が「走る」ということが好きだからです。確かに、「走る」とことは、辛いとか、苦しいとか悪いイメージがあります。しかし、僕にとって「走る」とことは、今や、掛け替えのないものとなっているのです。僕は中学の時に陸上部に入部して以来、約五年間、陸上を続けてきました。入部当初は、やはり、辛かったり、苦しかったりしました。しかし、辛く走り続ける中で、僕は、様々なものを得るようになりました。それは、今の自分を形成する一つのきっかけです。だから、今回の甲府の強行遠足に出場することは、僕にとって、とても重要なことなのです。もう一つの動機は、自分自身への挑戦です。一〇三・六キロメートルという長い道のりを、ただひたすら進むということは、辛いことかビデオを見てわかりました。けれども、あえて、それに挑戦し、自分がどこまでやれるのか、確かめてみたくなったのです。そして、もう一度、自分の弱さを発見し、それを克服するいい機会ではないかと思ったのです。



てからの自分の精神力がどれ程のものか知る楽しさ。これらのように実際に走ることの中からの動機もあるけれど、何と云っても一番決め手になったのは今しかできない貴重な体験をしたい、これです。私は昔から、料理は教師になりたいと思いついて、色々な経験を積もうと努力してきました。そして今回、甲府第一の強行遠足の話を聞いて是非行ってみようと思ったのです。だから走ることはもちろんのこと、自分の経験の一つとしてプラスしたいだけ、甲府第一高校の生徒のみならず、この交流も同じくらい楽しみにしています。行ってみたら、自分が見てみたい土地で、自分は何より頼れる人がいない土地で、自分はどう行動できるのか、どういう走りができるのかを試してみたいのです。自分の人間性がどれ程のものか知る良いチャンスだと思うので、もし行けるのなら必ず先走して帰ってきます。以上が私の甲府第一強行遠足に向ける思いです。

保健室より強行遠足直前の諸注意

強行遠足直前となりました。自分の健康管理や健康状態についてもう一度見直して下さい。

- (1) 現在、ケガをしたり病気になる人が心配な人は、自己判断で受診し、医師の指示に従って行動して下さい。保健室から事前の受診が必要人には受診するように通知をしましたが、受診した結果が戻ってこない人がいます。必ず、9月30日まで、に保健室に結果を提出すること。
- (2) 急に冷え込んだためカゼをひいたり、胃腸を悪くする人が目立ってきました。30日、1日の土日には、体調が少しでも悪だと思えば、しっかり休養をとって下さい。
- (3) 又、出発当日、37度以上の熱があったり、下痢などで体調をくずしている場合は、絶対に無理をせず、参加の是非については、医師の指示を受けて下さい。
- (4) 強行遠足の参加するに当たって、自分自身で用意し携行すべきものは、タオル、キャップ、食料、常備薬、肌着の着替え等々を準備しきちんと携行すること。
- (5) 長時間、歩き通す為には、必ず栄養の補給が必要です。空腹で低血糖状態になると疲労も加わって大変具合が悪くなります。必ず一食か二食は用意し、途中で食べることを。校医の先生からお話がありました。これといった病気がないのに疲れやすい、めまい、たちくらみがあるという人は、低血圧である可能性があります。こういう人は、強行遠足中、特に保護、補給の補給をしっかりして下さい。そして、歩行のペースとしては、最初一時間位は、ゆっくりとしたペースで歩行し、身体が慣れてきたところで徐々にペースを上げるようにして下さい。
- (6) 歩行中の飲み過ぎ、食べ過ぎは、胃腸に大変負担をかけます。特に注意して下さい。
- (7) 前夜の睡眠は十分にとり、出発前の食事は必ず食べること。
- (8) 出発前の排便も必ず済ませること。

※無事故で終了してこそ強行遠足は、花丸印の素晴らしい行事となります。その為にも皆さん一人一人の健康管理と安全を考えた行動に期待します。

甲府一高
北見北斗高

強行進足で友情結ぶ

伝統行事に相互参加

として、ともに甲府府下の歴史を待つ。甲府一帯に戦雲籠り侵襲と北河原北村の北見北村、奥通野の侵襲が双方の陣地間に生じ、戦況は互角が裏返し、四日に北河原一の生地四ノ谷北見村を占領。十三日には北見北村の生地四ノ谷が、甲府一帯生じ二種に小細末の一〇三六八歩兵に進む。

交戦は、今年で学校創立十周年を迎えた北見北村側が勝ち、昨秋は教師に入すのが通例として、戦の進行は遠慮を免ず、今年生地四ノ谷を占領する。四日に甲府一から山公本館に君を年生入二生入、北見北村の第六十區捕獲、足に歩出した。北見北村の遠見は幸七二、幸四一、一九九と甲府一と距離が一

愛く、義者も一見はたが
 それけにハイベア、しか
 し四人とも窮乏死した。広
 瀬、長谷部、三木、中村、人
 会、中村、信雄、さく、と語り
 言葉を送った。
 平野一の第六十六回、博
 多の神道は、夢に生じた。

足は十三、十四の両目得われ
全校生徒千七十五人ととも
に、北界北斗から阿含正真君
ら三年生一人、二年生一人が
参加する。

平成4年10月(1992)



北見北斗の4人も出発

甲府一高
進行違反

伊府一萬（二萬圓建設費）の第六十六回國庫債券が十三日始まった。今年は北朝鮮北流が實現し、開南生徒四人も交ってスタートした。

校庭で出発式が行われ、広瀬が演説し、「目的を自覚し、完

交ってスタートした。

走る自慢ではほしいと、嚴助、北賢、北井、藤井、四人の紹介のあと、小林武史生体協會が「預いっぱい頑張ります」と力強く宣誓した。

午後二時半、本校の倉庫と
ともに男子生徒五百二十三人
が二〇三・六先の豊野原小
開市を目指してスタート。女
子生徒五百二十六人は十四日
午前六時半、北宮原郡須玉町
の須玉小から小海まで約四十
六キロを走り抜く。



女子生徒の声援を受け、小幡市を
目指し出発した男子生徒
＝甲府＝高正門前

強行遠足新聞 第4号

[illegible]

第70回強行遠足を終えて

三、新編 辻村道子著

今年も小園に2人の生徒が同時に
元頭で到着した。今年も、と表現し
たのは、過去には一度も数回取組まな
がったことにゴルは驚いた。これは
である。北見北高の強行進足に
おいても男子も人が何かにトッパで
手をつなぎ合っていた。女子もそ
の時、「職員がつくまで離れなさいと
だめだ」といって二人を叫ぶ。あ
れで良いのだ。私は、数年前のオリンピ
ック50km無差別のゴールを思い出した。
金メダルの選手を誰もめがめず
オリンピックの真白の相手で戦つてゐる
2人の選手が必死の形相で駆けつけ
入ってきた。しかし、その後デッド
ヒートが続り広げるのではなく、ど
ちらからともなく手をつないでゴー
ールしたのである。

小堀一峰く、という共通した
目的をもち、心身共に健康な中
で同じ気持ちと力を共に発揮し下といくと
共闘する所が主な点。勝つ負けなく
も敗北はほどほど重要とは思ふべきであらうか、相手や競争
ののではないだろうか、体力、勇氣がま
きって船に出る能力、いや、そうでは
ないのだらうか、いや、そうではない

ものである。心の共鳴は、喜びが主で、起さずせよと手をつないでいるのゴールとなる。「相手と摩擦とそう」ではなく、「共に進むう」というすばらしく、私の状態ではなからうか。これは、私の理想である。

昭和33年(第34回強行規定)の配給に、「いつ強行規定が廃止になるかわからないので、予算10万円で作った」16mm映写機を使い、記録映画を作った」という記事がある。今から33年たった1968年も既に配給の不安をいっていた。にもかかわらず今年770回を越した。この歴史をよそで歩くという英の体裁から生まれる映画ではないだろうか。

北の大地を走る！

10月6日(日)、北海道北見市で第4回道庁選足が実施されました。北見市立甲府第一高は選理選足を通じて、この学校と交流を続けています。昨年は、北見市立中やから代表生徒が、本校の選理選足に参加しましたが、今年は本校から2、3年生の代表4名が司理の先生方と指導員へ参加しました。



代表の4人。
左から
黒川清子(25歳)、中山雅子(25歳)
黒川清子(25歳)、中山雅子(25歳)
黒川清子(25歳)、中山雅子(25歳)



氣樂なるを

2 年 2 組 大橋孝清

10月6日私たちは第64回北見
北手製作展覧会に参加しました。やはり
北斗の年輪は素晴らしいもので走っ
ていきました。私も自分のペースを平
で走り、中間点では89位で
したが、最後の2位まで上りつたので
すが、疲労不足のためお喜ばしく
なり、金金のリタイアをしました。
私はとても悔しかったです。お見かけ
しました。お見かけしました。

72キロ口、要は、
たつた。27キロ口、要は、
に走り切れる距離だとしていた。
思は昔からスパスパが得意で、長
距離を走ることも得意としていたの
で、足を痛めて固くても走れず、多
分、休んでしまっていた。

以上の通り、本会では、
 1. 財政の健全化、
 2. 教育の充実、
 3. 社会福祉の向上、
 4. 環境の美化、
 5. 交通安全の確保、
 6. 防災対策の強化、
 7. 文化振興の推進、
 8. 国際交流の促進、
 9. 青少年の健全育成、
 10. 高齢者の福祉向上、
 11. 障害者の社会参加、
 12. 地域住民の参画促進、
 13. 透明性の向上、
 14. 情報公開の推進、
 15. 市民意識の醸成、
 16. 自治体間の連携強化、
 17. 国・県との関係強化、
 18. 民間企業との連携強化、
 19. 市民ボランティアの活用、
 20. 地域資源の活用、
 21. 地域産業の振興、
 22. 地域観光の振興、
 23. 地域文化の振興、
 24. 地域スポーツの振興、
 25. 地域健康づくりの推進、
 26. 地域防災力の向上、
 27. 地域安全の確保、
 28. 地域環境の改善、
 29. 地域生活の向上、
 30. 地域住民の幸福の実現、
 31. 地域社会の持続可能な発展の実現、
 32. 地域住民の生活の質の向上、
 33. 地域社会の活力の向上、
 34. 地域住民の生活の安定、
 35. 地域社会の安定、
 36. 地域住民の生活の向上、
 37. 地域社会の向上、
 38. 地域住民の生活の向上、
 39. 地域社会の向上、
 40. 地域住民の生活の向上、
 41. 地域社会の向上、
 42. 地域住民の生活の向上、
 43. 地域社会の向上、
 44. 地域住民の生活の向上、
 45. 地域社会の向上、
 46. 地域住民の生活の向上、
 47. 地域社会の向上、
 48. 地域住民の生活の向上、
 49. 地域社会の向上、
 50. 地域住民の生活の向上、
 51. 地域社会の向上、
 52. 地域住民の生活の向上、
 53. 地域社会の向上、
 54. 地域住民の生活の向上、
 55. 地域社会の向上、
 56. 地域住民の生活の向上、
 57. 地域社会の向上、
 58. 地域住民の生活の向上、
 59. 地域社会の向上、
 60. 地域住民の生活の向上、
 61. 地域社会の向上、
 62. 地域住民の生活の向上、
 63. 地域社会の向上、
 64. 地域住民の生活の向上、
 65. 地域社会の向上、
 66. 地域住民の生活の向上、
 67. 地域社会の向上、
 68. 地域住民の生活の向上、
 69. 地域社会の向上、
 70. 地域住民の生活の向上、
 71. 地域社会の向上、
 72. 地域住民の生活の向上、
 73. 地域社会の向上、
 74. 地域住民の生活の向上、
 75. 地域社会の向上、
 76. 地域住民の生活の向上、
 77. 地域社会の向上、
 78. 地域住民の生活の向上、
 79. 地域社会の向上、
 80. 地域住民の生活の向上、
 81. 地域社会の向上、
 82. 地域住民の生活の向上、
 83. 地域社会の向上、
 84. 地域住民の生活の向上、
 85. 地域社会の向上、
 86. 地域住民の生活の向上、
 87. 地域社会の向上、
 88. 地域住民の生活の向上、
 89. 地域社会の向上、
 90. 地域住民の生活の向上、
 91. 地域社会の向上、
 92. 地域住民の生活の向上、
 93. 地域社会の向上、
 94. 地域住民の生活の向上、
 95. 地域社会の向上、
 96. 地域住民の生活の向上、
 97. 地域社会の向上、
 98. 地域住民の生活の向上、
 99. 地域社会の向上、
 100. 地域住民の生活の向上、
 101. 地域社会の向上、
 102. 地域住民の生活の向上、
 103. 地域社会の向上、
 104. 地域住民の生活の向上、
 105. 地域社会の向上、
 106. 地域住民の生活の向上、
 107. 地域社会の向上、
 108. 地域住民の生活の向上、
 109. 地域社会の向上、
 110. 地域住民の生活の向上、
 111. 地域社会の向上、
 112. 地域住民の生活の向上、
 113. 地域社会の向上、
 114. 地域住民の生活の向上、
 115. 地域社会の向上、
 116. 地域住民の生活の向上、
 117. 地域社会の向上、
 118. 地域住民の生活の向上、
 119. 地域社会の向上、
 120. 地域住民の生活の向上、
 121. 地域社会の向上、
 122. 地域住民の生活の向上、
 123. 地域社会の向上、
 124. 地域住民の生活の向上、
 125. 地域社会の向上、
 126. 地域住民の生活の向上、
 127. 地域社会の向上、
 128. 地域住民の生活の向上、
 129. 地域社会の向上、
 130. 地域住民の生活の向上、
 131. 地域社会の向上、
 132. 地域住民の生活の向上、
 133. 地域社会の向上、
 134. 地域住民の生活の向上、
 135. 地域社会の向上、
 136. 地域住民の生活の向上、
 137. 地域社会の向上、
 138. 地域住民の生活の向上、
 139. 地域社会の向上、
 140. 地域住民の生活の向上、
 141. 地域社会の向上、
 142. 地域住民の生活の向上、
 143. 地域社会の向上、
 144. 地域住民の生活の向上、
 145. 地域社会の向上、
 146. 地域住民の生活の向上、
 147. 地域社会の向上、
 148. 地域住民の生活の向上、
 149. 地域社会の向上、
 150. 地域住民の生活の向上、
 151. 地域社会の向上、
 152. 地域住民の生活の向上、
 153. 地域社会の向上、
 154. 地域住民の生活の向上、
 155. 地域社会の向上、
 156. 地域住民の生活の向上、
 157. 地域社会の向上、
 158. 地域住民の生活の向上、
 159. 地域社会の向上、
 160. 地域住民の生活の向上、
 161. 地域社会の向上、
 162. 地域住民の生活の向上、
 163. 地域社会の向上、
 164. 地域住民の生活の向上、
 165. 地域社会の向上、
 166. 地域住民の生活の向上、
 167. 地域社会の向上、
 168. 地域住民の生活の向上、
 169. 地域社会の向上、
 170. 地域住民の生活の向上、
 171. 地域社会の向上、
 172. 地域住民の生活の向上、
 173. 地域社会の向上、
 174. 地域住民の生活の向上、
 175. 地域社会の向上、
 176. 地域住民の生活の向上、
 177. 地域社会の向上、
 178. 地域住民の生活の向上、
 179. 地域社会の向上、
 180. 地域住民の生活の向上、
 181. 地域社会の向上、
 182. 地域住民の生活の向上、
 183. 地域社会の向上、
 184. 地域住民の生活の向上、
 185. 地域社会の向上、
 186. 地域住民の生活の向上、
 187. 地域社会の向上、
 188. 地域住民の生活の向上、
 189. 地域社会の向上、
 190. 地域住民の生活の向上、
 191. 地域社会の向上、
 192. 地域住民の生活の向上、
 193. 地域社会の向上、
 194. 地域住民の生活の向上、
 195. 地域社会の向上、
 196. 地域住民の生活の向上、
 197. 地域社会の向上、
 198. 地域住民の生活の向上、
 199. 地域社会の向上、
 200. 地域住民の生活の向上、
 201. 地域社会の向上、
 202. 地域住民の生活の向上、
 203. 地域社会の向上、
 204. 地域住民の生活の向上、
 205. 地域社会の向上、
 206. 地域住民の生活の向上、
 207. 地域社会の向上、
 208. 地域住民の生活の向上、
 209. 地域社会の向上、
 210. 地域住民の生活の向上、
 211. 地域社会の向上、
 212. 地域住民の生活の向上、
 213. 地域社会の向上、
 214. 地域住民の生活の向上、
 215. 地域社会の向上、
 216. 地域住民の生活の向上、
 217. 地域社会の向上、
 218. 地域住民の生活の向上、
 219. 地域社会の向上、
 220. 地域住民の生活の向上、
 221. 地域社会の向上、
 222. 地域住民の生活の向上、
 223. 地域社会の向上、
 224. 地域住民の生活の向上、
 225. 地域社会の向上、
 226. 地域住民の生活の向上、
 227. 地域社会の向上、
 228. 地域住民の生活の向上、
 229. 地域社会の向上、
 230. 地域住民の生活の向上、
 231. 地域社会の向上、
 232. 地域住民の生活の向上、
 233. 地域社会の向上、
 234. 地域住民の生活の向上、
 235. 地域社会の向上、
 236. 地域住民の生活の向上、
 237. 地域社会の向上、
 238. 地域住民の生活の向上、
 239. 地域社会の向上、
 240. 地域住民の生活の向上、
 241. 地域社会の向上、
 242. 地域住民の生活の向上、
 243. 地域社会の向上、
 244. 地域住民の生活の向上、
 245. 地域社会の向上、
 246. 地域住民の生活の向上、
 247. 地域社会の向上、

2005年5月

今回、北海道という地にとっても珍しかった。初めての旅行で、初めての北海道でさらに緊張が走りまわった。北千恵校の生徒さんは、いい人ばかりで私は知らない人は多いと驚いた。中からは足立は美しすぎて感動しました。雪の海が広がってしまいましたが、当日、体調を崩してしまい予定通り一日も休んでしまったが、自分でも驚くほどの結構な量が出てきてました。思ったよりも寒くないのでよかったのは、予想していたより、一層に暖かかったです。

山崎 明

肥や威嚇せんと、お守りまぐれた其美蓮
 と。自分の大好きな人たちが外取理し
 てくれたからです。
 情にきてて美蓮に会ったら、ほつ
 としました。真事に帰って来れて良
 かったです。
 この4日恒。北地酒も顔元させて
 もらうたら、北見北地酒の人たち
 と又夜でまじりして、とてもよい盛
 舞をしてみました。本当に夢中で我が
 家からです。
 既年も。一箇の強行親で兩張ろ
 と思います。

高校生活の思い出

小波分析

[illegible][illegible]

北見北斗高校強行違反

姓名	性别	年龄	职业	住址	电话	备注
王德胜	男	45	工人	本市和平路100号	12345678	
李小红	女	32	教师	本市文化路50号	87654321	
张志强	男	28	学生	本市青年路20号	98765432	
刘小芳	女	25	护士	本市健康路30号	56789012	
陈大明	男	50	干部	本市光明路40号	34567890	
赵小丽	女	38	医生	本市健康路50号	23456789	
孙志强	男	42	工程师	本市科技路60号	12345678	
周小梅	女	35	会计	本市财务路70号	01234567	
吴大伟	男	48	经理	本市商业路80号	90123456	
郑小娟	女	30	文员	本市行政路90号	89012345	



3人で手をつなぎあって
ゴールへ!



北見北斗のグラウンドで
出発の合図を持つ。(AM4:00)

無V型内装

— 往西開走 四、五公里

[illegible][illegible]

広い。どこまでも続く
道をひたすら走る

1996年(平成8年)10月7日(月曜日)

北 海 道 新 聞

快汗体感スポーツの秋



朝日を浴びて 目指せゴール

北見北斗高の強行遠足

北見北斗高(市川町)の強行遠足が、10月6日(日)に行われ、男子は、山形第一高校、女子は、山形第一高校と競り、男子は、山形第一高校に敗れ、女子は、山形第一高校に勝利した。この遠足は、北見北斗高の強行遠足として知られ、毎年行われている。今年も、男子は、山形第一高校に敗れ、女子は、山形第一高校に勝利した。この遠足は、北見北斗高の強行遠足として知られ、毎年行われている。

北見北斗高(市川町)の強行遠足が、10月6日(日)に行われ、男子は、山形第一高校、女子は、山形第一高校と競り、男子は、山形第一高校に敗れ、女子は、山形第一高校に勝利した。この遠足は、北見北斗高の強行遠足として知られ、毎年行われている。

北見北斗高(市川町)の強行遠足が、10月6日(日)に行われ、男子は、山形第一高校、女子は、山形第一高校と競り、男子は、山形第一高校に敗れ、女子は、山形第一高校に勝利した。この遠足は、北見北斗高の強行遠足として知られ、毎年行われている。



佐野智子 画

あの頃のこと

□ 協力者

記念誌発刊によせて（塩川忠巳）
白田救護検印所—依田寿俊次氏伝—（渡辺富弘）
白田救護所（依田トミ子）
柏木宇三郎氏紹介（小宮山梓）
野辺山本部のしじみ汁—丸山良雄氏紹介
野辺山本部の名コック長—岡部勝男氏紹介

□ 恩 師

強行遠足余談（嶋田武）
行としての強行遠足（石丸午郎）
遠い灯（伊藤忠一）
強行遠足を了って（江口俊博）
20年前のこと（岩波政雄）
世の人の情けの上に—救護検印所依頼交渉の思い出（猪股正彦）
総選の嵐の中で（天野 進）
再び教師として強行遠足体験（五味武彦）
絶賛！ 強行遠足（千野恒夫）

□ 同窓生

校友会雑誌から

全国体育日強遠足（城南生）／中央線沿線強行遠足／強行遠足（廣瀬久二良）／
同（大久保誠一）／同（中村重男）／強行遠足にトップして（三枝棒）／
強行遠足の思出（饗場孝朋）／同（田原利雄）

最初の強行遠足（堀内好訓）
笹子饅頭（保科太郎）
強行遠足（山田 茂）
強行遠足の思い出（岩下龍一）
私の甲府中学時代（中村 位）
私の中学時代（諏訪一雄）
強行遠足と私（今福利重）
心の中のコロニアル・イエロー（芦澤一洋）
手記（岩間孝吉）
来信（寺坂俊子）
甲府一高時代のこと（望月達史）
今にして思えば「愛」（小田和直子）
白田のおばさん ありがとう（中込誉世夫）

※本文はいずれも執筆当時のままとした。ただし、明らかに誤植と思われる表記は訂正し、新字、現代仮名遣いに改めた。現代の社会通念上ふさわしくない表現も見られるが、原文の味わいを尊重するためそのままとした。

□ 協力者

記念誌発刊によせて

小諸市長（当時）塩川忠日

山梨県立甲府第一高等学校恒例の強行遠足も、大正13年(1924)11月3日の第1回以来、昨年(昭和56年・1981)で56回を数え、すっかり当地方の年中行事として定着いたしました。

又、佐久地方往還になり早くも、20周年を迎えた
とのことであり、学校当局はもちろんのこと、生徒、
PTA関係者各位が丸となり、ご努力した結果で
あり、心から敬意を表する次第であります。地元市
民といたしましても毎年10月には、甲府一高の強行
遠足を迎えることが、楽しみの一つになっていると
ころであります。

私も毎年、早朝、ゴール地点の市民会館前で出迎え、ある年は、皆さんの学校へ伺い出発式に激励のあいさつを申しあげたこともあります。強行遠足、これは皆様の特権であり、又、若者のロマンではないかと思います。

正に自分の限界との戦いであります。自分の状況判断により、それなりの結果が出ることも、又事実であります。自己の限界を知ることができるこのすばらしさ、苦しい思い出、楽しい思い出が沢山あるであります。高校時代にこれほど貴重な体験は外にないと私は断言できると思います。強行遠足での友との語り合いや、大自然とのふれあい、友情、真実等、何かをこの体験から得るものがあります。これはその後の人生で必ずやプラスになると思います。

強行遠足の途中での美談が何回もあり、その善意の人の名前を調べてほしいとの連絡がありました。これほど私共に感銘を与えたものはありません。皆さんの一生懸命になって歩んでいる姿に接し、何も感じないほうが、むしろ不思議であり、皆さんと市民との出会いは何事にもたえることのできない、すばらしい感動であります。数人のグループでの行進中、遅れそうになる友をかばうあの態度、苦しさ

に天をあおいで歩む姿、あるいはもくもくと下を向いて歩む姿、何を考えて歩んでいるでありませんか。

ただ何といっても忘れることのできないこと、それはゴールでのシーンであります。あまりの苦痛に遅れがちになる友を助け、横一列に同時にゴールされる姿、あるいは共に肩を組みゴールされる姿、これは毎年このシーンに接していますが、とにかく何かいわれる時代ではありますが、この清らかさ、友情、疲れているが完走したというよろこびの目、非常に印象的です。

これからも永久にこの大会が続くことを願うものであり、第二のふるさは小諸市であると自然にいわれるよう、当市といたしましても、更に大会のバックアップの輪を広げてまいりたいと考えておりますので、どうか甲府一高の強行遠足がますます盛大に、より多くの成果を挙げられますよう祈念申し上げ、誠に簡単ですが記念誌発刊に対する所感といたします。

(昭和57・1982『佐久往還強行遠足20周年誌』)

※塩川忠巳氏は昭和51年（1976）から平成8年（1996）まで20年間小諸市長に在任。本校強行遠足にご協力いただいた。

白田救護検印所

— 依田寿優次氏伝 —

渡辺 富弘

白田に依田^よ寿^{こと}優^え次^じと言う人がいた。佐久郡の山村に生まれ育ったが、耕地が少ないために日雇いに出なければならなかった。

世は金融恐慌の波が押し寄せ、不景気はどん底へと歩みつつけていた。山村の若者たちは次々と外へ出向いて働くようになった。彼も山梨県に行って働こうと考え、裏の山を越えて北巨摩に行って養蚕の手伝いをして、日当50銭を積み立てながら、いずれ佐久平（白田）に出て仕事をしてみようかと心に誓っていた。

昭和4年(1929)、その年の養蚕は天候不順にた

たられて病気が発生し、各地の蚕は全滅に近い状況であった。

北巨摩に出稼ぎに行ったところ仕事にはぐれてしまい、一人さみしく山道を引き返すことになった。陽はだんだん西に傾き夜になり空腹はつのるばかりである。空腹は苦痛に変わり、その烈しさは増すばかりで、ついに道端の農家の戸をたたき、事情を話して食を乞うた。そこの主婦はやさしく塩ムスビを握って渡してくれた。

「地獄で仏」とはこのことである。家に帰り、そのことを語り、一夜は明けてしまった。人に対する親切の尊さをしみじみと知らされたのである。

それからは親切を銘として働き、若き日の夢の実現へと進んでいった。昭和10年(1935)は佐久平に移り住み、今までに蓄えた全財産を投入して動力^{動力}粉摺機と耕地3反を購入した。彼はこの地で働きに働いて生計を高め、労働の尊さを深く理解した。

その後、5人の子どもの将来を考えて、彼は酒屋を経営し、牛乳も併せ販売することにした。牛乳の配達は全て子どもにまかせ、それによって労働の尊さを育ませ独立精神を培わせた。

このようにして彼の一家は、全員で奉仕と勤労を中心として生活を高め家庭の円満を築いていった。

昭和38年(1963)、臼田の角で酒屋を営んでいたところへ、甲府一高の先生が強行遠足の救護・検印所の設定のために偶然訪れたのであった。

昭和43年(1968)、依田寿俊次さんは他界された。その死が近づく時、家族を枕元に集め、甲府一高の強行遠足に対する奉仕は、自分が死んでも続けることを言い残して息を引きとった。

依田寿俊次さんが亡くなって以来、今日まで一高の生徒を代表して、その時の応援団長が線香を仏壇にたむけ、感謝の気持ちをあらわしている。甲府一高生は依田寿俊次さんのお気持ちをいつまでも忘れてはならない。

臼田救護所

依田 トミ子

昭和38年(1963)に強行遠足が始まって、佐久方面にきた時は中込まででした。思えば20年目の年になりますが、今になってみれば、ちょっと前のことのように思い出されます。強行遠足とは、中込までの92kmという長い道のりで、一高からは主に登りの野辺山まで、そして、それ以降は少し下りにむかう中込までの道だったと思います。高校生では、大変な遠い道でしょう。38年頃は、まだまだ土や石の多い道でした。臼田まで何人来られるかと心燃やして待っていた年、そして初めての救護所とは何をしてあげたらいいのか、お茶だけでいいのかと不安な年でした。

前日からお願いしておいた、おばさん達4、5人と共に、午前4時より待っていました。6時頃、やっと見えた1人。また、2人、5人と元気よく歩いて来ます。生徒さん1人来るごとに、おばさん達は、なぜか目が真っ赤になり、後ろを向いてハンカチで目を押さえ、生徒にお茶をあげていた時もありました。私のお友達は、同じ年頃の子供を持つ人たちだったため、感激がたかまり、生徒達を迎えるごとに拍手の手の中に涙がおちたことも多かったのです。おばさんたちは、下向きになって生徒の足をさすりながら、励ましの言葉をかけ、そばで見守っていた亡き夫も、「頑張れ、頑張れ、行くのだ、鮎玉でも口に入れて、男の子なら行くのだ。」と元気づけるのでした。そして、「牛乳もいいよ。」とさし出したりもしました。数十人が通り過ぎて、11時頃だったと思います。1人の生徒に夫が、「お前、お腹がすいているのか。」とたずねたところ、「おじさん、そうなんです。」と返事がありました。「おーい、おにぎりを作れ!」とのことで、友達皆で、朝ごはんの残りをにぎりはじめました。生徒さんが「おいしい」と食べてくれ、それから毎年、あたたかいおにぎりをあげるようになったと思います。

力むすびを食べ、牛乳でも飲んで、目的地まで行け、行けよ、と励ました夫でした。その時、1人の

子供に「ほくは、もう歩くことが出来ない。」と言われた時は、本当にかわいそうな生徒さんと思いました。後から来た数十人の子供さんも皆そうでした。おばさん達も共にないた時でした。ある子供さんはお茶を飲みながら、甲府にはぶどうがあるければ、りんごはないよと、指さして言いました。夫曰く、「来年こいや。きっとリンゴを沢山用意して置くからなあ。今日はおしんこで間に合わせてくれよ。」と肩をたたいて、頑張れよ、と元気付けた事でした。その後、生徒さんからのお礼の手紙が来て、大変喜んでいました。39年(1964)は、早々にリンゴを沢山用意して待っていました。一高の生徒は頑張り屋だと感動した夫でした。39年頃は、まだ車が少ない頃で数人の子供さんが朝の10時頃にはもはや足のいたみで歩けないのでした。見ておれないお母さん達は、肩を組んで駅まで送って行ったこともありました。

41年(1966)頃、小諸まで行くようになった時は大変だと思いましたが、子供さん達は一層元気を出して目的地に向かって行くのでした。本当に小諸までとは永遠の道であるのに、若者の元気と勇気のあるのには驚きました。1年ごとに生徒さんの熱心が増し、多くの方が小諸まで行くようになったことは、私達おばさんの方も喜んでおります。けれど、朝霧の多いため、足にまめを作る生徒さんが何人か出たこともありました。オリンピックの年の前後だったと思いますが、私がおにぎりを作り始めた時でした。1人の先生が来て、「一番が今来ますよ。」と言われた時は、まだ12時頃でした。皆が大急ぎになり、たき火をし、お茶、おにぎり、牛乳、リンゴ、鮎玉などを用意していたら、1時前でした。元気良く一番が走って来ました。一同手をたたいて迎え、生徒さんは5分ぐらい休んで元気よく行こうとしましたが、私は「ちょっと待って。」と言って、鮎玉を口に入れてあげました。その時の顔が今でも思い出されます。

43年(1968)の時は、前夜より曇り、当日の朝から雨で、先生方は、一日延期の電話連絡を受けて一日待つことになりました。その夜も、夫は先生方と

一ぱい交わしながら、色々と話に花が咲いて夜遅くまで楽しく過ごしました。その時のことは、今でもはっきりと覚えています。夫が「自分がいなくなっても家には子供もいるし、お母さんもいるので、強行遠足のことは一高がやめるまで白田では続けさせていきます。」と言ったこと、今も心にしみております。男は苦しい時を頑張って行ってこそ男だ。長い人生、足で行こう。痛みも沢山あるが、それが人生の行く道だ。そんなことも言っていました。

その年の10月23日に、夫は急死しました。葬儀には、今の校長をしておられる岩波先生、守山先生、萩原先生、そして生徒さん2人が、感謝状を持って来てくださり、本当にありがとうございました。夫は貧家に生まれましたが、日々、人は生きていく上で、感情の豊かな人、世の中の人に信じられる人に成るようにと、いつも口にしていました。それから毎年、生徒さんは強行遠足にはお線香を持って来てくださるのです。本当に私は心より喜んで、毎日一本ずつ仏にあげております。他にも品々を頂き、その中には千羽鶴もありました。毎年、PTA様にもなにかとお心づくしをいただいております。また、90年祭、95年祭、100年祭と、私は3度もお招きにあずかり、参上いたしまして、一生のすばらしい思い出となりました。

20年間に一度だけですが、小雨の時もありました。生徒さんは、カッパを着て、木の棒の大きなつえをついて、数人がやって来ました。その年は、数名の生徒がくずずれがひどく、おばさん達が看護に大忙しの年でした。強行遠足が終わってから、お母さん方の御苦労をねぎらう会でのお茶飲み話では、色々たくさんの話題がありました。あの元気な子、足がかわいそうな子、身体の弱い子、なんにも言わずに黙ってうつむいている子、など様々話をしていた時、救護所の黒板に大きく「おばさん方、本当にありがとう。一高生」と書いてあったのを、皆さんで見、感激の涙でお茶を飲んだこともありました。

その後、良い天候で秋空が高く、寒い朝が多く、たき火の灰が舞って、子供さんの黒い制服の肩を白くしたこともあったなと思い出します。生徒さんも、

今では先輩に何かと教えられ、あまり足の痛みもない様な気がします。強行遠足の頃は、長野県の朝は冷えることがあります。その寒さをおしのけて、無心に走る生徒さん達は、本当に良いことと思います。95年祭後、毎年のように小諸まで走る子供が多くなっていくようです。また、小諸まで走ることの出来た人々は、心にしみた喜びがあったことと御推察申し上げます。4、5年前から、PTAのお母さん達がお手つだいに来てくれているので、救護所もありがたく思っております。900個のリングを、ピカピカになるまでみがかれる父母様方、一心に真っ赤になったリングを見つめながら、様々な思いで明日を待つ心は、何にたとえたらよいでしょうか。夕空を見上げて心配する先生方、区長様に御あいさつにまわったあと、一同がそろって、晴れる朝を願って夕食をとるひとときは、私達一同の楽しい前夜祭です。

今は、学校のほうでも様々に注意してくださって、子供さん達も一層歩き良くなったようです。つえにすがる生徒さんが少なくなったことのようにです。救護所も笑いの中に「がんばれや！」の声のひとつもあります。年がたつごとに、元気な子供さんがふえて行くのが見うけられます。そして、一高の生徒さんは、礼儀正しく、感じが良いと皆様にほめられます。3年生は、「3年間、ありがとうございました。」と言って行きます。言われるたびに、頑張れよと心中で祈っております。炊きたての御飯を手の平を真っ赤にして、ふうふう吹きながらにぎるお母さん達、牛乳をあげるOB、リングをさし出すおばさん、お茶碗をきれいにしてくれるお母さん、また、子供さんの口におしんこを入れてあげるおばさん、足の痛みを見てくださる看護婦さん、道を守るお父さんや先生方、そして、足を引きずりながら歩く生徒さん達、みんな一心同体の心のつながりがあると思います。人間にとって、大切なことだと考えさせられた私です。

一高の生徒さんは、本当にやさしく、感謝の念の深いことには、毎年何人からもお手紙をいただきます。私は、ちょっとの事でこんなに喜びのお手紙をいただき、心よりうれしく読ませて頂いております。

また、一高の御父兄にお願いですが、お子様に強行遠足の時は、あまり品々を持たせないほうが良いと思います。小諸まで101km歩くお子様は、少しでも身に付けるものは大変なお荷物に感じられますから。本当にこの子供さんに必要と思われるものだけで良いと思います。どうか身軽にして上げて下さい。強行遠足は、生徒さんにとっては1か月前より体の健康と心の準備にと、大変なことでしょう。どうか、注意を守り、一人でも多く、小諸まで行かれることを祈っている私です。そして、今から10月をお待ちしている依田家です。

明治生まれの私、今年72歳です。若者は大スキです。20年間とは思ひ出もたくさんありますが、良い文もできずにこまっている私です。どうぞ、悪しからず。

夕空を見上げては待つ一高生

朝霧よ天までのぼれ一高生

柏木宇三郎氏紹介

小宮山 梓

三岡救護検印所が開設されたのは、男子終点が小諸になった昭和40年（1965）である。

先代（宇三郎氏の父親）の柏木氏の時代から全面的な協力をいただいて今日に至っている。先代の柏木氏も気骨のある人情家で亡くなられる時、「甲府一高の強行遠足が続く限り協力するように……」と言われたという。

父親にも増して人情家で熱血漢の柏木宇三郎氏は、この言葉を遺言だと思い、自分ばかりでなく、息子の代になっても続けさせるという。

「年若い少年が自分の力の限りを尽くし精いっぱい頑張る姿は尊いものだ」。これが柏木さんの口癖である。

三岡はゴール小諸の一つ前だけに、ここを通過する生徒は小諸必着を決意している。制限時間ぎりぎりにくる者ほど疲労困憊しているが、是非、小諸まで行きたいとの願いは強い。過去にこの三岡に制

限時間を大幅に過ぎて到着し、やむなく前進を停止されたが、泣いて前進を懇願した生徒があった。柏木さんはその姿をみて生徒の純粋さ、真剣さに打たれたという。そのすぐ後生まれたお孫さんに、その生徒と同じ名前をつけられたのである。

柏木さんの職業は建築業である。お宅には子供さんも多い。最初の頃2、3年は三岡救護検印所の勤務は小諸の旅館から時間をみはからって三岡に戻って勤務した。それでは大変だろうと柏木さんの心遣いで、お宅を食事を含め宿泊に提供してくださるようになった。

それからは毎年職員・P合わせて10人程がお世話になっているが、食事の支度等は奥さんだけでなく、お嫁さん、嫁いでいる娘さんまで家族総動員でやってくださっている。また、通過する生徒にはリング4箱分、1箱1箱の皮をむいて、さらにそれを切って生徒に用意してくださっている。

リングの他、柿、氷砂糖、お茶も出してくださり、奥さん、娘さんは終日ご協力していただいているのである。そして、救護・検印所に必要な道具はすべて柏木さんのお宅のものを貸していただいている。

かつての古いお宅が道路沿いに残っていた時には、生徒が土足のままでトイレが使えるようにと、廊下に新聞紙を敷いて便宜をはかってくれ、台所も自由に使えるように配慮してくださった。また、昭和60年には、古い家を取り壊したあとに、甲府一高の強行遠足用に水道の蛇口を残してくれ、強行遠足の折には仮設のトイレも自分で設置してくださっている。

このように三岡の柏木宇三郎氏は、27年間にわたり全面的な協力を惜みず、甲府一高の強行遠足を支えてくださっているのである。

(平成4・1992 「第112回同窓会記念誌」)

野辺山本部のしじみ汁

— 丸山良雄氏紹介 —

学校を出発してから52キロ、コースの最高地点に男子は夜中の12時頃、女子は午前9時30分頃にや々と着く。

野辺山本部には生徒が楽しみにしている熱い“しじみ汁”が用意されている。かつて今もこのしじみ汁は生徒の目標であり楽しみの一つである。

強行遠足にそれが用意されたのは、第3回に松本方面にコースが設定されて以来のことであり、戦前、戦後の食糧難の時代にも毎回欠けることもなく用意されてきているという。

かつては諏訪湖でとれたしじみを岡谷・諏訪本部で用意し、35、36年には本部から台ヶ原まで移動してつくったものであった。また、台風がしじみの産地を通過し、しじみが手に入らず遠くまで高いものを買い集めに歩いて準備したことも、小さい鍋しかなくて、せっかく買ったしじみが汁にならなかったこともあったという。

先輩達は異口同音に忘れられない味として語ってくれる。なかには、しじみのない汁しか3年間飲まなかった人もいる。

今では日新ホールの主人丸山良雄氏が「是非これだけはやらせてくれ」といって全ての用意をしてくださっている。

小諸にコースが変わって以来20年近く、先輩の心意気と後輩を思う心温まる熱情によって、このしじみ汁が出されていることを紹介したい。

強行遠足の始まる1カ月前には、しじみ100キロ、味噌20キロを予約し、当日午前8時30分には鍋、釜などを用意して野辺山本部に向かう。そして、熱いしじみ汁を準備して、野辺山本部を通過する生徒一人ひとりに強行遠足の味“しじみ汁”を提供してくれるのである。

ここに紹介した丸山良雄氏は、本校昭和26年(1951)の卒業生である。

昭和36年(1961)「日新ホール」が落成し、その食堂のマスターとして職員に、また生徒に食事等の

お世話をしていただいている。

生徒には“日新ホールのおじさん”と呼ばれ親しまれている。

OBとして一高を愛し、強行遠足を愛する心意気を感じさせるジェントルマンである。

(平成4・1992 「第112回同窓会記念誌」)

野辺山本部の名コック長

— 岡部勝男氏紹介 —

甲府一高の強行遠足は、数多くの方々の善意に支えられて実施されている。

それは、強行遠足の中にこめられた精神が、歴史をこえて人々に引きつけつづけているからであろう。

ここに紹介する岡部勝男さんも、強行遠足をこよなく愛しつづけるお一人で、一高の強行遠足にとって欠くことのできない協力者なのである。岡部さんは、松本コースの時から協力者で、岡谷救護検印所でしじみ汁をつくってくださったという。したがって、その時代から実に30年以上つづけてご協力いただいているのである。

佐久往還にコースが変更になってからは、野辺山において、本部設営という大変な仕事を、器具運搬から後片付けまで一切を中心になってしてくださっている。

岡部さんの手にかかると、アスファルトの広場がたちまちのうちに、大調理場になってしまう。水道の配管、電気の配線、調理台と巨大なかまのセット、そして、テント張りが終わるとみごとな調理場ができあがる。その調理場を使って、多くの女性協力者とともに、通過する生徒一人ひとりのために、丸山氏提供による“しじみ汁”づくりに精を出すのである。

野辺山本部は、人の出入りが多い多忙なと

ころである。男子トップが通過する午後8時半ごろから、女子のラストが通過する翌日の午前11時ごろまで休みなく続く。

男子も女子も生徒全員が野辺山本部のしじみ汁を楽しみにしている。疲れて到着した生徒が熱いしじみ汁を息を吹き吹きおいしそうに飲むのを見ると、自分の疲れも忘れるという。

30年の間には、長女が甲府一高を昭和60年に卒業し、今は次女が3年に在学中である。

岡部さんご自身は本校の卒業生ではないが、一高を、そして強行遠足を愛する思いは、人一倍強いのである。

現在52歳であるが、これからも、まだまだ野辺山本部の名コック長として、強行遠足を支えていただけることだろう。

(平成4・1992 「第112回同窓会誌」)



佐野智子 画

□ 恩 師

強行遠足余談

嶋 田 武

発 端

明治天皇の誕生日の天長節は大正時代になって明治節として、明治天皇を敬慕する祭日として祝われたものであったが、大正13年（1924）の明治節には何か体育行事を催せとの通達が文部省から全国の学校に発せられた。

甲府中学では時の江口俊博校長が、これを機会に全校生徒の脚を鍛えることに着想されて午前6時から午後6時まで正味12時間にどれだけ歩けるか、中央線に沿って甲州街道を東に向かって歩くことを実施された。

その結果は上野原駅まで到達した者が最高で、蹴球部や陸上競技部の選手が多く駆け通して余裕たっぷりだったのに、時間ぎれで前進出来なくて不服だった。

私はその時5年生だったので卒業した翌年から一昼夜を歩くことになり東の方面は笹子、小仏2つの峠がある上に東京都心に近づくにつれて乗物が混雑して危険だと言うので、西方面のコースを取ることになったのだが、24時間を不眠不休で歩くことについては各方面からかなりの反対の声もあったが、江口校長は断呼として初心を貫いて実行に移された。

一躍有名に

昭和6年（1931）から私は甲府中学に奉職することになったが、その時には「強行遠足」は全校挙げての一大行事となっていて組織的な計画と綿密な統計のもとにとり行われているのに驚くと同時に頭の下る思いがしたことであった。

昭和10年（1935）に「世界教育大会」と言うのが東京で開かれるので「強行遠足」の来歴と統計とを英文で印刷して配布しようと隈部以忠校長の発案で先ず日本語の原稿は出来上ったが、英訳するに至らなかった。

その原稿は職員室の戸棚に埋れていたものであった

が、大野芳麿校長が^{きん}底に眠らせて置くに忍びず、日本語のままで出版し「我が校に於ける強行遠足の意義と其の実際」が初めて陽の目を見ることになり、世間に公開される機会を得たのであった。

昭和14年（1939）朝日新聞の山梨版に強行遠足の記事が載ったが、誤りが多かったので訂正の申込を甲府支局へしたところが、施行の内容を書いてくれと請われて原稿を渡したところ、全国版に2日間に渡って連載されて一躍日本一の折紙をつけられるに至った。

「オイ！コラ！」

戦時色が次第に濃厚になると共に国を挙げて「健脚鍛練」とか「戦場に通ずる足」とかが叫ばれると同時に「百軒行軍」が盛んに日本各地で催されたので甲府中学のメダル線がほぼ百軒に相当し健脚鍛練の総本山として世間の注目の的となり参観者が押しかけてきて強行遠足の内容を聞きたいとてその応接に授業もできない有様であった。強行遠足が有名になるにつれて上諏訪まで何軒、松本まで何軒と称しては居るものの、鉄道の軒数によったもので国道が鉄路に平行しているとは言え果して吾々の歩む里程が鉄路の軒と一致するか否か、疑問が生じてきたので実測して見ようと言うことになり、全区间を5つに分け、1組3人の職員が50米の縄を持って実測したのであった。私は小野—松本間の測量にあたったのであったが、50米の縄をズルズル引張りながら手帳へ記入するのを見た駐在巡査に「オイ、コラッ」と呼び止められることしばしばであった。古参の巡査は強行遠足を承知していて吾々の説明を聞き終らないうち「よし、御苦労」と言うことになるのだが、新参の巡査への説明には手間どれた。

頑張りズム

東京の「学校衛生医師会」の例会から「貴校の強行遠足に就いて聞きたいから教職員を派遣して欲しい」との書状が学校長宛に届いた。私は大野校長から出向を命ぜられて、会場である岸体育館に行き「強行遠足」を詳細に説明したところが並居るスポーツ医学研究家達が既に19回も実施している事実と実績に驚嘆して、その年行われる20回の強行遠足を見

学しようではないかとの決議に基き、昭和18年（1943）の秋には文部省の体育技官を始めスポーツ医学の権威者4名が入甲されて、出発からゴールまでをつぶさに視察して「世界一」の太鼓判を押して行かれたのであった。

つまり20年の伝統の下に24時間を黙々として孤独と睡魔と戦いながら歩み続ける平凡な行事を全校生徒が欣然として真剣に取り組んでいる姿に、視察者達は舌を巻いたのであった。

それにしても毎年実施の都度、沿道の見ず知らずの人々の数々の親切をわすれることができない。湯茶の接待は言わずもがな、雨に濡れながら歩む生徒に黙って洋傘を貸してくれた信州の人々の数え切れない善意に満ちた人々の好意にも支えられて、強行遠足はここまで発展してきたのでなくて何んであろう。だが、創設当時に比べると周囲の事情は著しく異ってきた。とりわけ交通事情は強行遠足の行手をはばんでいるかの如き感がある。世間の批判も時代と共に様々であった。或る時は寵児の如くもてはやされ、或る時は野蛮とか非衛生の非難をきいてきた。だが強行遠足は周囲の風当たりがどうであろうと右顧左眄することなく頑張りズムの精神に徹することを念じて止まない。

（大正14年卒・元甲府一高教諭）

行としての強行遠足

石丸 午郎

「朱子」の「先知後行」の説によれば先ず知ってそれから行いがあるとした。この弊害は知に偏して行いを忘れることである。

この弊に対して「王陽明」は「知行合一」を説いた。即ち行いのない知、知のない行は無いと云うのである。王陽明の学が、観念の学ではなく実行の学となった所以である「Boys be ambitious」は甲府一高魂の一方向を知として教えてくれている。強行遠足は此の

知と合一としてあるべき行の一つとしての存在であると私は考える。

知を人間の精神面と考えるならば行は身体面と結んで考えることができよう。そして知に偏せず行を考えると精神と身体との調和が生まれる。心身の調和を強調した教えとして「MENS SANA IN CORPORE SANO」がある。体育館の正面壁の上に浮き彫りされた古来の名言は、身体を無視した修練、根性を抜きにした練習は有り得ないことを強調しているのである。

強行遠足を歩くことによって、強い根性が育成され、その根性がまた頑健な身体をつくる。こうして生々発展して止まらないのが一高魂である。私は強行遠足が甲府一高の豊かな教育の中につきぬ流れとして存在していくことを希ってやまない。

（大正14年卒・元甲府一高教諭）

遠い灯

伊藤 忠一

私は本校（甲府中学時代）に昭和3年（1928）就任して以来、通算して在職30有余年になる。この間満州事変、支那事変、大東亜戦争を味い、総てが戦時体制下にあったわけだが、終戦とともに日本も大きく転換し、時代の移り変わりと共に教育面にも大きな改革をもたらし、民主的教育となり且つ中学校は高校制度に切替えられたのである。このような時代にあっても本校の強行遠足は依然として不動の歩みが続けて今日に至ったのである。私は在職中毎回強行遠足の企画、運営に参画してきたのであるが、その中で特に心を打たれた話があるのでそれを述べて見たい。

ある生徒は次のように語る。

号砲一発全校生徒は一路北へ北へと進む、漆黒の空、路一筋に続いている。先陣を競う者、後から後

からと自分のペースで進む者、力をセーブして進む者ありで段々と三三五五となっていく。時々足下を照らす灯が走る……夜は明ける。南アルプスの紅葉は朝日を受けて目にしみる。陽があがると又元気を出し痛い足を引きずって歩く。こうして80キロも歩くと又暗くなる。疲れは出るし寒くもなる。友人は少くなる。自分の周りには何にも見えないので全く心細くなるのである。只白く見える路を黙々と進む。遠くに電灯の光が見えてる。一番近い停車場を思い中止しようかなと心は動く。しかし杖にすがり重い足とりで行くと先方の暗がりの中に何かうごめく影があるよく見ると矢張り甲中生だ。「俺より先に行って居る仲間もあるのだな」と心を引き締め痛さを我慢して進む。寒さは益々身にしみてくる頃遠くの方に小さな灯が見え始めた。そして汽笛の音を聞いてあれが〇〇駅かと気づいたが、まだまだ非常に遠い距離であるように感じられる。

「然しあの駅まで行かなくては自分のレコードは作れない」と思い、痛む足疲れた体にむち打ったのだが仲々に進まない「もうレコードなどはどうでもよい」と思い度くなる。「だが待てよ。これが甲中の強行遠足なのだ。否人生の強行遠足なのだ。学問の道歩く人の修業だ、いづれも同じ心の頑張りに通ずるのだ。この強行遠足に於いて遠くに見えるあの灯こそ我等人生の目標である」とこのようにその生徒はつくづくと実感をこめて語ったのであった。

事実その通りで現在の彼は立派に人生の街道を強行遠足の時のような頑張りで活躍している。この強行遠足が人生の思い出であると共に頑張りの精神の指導となれば幸いである。（元甲府一高教諭）

強行遠足を^{おわ}了って

江口俊博

前々日迄降ったり止んだりの危っかしい天気だったのが流石に「天長節」日中で快晴であったことは何より好運であった。それに地面が湿っていた為歩くには絶好であった。其為か今年は飛び切りの成績

で何とも嬉しくて堪らない。九百何十人の生徒中17里の上諏訪検印所を通過したものが410人20里の辰野を通過したものが約150人30里の松本に到着したのが5人其先着2人は午後8時40分に松本駅に入っただから歩き出してから21時間弱で着いた。

こんな事実を持っている学校はヒョットすると日本に無類かも知れない、日本に無類だとすれば勿論世界的の一記録と思う。何処の学校でも出来ないというのではない、やった学校があるまいと思うのである。そうしてこれはやったらよい事と思う。自分の体で自分の力で歩くという精神を長養すること教育の一大眼目といてもいいと思う。

今年の1年生の過半は17里の上諏訪を突破した。これは愉快的な事であり名誉の事である。よく辛抱したと讃めたい事である。偉いといってもいいと思うがこれは併しながら1年生のみが偉いと思わぬ。1年生の過半が17里以上歩いたのは当人達が達者であったには相違ないが実は甲府中学校が歩かせたのである。甲府中学校の伝統精神がそれ等の人を割合に楽々と17里歩かせたのである。甲府中学校が強行遠足をやり出してこれが6回目である為に現在の生徒は2年生から5年生迄悉く強行遠足の醍醐味を知っている。ピッコを引摺ってもひと駅でも遠くの駅から乗って帰る豪快さを解している。故に強行遠足となれば勇躍して歩き出す敢為の気風が今学校内に磅礴している。今年の1年生は此空気に煽られて知らず識らず歩いたのである。実に愉快的な事と思う。5里か6里歩く事を遠足だと思っている大都會の中学生の夢にも知らぬ愉快さである。

茅野や上諏訪辺を痛い足を引摺って歩いておった風は他人から見れば痛ましくもあり気の毒にもあったかも知れないが歩いている当人はもう上諏訪だ今度が下諏訪だと無限の希望と誇らしい楽しさで歩いていたのである。そうして一生忘るべからざる根深い楽しみは苦み其者から泌み出して来るものだという真理を一步一步に味いつつ従って苦み其者が楽しみであるという明るい晴々とした天啓を体験しつつ歩いていたのである、而して此体験は人間の一生を明るく導く夜光の珠ともいうべきである。1年生に限

らず上諏訪を通過した四百幾十の青年少年は悉く此珠の持主になったのであると思う時校長たる僕の喜びは言い尽されない。恰も我が使命を果し得たような喜びを感じる。只願くば穴山や日野春辺で引返した生徒達も単に遠足と軽く思わないで身体に故障があつて到底歩けない運命のものは格別として茅野迄も富士見迄でもよいから歩けるだけは是非歩くという気持になってほしいと思う。此気持の落伍者は必ずしも遠足でのみ落伍するに止まらぬと思うから憂慮する。

尚ついでに話して置きたいのは信州路に入ると自動車の運転手達が痛そうに歩いている諸君の姿を見て内部には「岩がねをきりとほしても川水はおもふところに流れゆく」烈々たる大精神がピッコ引く一足一足に芽を出し伸び育ちつつあることを洞察し得ない浅い同情からで只で乗せて行くから乗れ乗れと勧める事である。乗ったらおしまいである。下諏訪を通過しよう辰野迄行こうという雄図が挫折する斗りではなく自分で歩く我が力で行くという君達の貴い気魄がベチャンコになってしまう。これは而して遠足の折斗でなく人生の長い旅路に幾回も出会う誘惑である。ウツカリ乗ってアタラ名士の末路を蕭條たらしめた人が大正昭和にかけて幾人もある。乗るべからず乗るべからず自分で歩くより貴い事なし。今年は其誘惑にかかった人もなかった事はよくもよくも恵まれた強行遠足だと思う。乗るべからず。強行遠足万歳。

(元甲府中学校校長 昭和5・1930「校友会誌」)

20年前のこと

岩波政雄

昭和37年(1962)10月16日。この日、新しく定めた松原湖へのコースによる強行遠足が行われることになっていた。

しかし、前日は、朝が小雨、日中はくもり時々晴れ、夕方にわか雨という、気象の変化のはげしい一日であった。

強行遠足が実施できるかどうかの状況を、もっとも直接的に支配するものは天候である。強行遠足を前にした職員会議では、必ず予定の日の気象が問題になった。そのため、地学の教師は、あらかじめ気象台に問い合わせて予想天気図を作り、それを会議の席上で説明するというのが、そのころも続いていたならわしであった。

実施前日の15日は、上述したような天気であった。しかし、16日の深夜0時出発となっている強行遠足を予定どおり実施するか否かは、生徒の登校してくる前までに決定しなければならない。実施ときまれば、HRで、参加についての最後の注意を聞いて生徒は下校するのであるし、実施しないとすれば、予定は延期して、授業に入るのである。天気は、降りみ降らずみといったようすで、判断がむずかしい状況であるが、決断は下されなければならない。結局、種々のデータから、決行ということになって、生徒にも伝えられる。生徒がいそいそと下校してから、職員会議が開かれ、重ねて翌日の気象の予測が説明される。天気はよくなるが寒いということであった。この時も依然くもっている。

会議が終って、職員はそれぞれ担当の救護検印所などの任に赴く。そのあとも、なお雨が降り、夜になっても再び降った。強行遠足実施の態勢に入っても、不安の条件はまだ残っている。

その夜、清里の清泉寮の検印所の任に就いたある職員は、「天気のことを気になったためか、16日の朝は早く目覚め、すぐに外に出てみて驚いた。秋冷の空気の中にそびえる八ヶ岳の山肌が、朝日を浴びて美しく、見たこともないスイスの風景を見ているような気持ちだった」と当時を回想しているが、事実、15日の夜は、清里では雪もちらついていたのだが、翌朝には青空が広がっていたのである。先日、気象台に20年前のその日の気象を調べていただいたところ、16日午前0時には快晴となっていたとのことであった。前日のくもりや雨はあとかたもなくなったわけで、天気はどうかなどと心配していたことは、あれは杞憂にすぎなかったということになった。こうして、好天のもとで、松原湖方面への第1回強行

遠足は行われることになったのである。

いったい、本校の強行遠足は大正13年に始まり、コースは最初のころを除いて長い間松本方面へときまっていた。それが、30年代に入ると、次第に交通事情が悪化し、このコースが適当であるか否かの検討を要するようになってきた。

その検討の結果、松本コースを改めて松原湖方面へのコースをとることになった。決定に至るまでの道は長かった。その年の職員会議録や「甲府一高新聞」(昭和37. 9. 29)によれば、特に37年度初めから本格的な検討に入り、委員会も設けてコース変更の場合の具体的計画も練り、ようやく成案を得て、PTAにも同窓会にも変更の趣旨などを説明して賛同を得た。一方、生徒には、LHRの放送を通じて繰り返し説明し、自治委員会でも納得のゆくまで話し合いを行った。こうして、新コースの決定をみたのである。

それ以来早くも20年が過ぎた。今にして思えば、あの日、雨や雪の心配がさりと消え、まぶしいばかりの快晴になったことは、この新コースによる第1回の強行遠足を祝福する天の意志のあらわれではなかったかという気がする。いやむしろ、あの年の強行遠足ばかりでなく、それ以後今日まで毎年の強行遠足、さらには、これからさき続くかぎりのそれを幸わえたまうしるしではなかったのかとさえ思われる。新コース第1回の強行遠足の時のことであっただけに、そんな気がしてならないのである。

強行遠足は、コースが変わり方法が改められても質実剛健の心意気に自己をためそうとする意味は変わっていないといつてよいであろう。それあるがゆえに、22時間内をひたすら歩くという、この困難で苦しい行事をやめようとは、職員も生徒も思っていない。それどころか、これを伝統の行事として、誇りにさえ思っている。

ただ忘れてならないことは、この行事がこれほど長く続けられたのには、職員・生徒の心がけはもとより、PTA・同窓会の方々、沿道沿線の方々の、熱烈なご支援ご協力あればこそと、感銘を新たにしなければならぬの一事である。新コース20周年に

あたり、この方々のご厚意に深く感謝申し上げ、この行事に対していっそうのご理解ご協力をお願いするとともに、職員生徒いっそう思いをひめて、広く世のご期待に沿うべく努力することをお誓いする次第である。

(元甲府一高校長「佐久往還強行遠足20周年記念誌」昭和57年・1982)

世の人の情の上に —救護検印所依頼交渉の思い出—

猪股正彦

昭和37年(1962)、交通事情等から松本コースが小諸コースに変更、終点は松原湖、38・39年と中込だったのを、40年小諸まで延長することになり、全線にわたる調査・渉外を命ぜられ、同僚と出かけることになった。

母校に赴任して4年後の27年、従来自転車を使ってやっていた事前調査・渉外出張を自動車で実施しようという私の提案が、数回の運営委員会でもんだ末、やっと職員会議で承認された経緯もあって、その年から毎年のように事前調査・渉外の任務と、強歩の全線巡視や救護を命ぜられていた。自動車への切り換え提案がもめたのも、全職員中免許取得者がわずか2・3人という時代にあつては無理もないことだったろう。

毎年の馴れた仕事ではあつても、今回のそれはこれまでと違って、初めてのコースでの開拓の仕事なので、ある程度の困難は予想され、その覚悟で出かけた。

長い歴史を持つ松本コースの場合は、現地に臨んでから先方の都合のため依頼先を急に変更せねばならぬことなど殆どなく、前年度と同じ検印・救護所や市町村役場・警察・駅・医院・新聞社等へ顔出しすれば、それで容易に仕事が進み、私の体験した十何年間に変更の交渉をせねばならなかったのは、わずか2・3箇所にすぎなかった。

それほど一高の強歩は、峡北・信濃路全線の地域

社会全般から理解され愛されて、不変の協力応援を受けて来たわけである。これが、企業や民間団体等の行事であったなら、こうまで多くの人々から、こうまで長い年月の間を協力応援しては頂けないだろうと、当時、私は、学校というもの、学生というものの果報を痛感したものである。

昭和27年(1952)、親戚のダットサンの小型トラックを借りて、初めて同僚と2人で出かけた時のことである。当時は沿道のガソリンスタンドの数も少なく、主要市町に点在する程だったので、予備のガソリンを詰めた携行缶を2つ荷台に乗せて、無舗装のエクボ道をガタゴト音を立てながら出かけたのだが、帰途、急ぐ余りに下諏訪で空になっていた携行缶への補充を忘れていたため、富士見の降坂の途中でガソリンえんこをしてしまった。今と違って行き交う車も少ない上に、乗用車などは燃料タンクの容量が少ないために、なかなか求めに応じてくれない。日暮れ時の山道で、途方に暮れるどころか泣き出した心細さであった。やっと逆方向から通りかかったトラックに、何回目かの両手を合わせて、ホースで抜き取った少量を頂き、韭崎のスタンドまで帰り着いたのだが、トラックの運転手のお情けも、多分にウインドガラスに貼っておいた学校名のおかげではなかったかと思った次第である。

※ ※

手間取る交渉先も予想外に少なく、順調に進んで臼田に着いた。位置としては町の中央の四ッ角の手前のあたりが適当と考え物色したが、なかなか格好の家がない。何軒か交渉してみたが駄目。初めて厚い壁におち当たってしまった。結局、ここで手間取ってしまうと先方小諸までの交渉依頼が完了出来ないで、臼田は帰途やり直すことにして、先を急いだ。中込駅・役場・小諸の旅館・役場、そして、帰途予定外ではあったが念の為に寄りした甲中出身の佐久病院長のご好意ある応待が印象に残っている。

さて、問題の臼田である。われわれだけで探すよりも、町の人に相談をと考えて立ち寄ったのが四ッ角の手前西側の依田牛乳店だった。応待に出られた中年のご婦人が、われわれの名刺を見るや末の男の

子を来春地元の高校よりも一高へ進学させようかと、家内で相談していると話され、驚くやらホッとするやら。地獄で仏の思いで、こちらからの本論にかけると、すらすらと決まってしまった。店から甲府方面へ200米ぐらい、臼田の町はずれの国道から西へちょっと入った所がお住いで、国道からの入口辺が広い空地になっているので、焚火も可能とのこと、喜び勇んで早速ご婦人の案内でお宅へ伺い、ご主人にお逢いして、正式に承諾して頂けた。

これが、後半小諸コースの有名人となられた依田ご夫婦との初対面だったのである。長男ご夫婦の外に娘さんや息子さんも居られて人手は多いので、出来る限りの便宜をはかって下さるとのご好意を第一の土産に帰校した。

その年、臼田検印所の第1回目が、生徒へのお茶、リングのサービスと勤務職員の宿泊接待で開始され、翌年は麦茶、リング、牛乳それに隣接の検印救護所勤務職員の宿泊まで受け入れて下さり、そのまた翌年は握り飯まで加える全線随一のサービスのエスカレートぶりには驚嘆もし感謝申し上げた次第。もちろんご主人の夜を通しての焚火のサービスは言うまでもない。そのお優しかったご主人も、私が一高を離任して間もない頃、故人となられたが、奥様を先頭にご家族総出の協力応援は、相も変わらず引き続いて今日に及んでいる。

私の勤務した当時、検印救護所への学校からの謝礼は、たしか二千元か三千元、宿泊職員のお礼も千円から二千元ぐらいだったと思うが、このことから、金銭抜きでの誠意一つからの協力応援だったことが判断できよう。

百周年記念式典に湯村に一泊ご招待して感謝状を贈呈したことで、ご一家に長年ご厄介をおかけするきっかけをつくった私はホッとした次第だった。ことのついでに希望を述べさせてもらえば、長年にわたって協力応援して下さいの方々を今後も毎年お一人づつでも創立記念式にでもご招待して感謝状を贈呈したらどうだろう。

私が、本誌にこのような拙文を寄せたのも、長い歴史と伝統に輝く一高強歩が、数知れぬ多くの世の

人の情があってこそ続いて来られ、またこれからも続けるものであることを、強歩に参加する生徒諸君に強く再認識してもらいたい願いからに外ならない。

そして、そうした多くの世の人の情に諸君の応える道は何であろうか。(元甲府一高教諭)

総選の嵐の中で

天 野 進

一 総合選抜制度 (略)

二 強行遠足

黒の学生服に白ズボン、校長先生の号砲とともに3年生男子が勇躍校庭を出発する。同窓会、PTAの役員の方々が太鼓を打ち鳴らして激励する。

いつもの通りの「強行遠足」の出発風景である。

しかし、この10年の間にこの風景にも、少しずつ変化が見られ、それが10年という長い物差しで眺め直すと、「強行遠足も随分と様変わりしたんだなあ」という感慨を覚える。

一番大きな変化は女子生徒の増加であろう。先に触れた甲府総選制度の拡充発展とともに在校生男女比は確実に女子増加の傾向をたどり、現在では各学年とも女子が男子を上回る状況にある。

したがって、強行遠足の出発風景も、校門から前店(なんと懐かしい「望月商店」の甲府一高生にのみ通じる呼称よ)、さらに相川の橋まで、道の両側を埋めつくした女子生徒の嬌声に、そのクライマックスが移った。

一夜明けた早朝、高根東小まで移動する彼女たちの必要とするバスも数台から10数台となり、全校生徒数200名足らずの高根東小のトイレが彼女たちに占拠されて、全て渇水状態になる有り様である。(この点は近年女子の集合地点を緑が丘から学校に改めて解決した。)

女子の増加は各教護検印所の勤務にも強行遠足という伝統行事そのものにも随所で多大な変化をもたらした。

三 かいじ国体 (略)

(元甲府一高教諭 平成2年・1990「第10回同窓会記念誌」)

再び教師として強行遠足体験

五 味 武 彦

昭和33年(1958)一高に入学した私は、夏休み前の強行遠足オリエンテーションに参加した。学校自作の「記録映画強行遠足」を講堂で見たが、当時としてはめずらしい8ミリフィルムであった。フィルムの映画は戦時色が濃く、ゲートルを巻いた先輩たちが道端にゴロゴロ倒れている姿が印象的であった。彼等の疲れ切った表情からはこの行事がいかに辛い厄介なものであるかをうかがわせるものがあった。

その数日後、元気だった父が突然死んでしまった。そんなことで夏休みはほとんど勉強に身が入らず焦るおもしろい日々が続いた。秋になり、私にとって第1回強行遠足は父への懐いと人生の虚しさを抱く旅となった。松本までどのようなペースで行けばよいか友達と計画を立てていたのだが、実際には塩尻峠にさしかかる手前で、腹痛と沿道の埃のため胸が痛くなり前進を断念したのだが、これが私の高校時代唯一の強行遠足であった。その後病気のため2年間の休学をしたからである。この間に、コースは松本から小海・小諸方面に変わっていた。

22年後私は母校の教壇に立った。その年の強行遠足は生徒のときの思い出と重ねてみて、とても懐しかった。新たな発見もあった。強行遠足は生徒、教師のみならず保護者、卒業生を交えた一大イベントになっていたのだ。「行」としての強行遠足は薄れており、それぞれが楽しみながら参加していることに隔世の感がした。それでも一昼夜を通して歩くことには変わりはない。生徒の強行遠足への思いは時代を越えて共通した何かがあるのだと思った。

平成4年、この歴史に新たな1ページが加わったことである。北海道北見北斗高校との強行遠足交流が始まった。1年おきに両校の代表の生徒がそれぞれの強行遠足に参加するものだ。私の担任した学年

の生徒が交流第一回として北見北斗高校の強行遠足に参加することとなった。私も引率者として参加し、本校だけでは味わえない素晴らしい強行遠足に発展していると実感した。昨年は2回目の北海道行きで、本校の生徒4人が北見の広々としたジャガイモ、タマネギの畑中を走って来た。

これらの体験から、強行遠足がある限り本校の心は絶えることなく受け渡されて行くものと確信した。新たに入学する生徒達に時代を越えて共感する何かを伝えたい。教師として。

(元一高教諭 昭和38年卒)

絶賛！ 強行遠足

千野恒夫

昭和51年(1976)母校に赴任し、平成7年(1995)3月までの間、18年強行遠足の企画・運営等の一端を担う貴重な経験をする事ができた。

昭和50年代は道路事情も悪く、未舗装の砂利道が多く埃を被ったり、足にまめができたりで大変だった。今のような軽いシューズでない、底も固いゴムの運動靴のため、各検印所はまめの治療に大忙しだった。赴任した年は小諸勤務をしたが、市民会館は行事で使えず、近くの公民館を救護所とした。小雨が降る中を、まめが破れ血が滲んだ足を、引き摺り泣きながら終着点に向け頑張ってくる生徒の様子に、思わず目頭が熱くなり感動した。

小諸市民の60歳代の男性が「大丈夫か、頑張れよ」と声援しながら付き添って来た。その方がストーブの回りで毛布をかけ震えながら休んでいる生徒の様子を見て、小諸から20km離れた高峰高原スキー場の温風ストーブを調達し、灯油を満タンにし貸してくれたので、部屋が暖まり濡れた制服も乾かし帰宅させる事ができた。

その年、都留文大教授と学生たちが、運動生理学の立場で強行遠足を科学的に検査してくれたが、教授は検査を学生に任せ、もっぱらまめ治療をしてくれた。

小諸駅までの歩行がまた一苦勞であった。見かねた市民が車に乗れと誘うが、どの生徒も「明日の10時まで人の援助を貰うと失格になりますから」と頭を下げてお礼を言った。生徒をととても頼もしく感じ、感激したのを覚えている。便所の中でゴールした感激に声を出して泣いている生徒も多く見た。検印所係の父親の方々も、我が子の到着を遠巻きに確認し喜び、目頭を真っ赤にしていた。子供たちの一昼夜に亘る自己の限界への挑戦を称える様子は、口では言えない心を打たれた。「やっと来たよ！先生」「えらかったよ！もう行かんでいいづら」生徒諸君のやり逃げた満足感の言動やその光景が印象的だ。強行遠足を思うとき忘れられない、私の宝である。

※この方は松井農園のご主人(先代さん)市議会議員です。昭和52年(1977)からリンゴの差入れがあり、昭和54年(1979)から松井氏や市長の友人、小林さんのパン、市長の牛乳、それにインスタント味噌汁が差し入れられるようになりました。

(元一高教諭 昭和33年卒)



佐野智子 画

□ 同窓生

校友会雑誌から

全国体育日強遠足

城南生

11月3日全国体育日に当り、我校では例の徒歩主義に即して昨年通り強遠足を挙行政した。

即ち全校生徒を脚力に応じて二分し、比較的弱者組は御岳仙娥滝へ、強者組は信州往還を松本に向って脚の続く限り、勢力のあらん限り行ける所まで歩いて帰途は中央線を利用する事にしたのである。

去年の此の日は甲州街道を東京に向って、同じ方法で強遠足を行ったのであった。既に去年に於て17里余の上野原を突破した猛者が十数人もあり、而も翌日余裕綽々平気で授業を受けた痛快な経験を持つて居るので、皆人の自信は相当に強固である。今度こそはと前々から今日の来るのを心待ちに待って、肉躍る脚を撫しつつ居たものも蓋し少くはなかった。

天長節の式場で校長先生から今日の此の計画を発表された時、異様に眸の輝いた者我知らず力脚を踏みしめた者も数多かつた。2日の授業が終って帰宅する人々の足取りは何時になく緊張して平素よりも勢力があった。夕方の甲府の町には草鞋を提げて歩く者、脚絆を持って走っているもの、菓子や果物を買って居る者、三々伍々逢う者は異口同音に、貴公何時に出る……ウウ俺は2時だぞ……オマアは……僕はKと3時に立つ事に決めた……。馬鹿、俺なんか1時だぞ……。Hは零時だとよ……。なあに追い越してやるから見ろ……。我輩は台ヶ原で朝食だぞ……。こんな応答で持ち切って居た。知らぬ他人が聞いたら何事が起ったのかと思つたろう……。空気は異常に振動して居た。

愈々当日が来た、猛者連は夜の12時から学校事務所へ証印を貰うべく犇々と押しかけて来る。事務員から証印を貰っては点々と出かける。午前6時迄に全部発足した其の数実に6百数十人、外に職員も相前後して発足した。

昨夜の天気予報は全然當った。否天が我校の拳を賛して援けて呉れたかのよう、風もなく霜もなく申分の無い平和な秋日和だ。金銀宝玉を鑲めた様な壮麗な天空を仰ぎつつ3人、5人、10人、8人思い思い自由の歩調で自由の集団で、信州往還を肅々と西北に進む。鳳凰、駒、ハッの諸峰は近く遠く、濃く薄く装って物事言わんばかりに我等を迎えて居る。塩川や釜無の流は私語する様に囁きを立てつつ吾等の脚を勵まして呉れる。夢の様なこの情調、壮快と云おうか将厳肅と云おうか。?……。

葦崎の町でも握飯に舌鼓を打っているものもある。夜の幕は薄ら薄らと東の空から明け初める。星も疎らになって来た。先着はもう牧原か、それとも台ヶ原か、後で聞けば川口澤田などの塩尻連は台ヶ原へ着いて居たそうだ。

穴山橋附近の七里ヶ岩の秋色は捨て難い。火山噴出物の推積からなる第三紀に近い洪積層は妙義山のそれに似て、彼所此所怪岩奇勝を呈し、灰白色の上に血潮のような蔦紅葉が匍ひはらばって柵や雑木が紅に黄に緑の松の間を点綴し居る。旭に映じた景は全く眼の覚める様だ。

台ヶ原から長坂や小淵沢へ出た者も多数あった。麿て国界橋へ着いた。甲府元標から9里29町とある。愈々長野県の土を踏んだ時は何物が征服した様な感じがかった。国界から富士見駅まで1里半と聞いて居たが、路は良くなし加うるに上り坂だから疲れた脚には仲々こたえる。直角に射て来る強い陽光で背中は汗だくだ。遠い遠いと不平がましく愚痴る者さえある。此の坂道で最後の止めを刺された者も数多かつた。富士見駅から乗って帰る者が仲々多い。富士見から青柳、茅野、上諏訪迄は程よい下り路で脚の運びも楽だ。併し身体は痛く疲れて来た。上諏訪へ着く前に日はバツタリ暮れた、再び星の世界となったのであ西の空を怨めしげに眺めつつ、上諏訪駅に碇を下した。帰甲したのは夜の11時58分。

(大正14・1925「校友会誌」51号)

中央線沿線強行遠足

昭和3年11月5日挙行

天気は良し暖く菅原や上諏訪の事が頭にあったためか、学校の多数生徒に忍耐力の出たためか、去年の学校或は畿或は自分の記録を破らんとする心の働いたためか、遠くの停車場は近くのより優遇してくれるためか、体力の向上か、実力主義で自分の力を心ひそかに試みんとする自覚の生じたためか、非常な好成绩で、去年の本曾福島に行った程の記録はなかったが而し、遠距離まで行った人は何倍か知れん。松本駅などは近い処になってしまった。

此の意味に於て去年より好結果であったと云える。学校の考えとしても、きっと多人数が遠くまで行く記録を欲しいと思って居るでしょう。

一天才を破るは困難かもしれん。がローマ人はハンニバルを破った。ローマ人になれ甲中健男子。来年は一層好成绩を得てくれ。

(昭和4・1929「校友会誌」59号)

強行遠足

3年 廣瀬久二良

電燈のにぶい光が流れる。その流れを横ぎれば又漠々とした霧の海。間がひしひしと押合うて又渦をなして流れる。服は曉露を浴びてはやしとりとしている。踏む草鞋の軽さ、ゲートルの足の緊張、若々しい思が胸に滴ちる。昂然たる意気は又空気に漲っていた。もう2里も来たであろうか。

前を行く3人組がある。松本行の連中だ。各々勝手な熱を吹き乍ら行く。話を聞き乍ら僕は一人ははえんだ。野心……人は確かに生くる者だ。殊に青年の青年たるべきは、青年の生くるは唯これにある。

3人組を追越して進む。くらわしい空には一点の星だにも見出し得ず闇を縫うて限なく続く一条の白線の上を黙々として唯1人歩むのであった。頭はどこまでも澄む。うきふししげき人の世の1人旅、そうした、思をいだかせられずには居られなかった。荏崎、日野春は何時の間にか白い路と共に残し去つ

てはの暗い空に一点の燈光の見ゆるを台ヶ原と聞く時ははや足の感覚もにぶり、無情な路の色のみが眼に映じた。冷々たる曉風をさけて台ヶ原のとある家の前に佇みて取る朝食……時計はまだ4時を指して居る。ばさばさと凍った握飯の口にふれた時転た人生の酷風を味った。

夜明け。ほのぼのと明け染むる山際は日うらうらと上る大海の日出をも思わしめ久方の空にはたなびく雲もなく傍を流るる水も又濁れる塵を含まない。五欲六塵の風を避けて唯1人行方さだめぬ雲水の旅をつづけた西行、又蕪村の「大和路や……」の句を思い浮べて心は旅愁の雲に閉される。「夕の猿の山の峽に鳴きて人の涙を落し」という貫之の言の葉も思い出されてこのもかのもに心はまといともすれば足の進みをさまたげ勝ちである。霜に垂れた柿の色は山里の物詫しさを深刻な色に彩って思わず涙をそそられる。

誰に見せ誰に聞かせむ山里の

この晩もおちかへるねも

富士見の草むらに寝て見る空の青さ、広さ、心はいつもと知らず宇宙に迷い出て、再び現に帰れば日の光が葉陰をもれて自分の胸の上に湧いて居る。草に宿る緑の露さえもわが心をなぐさむるように思われて無上の楽園を味った。

上諏訪。一碗の汁に母愛のそれにもひとしき慰安を感じつつ勇を鼓して塩尻突破を思い立った。同行3人白茶けた街道を無言のまま歩く湖の水のゆらめき。小波の上に2時過の日がさびしく光る

あかあかと日はつれなくも秋の風

下諏訪の道の長さ。途中一緒になった者を加えて6人。塩尻峠への道は一直線につづく。1人の影はいつしか消えた。最早4時近くである。中の2人が吐息と共に吐いた言葉に張りつめた意志も消え同時に足の痛み、峠の道程、そして様々な思が身を襲うた。

5時。岡谷の停車場に足を引ずった5人の悲惨な姿が見出されたことであった。(同前)

強行遠足

3年 大久保 誠

1歩毎に、1呼吸毎に、牢固たる意志力と、邁進力を感じた、夜明けの冷気も、意志の権化たる肉体に消磨せられ、円い帽子の隙間から精進の汗が流れ出す。何事もベストを以て、衝突したなら出来ぬ事はない。陽気の発する処、金石も亦通るは必定である。僕の想到が此処まで来た時、目前の間は一掃せられ、無礙に輝く光明は期待の夢の如く、展開しているではないか。歩一歩、確実に踏む鞋下には、エネルギーの活動が断えない。「平坦ならぬ人生の路も、斯の如き、尊き偉大な力によって、左右されないことはない。」と、つぶやいて、喜ばしい微笑を洩らした。富士見高原の太陽は、燦爛として、我等が頭上を明るく照らしている。冠も時代の勝利者に、栄冠を載するが如くに。(同前)

強行遠足

2年 中村 重男

例年11月3日に催される我が甲府中学の強行遠足は明治節の関係上5日に延びた。

その前日即ち4日の真夜中、学校の捺印ある証明書を受けてから、全校生徒一斉に校門を出て各自思い思いに目的地を指して急ぐのであるが、校長先生始め其の他の先生方も我等生徒と共に此の遠足に参加せらるるのは嬉しい。上級生諸兄の中には遠く木曽福島まで行かざる健脚家あると聞いては全く驚かざるを得ない。

丁度4日の晩8時頃でもあったろうか、平生非常に健康な母が突然卒倒された。手当が行届いた為意識はすぐ回復されたけれどもまだ夢うつつの様に何か仰有っていたので、登校の時間は切迫して来たけれども出掛けるところの気持ではなかった。然し病床の母は「もう大丈夫ですから安心して出掛けなさい」と仰有って早く早くと僕等を促された。母のはっきりした言葉を聞いた時は全く嬉しかった。叔母様

達は門の処まで見送ってくれた。そして「みんな居ますから心配しないでね」と言って下さった。

学校へ行って見ると事務室の窓は証明書を受けようとする生徒の群でもう大混雑であった。今夜は誰を見ても甲斐々々しく仕度してほんとに素晴らしい元気である。僕もやつの事で証明書を受けて大勢の学友と共に校門を出た。母が「夜の中に全速力で歩かなければ駄目です」と仰有ったので先に行く人を追越しては又追越され、暫くは殆ど夢中になって歩いた。

ふと見上ぐれば、いつの間にか美しい星は満天に輝き澄み切った月光は僕等の行く手を明るく照していた。懐中電燈や提灯の用意するいらぬ全く強行遠足お誂向きの夜であった。幾つかの橋を渡り、坂を上り、坂を下りて、山と山との間の暗い道を抜けてとある田圃に出た。すると其処に大勢の人が焚火していて僕等をねぎらって呉れた。

去年も僕は此処で一休みした事を思い出して懐かしみを感じた。

暫く休んで又歩き出した。葦崎に這入ったのは1時半頃でもあったろうか。弟は「足が痛い」「疲れて仕舞った」など言い出して僕は困ってしまった。が、無理矢理元気をつけて一生懸命に急いだ。黒沢橋を渡った時僕は弟に「去年よりはずっと早く来たから上諏訪位までもうわけはない。ウンと頑張っで行こう」と言って励まし励まし大きい声で歌など歌いながらせせと歩いた。

寒気は追々に加わって水筒に入れて来た湯も全く氷の様に冷たかった。僕も弟も手拭で頬冠りをして笑い合った。弟は「早く夜が明ければいいね」と言っていた。何処からかラッパの音が晩の静かな空気を破って勇ましく響いて来た。

やがて夜はほのほのと明けた。あこがれの富士は遥かの南方に其勇姿を見せ、駒ヶ岳また前方に微かに浮びて、あたりの清々しき眺め全く筆紙につくされない。暫く又歩いてから朝飯をとるべく或神社の前に休んでいると古谷先生と横井先生がおいでになって「もう少し上れば休み場があるよ」と仰有って下さったが、大分空腹を感じていたのでみんなと一緒に

に其処で食事をする事にした。

約20分も休んでから坂を上ると「甲府中学生湯呑場」と書いてあって大勢の生徒が焚火にあたったり、弁当を食べていたりした。先刻古谷先生が仰有って下さったのは此処であったとわかった。間もなく校長先生もおいでになって我等の為に此用意をして呉れた親切な小父さんにお礼をいって居られた。

僕等は其処では休まずに坂を下りて行った。気持ちいい朝の田舎道を何か口ずさみながら、荷馬車の手綱をとってもう仕事に出掛ける人もあった。「疲れた」等と言って幾人かは其の馬車の後に乗った。

少し歩くと大きな松林があった。通りの電柱には「交通安全週間」「左極楽右地獄」等と書いた紙がどれにもこれにも貼ってある。この松林を通り抜けてとある村へ入ると何処の家でも稲こきをしている。落付いて悠長に仕事をしている田舎の人達がいいと思った。こんな所で静かに勉強したいとも思った。

空腹になったので富士見駅へ行く坂道へ来た時其処の大木の下でみんなと昼飯を食べているとヨイサヨイサと非常なお元気で校長先生がおいでになった。食後暫らく休んでから又新しい元気で立ち上った。そして校長先生の後を追って急いだ。国界橋には多勢先着の諸兄が休んでいた。僕はそこで草鞋の左右をとりかえて歩き出した。さあいよいよ我が山梨県から一歩外へ隣接長野県へ入った。

ここからは下りになるので大分疲労していた弟も急に元気百倍「天我に此幸を与え給え」など独語しながら喜色を満面に今度はずんずん歩いている。僕等の一行を見ていた人は、「あんた達何処から来たのですけ？ほう甲府からですけ。甲府から此処まではずいぶんありやすよ。疲^うびれやしつら」等親しみ深い言葉をかけて呉れた。橋の処では袴をも着けない田舎風の小学生が写生をしていて物珍らしそうに何か言いながら僕等を見送っていた。

その中に富士見駅へおいでになったと思っていた校長先生の温顔が後から見えてとうとう一行は追い抜かれて仕舞った。

青柳駅近くなった頃弟は「お兄様もう帰らない？まだ3・4里は歩けるけれど僕はお腹が痛いからね」

と言い出した。はくは思わず吹き出してしまった。ふだんから負けず嫌いの弟の気持が面白かったから。

それで僕は上諏訪までは是非にと思っていた予定を変更して残念ながら弟と一緒に帰ることにして青柳駅^{あさぎ}として歩いた。駅構内には甲中健児の多数が流石に疲れきったような顔をして休んでいた。校長先生も居られた。彼方にも此方にもコックリコックリ睡眠を食っている。僕等も駅長に捺印して貰って切符を買った。未だ12時40分乗車の時間までには大分間があるので僕も片隅の椅子によりかかってコックリ党の仲間に入った。

家へ帰ってから弟が其の時の僕の様子を真似てみんなを笑わせた。

やがて1時57分汽車は轟々と音を響かせて青柳駅のホームへ着いた。友に促されて急いで車内に入ると又眠って仕舞った。弟も眠るべく用意していた。

ふと眼が覚めるともう竜王駅であった。弟は急に元気づいて「お兄様もう直ぐね」と言ってニコニコしながら窓の外を眺めていた。

1分また1分汽車は気持ちよく走って目ざす甲府駅に着いたのは午後3時半頃であった。「来たよ来たよ。起きなきゃ駄目だよ」「おい降りるんだよ」と言う友の声と一緒に甲府！甲府！と車外を呼び歩く駅夫の声になつかしさを感じながら降車して疲れた足を引きずり引きずり家路を急いだ。

家の玄関に入って、「只今」と大きな声で言うや否や、弁当の残りも水筒も其処へ投げ出して草鞋の紐を解いて家へ上った。湯殿で足を洗い母の寝こんでいる座敷へ行くと母は昨夜よりは余程快くなられて叔母様達とお話しておいでになった。僕等2人が入っていくと「多喜男も青柳まで行ったのですか？それは偉いこと」「疲れたでしょう？」「こんなに元気よく帰って来て嬉しいですよ」と母が涙を浮かべて喜ばれる側から叔母様達も「ほんとによく歩きましたね、重男さんも多喜男さんも全く偉いことです」と賞めて下さった。僕は去年より1里半許り余計に行ったのであるが弟は最初の試みとしては可成りよく歩いた。

夕飯には僕等の好きなかしわ蕎麦が用意されてあつ

た。昨夜母の病気を案じながら出掛けた×兄が疲れた足を運んで丁度見舞に来て呉れたので3人の遠足談に笑い興じながらみんなして楽しい食事を終えた。就寝したのは8時過ぎであったろう。

僕は床の中で今夜の夢は甲中名物の強行遠足であろうなどと考えた我が校一千の健児が雄々しい旅装に身を固めて深夜各自の家を出発するの光景は正に動員令下って出征する兵士のそれの如くに勇ましく花々しい。さあ来年こそは青柳駅突破何のその。上諏訪否塩尻まで……

さえ渡る月の夜道を弟と急ぐも嬉し強行の旅
疲れじと言葉強くも言い張りて兄に追いつく姿うれしき (同前)

強行遠足にトップして

4年 三 枝 捧

「剛健旅行。」^{△△} 嗟、何と聞くも愉快な尊い事ではないか。しかも我校の一大特色が天下に知られ、各地で之を模倣し始めたと聞いては、嬉しい事であると共に、自重せねばならぬ。これを思う時、私は深く胸に何か刺される様な気がする。

今年は諸君の自重により、例年に無い良成績を得たのはお互に悦ばしい。

はからずも今年は私達が徒に、重要な先陣を承り、しかも記録も破らず、唯松本の30里位を突破した位の事のみで、かくも名誉ある我が甲中第6回強行遠足に優秀者として遇されるのは、私にとっては実に恐縮に堪えぬのである。

尚、共につけ、何か書けと云われたが、別に感想等もなく、5年の笹本君が書かれたから、私は唯其の経過をそのまま主観的に記述するに過ぎない。

×××

3日の日は、私は式後、直に10時の汽車で帰宅して、3時間^{△△}計り眠った。そして夕方、紅梅町の或親戚に至りそこで休息させてもらったのだが、何にせよ聞き馴れぬ都会の響には、どうしても眠れず、此処でも約3時間内外しか休めなかった。

やがて、夜も半となりておこされて、時計を見ると11時半には驚いた。女中が間違えて1時間おそく起したこれは寝過ぎたしくじったとばかり、支那そば1杯に体を温め、大急ぎで出かけたのは0時15分であった。

さあ忙しい、駆足で夢中、学校へと走る。
途中には、もはや1人の影すら見えなかった。自分1人と云うのはあまり良い気持ちもしない。それも早いならいいが、おそいのだ。走る事、走る事、「今年はもう駄目だ」とさえ思った。でも足が痛まなかったのは嬉しかった。

かくて校門に至るや、丁度第2鐘が鳴り始めた。「噫、よかった」と一息ついた。すぐ控場前に飛びつけた。

正に私の名を呼んだ時であった。しめたとばかり、証明書を戴くや、直に豊栄堂前に於て、予てより必勝を期して約束していた5年の笹本君を待った。

誰、彼と嬉しそうに元気よく大声を呼びながら、前を過ぎて行く諸君の雪の如く、校門より崩れて出る様を見ては、気はいらつき、あせるのみであった。「早く笹本君が来ればよい」と。

しかし其れも瞬間だった。すわと出発、時正に0時5分過ぎ、予てよりの本願がトップを切ろうと云うのだから忙がしい、相川橋、練兵場の辺で大方の者を追越し塩部、関屋往還上に至る頃は、先頭であった。浅川、三橋河先生方をも越して断然トップを切った。

時に4年の石原君も同伴だったが、それからと云うものは、あの月夜を絶好の幸と走る走る、やはり登校の際と同じであった。之は面白い。何れ、何かの力がそこにあったのだ。

今になって考えるて見ると、まあよくあんなにと思われる程急いだ。疾風に吹きまぐられる木葉のように、蕨崎など1時20分頃通過、破竹の勢そのものであった。カラコンカラコンと響き渡る金剛杖の音に、足並そろえて進み行く様は、全く何とも形容の出来ぬのであった。

もはや、私達以上に走ったのは、4年の菱山、3年の樋泉、外下級生2名であったが、「一歩先に一

歩先に」の主義であった。

かくて7人、常に足並そろえて、共に先へ先へと争いつつ、何時の間にか、あの長い七里ヶ岩も8分通り過ぎて、穴山橋も3時頃過ぎたように思う。宮脇、牧原の辺で誰か1人落伍して、6人となってどんどん進む。

月には感謝せざるを得なかった。月が無かったなら歩めぬと云ってよい。石ころに足を痛め、燈火を手にして身体自由を得ず、大勢と歩みたくなったに違いない。必勝を期した2人には、月こそ絶好のチャンスであった。

目ざす台ヶ原へついたのは丁度4時、「嗚呼、もう一息白須の菅原小学校で、先生方が待っておいでだろう」と着いて見るとがっかりした。思わず、知らず側の電柱に腰下し、何やら口中に入れた。しかし5分も経たぬ間に後の方で声がする。これはいけんとばかり、急ぎ立ち上り出かけた。彼等もすぐ続いて来る。

6人連の2人は後れ、後からの3人が加わって又7人となったが、私達は先頭にたった。その中の4年の鈴木健夫君は松原に休憩場のある事を知らせてくれたので、意気も回復した。彼の松林より味爽の氣にふさわしく火の見えた時は、何とも云えぬ元氣と悦びとを感じた。

私達2人が1着4時50分であった。直に4、5人来た。おいしい麦湯を5、6杯も飲みほし、2番目に出発、先に出かけたのは鈴木と5年の新海であった。間もなく2人を追い越し、又断然1番であった。例年なら私達2人は夜明けは台ヶ原の手前であるが、今年は国界橋であった。

2番目とはかなりの間隔となり、上葛木の辺など非常な速度で、7時頃富士見。突然、私の足は痛み出して動けなくなった。笹本君は子に対するの父のようにして私に当った。3分計り休憩と、笹本の言葉に効あつてか、動け出した。青柳辺で1番手の鈴木等が後に見えたので尚氣を奮い、上諏訪までは実に1息であった。

上諏訪手前の踏切で、甲府からの客車が来た。機関手は手を振って元気づけ、篠原先生のおられたの

がわかったが、先生方は気付かなかっただけ。

あの町の中程で、突然、長田先生に会って第1検印を押して貰い、「もう1息で1番だ」と云われ、益々元氣着いて吉田屋第1着10時40分であった。

川久保、萩本両先生が大そうよろこばれた。しかし例年に較べて少し遅いようだと言われ、私達は1番の責任感に打たれた。志氣大に奮い、蜆汁の御馳走を5分間で平げ、草鞋も片方とりかえて、すぐ出立したのは11時少し前で、予定川岸の弁当に少し後れ、岡谷で歩みながら昼飯を済ました。

川岸駅の手前で、仲本教頭にあった。「おおよく早かったね、1番だ、がんばれ」と申された。右に天龍川を眺めつつ、流れに従い、あの立派な道路を実に全コース最大速力で進んだ。この時私は面白い事を考え出した。それは少し疲れたしたら、なんでも気合をかけて進むに限る事だ。簡単だがこれが非常に力になった。その勢で1時50分頃はもう辰野の町はずれで、徳江先生がおられて、第3の検印をして下さって、話しながら駅前まで案内して下さい。この休憩場では、矢嶋博先生の心配になる蜆汁など戴き非常の勢で小野に向った。

この辺は2年の頃やはり笹本君と真暗な中を眠り歩いた事を思い出し、感慨無量。前面から突然、井上先生があらわれた。

先生は塩尻から逆コースを下諏訪までおいでなのだ。「かなりの善知鳥峠で待ったが誰も来ないので、ここまで下りて来た。これは1番のものにあげる」と云っておいしい林檎を下さった。この辺ではあとで聞けば、2番手の人は2里遅れたそう。3時半頃小野に到着、4時頃は善知鳥峠にかかった、峠といっても平地に行く如く、忽ち頂上に至り、トンネルを下にしながら下り始めた。下りは長い事長い事だんだら下りに足も痛み真暗なのに、先日の雪で木は道に、おいかぶさり全く閉口した。やっとの事で6時20分塩尻に至り、甲府中学と云う提燈を見た。

「オーイ先生何処ですか」といかにも無作法に疲れた調子で呼ぶ、「こっちですよ」と直ぐ例の茶屋らしい家から女の声がした。這入るとそこには清水先生がおられて、今出てこられる所だった。「早かつ

た、仲々健脚家だ」と先生を始め、この家の人達も大そう感心していた。そこでゆっくり、色々先生と話しながら待っていた「むすび」をここで皆平らげた。「先生もう後から来ませんよ私等が断然」等です。額を戴くんですよ」と少し調子にのって来た。すると先生も「額かね」と笑いながら申された。直ぐその勢で松本位と校歌など歌いながら進む。大門と云う町で三本連に会い一番右をとって行くと、所謂、桔梗ヶ原だ。全くさみしい所だった。この辺が古戦場かなどと思うと一入さむしく、黒い林はことに私におそろしく感じられた。詩人、文人なら実说一句でる所。笹本は元気故、私もそれに引かれてしまいいは人家などなくとも平気でぐんぐん進んだ。原新田の辺だったろう。一軒茶屋の前にこつねんと藤田先生がおられた。

又先生のよろこびは一通りや二通りではない、大そう悦び、「さあ松本へは行けるだろうな、書いとき、先ず松本駅に至る事としたら、上土廻りの自動車に乗ること」等一々丁寧親切に先生のお家をおしえて必ず家へ来てくれと云われた、実に私達はうれし泣きが出る様であった。

それで最後にこんな目に会ったのだから又、疲れながらも非常の勢で松本へと進み得た。

村井、手前に至るや、腕に白帯のある先生らしい方がこられた。近づけば、篠原先生であった。私達は藤田先生のおる所を述べ、博物の先生など「何か買って来るだったな、まさかこないとおもったからな」などと申され2先生方からも大そう元気づけられ、私達の足は一層軽くなった。

かくて10時50分、まだ十分歩める確信はあったがもう占めたものと、松本に到着し、駅長の証印も押してもらった。

直ぐ駅員の親切により、自動車の人となり、疲れは一時に至り、笹本はそうでもなかったが、私は愕然として1歩も歩めなくなったのだった。とは云え車中より1甲中生の踏端にたたずむを見た時は、私達の足は鳴った。ああもう一息何故田沢寺まで行かなかったらうと、勝誇りし私達は、ここに於て何んとも云えぬ不妄の念におそわれたのだった。

しかし、それと共に、この甲中生には大いに敬意を表した。それは実に久保寺恒夫君であった。先生の宅に到るや、久保寺君のみか、実にまだ外2人4年の志村君と3年の樋泉君とが来たのだった。

嗚呼かくして私達は30里を22時間で突破したのだった。想えば足の力は偉大なものだ。かくて、5人は先生の御宅で絶大なるもてなしを受け、和氣藹々^{かいあい}の内に明朝朝1時甲府駅に着いて、直に痛い足を学校へと向けた。

最後に藤田先生に感謝し、来年は諸君の尚一層奮闘せられ、新記録をつくらん事を祈りつつ筆をおく。
(昭和5・1930「校友会誌」)

強行遠足の思出

5年 鑿場孝朋

3年の時松本へ川手君と共に行ってからは、どうしても松本は突破したいと思っていた。4年の時は上諏訪へは第1着であったが、雨の為中止のやむなきに至った。今年幸に有明迄行けたので、思出づるままに筆を取った。

式後家に帰り寝たが中々眠れぬものであるから、戸を閉め暗くしたが眠れず、8時間の中正味2時間辛うじて眠れた。

午後8時起床、万端整え出発した。電車へ乗ってたれを見ても皆自信ありげな様子、何だか引目がしてならぬが、目をふさいで前からの作戦を頭中に書き、又一方今度の成功を神に祈らずにはおられなかった。

先ず20分前学校到着、服装検査をやり葦崎まで飛べるか、どうかを検べ、カードを受ける許りにしていた。昨年よりも早く上諏訪に着かむと先生のカード分配も一刻千秋の思いであった。貰った、もう夢中で飛び出した関屋往還を西へ西へと、常盤ホテルの辺ではもう4人でトップを争って互に力走した。

千塚橋の辺で自分が一番まいった。ゲートルがかたく3人に後れた。前の2人こそ我2組の清水、堀内両君で、1人は下級生であった。後をふり向いて

見てもたれ1人來なかつた、後れてはまずいと思つて我慢して走り出した。

松島の向うの分岐点で3人を越しトップを切った。それであの長い下り坂を走れるだけ直進した。自分の後に900余人が居ると思うと愉快でならぬと同時に続かれてはならぬと思つて、注意に注意をして進んだ。時折後を見るけれども中々見えぬ、走つては歩き又走つた。愈々七里が岩に差し懸つた、岩は道を暗くし、ものすごい。片方には河の音がゴーといい、1人で歩くのは余りよい感じはしないが競争心には打負かされ、自分はどんどん進んだ。七里々岩も長くてあきた頃どうも具合が悪い。脳貧血でも起きたらどうしようか等考えて進んでいると、白須の学校手前に井上先生と小使さんが立っていて道を教えてくれ、先生に具合を話すと帽子を取り頭を冷す様に言われたので、実行するとすぐ回復した。その上先生には自分と共に歩いて下された。以前より1人でない故気強い、又先生にはどうも押され気味で、先生の強脚には驚かされた。

国界橋も暗い、鶏が時折思ひたつた様に鳴く、星の数も何時しか少なくなり愈々長野の第一歩を踏みだした。寒さはひしひしと身に感じられる。互に無言で進んだ、富士山の停車場へ入る村でたれか我々をオーイと呼んだ、向うを見ると宮野先生がおられた。第一検印だ、時6時15分と先生は丁寧にカードにしるして下された、すると後からオーイと声がする、自分は大変驚いた。これこそ斎藤君だ、聞けば大芝、小林君と分れ私に続いたのだそうだ、先生とも分れ2人で進んだ。もう自分等も足は痛み、又続けられることを恐れ曲る度に後をふりかえつて見た。そして過去4回此の道を歩いたことを考えながら、時折下を通る汽車をながめながら上諏訪へと進んだ。

上諏訪第1着10時20分、昨年の自分の記録を10分縮めた。鯉汁の御馳走を受けて清水、伊藤先生と話をしていると驚いたことに5年大芝、3年望月、三澤の3君が来た。自分等は気が気でない、すぐ岡谷に向つた。足は大変痛む。湖水の反射の為目はくらみ、自動車は間断なく往來し、毎回の遠足で一番骨の折れるのは此の湖畔だ。又此の辺で、大方大勢が

決定するのだ、杖を頼りに頑張つた。唯々近路を近路をと探して進んだが岡村先生の検べて下さつた道が一番近かつた。先生の地図を筆記しておいた故たよりにどしどし進んだ。塩山とかの小学生が、励ましてくれたのも嬉しかった。

岡谷の停車場を過ぎ少し進むと古谷先生が甲中のマークを書いた白旗を立てていて下された。早く行きたいが足が動かずやうと到着し第1番を貰いて出発した時が零時50分。次は川岸だ。休むと足が痛む故無休主義で進んだ。此れが成功の大秘訣である。天龍川に沿うて進む、此の辺は道が河に平行して数条あるから、平らな広い道を取るがよい。

川岸駅を通過し辰野に向う。道は皆天龍川に平行で埃の立つには弱る。天龍川の水を眺めながら、昨夜からの戦を回顧しつつ辰野の町に入る。2年の時此の町で第1番が取れたことを思うと懐かしい検印があると思つたがなかつたので小野へ向う。3年の時此の間で雨宮君に越され、自分等が杖をたよりにポツポツ行くのに大足でチョイチョイ歩いて行かれたことや、塩尻へ向つた古谷先生等が励まして下されたことが踏切の所で思い出されて、左右を向いたが汽車らしき物はなく、唯風の為埃が立つに過ぎなかつた。今年は越されまいと後をみると驚いたことに6人來る。又一昨年の通りやられるかと思つて残念でならなかつた。

斎藤君をも励まし、続けられず小野の町へ入つた。橋の上で腕に白帯をつけて居られる先生がオーイと呼ぶ、もう此の瞬間は小飛だった。それは坂齊先生で、わざわざ検印所から迎えに来て下されたのであつた。茶や菓子を出して下されたが後に3年生が見えたので2分許りにして出発時4時、前に倍し勢は出た。いよいよ塩尻だ、先生に力づよい言葉で励まされて一層元気を増して、其の後は実に元気で有明迄行けた。塩尻へ遠廻りをせぬ様注意に注意をして進んだ。3年の時にはもう近路についた頃は薄暗かつたのでよく記憶せぬので道う人々に皆聞いて進んだ少しの傾斜なので前より速度を出して進むと、あの塩尻峠の寂しい所に岡村先生と小使さんとでいて、キャラメルを我々が1番だといつて2つずつ下され、

必ず松本は突破しろといって肩を叩いて下された。近路を通る許しを受け愈々峠だ。峠といっても下り坂で駆足だ。齋藤君もすぐ続いたがだんだん此の辺からおくれた。

塩尻の町に入り五千街道へ齋藤君が入らぬ様に町の人に頼んで、あの町を殆ど駆足だ、自分の勢は葦崎の町辺以上だった。そして篠原先生の塩尻検印を5時30分に受け、駆足で松本へ向った。桔梗原が此の一带だそう、遙か向うに松本の灯の輝きが見え、右手の山の上に月が昇った。自分は諸国漫遊の武士の如き気がして、松本へ松本へと進んだ。

松本の町へ入るとすぐ藤田君が甲中の提灯を下げ自転車へ乗りながら来られ「御苦労」と言われた時には30里なんて歩いた気はなく、毎日学校へ通っている時と同じ気がした。今一息と思ってスピードを出して停車場へ着くと、藤田先生と山口先生とが居られた。8時だった。藤田先生達は大変悦こんで下され、もっと歩くかと問われたから12時迄歩きますと云うと、信濃鉄道方面へ行く道を私と共に歩いて教えて下され又色々 tonight の宿泊等まで一切注意して下され分れた。寒さも募る、足も亦鈍り出した。此の時塩尻の辺で我々を自転車で越した甲州人が松本で用事を済ませて来たのだといって一寸一緒に歩いて下された。時折鉄筋コンクリートの橋があると此んな良い橋は甲州にはないだろう、旅の土産話にするさ等と甲州を馬鹿にしたのも寒い中の思出の一つだ、その人とも分れ、北風の吹くさびしい道を1人で進んで柏矢町の辺で時計を見ると11時近かった。いよいよ今日の勝負も定まる時が近づいたと思うて、通行人に有明迄幾町あるかと訊ねると、1里といわれたのには驚いた。すは大変と思いつつ又杖を頼りに馳足だ。11時15分頃有明の町だなあと、ねむい中にも感じられた。

間もなく停車場らしき家があった。開札口とはあるがどうも停車場とは思われぬ、行ったり来たりしていたが、あたって砕ける覚悟で戸を叩いた「誰ですか」と声がした「甲府から来ました」というと同時に「停車場ですか」と聞いて、停車場と知れて安心した。表へ廻り中へ入った時11時25分。今日の聖

戦も余す所35分でやめた。そして仕度を取り上に上った。駅長は色々様子を聞いた。今1人来ますよと云うと大変驚いた。一時も早く齋藤君が来ればよいなと思っていたが、つい来なかった。夕飯の仕度をして下され、又一昨年雨宮君の話も出た。それがすむと駅長に案内されて外へ出た。そして雄大な日本アルプスの説明及び有明駅の地位等を説明して下された。月光に輝くアルプスは甲州の山以上の美を展開し、自然の偉大さを物語っていた。

一夜を駅で過ごさせて貰い、翌朝有明の駅を立った。昨夜のアルプスの姿は霧の為見え、唯吐く息が白く目についた。そして気もゆるみ、電車へ乗るにも汽車へ乗るにも大変苦労であった。12時頃甲府駅へ着いた。幸い五味君の自転車を借り学校へ向った。途下坂齊先生に遭い昨日の札を述べ自分が第1等と分った。学校へ着くと、校長先生及び諸先生が大変喜こんで下された。そして甲中第10回の強行遠足に優勝者とされても前年の記録が、やぶれなかったことを残念に思うが自分は毎日2時間30分も歩いて有明にしか行けぬことは下級生の諸君より意気がない為であると思う故、どうか諸君は、来年は必ず有明を突破して甲中に模倣し出した、山工、工芸、農林等の学校に甲中健児の意気即ち甲中スピリットを心行く迄示し驚かせて下さい。自分は此の事を深く御願ひする者である。

* * *

さて一寸注意というより感じたことは、弁当は余り持参せぬことであります。自分は今年握飯を2つしか1日に喰いませんでした。又一寸の遠足と思って、キャラメル等を多く持つことは水を飲むからです、なるべく避け、遠足前は、遠方から通う人は、1時間の処は40分位で歩ける様に注意して置くことです。そして風邪等は絶対に引かぬことです。では来年はうんと頑張ってください。

(昭9・1934「校友会誌」)

強行遠足の思出

5年 田原利雄

どんより曇って星1つさえ見えない真暗な夜の虚空に何時も聞き馴れたあの鐘の音が低いけれども、力強く静かに澄んだ空気をふるわして響いて来ます。

その鐘の音こそ、我等が天下に誇る甲中強行遠足の出発の合図なのです。11月4日午前零時希望に満ちた甲中健児が、校前に整列するや、カードの分配が始まりました。誰の顔にもはちきれそうな元気が表われています。遂に私にもカードは渡されました。校門の所の混雑を押し分けて閨屋往還に飛び出して夢中で西へ西へと急ぎました。千松橋の所まで来ると橋が落ちて居るので磧で火を焚いて仮橋を渡して呉れました。河辺で提灯をさげて立って居た小使さんに聞くともう先に13人位も通ってトップは望月君だそうです。

松島の町へ入ると、前へ2、3人見える外後はもう誰もついて来そうもありません。町の出はずれで5年の大代、桜井両君に追いつきました。町から急に田圃に出たのかハッ^{おかし}風が冷たく頬を撫でて寒さがめっきり加って来ました。

登美の長くて飽き飽きする坂を4、5人で登り初めましたが、私の方がおくれ勝ちで、何時も後から小飛びでついて行きますと、途中で4年生の者が2人とうとうへたばってしまいました。下り坂になったと思われる所から飛び出しましたが、皆猛烈な速力で石につまづくと、火花を散らしそうでした。調子が少しも出て来ないので、坂を下り切ったトンネルの辺から、歩いてもらいました。昨夜の睡眠不足が祟^祟ったらしい。左手に塩川の流れの音を聞きながら急ぐと、川向うの枯木の梢の間から葦崎の灯が、青白く輝いて居るのが妙に眼の前にちらつきます。時々ヘッドライトを1つしかつけないトラックが走り過ぎました。空が真黒なので天候が気がかりです。測候所では今夜は大丈夫とは云うものの今にも雨が降り出しそうです。礫^{いし}をぎっしり敷きつめた線路沿いのあの道は新しい草鞋にとっては非常に歩き憎い。礫のない様な所を振んで一列縦隊をつくって進みま

した。

葦崎の町に入るとのどが乾いてどうしようもないので井戸を見つけて湿すと急に元気づいて調子が出て来たので、此の分ではと内心微笑みました。町の途中では2人ばかりに追い付かれました。見ると5年の新海君と、3年の上田君で2人とも蹴球部なので、相当の者らしい。又続かれてはと思って町を抜ける所まで早足で急ぎました。町を出抜けてしまうと七里ヶ岩が道路まで追って石ころ道ばかりが白く浮んで、時折枯葉が風に舞って、窪んだ所に積って又転って行きました。背負った握り飯のぬくみが体に伝って来るのが感じられます。睡気がさして来たので出発の時の元気はどこへやら、時間さえ経てば台ヶ原へつくのだと云う様な感じが出て来ると足が段々に進まなくなりました。一団の間に長い長い沈黙が続きました。飽きた頃やっと台ヶ原の灯がちらちら見えますと、なんとなく足も急いで来ました。今年は道が変ってあの急な坂の舊道ではなくて新道になったようだ。

4時10分台ヶ原到着。もうずっと前にトップの望月君と、4年の岩下、3年の大柴両君と一緒に発ったと云うので私達も10分ばかり休んで又出発しました。新手の一団を加えて歩いては走り、走っては又歩き……国界橋はまだうす暗かった。坂を登りかけますと先に行った人々のつく息が真っ白に林の中にぼうーと消えて行く、明るくなって空を仰ぐと曇って居るが、少し青空がのぞいて居たがそれも何時しか無くなって、空一面に灰色がかって、毎年見られる朝焼けも今年は見られません。

皆が遅れたので私は1人きりになって朝霧のまだ晴れやらぬ富士見の坂をかけ登りました。あの急な石ころの坂道をあがり切って少し速度をゆるめて居ると5年の窪田君、4年の神宮司、田草川、久留四君が追いついて来るのが見えます。気が気でない、負けてたまるものかとばかりにあの霜の降りた真白な道を枯葉を踏んで草鞋の切れたのもなんのそのとばかりに急ぎました。幾まがりかまがった所で先発隊の寺澤先生に行き逢いました。挨拶もそこそこにあ飛びました。余程行って振り返ったが誰もついて

来る様子もありません。もうこの辺は桑の葉はすっかり落ちて、山の木々の葉は真紅に色づいて所々に白樺の見えるのも高原らしい景を一入深めて居ます。川1つ越した山と谷間に発達した村落から立ちあがる朝餚の煙は私に雄大な気を起させました。朝の寒さが顔や手にひしひしと感じて来ます。すると私の頭の中に過去4年間の強行遠足の思出が数々湧いて来ました。1年の頃はこの辺でもう大分疲れていたっけ、2年の時は大雨で丁度この辺で晴れて居たのに、後から自動車来て、中止を知らされてがっくりしたっけ、3年の時は……等と思って歩いて居ると、道は鉄道と沿いました。あの因縁深い青バスが朝の寒さを衝いて、もう走って行きました。下り坂になりかけました。毎年私はここで調子を出すので、今年も無理をして走り出しました。なんとかしてトップに追いつこうと思って走って居ると、ずっと前の曲り角を錯覚かも知れないが確か甲中生が3人、松の梢の間から見えました。追いついて見ると、やっぱりトップの3人でした。私も5年間一度トップになろうと思って居りましたが、その理想も夢ではなかったのです。遂に実現して今自分がそのトップになって居ると思うと、知らず知らずの内に、言い知れぬ喜びが湧いて来ます。私はなんとかして3人を抜こうかと思って相当急ぎましたが、彼等3人はさる者なんとしても一緒に続いて来ます。

茅野の町へ入るとすぐ甲中と立った旗が角に立って居ります。うれしくなって、とびこむと今井先生の検印でした。町を出抜ける頃私の方がおくれ勝でした。上諏訪へのあの長い道を4人で競り合いますと段々に望月、大柴両君は後れて来ました。踏み切りにさしかかって後をふり向くと両君はずっと後になって歩いて来ました。岩下君は4年だが例年の猛者で、どんどん速力が出て来ます。私がやっとの事について行くと、道はアスファルトになる所まで来ると、はるか向うに赤十字と甲中と書いた旗の立って居るのが見えましたので、疾風の如き早さで息を切らして駆け込めば先生方や旅館の人達は不意の闖入者に驚き乍ら迎えて呉れました。正に第1著午前9時50分新記録樹立。

御馳走の蜆汁を飲んで居ると後れた両君がすぐに入って来ました。宮野先生の御話に依れば松本方面は降雨模様なしとの事、歓喜して再び岩下君と出掛けました。諏訪湖がどんよりと鉛色に湛えた水面に曇った低い空を映じて居ります。そして湖水の向うの山はぼんやり霞がかかった様に……何時も埃に悩まされる湖畔道路も陽の射さない為かなんとかしつとりとして居りました。

岡谷の手前の黄色なカリンと林檎の畠は私の味覚をそそる一方又見事な眺めでした。その林を抜け出ると、煙突の林立する岡谷です。真黒な煙が町の上空を一面に塗りつぶして居りました。釜口橋で天龍川の向う岸へ渡る所に鈴木先生が立って居られ、地図を見せて下されながら元気づけて下さいました。工場の蓄音機が古い流行歌を奏でて居るのが妙に故郷を思わせぶりでした。山辺の小路で長い杖を拾って、折って2人の杖にしました。通学橋を渡って曲がると川岸で、すぐに検印所がありました。萩本先生の検印で、時間を聞くと、昨年よりは後れる様です。それではと猛烈にビッチをあげて、駐車場の時計を見ると、丁度12時でした。よしそれならば1時間以内に辰野へと、岡谷で拾った杖に頼りをかけて急ぎました。

平坦な広い路が続いて、左手にはすぐに山でその麓に鉄路が敷かれ、右手は天龍川が深い谷を作り、流れは山の裾を削って、ものすごい音をたてて居りました。曇った空が今にも泣き出しそうです。せめて松本迄はと、不安な気持ちを抱いて急いで居りますと、幾つかの曲り角からとうとう降り初めました。なにこの位の雨ではと思うものの、又その一面なんとなく晴れた日より、張合がない様な気もしました。

空一杯に、濃淡の区別なく、淡黒い墨を流した様な曇り具合で、銀線が落ちて来ては、乾き切った路の埃に綺麗な丸い斑点の模様を付けて行きますと、その度に道端の草葉の上に真白く積まれた埃も、音もなく段々に落されて、洗った様になって来る。こんなものでも平凡さに飽き飽きとした私達の眼には面白く感ぜられました。曇った様な天龍川の谷底からの音のみが、あたりの静けさに反響して居る。

零時50分辰野の検印場へついたが、誰も居ない。声をかけると婆さんが出て来て、伊藤先生の受持だそうだが、未だ早いと行って昼飯を食べに行ってもう帰って来る時分だそうだが、待つて居る暇もないので、その息子に名前と時刻とを示してもらい、大きな自分の家の印をカードに押してすぐ出発しました。

途中で伊藤先生に行き逢い、未だ来ないと思って居たと驚いて居りました。駅前の休憩所では麦湯を出して下さったが、一杯もそこそこに急いで又北へ。体中がやたらに痛くなって来た様だ。持って居たサロメチールを塗ると何んだか軽くなった様な気がする。岩下君は歩き初めは私よりえらそうだが、少し行くとすぐに早くなります。そこに彼と私との格段の差異があるらしい。踏み切りを過ぎて暫く歩くと道は全く町を脱けて、細くなって山の裾に沿って居る。道に落ちた褐色の栗のいがが雨にしたされて居る中を進むのは、草鞋にとって妙にふわふわした様な感じがする。垂れ下った梢から雫がぱたりぱたりと枯葉に音を立てて落ちて居りました。

どの位来たのか知らないが、急に後でオーイと誰か呼ぶのが聞える。振りかえると、知らない人が2人自転車で私達に追いついて来る様子、立ち止まって待つて居ると、新聞社の人で写真を撮って呉れるのだそう。喜んで早速楽な姿勢をして、2回撮ってもらってから御礼を云って元気良く出掛けると吃驚して、曲り角の所まで来て未だ立って見て居りました。これに気を良くした2人は尚も小野に向けて有明突破とばかりに勢込みました。清流に渡された橋を渡って小部落を出脱けると、広い真直ぐの道が長く長く北へ向って居りました。しょぼしょぼと降る雨の中の四面の山々の頂は、雨煙にむせんでばうとして居ります。どうやら本降りになったらしく肩の所をひどく叩くのが解る。襟から体へ。袖から雨だれが。なんて意地悪な天気だろう。私は天に向けて叫びたい様な、いらだたしい気持ちになった。強行遠足で雨に見舞われたのはこれで2回だ。中止ならなければ良いがと、心に念じながら進む。

小野の町の煙突が意識される頃から岩下君におく

れて来ました。小野の検印場では岩下君が待つて居て呉れたので非常に嬉しかった。青木先生の検印で示された時刻は2時30分で、岩下君と5分ばかりの時間の開きがありました。この分ではどうも中止になりそうだと云う先生の御注意に依って休んで居たが、なんの命令も学校からないので身仕度を堅く整え、頬冠りをして、検印場を元気よく飛び出せば、時刻は3時。雨は益々降りしきって到底止むべくもなく、うとう峠の坂道はぬかるみで、草鞋が滑ってなかなか進まない。4時迄にはとにかく塩尻に着かなければならぬと云う方針なので、鼻息だけは荒い。岩下君はどんどん急ぐが、私は足が重たくて走っては追いつき、後れては又走り、そうこうしている間に足が痛んで来たので、遂に彼に追いつくのは断念する。と段々に後れて来るばかりだが、どうする術もない。服にそって触わって見ると、びっしょだ。水が絞れる様でした。峠の家で事務所の中澤さんから学校からの心尽しのキャラメルをもらい受け、それを固く握りしめた時1個のキャラメルにも遠い学校の様子がありありと頭に浮びました。昨年は此の辺はもう薄暗かったが、今年は未だ4時が少し過ぎたばかりだ。石ころの坂道で私は幾度か転びそうになりました。

雨は風さえ交えて、横なぐりに吹き始め、落ちた枯葉が溝から溝へ、重たそうに転って行く。誰も通らない道へ、私の草鞋の足跡が、はっきりと1つつ付いて行きました。振り返ったが誰も来ない。唯あの物すごい風が雨を地上に荒く叩きつけて居るだけでした。急に寂しくなってきました。行き違った見知らぬ人に岩下君の事を聞いたが誰も知って居る者はありません。細道から本通りへ出ると風も止んで急に賑かになった様だ。頬冠りをした私の姿は自然と人々の目をひきました。足の方なんか、どこからゲートルでどこから足袋だかそれさえ区別がつかえません。ずっと向うの雲の切れ間から不思議にも青空がのぞいて雨もすっかり止んでしまった。その時は青空の多くなるのが、私の何よりの張合の良い事でした。何時か私は駆け足になって居りました。

4時25分、駅と松本方面への別れ道の所に昨年と

少しも変らなく塩尻の検印所がありました。伊藤、篠原両先生が居られまして、岩下君はもう30分ばかり前に出発したと聞かされて驚きました。彼は私をわずか小野からこの間に於て30分も抜いたからです。私は懐中電燈も何も持って居ないので、これから先は不安の様な気がして次に誰か来るかと相当待つて居りましたが、何時迄経っても誰も来ないので唯一人で出発する事に決心しました。明るい間に広丘まで着けば後は所々に人家があるから寂しくないだろうと、おっしゃる伊藤先生の声を残して、歩き出しました。去年は丁度真暗で此所ら辺が最も印象深かった。私は居眠りしながら道端の溝へ落ちた事や、誰かが泣き声を発しながら歩いて居た事が順々に思い出されて来ました。

あたりは何時しか仄暗く、雲の切れ間から落日が残雲を紅く彩り、山も、森も、林も径も、私も、その夕映の中に柔く包まれて居りました。遂に4日の陽も今沈まんとして居る。家路に急ぐ荷馬車と行き違いました。やがて、その夕映えも拭うが如くに消えて、鬱蒼とした松林の間に草や暮色が立ちこめ、雲の絶え間から、月が輝き初めると、遙か向うに松本の灯が松林を透して見えました。再び空一杯に雲が拡がって、月の明りも見えなくなって、冷い風が左手の小高い畠の枝だけの桑をゆずぶって、軽く吹いて居りました。

広丘に着く頃はあの幽玄な夜が静かに迫って、桔梗ヶ原の松嶺が私の心をやたらに急がせました。帽子に白線を巻いた中学生の団が自転車に乗って大きな声で話しながら来て、私の顔を不思議そうにのぞき込んで越して行く。人家と林とを幾つか過ぎると、道の両側は一面に野原の様な所へ出ました。松本から夜汽車が、左手のはるか向うを、闇を衝いて走って行く。あの単純な車両のきしる音が寒いあたりの空気を動かして、やけに私の心細さをそそり立てる。雲が無かったら良い月夜だろう。真暗だ。まるで道だけの世界の様だ。誰かが後からついて来るような気がするので振りかえったが風ばかりが吹いて居るだけ。私の向って居る空が、はうと明るく。多分松本の灯が空に映じて居るのだろう。それが、

私の心を招いて居る様な気がする。いくら急いでも近づきそうもないので狐にでも、化されている様だ。

村井を過ぎる頃、私は全く疲れ果て、その上眠けが加わってどうする事も出来ないので少し休もうかと思つて道端の電柱により懸かりました。……犬の遠吠えに眼をさますと10分ばかり電柱にもたれた儘眠ってしまったのでした。我慢して歩き出したが足が痛くてどうしても思う様に歩けない。自転車でリヤカーをひっぱって来た人が乗れ乗れと非常にすすめました。御礼を云いながら乗れぬ理由を種々話すとその事が解ったのか「うんうん」と返事をしながら黙って聞いて居ったが「物すごい事をするですね」と云って、町まで案内してやろうと、一緒に電車通りの見える所迄ついて来てくれました。

遂に松本駅着、7時20分でした。藤田先生は笑顔でもって迎えて下され旅館迄連れて行ってもらい、岩下君の事を第一番に聞くともうずっと前に元気よく北へ向つたとの事、もう私はこの時彼が新記録を作るであろう事を確信した。私も疲れているが4年生が先に行っているこの時、なんでおめおめと止める事が出来ようかと思つて、藤田先生にもっと歩く事を誓い、大町方面への街道の解る所迄案内してもらいました。

先輩の松高生が2人も来て、応援して呉れたので、元気回復して別れを告げて唯一人急ぎました。もう検印所がないのだと思うと、前途に一抹の淋しさを感じる。道路は此方もやっぱり雨が降つたらしく所々に水が溜って居て、松本で履き替えた草鞋だけが黒い土の上を往復して居る様だ。北松本を出ると、ひどく寒さが募って来て、いくら襟を掻き合せても駄目でした。服が濡れているのが、ひんやりとした感じを起させ凍った様にばさばさしている。足裏からもじくじくと冷える。

新橋、梓橋等のあのモダンなコンクリートの橋を過ぎると、道は濡れては居るがしっとりとして海辺の砂浜を歩く様にざくざくとして気持が良い。どちらも真暗だ。右の方に長野への鉄路の灯が或る間隔をおいて線路に眼前にちらつく。左には豪壮な日本アルプスが、はっきりとした輪郭を画いて、暗闇を

透して、真黒な姿を現している様だ。松本盆地のあの街道を唯1人で進むと私はなんだか神秘的な境地に入っていくような気がする。そして他国の夜の静寂な圧迫は私の胸をひしひしと固く締めつけて行く様でした。歩きながらじっと眼を閉じると、昨夜からの思い出が……出発の時の興奮……それ等が頭の中で、走馬燈の如くに浮んで来ました。はるかな信越線の駅の灯が一点になって、麓にうるんでおる様にぼうっと、輝いて居た。刻一刻と時は過ぎて行く。有明迄はどの位歩けるかと思うと、あまりにも遠い幻影をおいけて居る様な不安が、心の底に浮んで来る。街道は唯真直ぐに北へ。それは私にとっては永遠に解けぬ難題を面前に突き出されて居る様だった。

次の町は豊科でした。私はとうとうこの難題をここで打捨てる事にしました。時間は充分にあったが、自分の力が未だはっきり解って居なかった為、どの位で倒れるのか解らなかったのです。そこに私の欠点があったのです。4年生の岩下君が未だ歩いて居るのに、そして時刻は10時15分であったのに、なぜ私は止めてしまったのか？意志が弱かったからなのです。下級生の諸君達よ、自己の力を疑わずに進め。今迄書いた私の強行遠足の思い出が少しでも諸君の力になったら最上の光栄だ。ではこれから後の君達はうんと頑張って、どしどしと新記録を樹立して下さい。

最後に恥かしい事ではあるが、私は1年、2年、3年の時迄は1回もメダル線迄行った事がなかった者だったのに、競技部に入って長距離をする様になってから、歩ける様になったのです。来年から英雄的な記録を保持せんとする者は、暇な時だけでも良いから平常から長距離の練習をして下さい。かくすれば松本突破は確実であると私は今筆を置く前に断言します。(昭11・1936「校友会誌」)

最初の強行遠足

堀内好訓

待ちに待った強行遠足の日は来た。

「東に甲中あり、西に鹿兒島女子師範あり」と天下に喧伝されている程我が甲府中学校の強行遠足は有名である。恐らくこれを知らない人は少いだろう。仰々甲中の強行遠足がこれ程有名になったのは長い18年の歴史を持つ其のお蔭だと思う。

僕等は今年が初めてのこの強行遠足なので其の前夜は胸がわくわくしたり心が勇んで落着く事ができなかった。やうと寝ついて起された時はもう時間が余り無かった。準備は充分だった。支度を完全にしてお兄と共に家を出た。ひっそりした街路を歩む僕の姿を電燈の光が映し出して影が前から後へと過ぎ去って行く。途中の道は3、4人の人が出ていて「頑張ってお出なさい」と声を掛けて励まして呉れる。嬉しく元気づく。

学校へ着いた時にはもう半ば過ぎ来ていたらしく付添人が門前にずらりと並んでいる。我が子如何にと……。

出発の合図によって一千余名の甲中健児はどつと校門外に吐き出された。此の前、講堂で見た強行遠足の映画と同じような有様だ。人波も次第に解けて、約束の連と一緒に急ぐ。初めて穿いた草鞋が足にきちんと着いてとても軽く足が運べる。友達も非常に張り切っている。あまり長く歩いた経験のない僕等にはちょっと不審に思われたが、かねて先生からの御注意、上級生から聞いた事に従って歩けばよいと思った。足はよし大丈夫だ。きっと遠くまで行けるぞと言う信念を持って一生懸命だ。精神の持ち方が大切だ。空には雲が懸って其の間から月が明るい顔を出す。辺り一面が淡明るい感じた。今年こそと皆物凄い張り切り振りだ。僕も負けないぞと頑張る。歩け歩けの今日に相応しい行事だ。

韭崎を通ったのは午前2時頃、町内で茶の接待を受ける「有難う」と心の中で感謝する。渋谷教頭先生は非常なお元気でぐんぐんと生徒を追い抜いて行かれた。道は長い、どこまでも端がない。此の道を

どこまで行けるだろう。何時もならぐっすり寝ている頃なんだが……と思うと歩きながら迷にうとうとしてしまう。

台ヶ原の休憩所へ着いて弁当の風呂敷包を開いたらしっとりとしていた。戦地の兵隊さん達は今頃何をしているだろう。進軍か、それとも休憩か。御苦労を思うと全く感謝の他は無い。甲中出身の或る人で今支那で戦って居られる兵隊さんが学校に送ってきた手紙に「中学校の時にした強行遠足の体験があって今非常に為になっている」と書いてあったそう。

僕は疲れた足をひきずりながら午後4時頃川岸駅へ着いて其処で止めた。今年始めて経験したので来年からはもっともっと頑張る覚悟だ。又我が校の強行遠足を誇ると同時に此の強行遠足で鍊り鍛えられた強い精神身体を持って何事にも強く当ろうと固く決心した。—1年生の時—（昭和17・1942「強行遠足の意義と其の実際」より抜記）

笹子饅頭

保科太郎

東京オリンピック以後、根性という言葉がいわれるようになったが、私は根性とは早急に築きあげられるものでなく、苦しみの壁を何度か経験しているうちに生れてくるものであると思う。私は母校に在職中、齡三十路をすぎて応召され満州の軍隊に一兵卒として入隊し、終戦後はシベリヤに抑留された身であるが軍隊での度重なる長距離行軍や身の毛もよだつシベリヤの氷雪原野の行軍と抑留生活で生きるためのたたかいに、よくも耐えることが出来たと思っている。それは私にとっては中学時代や母校在任時代の強行遠足の体験が私の強い精神力となってこれを克服しえたと思ひ、今もなおそれを自負しているが、これが私の根性だと思っている。

私の強行遠足の体験は江口校長が創始した大正13年（1924）、当時私が中学1年の時にはじまったものであるが、初回は甲州街道を東へのコースが行なわれた。午前6時から所要時間12時間であったと思

う。然しこのコースは笹子や小仏の峠越えの難関があったので、その翌年からは信州路のコースに変更されたときいている。私の思い出はこの時にはじまるのであるが。当時小柄で気の弱かった私は笹子峠の登り口から江口校長におそろおそろ随行して山道を歩く要領や登山の心得などを教えられたもので、今でも記憶が残されているが、何時しか先生に親しみを感じ笹子駅前の茶屋に招かれて小休止の折に、笹子饅頭をご馳走になったものである。

当時は師の陰をふむことすら出来ない程に思っていた先生、しかも校長手ずから饅頭を戴いた感激は子供心には強く響き印象づけられている。この時に江口校長の躰に、その頃の二銭銅貨大の豆が出て驚きかつ痛々しく感じた思い出などをとおして、今にしていえば、江口校長に饅頭を戴いたからではないが先生の慈愛心と校長自らの実践躬行の範を示した尊い姿に敬慕の念が無垢な私に感受しはじめたものである。

毎年11月3日の明治節、午前零時を期して校舎前庭にうず高く積んだ古傘の山に、晴天を祈って点火した大かがり火、こんなことにも配慮があったのであろう、太鼓の音も勇ましく一路信州路へ出発したものであるが、何時も台ヶ原附近が一つのヤマ場であった、齒をくいしばっての上諏訪駅到着のしじみ汁や善知鳥峠の砂糖湯等今なお胸をときめかすような中学時代のあの思い出は確かに剛健な精神、今でいう根性が培われたと思っている。

私が母校に就任してからはこの中学時代の体験がものをいい、時拾も戦時体制でもあったので後輩たる生徒にも、強行遠足未経験の新任の教師にもよく発破をかけたもので、昭和17年（1942・19回）、昭和18年（1943・20回）は強行遠足の最高潮に達した年であり、その頃国家的にも高く評価されて当時の陸軍省やスポーツ医学界等の関心がたかまり、これが徴兵適齢引上げ案の資料ともなったときいている。

この昭和17年（1942）の4月、強行遠足の科学的究明や冊子発行のため私ども研究班は学校の玄関から松本駅前までの全コースのみちのり実測を計画し、私は嶋田先生と組んで小野駅前から松本駅前までの

道程を測定することになり、早朝から50米のロープを携行して当駅前から善知鳥、塩尻、松本平へと逐次50米毎に測って行ったものである。今おもえばあまりに原始的な測量であったが漸くして夕刻松本市街にさしかかった折、一大事変が起った。市街には大衆が所々に群がり何事かささやき、人心の動揺する様を私どもはいぶかしげに近寄ると、何とニス連報板にアメリカ空母艦載機の東京初空襲であった。時に4月18日であったが私どもの肝をつぶしたこと想像以上のものがあつた。

戦争もこれから激烈になり私もやがて応召の身となったのであるが、終戦後20年の今日、民主主義のかけに人間形成に核心を失ないつつある現時点において、このような行事をとおして、青少年に強固な意志、苦しみに耐えうる根性を培かつて行かねばならないことは、この強行遠足の真価を知る者の共感ではないかと思っている。それだけに江口校長の創意に礼讃を送り、あえて笹子饅頭と題した次第である。(昭和4年卒・元甲府一高教諭)

強 行 遠 足

山 田 茂

進化の過程に於いて直立して歩行し得た生物は、化石で発見された所謂ジャワ原人で今から約百万年前から二百万年前のものであるといわれている。

進化論には諸説があるが、これが人類の直接の祖先といわれている。こうした私達の遠い祖先は、ある時は敵を追い獲物を追うなど生存に必要な足を使用した。また直立することによって脊髄や脳の発達が進められ、やがて知能も発達してついに万物の霊長の位置を築いたのだといわれている。直立歩行はこのような重大な意味を持つものであり、人類にとっては、この歩くことは最も基本的な動作であり、走る、跳ぶなどの基礎体力が培われてきたのである。

大正13年(1924)文部省から全国の中等学校(現高校)に対して、明治節(現文化の日)を祝して何等かのスポーツを実施せよとの通達があつた時、こ

れを受けて立ったのが当時「質実剛健」を校訓と定めた江口俊博校長であつた。校長は即座に「歩く」ことを決断されたが、これには他にも理由があつたと思われるが、以上のような理由もその一つではなかつただろうか。また「鉄は熱いうちに打て」といわれているが、このことは昔も今も変ることのない鉄則であろう。高校生時代は正にこの「熱い」時期に相当するので、この時期にこそ大いに心身を鍛える必要が有ると考えられたのであろう。歩くといつてもただ漫然と歩くわけではなく、制限時間、コース、目的地など其の他のルールを設定し、自己の最善を尽して歩くことであつて、歩行中に起り得る困難辛苦に対してはこれによく耐え得る不撓不屈の根性を要求したのであり、また1年に1回位は自己の体力の限界に挑戦し、これによって自己体力を反省し自覚する機会があつても良いのではないかと考えられたのであろう。

私は昭和5年(1930)の卒業生であり校長の教え子の一人でもあつたから、当然この強行遠足には参加したものであつた。

私は在校中は陸上競技部の選手をしていたので足腰は鍛えていたのであるが、どういふものか長距離は不得手であつた。さて11月2日午前零時を期して一斉に出発したが、私はトップグループの中にあつて信州往還を経て松本を目指していた。だが行程半ばにして足はひきつり出し、その上底豆まで生じ、あたかも針のむしろの上を歩くようなものでその痛さは身に沁みた。しばしば小石の上に乗るその痛さに飛びあがり、思わず悲鳴をあげるという醜態を演じたのである。私は不撓不屈の限界ももはやこれまでと思ひ同行者と別れて早々に列車にて帰途につき甲府駅下車、ホームに降り立った時は痛さは一層増して私の顔は苦痛のため歪んで見えたであらう。跨線橋など恥も外聞も無く四つ這いで渡り、ようやくのことで帰宅して玄関の中でぶっ倒れてしまつてゐた。

私は「恐行遠足など糞喰えだ。もう2度と参加しないぞ。」と心の中で決心したのであつた。ところが翌年になってその時が来ると「よし俺も男だ。今

年こそはうんと頑張ってもっと遠くへ歩いて見せるぞ。」と心を新たに、この強行遠足に挑戦するのであった。若人のこうした心意気は私一人だけではなかったし、こうした愛着が次代へ受け継がれていったことに、この強行遠足の意義が見出されるのではないだろうか。

私の在職中たまたま創立85周年を迎えたが、その記念行事の一環として強行遠足のスライドや沿革誌などの発刊はどうかと提案した結果、私は沿革誌の編集を担当することになった。私は膨大な資料に埋れながら作業をしているうちに、しばしばコースの変遷の有ることを発見したのであるが、これはその時代の交通事情によるものがその主な理由であることを知った。

現在の佐久コースもまた然りであって、以前の信州往還は次第に車両の通行が頻繁となり、歩行には不適當であると判断して、他に変るべきコースを物色したのであったが、やがて極めて無難で種々の条件にかなった現コースが選定されたのである。時は正に昭和37年（1962）であって終点は初回は松原湖、次回からは中込であったが、生徒の「もっと遠くへ歩きたい」という要望に答えて、小諸まで延長したのであった。

私は役目上校長に従い全線を巡察したが、中込終点時代に大いに感激した事実が2つあった。

その一つは、白田の救護所の依田酒店であったが、毎年のように私費を投じ茶菓、果物、飲食物の接待をして戴いたことである（85周年記念には表彰を受けられた）。

他の一つは、終点中込であったが、駅前広場には「歓迎甲府一高強行遠足」と大書した横断幕を張り巡らしたり、婦人会からは白エプロンを着用した多くの婦人達が出動して茶菓の接待や疲労者の手当などして戴いたし、それに町では宣伝カーを繰り出して生徒の通過をアナウンスしてくれたりしていたし、またある商店ではリンゴ数箱を進呈してくれたりしたのであった。これには私達は大いに驚きもし、感謝感激の何物でもなかったことを覚えているのである。だが私はふとこの時頭の中を横切った影があっ

た。それはもしこれが逆の立場であったなら、山梨県側では果たしてこんなことをしたであろうかと。いささか気になったのは私一人だけではなかったのであった。

さて私は18年間の在職中、強行遠足の運営に参画させて戴き年次を追ってその実施内容に改善を加えてきたが「安全歩行」はその重点目標であって、これを軸として実施計画を立てたものであるが、万一重大な事故が起きたとしたら、これは直ちに強行遠足に終止符を点ずることを意味するものであるから、今後共強行遠足を存続させるためにもこの「安全歩行」を肝に銘じなければならない。特に主役でもある生徒諸君は決して「親の心子知らず」や「笛吹けと踊らず」式では困るのであって「安全歩行」のためには絶対にルールを守り実施要項に従い、自己の体力に応じた歩行計画を立て細心の注意を払い、決して事故など起こさぬ歩行を心掛けて戴きたいと願うものである。

私は強行遠足終了後、各救護所の係から「異常なし」の報告を受けた時正直ホット一息つき「やれやれ」と胸をなでおろしたものであって、これは私の偽りのない実感でもあったのである。

私が退職して既に12年を経過したが、其の間ずっと強行遠足を見守ってきて、本年度で通算57回目を迎え、佐久コースは21回を数えるとは実に歳月の早いことを痛感している。

私はかつて小諸の城跡に登り、遙か浅間山の噴煙を望み、また藤村の詩に慕情を感じたものであった。まことに佐久コースは私の思い出の一つでもあったのである。

此の度佐久コース20回を記念して記念誌を発行する由、まことに結構なことで期待しているが、私のかつて沿革誌編集時の苦勞を思い出し、同様に御苦勞の多いことを推察しつつ立派な記念誌発刊の成功を心から祈念する次第である。

（昭和5年卒・元甲府一高教諭）

強行遠足の思い出

岩 下 龍 一

強行遠足後の長い時日の経過は、当時の印象を大部剥ぎ何回か参加した此の行事は相当記憶を混乱させてしまった。今ここに数回強行遠足を通じて比較的印象されたところの2、3を断片的に述べて見みよう。

* * *

辰野からの路は左右の山をうねうねと北上している。私は先刻からこの道を急ぎに急いでいた。日没後の狭い谷間を登っていた夕焼雲は最早、黒ずんで同時に道の両側の稲田に、行手に暗闇が立ち込めていた。此処何処に点在する民家にも灯が入った。唯一人夜に追われているような寂しさと、ちらちらする灯によって惹き起こされるホームシックで私は全く拠りどころと平静さを失い、小野の余りにも遠いののにいらいらして歩いていた。もう大分歩いた、直ぐ其処が小野に違いない。すぐ其処迄行って見たが小野ではなかった。がっかりする。その先でも亦がっかりする。こうして何回かの失望を繰り返した。小野は私から逃げて行く。私は小野を憎み、腹を立てた、そして正に破裂せんとする癪癪に歯を喰い縛ってこらえた。実に辛かった。——2年生の時——

* * *

松本を過ぎると極度の疲労で自分の身体の疲れも忘れ、歩く事に何等の苦痛も感じ無くなる。一方頭の働きは鈍って5、6才の子供程度を出なくなってしまう。とにかく私は此処でも依然たる元気で歩き続けた事を記憶している。然しはたから見たら死に損なった野良犬の如くであったかも知れない。もう時間も遅い、行き会う人も無い道に沿った信濃電鉄線（今の大糸線）の電車が時々スパークし、眼を射、轟音が徒らに響き窓の灯が明るい、煌々と電燈の灯った駅を幾つか過ぎた。既に意識は朦朧としている。ある駅の前で警察官に捉ってしまった。うるさく訊問して仲々許してくれない、もう定刻24時に近い、やっと許された時私は傍の駅——会梁駅——に入り込んで行った。——3年生の時——（昭和11年卒）

（本稿は当時東京帝大法学部在学中の追憶記である。昭和10年（第15回）の最高記録（会梁140.4キロ）保持者である一昭和17・1942「強行遠足の意義と其の実際」より転記）

私の甲府中学時代

中 村 位

昭和16年（1941）4月入学、昭和20年（1945）3月第4学年卒業という経歴をみておわかり戴けるように、全員が旧制中学4年という前にも後にも例のない学年が私達、いわゆる「六浦組」である。大東亜戦争が始まった年に入学し、終る年に卒業したので、在学中援農作業をし、予科練に多くの入隊者を送り、4年生になると、勤労動員令により全員が「海軍航空技術廠」に動員されました。宿舎が横浜市磯子区六浦町にある六浦寮にあり、工場は横須賀市追浜にある海軍直属の工場でした。従って私達の思い出は、戦闘帽、ゲートル、予科練、地下工場などです。それでも1、2年生の時は、鉄筋三層樓の1階と2階で、忠一先生、鳩三先生、トクさん、等今は亡き名物先生に教えを受けた思い出は今でもはっきり憶えています。

そして強行遠足です。昭和18年（1943）11月3日が戦中最後の強行遠足で、この年は200名近くが松本まで行き、すばらしい健脚を内外に示しました。私も夜中の11時45分足の裏をマメだらけにして松本にたどりつき、翌朝松本駅のブリッジをよつんばいで上った事を憶えています。

この様な時代に育ったせいか、皆忍耐強く、誠実に生き、今でも全員で年1回「六浦会」の名のクラス会を開いて恩師をお招きしています。毎年70名近く集り、お互の健康を祝すと同時に、中学時代をなつかしんでいます。（昭和20年卒・昭和63年度・1988「第108回同窓会記念誌」）

私の中学時代

諏訪 一雄

私どもの中学時代は、一番波乱に富んだものではなかったろうか。先ず小学校が国民学校と変りしかもその最初の卒業生。しかしながら、やはり2本の白線に桜の徽章の学帽は、当時の憧れの的であった。ところを見ると聞くとは大違い、その勉強の熾烈さはかなり厳しいものがあつた。自分で選んで入った学校とはいへ、それなりの努力は覚悟しなければならなかった。

在学中で特に強烈な思い出としては、やはり2年生の時の強行遠足、夜中の12時に校長のピストルで信濃路へひた走することは、今と大差はないが、特にこの時は、記念大会とあつて、全校各クラス別の対抗であつた。今までは何とはなしにメダル線を越れば程度の考えでは、済まされない雰囲気から、松高に在学している先輩の黒いマントに包まれて、塩尻峠から松本まで夢中で歩いた思い出は、今でもその達成感と先輩のぬくもりが忘れることができない。

3年生になると、時局は戦雲急を告げ、朝礼で、故人となられた坂齊先生の「月水金、勤労奉仕を行う」の説ある声、出征した留守家族の農作業の手伝い、桑の根っこ切り、上蕨の手伝い、ブドー園の草取りなど、食糧事情も悪くなってきた頃であるので、作業が終って、集合場所での会話は、「オイ俺のところは待遇が良かったぞ!!」と食い物の話に花を咲かせたのも懐しい。

その年の夏休みが終る頃遂に同級生は先輩達と同じように、大船の海軍燃料廠へ動員、私は皆より一足先に、甲種飛行予科練習生として土浦航空隊へ、ピッカピッカの7つ釦、しかしその扱われ方は言語を絶したもの。兵舎間はすべて駆け足、歩いているのは許可を受けた具合の悪い兵隊だけ一寸失敗すれば、アゴ（ゲンコツのピンク）。これなら程度も良い方で、お尻を目掛けて、野球のバットより太めのもので1発、2発、尻が痺れて眠れない夜も、でも今考えてみると、割合箱入り息子に育てられ、大人しかった私には、この1年間は、現在に至るまでの

私の人生観を大きくよりよい方向へ転換してくれたものと思っている。

終戦で意気消沈して家に帰ってみると、学校からの復学通知、登校してみると仲間が同盟休校の真最中、このように1年間ぐらひは、満足に勉強しなかった私達が社会に出て、最近職場に雇傭されてくる若い人達の様子を見るとき勉学から生ずる実力・創造性、積極性・忍耐力などの無いのは、どうしたことであろうと考える今日この頃である。私も来年は還暦、年寄りの冷や水であろうか。世は国際化時代。世界のなかの日本人として、21世紀を目指して、若者に大いに飛躍して欲しいものである。（昭和21年卒・昭和63年度（1988）「第108回同窓会記念誌」）

強行遠足と私

今 福 利 重

近藤兵庫校長先生の右手が高々と拳がりピストルが乾いた鋭い音を発しました。昭和21年（小生中学一年）10月29日の正午でした。

心地良い不思議な世界

何故か高鳴る胸、その熱さを感じながら校門を歩き出しました。すると走って行く上級生がたくさんいるではありませんか。この行事名には「遠足」の文字が入っています。ですから24時間をずうっと歩くものとはばかり私は思い込んでいました。走る上級生の勢いとその雰囲気に呑まれたように「…では自分も走っていいんだ。」と走り出していました。するとどうでしょう。そこには全く予期しなかった不思議な世界がありました。

足は軽く、呼吸は全然苦しくありません。はす負いの15個のおにぎりもさ程肩に重く感じないではありませんか。それ迄長距離走は一度もやったことが無いのに「あれっ、自分にはこんな走りができる…」そんな思いが頭をよぎりました。むろん上級生のように速くは走れません。苦しくならないようにと本能的にトコトコのマイペースで走っていました。その按配はとても心地良いものでした。その時の快感

は今もって記憶に鮮明です。

松本へ松本へ

登美のトンネルを抜けて間もなく、後方から走って来た寺田和男先生が「余りとばすとへばるからセーブして…」と声を掛けてくれました。「はあい」と返事をして、そのままトコトコと走り続けました。やがて先生の背中が小さくなりその先のカーブで見えなくなりました。

葦崎検印所は23番で通過、台ヶ原辺りで走りがつくなり出し速歩に落ちました。時折小走りを交えながら午後9時頃しじみ汁の上諏訪へ到着、さしかかった天竜沿いの、夜半に降り出して明け方近く迄続いた小雨は、小野の辺りで一時本降り模様となりましたが、速歩の体熱で濡れた服も乾くのかさして苦になりませんでした。道は初めてなので、上諏訪辺りで一緒になった松野正弘(4年)、牧野永俊(同)両先輩に随いて午前8時25分、第2グループで松本に到着しました。

出発前に、くり返し何回となく聞かされて頭に焼き付けられた《松本》で、まるで1日分の野良仕事を終えた時のようなほっとした気分になり早々に、10時発甲府行の汽車に乗り込みました。

強行遠足と精神力

初参加の強行遠足が終り、周囲から「君は精神力が強い…」とよく言われました。しかし、私にとって強行遠足は、たっぷりの24時間を、トコトコのマイペースに徹し、その心地良さに浸っていたようなものですから、何回そう言われてもピンと来ませんでした。

そこで、中学2年の強行遠足で実験することになりました。豊科辺りのことです。いくらトコトコペースでもさすがに松本辺りから疲労が全身に溜り出し、足の筋肉には硬直が始まっていました。それでも上諏訪で小走りから切り替えた速歩は結構快調でした。ここでいよいよ「精神力」の実験開始です。

意地でも50歩は走ってやるぞ…と駆け出しました。ところがもう体はバネが皆無で鉛のように重く20歩も走れませんでした。すぐにトコトコペースの速歩に戻しました。なまじの意地で、むしろ実験前より

体が重くなっただけでした。そして、私にとっては強行遠足に限らず何事もゆっつりのトコトコペースが最善だ、と再確認したものでした。

精神力は、思考中心の活動にはかなり有効であっても、体中心の活動では私の場合無効でした。

強行遠足に6回参加、その結果

当時、強行遠足のコースは、学校―上諏訪―辰野―松本そして大糸南線沿いでした。日程は、10月下旬の正午出発、翌日正午までの24時間でした。強行遠足は、私の入学した昭和21年度(旧制甲府中学の最終年度)に再開されました。前年度は敗戦による諸事情で実施されなかったのです。それで私達の学年は、強行遠足に中1から高3迄6回参加した唯一の学年となりました。

私の結果は後掲別表の通りですが、6回の到達距離合計は840km、平均140km(ちなみに信濃松川は141.3km)でした。

どうしてこの結果となったのか、いろいろと考えてみました。

結果の原動力・1

結論をひとまず要約すると「強行遠足に私の体力・気質が程良く合っていた。」ということになります。

中1の時期の身長132cm、体重34kgで矮小でした。高3の実施日前10日間に、下校の下車駅から自宅までの3kmを7回程走りましたが、強行遠足のために特別のトレーニング、などそんな関はありませんでした。小1の時期から登校前、下校後、登校日以外の休日は殆んど生家の農業の手伝いに追われていましたから、その合間に通学といった状態でした。小学6年間の通学距離は毎回往復6km、中・高のそれは毎回往復9kmでした。一方、猫の手よりはまして小学校入学以前から軟弱な畑、泥田を動き回っていました。そんなわけで足、腰、腹筋、心、肺がいつの間にか鍛えられていたようです。

気質といえば、「忍耐・努力」がどうにも気性に合わなくて、小1の頃よりはたから掛けられる「頑張れよ」、「一生懸命やれよ」の声はとくに嫌でした。そんな声を掛けられたり、気が向かない事があったりすれば、途端に心身の動きがなえてしまう性分

した。気が向くとゆっくりしたペースで事は、いくらでも長続きして飽きは来ないたちでした。今もってそうですが。

強行遠足は、とくに気に入った行事でもなかったのですが、実施の2日間とその翌日（結果報告の登校日）の3日間は野良仕事の労苦からともかく開放される、といった気分でした。

結果の原動力・2

当てはずれました。結果報告から下校すると稲刈が待っていました。それから1ヶ月ぐらゐの間に、新聞紙上で結果を知ったあちこちの親戚からいろんな話が寄せられました。その中に初耳の事実が二つありました。

その一つは、父方の従兄弟が山梨農林学校2年・3年（昭和8・9年）当時、同校の第1・2回の強歩大会で連続トップを記録していた事です（一之瀬芳明氏・旧姓丸山・80歳・玉穂町に健在）。

他の一つは、母方の従兄弟が甲府中学で次の3つを記録していた事です。それらは、日に増し寒冷の11月3日真夜中零時の出発、終了は疲労の極まる次の真夜中の零時、と言う条件下でのものです。

①3年（昭和6年）で松本へトップ到着・5～6名のグループ到着の中の1人

②4年（同7年）で上諏訪へ単独トップ到着・降雨のため上諏訪が終点となる

③5年（同8年）で有明へトップ到着・単独到着で全校新記録

（雲場孝朋氏・82歳・櫛形町に健在）

上の二つの事実は「強行遠足に適合する良好な資質が父方・母方の双方から、たまたま私に集中遺伝していた。」ことを強く推測させる事実です。これこそが結果の基本的原動力である、と思われてなりません。

ある日、同じクラスの望月輝哉君が「お前の籍は馬籍か…」と言いましたが、上の二つの事実を知る由もなかった彼の譬喩は正に本質を衝いたものでした。

結果とその原動力についての結論

結果の原動力とは、つまるところ「父方と母方か

ら私にたまたま集中遺伝していた、強行遠足に良く適合する体質、気質が土台となり、それと私の成長過程の諸動作とがうまくブレンドされて、より強行遠足向きになっていた。」に尽きます。

結果は、「…を目的意識的にしたから生まれたもの。」ではなく、「たまたま…だったからそうなったもの。」としか思えません。言い換えれば結果は、「たまたまの…が私にそうさせたもの。」です。

強行遠足の魅力の正体

強行遠足を終えた直後の極度の睡魔、疲労、体のいろんな部位の痛みなどによって、こんな事はもう2度とやりたくない、という思いが一過性にせよ少なくとも一度は頭をかすめた参加者は少なくなかったと思います。私はそうでした。

ところが強行遠足を1度でも体験した生徒は、夏休みが終わって秋風が立つと胸さわぎが始まるのです。一方、これから初めて強行遠足に参加しようとしている後輩達には、得も言われぬ期待感を抱かせるのです。そのみかこの行事は、73年の歳月と70回の輝ける実績に裏打ちされた伝統となり、多くの県内他校に早くから採用され定着しています。

文明の利器が溢れる時代にあって、只ひたすら歩くという強行遠足のこの不思議な魅力、その正体とは何でしょうか。単なる「体位向上」、「教育的効果」では説明し尽せないものがあります。私なりにその正体をあえて挙げれば、基本的には次の三つです。

①強行遠足創始校としての実績と伝統

②一過性的速効のレベルを遥かに超えた次元での、おのおのの人生を貫き支えてくれる何らかの強い力、の獲得

③24時間の原始的で単純な直立歩行

魅力の根源的な正体

魅力の基本的正体を以上とすれば3つのうち最も根源的な正体は③であると思われます。

乳児が手・足4本の這い回る動作から、初めて直立歩行を成し遂げた瞬間に見せる、あの歓喜に溢れた表情、身振りは、初めて直立歩行を獲得した人類の祖先が、その歓喜を続く限りの人類の子孫に伝えていることの現われであって、その歓喜はそれ程強

烈であった、と言えないでしょうか。

歩く、走る、という動作それ自体は極めて原始的で単純ですが、直立歩行の延長である短、中、長距離走、マラソン、駅伝、跳ぶなどの競技に、それを本人がやると否とに関係なく人は何故あれ程惹かれるのでしょうか。それは言うまでもなくそれらの動作の原点にあの歓喜の直立歩行があるからです。普段意識していなくても、人類の祖先が味わった歓喜と乳児期に各人が味わった歓喜の双方を、意識下に記憶しているからではないでしょうか。

強行遠足の不思議な魅力の根源的正体は、この行事の唯一の要素「24時間の原始的で単純な直立歩行」であると言えます。

みなさんはどう思われるでしょうか。

是非記しておきたい事

6回参加した強行遠足では、数多くの方々の温かい配慮とおもてなしを戴きました。ここでその遂一に触れられないのは残念ですが、どうしても記しておきたいのは次の事です。

松本から未舗装の砂利道を、自転車の通常速度を

落として、速歩とはいえその鈍った私のペースに合わせてギーコギコ、安曇杵掛迄(28.2km)を付き添ってくださった雨宮重治先生、信濃大町迄(37.3km)を同様の阿藤敏夫先生、そして、信濃木崎迄(41.6km)を同様の宮崎為雄先生、半世紀も前のあの三先生の御苦勞です。心底頭が下がりました。

強行遠足で獲得した力

強行遠足を6回体験して私が獲得した力、それを文字にすると「雖鈍遅、持久通天」です。自分の気質・性分に確信を持ったのです。

この7文字に私が勝手に意味づけているのは次の通りです。「鈍くても遅くても長期の目標・目的に対しては、その達成に必要なことを、三割の余裕をもって継続して行なえば、それなりに納得の行く結果に到達する。」

詳述は避けますが、50年の歳月を経て「雖鈍遅、持久通天」は、私にとってより強固で頼り甲斐のある力となっています。

6年間通学した学校に「強行遠足」という行事があつて私は実に幸運でした。(1997.4 昭和27年卒)

強行遠足の結果

今 福 利 重

1. 年度別実績

年度(昭和)	回	学	年	到 着 駅 (線 名)	到達距離(km)	学年順位	学年記録	全校順位	全 校 記 録
21	21	中 学	1	松 本(篠 井 線)	115.3	1			
22	22	併 設 中	2	有 明(大糸南線)	133.7	1	新	3	
23	23	〃	3	安曇追分(〃)	138.0	1	新	3	
24	24	高 校	1	安曇杵掛(〃)	143.5	1	新	2	新
25	25	〃	2	信濃大町(〃)	152.6	1	新	1	新(到着時間)
26	26	〃	3	信濃木崎(大糸北線)	156.9	1	新	1	新
合 計	6	(6回参加は21年度入学生のみ)			840.0	6	5		3
平 均					140.0				

*大糸南線・大糸北線：昭和32年8月統合、大糸線に名称変更。

2. 要 約

- ①参加回数……………6回
- ②合計到達距離数……840.0km
- ③平均到達距離数……140.0km
- ④学年1位……………6回
- ⑤学年新記録……………5回

- ⑥全校1位……………2回
- ⑦全校新記録……………3回
- ⑧その他

A. 中1の松本：第2グループで到着
B. 高3：超信濃大町第1号

心の中のコロニアル・イエロー

芦澤 一 洋

甲府一高を卒業してから、もう30年以上になる。その間一度もあの懐かしい場所に足を運んだことがない。しかし、何度もいつも、その時代、その風景が、私の喉の裏をよぎっている。その度毎、胸が熱くなる。

思い出すだけで、腔中に苦い唾液が満ちてくる深い悔恨もある。そのシーンが今もときおり夢のなかに登場してくるのだ。

当時は、そう考えていなかったのだが、今になってみれば、あの頃はまだ少年。何をするにも、もっと思いきってやった方がよかったと思う。誰の目も気にすることはなかったのだ。気をつかったつもりで、小さな水の輪しか作らなかったことが、今はしきりに悔まれる。それにしても、すべてがなんと懐かしいことか。

一高の校門をくぐったのは、実は1年生の春がはじめてではない。それより4、5年前の小学5年か6年の頃だった。その日、私ははるばる鯉沢から身延線に乗って、一高のグラウンドまで野球を見にきていた。身延高校と甲府一高の試合だった。後の巨人軍の2塁手、内藤博文選手が、多分活躍していたはず。私はそう思いこんでいる。

あれは春だったのだろうか。それとも夏だったのか。グラウンドを走りまわる白いユニフォームの姿も確かに憶えているが、それよりも一層鮮やかなのが、明るい日差しの中、くすみをおびてそびえるコロニアル・イエロー、背の高いその校舎の偉観に圧倒された記憶である。

新入生としてその校舎に足を踏み入れたときの感激は、それ故に一層強いものがあつたかもしれない。

しかし、その甲府一高、学園生活は考えていたより、はるかにタフなものであった。学業の点でもまた運動、通学の問題においても。

早々から登美の坂までの1万メートル、そして春の終りの盆地を1周する3万メートルがあった。

楽しさを感じたことはなかった。ただ辛かった。

出来れば避けて通りたかった。そして秋の、あの強歩大会だ。あれは正式には何と呼ばれたものだったのか、私は覚えていない。

映画を見た。安曇野の道をひとりの高校生が走っていた。確かに勇気が湧いたものだ。そして太鼓が鳴った。

オリエンテーションでの説明をしっかりと守った。夕暮れて疲れと心細さを感じはじめた頃、放らつ至極の上級生がみるみる私を追い越していった。約束のひとつも守られていない感じだった。

上諏訪の町、道路脇の側溝から湯気があがっていた。それに足を浸した。もう、家には帰れないような気がした。

残念ながら私はとうとう松本の町を目にすることなく、3回の大会を終えた。それが深くふかく、私の心に傷を残した。

私は歩く人になった。限りなく歩くことに、心ひかれる男になった。自然のなかで夜を過ごすことの好きな人間になってしまった。

やり残したことがある、30歳を過ぎたある日、私はそう思った。甲府から松本までを歩いてみたい、そう思ったのだ。未舗装の、あの、茅野、青柳の街道、荷車をひきだし、歓声をあげ、放らつの限りを尽して、思いきり、大人たちのひんしゅくを買う。あれはもう夢の世界でしかないのだが、とにかく私は納得したかった。やれば出来たかもしれない。いや、やれば出来たさ、私はそう思ったかった。

それから、しばらくして、私は歩く人になっていった。

考えるまでもなく、今の私の生活のすべての根は、あの山と盆地と川を見て過した少年の日、甲府一高の時代にある。

中央高速道を走って松本に向うとき、甲府市街の外れで、私の目は必ず、あのコロニアル・イエローの、背の高い校舎を捜している。（昭和31年卒 昭和63年度・1998「第108回同窓会記念誌」）

手記

岩間孝吉

青年期の象徴としての強行遠足

人生がよくマラソンにたとえられるが、高校時代の強行遠足は、わたくしの青年期をよく象徴しているように思われる。

16歳の高校1年時代、甲府一高に入学したわたくしは、2、3年生にまじって伝統の強行遠足に初参加した。とにかく、24時間で行けるところまで行ってみようとはりきったが、雨のため上諏訪で中止となり帰ってきた。

17歳の高校2年時代、サッカー部で鍛えられつつあった足にものをいわせて、少々気負いたって出発したけれども、穴山橋で腹痛のため落伍して帰宅する破目になった。

18歳の高校3年時代、学業の面での不振などによる劣等感にさいなまれつつも、サッカー部の練習にはしがみついていた。また、自己の精神面での充実を求めたかったのだろうか、ハイY（高校YMCA）運動に加わって活動を続けていた。

24時間で167kmに行く

1957年（昭和32年）10月14日、その日はうすぐもりだったが、比較的暖い日だったように記憶している。学帽、学生服、白いトレパン、くつ下にアップシューズ、という服装であった。腰のベルトには手ぬぐいをはさみ、ポケットには、学生証、検印カード、ちり紙、帰りの汽車賃、手袋などを入れた。肩から斜めにかけた小さな布カバンには、約3食分の小さめにつくったおにぎり、わらじ1足、キャンデー（ドロップ）、ふろしきなどを入れてあった。

午後4時、甲府一高校庭を太鼓の合図とともにスタート。走る集団の中程より少しうしろのところを、自分なりのペースで走り続けた。荳崎の検印所を通る頃は大勢だった人の群も、少しずつまばらになり、釜無川の土手の辺を走る頃は、2年生のK君といっしょになって2人で励ましあいつつ走り続け、台ヶ原の辺で先頭を行くと思われる数人に追いつき、追い越して国界橋の先まで緩走したように記憶してい

る。富士見には、夜10時5分に到着したが、（41km地点）、この辺までの平均時速約7kmである。

夜の甲州街道を松本方面を目ざして走り歩き、歩き走りを交互にくりかえすやり方で塩尻まで行った。途中、岡谷（72km地点）には夜中の0時57分着。富士見、岡谷間はややペースをあげ、平均10kmくらいで走った。例の岡谷のしじみ汁を立ったまま、足ぶみしながら、寒い外気の中ですすり、検印をしてもらうと足早に出発していったように思う。富士見から塩尻峠あたりまでの間は、用意していったわらじをはいて走り歩いたように記憶している。全行程の中程の3分の1にわらじをはき、初めと終りはアップシューズを用いたことになる。

暗やみの塩尻峠の検印所で、先生方がたき火を明るくして待っていて下さった。夜明けの前の一番寒い時間帯である。おり悪しくも、2人で歩き続けてきたK君が、峠を下りはじめた頃から身体の不調を感じ、2人はペースをおとした。松本検印所に2人で着いたのは、10月15日の朝8時5分であり、朝の通勤・通学の人たちの行きかう松本の町であった。

残りのおむすびとキャンデーだけをふろしきに包みなおし、肩からかけて、他の不用になった荷物をおき、少し身軽になった。K君も検印所の先生がたがみて下さり、1人で先をいそぐことになった。塩尻からゆっくり歩きつづけたおかげで、体力も少し回復したように感じられた。

松本から先は、先頭の人だけ付添いの先生が交代で付いて下さるとのことで、体育科の先生が自転車に乗って走り、わたくしはマラソンのような調子で走ることを再開した。松本から豊科（127km地点）あたりまで、平均時速10kmくらいで走りつづけた。2・3人の先生が交代で自転車による伴走をして下さったが、松川あたりからだったろうか、先生も自転車でなくいっしょに歩いて下さる方が1人付かれた。豊科あたりから少しペースが落ちはじめ、大町（151km地点）ころには、平均時速6kmくらいとなり、大町をすぎると時速5kmくらいにダウンした。

大糸南線、木崎駅に着いたとき、ここまでが今までの最高記録のところだよ、と先生が言って下さっ

たことをおぼえているが、疲労困ぱいし、あまり明瞭な返事もできなかったように思われる。木崎（15.6km地点）に、午後1時45分着、制限時刻の4時まであと約2時間ちょっと。もうこのあたりでは、水分を補給するくらいで、食物はのどを通らない有様だった。木崎の次の海ノ口までは約3km半なので、とにかく1つの駅だけはがんばって行こうと思い、自分を励ましつつ歩く。

海ノ口に着くと、1時間半くらいの時間がさらに残っていたが、次の築場までは、約7km半ある。何とかもう一つくらい行けるのではないか、1時間半残してストップは残念だ、との先生の励ましをいただき、足はすでに棒のようであったが、行くだけ行ってみようと思いに決め、歩きはじめる。それでも大町から築場（167km地点）まで平均すると、時速5kmくらいで歩いたことになる。築場の駅舎が見えた時には、本当にほっとした気持ちになっていた。駅の待合室のベンチにすわって大きな掛時計をみると、3時45分であった。

先生が、次の駅は白馬（当時は築場と白馬の間には駅はなかった）だが、15分ではとうてい行けないので、ここで止まることにしようと言って下さり、駅長さんに検印カードの印をいただいて再びベンチにすわったら、どっと体中の力がどうにかなったという感じであった。腰から下の筋肉が硬直し、容易に曲がらない有様であったが、頭の中ではボーとした気持ちのまま、松本行きの汽車を待っていた。

経験とは最良の教師である

20年以上たった今、強行遠足という学校行事を通じて受けた教育、学んだことの意味は、何だったのかと考えてみると——これを体験することによって、自己教育の場を得たこと（自分自身を強行遠足という場に投入することによって自己教育すること）だと思う。

百万遍の言葉による教育よりも、1つのかけがえないこの体験が自己をつくる、といったら言いすぎだろうか。こういう体験による自己教育の場を周到な準備によって用意しつづけて下さったことを感謝したいと思う。また、そういう場に自己を投入し、

自己をみきわめることの重要性を感じられる青年（高校生）の感性（人間性）を責いことだと思わずにはいられない。

来 信

寺 坂 俊 子

前 略

突然のお便りお許し下さいませ。実は、18日夜10時からのNHKの「新日本紀行」を何げなく見ておりまして、懐かしい強行遠足の姿を見ることができ懐かしさのあまりペンをとりました。

この大阪で（主人の転勤でこの8月に千葉から引越して参りました。）母校の名を、そして、あの思い出多い“青春の証明のような強行遠足”を見ることができようとは思っても見ませんでした。昔と変わらぬ白のトレーパン、首にまいたタオル、腰につけたふろしきづつみ。足を棒のようにして最後まで歩き抜いたあの感激……。

「へえ、行かんでもいいだな。」という懐かしい甲州弁。菌をくいしばって歩いたあの真剣な美しい姿。先生方も級友も一心に励ます姿。画面を見ていて、私はとめどなく流れる涙をどうすることもできませんでした。

そして、もう19年も前の昔のことがありありと思い出されました。

今も変わらぬ街道の家の心暖まるお心づくし。足をロボットのようひきずりながら深まりゆく秋の美しい景色を見て、ふっと心がなごんだこと。友と励まし合いながら一步一步信州路へと歩いたあの懐かしい場面が、はっきりと昨日のように思い出されます。そして、富士見にたどりついたあの感動は今でも忘れられません。

こうして遠く両親のもとを離れていると、あの時の母の作ってくれたしそ入りの一口大のおにぎりの味は、何よりも大事な母の愛情のようにさえ思われます。そして、小学3年、4年の2人の子どもにこんな思い出を作ってやりたいと思いながら、遠足な

どのお弁当を作っている私です。

放送で50何回目と話していました。ああ、まだ続いていてくれたんだな。兄は松本まで行ったっけ。そして、同じ道をまた弟も歩きました。

いつの頃だったか交通が激しくなったので、中止になりそうだとか、コースを変更したとか耳にしたことがありました。でも、こうして続けてくれたんだな、と伝統の重みのすばらしさをつくづく感じました。と同時に、お世話になった窪寺先生、斉藤先生。寺田先生などのお顔が次々と浮んできました。このように伝統ある甲府一高で学べたことに誇りを感じます。

今の子は、現代っ子はと、とかくいろいろ言われますが、あの目的に向かって無心に歩き続ける清らかな青春の心意気、純粋さと、「3年間どうもありがとうございました。」というさわやかな挨拶をするのを見る限り、根底に流れるものは今も昔も変わらないと思いました。

20年近くたった今でも、あの強行遠足で頑張りぬいたことが心の支えになることがあります。交通事情他、様々な件で昔とは変わっていて大変でしょうが、どうぞ、この貴重な「歴史の歩み」をいつまでも続けてください。

秋の1日、夜を徹してあの強行遠足をやりぬいて下さった先生方と生徒の皆さんに一言御礼を申し上げたく、思いつくままにペンを走らせました。

最後に甲府一高の今後のますますの御発展と先生方の御健康をお祈りいたします。

乱筆乱文お許しく下さいませ。かしこ
(昭和35年卒)

甲府一高時代のこと

望月達史

昭和47年(1972)4月、私は身延中学から甲府一高に入学した。確かその数年前から甲府南高との総合選抜制が始まっており、私達の選択の自由は半分

になっていた。希望どおり一高に入れたものの朝が早いには初めの頃少々参った。家を出るのが朝6時、歩いて峠を一つ越え身延線に揺られて1時間半、一高の道のりは遠かった。当時はストも多く、特に春闘の時期には友人の家を泊まり歩いたものだった。定期代は半年で7000円、国母駅から南は家も少なく、畑が広がっていた。中央高速ができ、リニアモーターカーが現実のこととなった現在とは隔世の感がある。

昭和40年代前半は一高にも政治の嵐が吹き荒れたようだ。私の入学時にはその名残りはほとんど無かったが、入学時の校長先生であった根津修蔵先生は折に触れて当時の苦勞話をされていた。

在学中、日本を揺るがした経済変動があった。昭和48年(1973)秋のオイルショックだ。昭和49年(1974)元旦の朝日新聞社説には「とめどもないインフレの進行、石油危機による日本経済と暮らしの不安が、自民党政権と各政党に対して重大な問題をつきつけようとしている。(中略)石油危機と経済の混乱で、かつてなく多くの国民大衆が政治への期待感を失いつつある」とある。公共料金は凍結されしばらくは上がらなかったが、それ以外の物価は確かに上がった。私は昭和49年4月から下宿生活に入ったのでそれは痛切に感じた。日新ホールのメニュー3本柱、ラーメン、カレーライス、フライ丼(ハムカツ丼であった、今でもこのように呼んでいるのだろうか)も20円程度上がって80円から100円程度になった。下宿料金は6畳1間1食付で1月1万4000円であった。この料金は上がらなかったが、下宿のトイレの紙質は1時期確実に落ちた、これはよく覚えている。

一高時代の出来事で最も印象に残っているのは何といっても強行遠足だ。昨年の秋、教育テレビで放映されたのを見て改めて感激し当時のことを思い起こした。あの頃はコースは現在とはほぼ同じだったが、清里、野辺山はまだ「リゾート地」ではなく、いずれも旅館が何軒かあるくらいだった。昭和47年まではOBの参加が許されており、その年、当時中大学生であった内藤泰蔵氏(昭和42年卒)に叱咤激励され

ながら私はトップで小諸に辿り着くことができた。あの感激は今でも忘れない。2年(2位)、3年(3位)と強行遠足は私の高校生活において大きな節目となり印象深い思い出となった。甲府一高の強行遠足は全国に冠たる伝統行事であり、あれだけのビッグイベントを続けていけるところに甲府中学、甲府一高関係者の結束力の強さが現われていると思う。

一高時代の思い出は尽きないが、多くの友人に恵まれ本当に充実し3年間であった。同窓生の1人として母校と同窓会の発展に微力ではあるが尽くしていきたいと思っている。(昭和50年卒 平成2年度(1990)「第110回同窓会記念誌」)

今にして思えば「愛」

小田和 直 子

当時、ふとしたことから体調を崩していた私が小海まで行けるとは、誰一人思っていなかっただろう。トトカルチョめいたお話もあったとか。

いよいよ明朝は出発。眠れぬままに指先で聞く胸の鼓動も心なしか落ち着かなかった。どのくらい経ったであろうか、何時しかまどろんだ私は夢を見た。空も山も川もなく、野原ともいえない野原を私の孤影だけが歩いては止まり、又歩いては止まる……。

小海への道は孤独の道なのであろうか。

「小海まで行くぞ。」当初の決意など呆気なく吹き飛んだ。肉体の限界は精神力まで減ぼしてしまうものなのか、何てだらしない……。そんなふうに分を責める気持ちも次第に弱くなり、私は海の口から松原湖に至る途中の陸橋の陰に腰を降ろしていた。「ここでこのまま時間が過ぎるのを待てば、私はもう歩かなくて済む。こんな馬鹿げたこと、これで終わりだ。」それまでも、次で止めよう次で止めようと思いながら僅かに残っていたプライドから歩き続けて来た私を、前進停止時間の制度が体よく救ってくれるように思えたのだ。

しかし、時間潰しには後ろめたさがあった。「お

前は頑張ったんだ」といくら自分に言い聞かせても私の中の何かが否定した。時折通り過ぎて行く友の「ファイト」とか「頑張ろう」「大丈夫?」とかの励ましに、いかにも気分が悪いかのような空返事を繰り返すことは苦痛だった。たまらない情無さが込み上げて来た。

ああ、みんなが行ってしまう……。私を一人おいて行ってしまう……。

それまで遠くにはんやり聞こえていた千曲川のせせらぎの音が、急に大きくなった。

42kmどころではない。夜を徹して105kmを歩く男子に対して恥ずかしい。否、それ以上に、夫々の悩みを抱えながらも、明るく、前向きに、真摯な態度で毎日に挑んで行く私のクラスメートに対して申し訳ない。もしこのまま終わってしまったら、こんなことくらいでくじけてしまったら、私は2度とあの素晴らしい人たちと肩を並べることが出来なくなる。その資格を失ってしまう。私は、あの人たちの心にふさわしい心を持っていたいのだ――。

立ち上がって再び歩き始めた私に、1年の時の級友が手を差し伸べた。私の腕を支えてくれるその手がとても暖かく、「ありがとう」の言葉もとだえとだえになりそうだった。

松原湖から小海への道は、遠いようで近く、又近いようで遠かった。この最後の4kmを歩きながら、私は何故歩いているんだろうと、何が私を歩かせているんだろうと考えた。すぐ隣で、私の心のすぐ隣で、両手を包むように握ってくれる何十人という友への友情からだろうか? 困難なものに立ち向かう若さからだろうか? 答えは分らなかった。しかし、今にして思えば、たとえ姿・形はかわろうともその底に流れていたものは、やはり愛であったのだと言える。

「人間は一人では生きて行けない。支える、支えられる……。同じ時を生きて行ける者同志の夢。みんなありがとう。私を愛してくれた人、私が愛した人、本当に心からどうも有難う。私は、私の高校生活が確かに青春の真只中にあったものだと、確信することが出来ました。」……10月6日の日付の日記、

今、懐しく読み返す。今年も又、白い萩の穂が風に
輝き揺れる季節となれば、私の魂を遥か小海の空へ
と呼び戻してくれることだろう。

この原稿を書くに当たり、T先生の「伝統の強行
遠足」（『高校教育展望』10月号）を読ませて頂き
ました。そして、当日ばかりでなく、半年以上も前
から御苦労頂く先生方、各検印所で御協力下さる地
域の方々、全行程を見守って下さるPTA・同窓会
の皆様、更に鉄道・警察・医療・報道等、各方面の
方々の御好意に支えられて56回を数えた強行遠足の
伝統の重みを改めて認識し、今さらながらに完走は
使命であったものと痛感致しました。ここに心か
ら感謝申し上げますと共に母校甲府一高の強行遠足が、
無事故のうちに100回、200回と回を重ね、益々成果
をあげられることをお祈り申し上げます。

（昭和54年卒）

臼田のおばさん ありがとう

中 込 警世夫

「このままでは、足がもたん！」これは、若神子
までの間に思ったことだった。

今年は韭崎まで長いこと走って疲労が早くから出
てきたのだ。しかし、2年の時一緒だった友達が
「今年は上位到着をめざすから早く行こう。」とはり
きっているのにひきずられ、疲労も忘れて歩いていっ
た。

「苦しい、もう止めよう……。」何度も思った。
これは、ほんの一部の人を除いてみんなが思うこと
だろう。しかし、これを乗り越える何かがあって、
やがて小諸に着くことができる。

これを乗り越える何か……。それは口ではいい表
わすことができない。

けれど、それが、今、言えそうな気がする。

それは、臼田に着いた時のことだった。友達と2
人で腰をおろして火にあたり、ボーとしていると、
背後からボンとなれなれしく、少々強めに肩をたた
く人がいる。

「疲れてまいっているのに、肩の骨がはずれたら
どうするんだ。」と思って振り向くと、臼田のおば
あちゃんがいて、「よう来た、よう来た。」とニコ
ニコうなずいているのだ。

おばあちゃんは何か、とても輝いていた。そし
て、僕達にこう言う。

「苦しいじゃろう、えらかったじゃろう……けれ
ど、世の中に出れば、きっと、苦しく険しい道が待っ
ているんだ。そして、もういやになってしまうこと
もたくさんある。でも、決してくじけてはいけない
よ。小諸へ行く時の気力を忘れてはいけないよ。い
いかえ……いいかえ……。」

僕は涙がこぼれそうになるのをおさえながら、失
いかけていた気力が、盛り反ってくるのを感じた。

足かグチャグチャになっていたが、それをも克服
する気迫が出てきた。「これだ!」と思った。

おばあちゃんが言った、あの気力と気迫が小諸に
自分を引っばっていくのだ。

僕達2人は、感無量で臼田を出発し、苦しんでい
る人、疲れている人達を励まし、手をかし、肩を組
み合って小諸に元気よく着いた。

そして、9時48分の電車に乗り帰途についたのだ
った。

最後に、臼田のおばあちゃんや励ましてくれた方々
に、心からの感謝の気持ちをこめてお礼を言わずに
はいられない。

「ありがとうございました」と。

（昭和56年度・3年生）



佐野智子 画

甲府中学・甲府一高

強行遠足『今昔物語』七十話

- | | |
|-------|------------------------|
| 第一話 | 笹子峠も天下の嶮だったと云う話 |
| 第二話 | 強行遠足は二の次だったと云う話 |
| 第三話 | 僕は暖かい飯が好きと云う話 |
| 第四話 | 上諏訪は生徒の湯治場だったと云う話 |
| 第五話 | 危機に立った甲府中学校と云う話 |
| 第六話 | 男というものは(?)と云う話 |
| 第七話 | 道路調査の思い出 |
| 第八話 | 強行遠足は感情の融和をはかるのによいと云う話 |
| 第九話 | 二度あること三度はなかったと云う話 |
| 第十話 | 強行遠足は精神鍛練の場であると云う話 |
| 第十一話 | 草駄天も顔負けしたと云う話 |
| 第十二話 | 危機に立った強行遠足の話 |
| 第十三話 | 眠る大人は育たなかったと云う話 |
| 第十四話 | 女が三人以上集まれば何と言うか(?)と云う話 |
| 第十五話 | 狐はばかさなかったと云う話 |
| 第十六話 | 女生徒の応援に力を得たと云う話 |
| 第十七話 | 人間が機械になったと云う話 |
| 第十八話 | 労しても効がなかったと云う話 |
| 第十九話 | 神と共に走りつづけた岩間孝吉君 |
| 第二十話 | 牛君に睨まれたと云う話 |
| 第二十一話 | 女生徒が大いにハッスルしたと云う話 |
| 第二十二話 | 道路標識が丁寧だったと云う話 |
| 第二十三話 | 捕らえて見たら我が子なりと云う話 |
| 第二十四話 | 急がば廻れと云う話 |
| 第二十五話 | だてに年はとらなかったと云う話 |
| 第二十六話 | 上には上の歩行計画があったと云う話 |
| 第二十七話 | 失敗は成功の基であると云う話 |
| 第二十八話 | 強行遠足は好ましくないと云う話 |
| 第二十九話 | 強行遠足の副産物と云う話 |
| 第三十話 | 強行遠足がレクリエーション化したと云う話 |
| 第三十一話 | 女生徒はお勉強がお好きと云う話 |
| 第三十一話 | 長野県人は非常に親切だったと云う話 |
| 第三十三話 | 強行遠足を再認識したと云う話 |
| 第三十四話 | 長野県知事が感動したと云う話 |

- 第三十五話 「スタジオ102」の効力があつたと言う話
第三十六話 全国に紹介された強行遠足と言う話
第三十七話 可愛い虎の子が戻つたと言う話
第三十八話 長野県人は義理堅かつたと言う話
第三十九話 強行遠足資料の発見
第四十話 回数が途中でズレた理由
第四十一話 車は出て行く埃は残ると言う話
第四十二話 歩き方にはいろいろあると言う話
第四十三話 しじみ汁と草鞋とで占つたと言う話
第四十四話 世相が変わつたと言う話
第四十五話 土方と間違えられたと言う話
第四十六話 文明の利器はおおいに活用すべしと言う話
第四十七話 昭和にも怪談があつたと言う話
第四十八話 まことに遺憾に存じますと言う話
第四十九話 あんよは下手だったと言う話
第五十話 強行遠足の母胎
第五十一話 強行遠足の名声
第五十二話 カシオペアは美しかった
第五十三話 涙ぐましい校友愛と言う話
第五十四話 帽子の白線はダテじゃない
第五十五話 かくして長途に上る話
第五十六話 草鞋と竹の杖でさっそうと
第五十七話 夜行テープとタスキの話
第五十八話 OBが国鉄を動かした話
第五十九話 墓地に気をつけて！という話
第六十話 松原湖～小海の迂回路の話
第六十一話 道路清掃の話
第六十二話 氷点下の気温と濃霧の話
第六十三話 垂れ幕のこと
第六十四話 中止にする方がはるかに大変だったという話
第六十五話 トン汁がシジミ汁に負けたと言う話
第六十六話 「まぼろし」の蜂さわぎ
第六十七話 野辺山貝塚？
第六十八話 検印カードがない！
第六十九話 野辺山の気温調査
第七十話 これも強行遠足の功德？

強行遠足『今昔物語』七十話

第一話

笹子峠も天下の峻だったと云う話（大正13年）

第1回（大正13年）の東京方面コースに生徒として参加した元本校教諭・石丸半郎氏の話である。

「昔のことなのではっきりとは覚えていないが」と語り出した。「11月3日（旧明治節）を祝して朝の8時頃出発することになっていた。私は自宅から自転車で登校したのだが最早出発した後なのか、あたりは閑散としていた。私は泡を喰って自転車で後を追ってやっと勝沼まで来て皆と合流した。ここで自転車を下りて一緒に歩き出したのであった。白い乾いたほこりっぽい道を喘ぎ喘ぎ歩いた。まだこの先には天下の峻笹子峠が待ち構えていることを思えば、今ここでへこたれてはならないと心に鞭打ちつつ一步一步踏みしめながら歩いたのである。いよいよ峠に差しかった。今と違ってその頃の峠は羊腸の急坂で狭くその上に石ころ道だった。しかも樹木は鬱蒼と茂り、それこそ昼なお暗くいまにも山賊でも出そうな寂しい峠であった。そこで皆は校歌や、その頃流行したデカンショ節など思い思いに歌い、元気づけながら登ったのである。と急に目の先が開け、明るくなったのである。あたりを見れば紅葉に色づいた木々、その間に隠見する蒼蒼した岩肌、その下を見れば樹木に覆われた深い溪谷、今にもサラサラと聞えてくるかと思われる溪流。上を見ればあくまで澄んだ青い空。そしてサヤサヤと谷を渡ってくる風と汗ばんだ肌がひんやりとした。実に美しく素晴らしい景色でありまことに印象的であった。

私は峠の八合目あたりで中止して帰途についたのであるが、その道すがら道ばたのぶどう畑の中に、真赤にうれた取り残しのぶどうの実を見つけた。丁度咽喉も乾いていたのでこれ幸いと一寸失敬して口の中へほうり込んだがそのうまかったことは今も忘れない」と。また話しを続けてこう語った。

「一番遠くへ行った者は上野原だったが、どうもおかしい、そんな遠くへ行ける筈はないと言うので、いろいろ調べて見たら、それは山岳部の連中でしかも先がけをして行ったものだった。それがばれて皆から油を絞られたものだ」とその当時を思い出しながら

感概深げに語ってくれたのである。

第二話

強行遠足は二の次だったと云う話（大正末年か）

「私の時代には本コースは信州街道で、その他のコースは金桜神社行であった。さぼりの連中はこの金桜行を選んだものだが、私は本コースを選んで参加した。私の家は長坂にあったので、いつも途中で中止して家に帰り一休みし、翌日は〇〇高女の運動会を見に行ったものだった」とはある先輩の話であったが、これには更に裏話があるのである。彼が目標としたのはその学校の在学の彼女である。彼は大学を卒業するや否や彼女とゴールインしたのであるが、その彼は今では孫が2、3名あるいいお爺ちゃんである。

一敵は本能寺にありと言う言葉がある—

第三話

僕は暖かい飯が好きと云う話（昭和初年か）

矢張り松本コース時代のこと、出発の際ある生徒が飯盒を持っていたので中味を調べて見ると、何と、生米が入っているではないか。そこでその理由を聞くとその時その生徒は少しもあわてずこう答えた。「僕は冷たい飯が嫌いだから、途中で飯盒炊飯をして暖かい食事をするのだ」と。さも当然であると言う顔つきで平然として答えたのである。まるでキャンプにでも出掛けるような調子であった。到底常人では考えられぬような神経の持ち主ではある。—こう云う人物こそ将来は大物になると専ら噂だった。—

第四話

上諏訪は生徒の湯治場であったと云う話

（昭和初年か）

松本方面コース時代のこと、上諏訪で中止した者は勿論のこと、近くは青柳、茅野、遠くは岡谷、松本で中止した者達が帰りに上諏訪温泉につかり、強歩の疲れを癒したものだ。中にはとんでもない心得違いな者もいて先生達を提督したものだ。

と言うのは富士見、青柳あたりで中止した生徒がわざわざ汽車に乗って上諏訪まで来て温泉につかろうと言うのである。またこの際あわよくば上諏訪の検印をものにしようと企むのである。後にはこれらの不正前進を防止するため、乗物を利用しての前進は禁じ、また中止した地点では必ず検印カードを返納するよう規定を設けたのである。

—後のカラスが先に立つと言う言葉がある—

第五話

危機に立った甲府中学校と云う話（昭和4年）

この伝統ある強行遠足と雖も学校あつての存在である。学校無しでは存在し得ないのである。従って学校のある限りこの強行遠足は続けて行くものと思うのである。

その学校が存亡の危機に立ったと言う大事件があつたのである。当時の人々は未だ忘れ得ないことであるが現在の人々は知らないのでは無いかと思うので敢えてこの際ここに御紹介するのである。

時は正に昭和4年の秋（？）であつた。或る朝突然に某新聞の全国版にしかもでかでかと「甲中生、反軍国主義を決議す」（題名は忘れたがこのような意味であつた。）と掲載されているではないか。そして7、80名の生徒が御崎神社の境内に集まって決議したと言うのである。この朝登校したらもはや学校中ではこの話でもちきりであつた。特に4、5年生は皆目の色を変えて議論が沸騰していたのである。

もう勉強どころでの騒ぎではないのである。それこそ学校の存亡にかかわる事態が巻き起つたのである。当時は軍国主義の華やかな時代であり、軍人に非ざれば人に非ずとまで言われた。遠くは日清、日露の戦争に大捷を博し、不敗を知らぬ神国の帝国軍人であり軍隊であつたのだ。各中学校以上の学校には軍より派遣された配属将校により軍事教練が課されていて益々軍の拡充強化が企図された時代であつた。従って軍に睨まれたらそれこそ立ちどころに学校の1つや2つはつぶされることは朝飯前の仕事であつた（？）と思うのである。さてこの日からと言うもの4、5年生による集会が開かれ事件の究明に

とりかかった。特に4年生の中にその犯人がいると目され、5年生の委員から一人一人指名され立たされて尋問されたのである。当時の最上級生はある意味では教師よりこわかつたものである。また5年生はそれだけの貫禄もあつたのである。

こうして2、3日間集会が持たれ真相を究明したのであるが、その結果は「無」であつた。「泰山鳴動して鼠一匹」と言う言葉があるがその一匹の鼠さえいなかったのである。その集会のある日、時の江口俊博校長が一同の前に姿を現わし「この事件は本校にとってはまことに存亡にかかわる大事件である。本校の名誉にかけてもきつと解決して見せるのでこの僕に総てを委してくれ」と言って拳で大きく胸を叩いたのである。一同はこれを了承したので直ちに学校長は5年生の幹部を引き連れてその新聞社に乗り込んだのである。

一時は血気に逸る大勢の生徒がその新聞社になり込みをかけると言う噂も飛んだのである。そこで学校長がこれを制し自ら陣頭指揮に立つたのであろう。

こうして新聞社に乗り込みその事実を究明したところ、まことにその記事とは相違して御崎神社へ集まつた者は7、80名が2、30名となり、最後には3名だと言う話になった。そこで「その3名の氏名を知らせて欲しい」と言うのと「知らせると学校では必ず処罰するだろう、それでは可愛そうだ」と答えて到々その3名の氏名はわからずじまいになって了つたのである。要すれば誰もそのようなことをした者はいなかったのだと言う結論に達しその記事の訂正を約して引きあげて来たのであつた。

このような大波乱を巻き起こした大事件もこうして終りを告げてまずはめでたしめでたしと言うわけではあつたが、私達としてはどうもすっきりせず尚その後もこの話について色々と話題が出たのである。

その当時どう言うわけか知らぬが、何かと言うと甲中生のちょっとしたことがすぐ書かれたのである。何か含むところでもあつてこのように書かれるのでは無いかと私達は言い知れぬ不満を持っていた。その矢先にこの事件であつた。当然甲中生は黙つては

いられない、猛然と立ち上ったのも無理はないのである。

これは後日譚であるが当時柔道部の猛者であったある先輩と逢った時、当時の昔語りに花が咲いたがたまたま話がここにきた時私にこう話してくれた「俺はどうもあの記事は初めから臭いと睨んでいた、これは甲中に反感を持っている奴の仕業だ、俺は誰がこの記事を書いたかその記者を洗って見ると矢張り俺が思っていた通りの奴だった。そこで俺は個人的な義憤と言うか正義感と言うか、俺は今ではこの通り頭は売っているが（彼はそう言いながらちょっと寂しげに頭をなぞって笑った）その頃は若かったからね、どうにも我慢が出来ず奴を引張り出して気のすむまで散々ぶんなぐってやったよ」と腕をさすりながら高笑いをしたのであった。

一人を呪わば穴二つと言う言葉がある――

第六話

男というものは（？）と云う話（昭和8年）

「昭和8、9年の頃だったと思うが」とストーブを囲みながらある先生が話し出したのはこうだ。「当時私は巨摩高女（現巨摩高校）に勤務していた。ある日突然に母校（甲中）から弟のことで召喚状を受けたので、何事かと思いながら学校へ行くと応接室へ通された。見ると弟と母親が某先生の前でかしこまって居るではないか。私が挨拶をして席に着くや否、某先生は「弟が強行遠足の際酒を飲んだので処分する」と言うのである。私は幸か不幸かその時は救護連盟の一員であった関係もあり、弟の監督不行届の点をお詫びすると同時に、物も言わずに弟の横面を2、3回張り飛ばしたのである。その音が大きかったので張り飛ばした私も驚いたが、尚驚いたのは某先生の方であった。眼を閉くしてまあまあと私をなだめたものだが傍にいた母親は泣き出す仕末であった。私は惘然としてしばし沈黙をしてしまった。さて帰宅してからの話である。

私は弟に「ああするより外は無かったのだ」と弁明すると彼は「少々痛かったが兄貴としては矢張りああするより外はなかつたらう」と言って頬をな

ぜ廻したのである。そこで私は詳しく経緯を聞いて見るところであった。「確かに僕は酒を飲んでいて仲間と一緒にいた。今更兄貴の前で嘘を言っても仕方あるまいが正直僕は飲まなかったのだ」と言う。そこで私は「正直に有りの儘を説明すればよかったではないか」と反問すると彼は答えて言った「今更誰が飲んだとは言っていないし、と言って自分は飲まなかったと言うといかにも弁解しているようで男らしくないと思い言わなかったまです」と。そして自ら罪を負ったのである。私は弟（末弟）の肩を持つわけではないが、私は当時は若かったので、その一言を聞いて「良くやった」と言って褒めてやったものである。彼は私と違って到って剛毅な質と親分肌を持った男で、山長のあだ名を持っていて上級生からも恐れられていたと言う話を聞いていたが、その彼が甘んじて無期停学を受けて終日家の中に籠もり専ら恭順の意を表していたことを思うと、今でも可笑しいやら、不憫やらでその様子が目に浮ぶのである。今でもこの愛すべき弟を信用しているが昔の生徒の中にはこんな一面をもっている生徒もいたのである」と。

一義を見てせざるは男なきなりと言う言葉がある――

第七話

道路調査の思い出

昭和9年第11回以後本年まで（昭和40年・1965）強行遠足には実施の約1ヶ月半位前に最低一回必ず道路調査が行なわれて来た。これは全行程の道路状況（交通状況、危険箇所、工事箇所、迂回路、迷いやすい所）の調査、距離の確認、沿道の伝染病の状況、救護所、検印所、駅、市町村役場、警察、教育委員会、病院などへの協力依頼、挨拶など実施に必要な沿道の調査、交渉を行うためのもので昭和9年の第1回の道路調査は2人の先生が、富士見から坂野までの間を徒歩で実施されたのだがそれ以後は3、4人の先生方がそれぞれ分担を決めて徒歩またはバスで行ない、戦後は自動車によって実施している。私もすでに十数回この道路調査に参加しているが特に感じていることは毎度のことながら沿道の関

係者の実に親切でしかも積極的に協力してくださることである。

昭和33年の事である。この年は「若き脚の記録」撮影の下見もかねて9月早々に第1号車に齊藤先生、須藤先生、小木曾先生、私、第2号車に窪田教頭、石丸先生、花輪先生、土橋先生が乗り早朝学校をスタートした。天気は晴れてはいなかったがそれほど心配することもなかったのに富士見峠にかかる頃から雨が降りはじめ、次第に風雨とも激しくなり、一杯にアクセルをふかしても30km位の速度しか出ない始末、茅野の手前まで行くとトラックが川に落ちそれを上げるために、クレーン車が狭い道をふさいでしまい交通止め、どしゃぶりの風雨の中で外に出ることも出来ず2時間近く両車ともストップ、はじめの内はこれからの予定、撮影の下見箇所などを話していたがついに皆だまりこくって車窓にふきつける雨をながめて無言の行。やっと出発したが風雨と2時間のロスのために第1日は予定の約5分の3で打切ったが松本到着午後7時。翌朝は5時に宿を出て交渉は帰路にすることにし一路北進、青木湖畔まで行って引返し大町で朝食、沿道の交渉をしながら松本に帰り、第1日に残してしまった交渉をしながら帰途についた。国界橋の手前まで来ると昨日通った仮道路は濁流の真只中、昨日は工事中で通行止めだった悪路を誘導しつつやっと切り抜けて、台ヶ原に来た所が小武川の橋が流失してしまっていて通行不能、やむなく平常は車などほとんど通らない様な坂道を七里岩の台地に上りしばらく行くと今度は前に行った大型トラックが路肩にはまり込んでしまったてまたまたストップ、しばらく待っていたが通行の見通しもたたないので近くに居たお百姓さんに聞いたところ少し引返せば乗用車ならなんとか通れる道がある、と言うので行ってみると車がようやく通れる田圃道で、ついにみぞに車輪をおとしてしまっていて進退きわまる。自力ではとてもどうにもならないので大勢の人に手をかりてやっとのことで車を持ちあげて脱出、どこをどう通ったかわからないが、長坂、日野春、若神子を通して学校にたどりついたのが午後9時を過ぎていた。後日また途中まで道路調査に行っ

たがまったくツイテない道路調査だった。

第八話

強行遠足は感情の融和をはかるにいと云う話

(昭和17年)

信濃大町コース時代のことである。毎年4、5年生の若干名は1、2年生の足弱生徒をいたわり介抱しながら優秀線まで連れて行くのを見受ける。1、2年生に優秀者の多いのは、このようなかくれた蘊の力が与かっていたのである。これと言うのも弱者に同情する武士道的精神、自己犠牲の尊い行為であるとともに長幼相接触の好機会でもあったのである。また師弟の間にもうるわしい話が在したのである。ある一生徒の後日談に「僕が桔梗ヶ原（塩尻と松本間）の淋しい道で（かつては時々追剥などが出没して夜などは通行人を脅かしたなどと言う話が伝わっていた）巡視の先生にいただいたキャラメル程おいしかったものはなかった」と。また真夜中、2、3の級友ととぼとぼ辿る淋しい田舎道、互いにもはや語る言葉もなく淡いライトをたよりに只管前進を続けている時、学校名入の提灯を掲げた巡視の先生に会う、その事だけでも彼等は飛びつく程うれしい、ましてや情のこもったいたわりの言葉をかけられた時の彼等の感激は一層のものだった。こうした何でもないような事でも、こうした機会には強い感激はまた感謝となり、不知不識のうちに師弟の情誼が結びついて行くのである。

一（強行遠足の意義と其の実際—昭和17年発行より）—

第九話

二度あることは三度はなかったと云う話（昭和18年）

「昭和18年と言えば、大東亜戦争もまだたけなわの頃であった。私の担任クラス（3年）に深沢丈二と言う生徒がいたが」と大関伝吉氏（元甲府一高教諭）は語るのであった。

「此の年彼は強行遠足に参加した。去年は7、8着で松本へ到着したので今年は2、3着位で松本へ到着したいものだ」と張り切って出発したのである。

その彼が川岸付近で貧血を起してしまったのでそ

の時川岸勤務の医師北島先生に注射をして戴き元氣を取り戻してまた歩き出したのである。ところが運の悪いと言うものは仕方のないものだ。彼が小野へ差しかった時、微用トラックに接触し道ばたへ投げ飛ばされてしまったのである。この時丁度下り列車が小野駅へ入りかかっている間に偶然にもこの事故を窓から目撃したのが小野の在郷軍人分会長であったが、下車するとともに急遽事故現場にかけつけ付近の小野病院へ収容してくれたのであった。

私は小野救護所（駅前油屋旅館）に勤務していたが、この連絡を受けたのでそれこそ取るものも取りあえず病院へかけつけたのである。事故と言うのは頭を打って脳しんとうを起した程度だったので、まづは不幸中の幸いであった。

そこで私は彼にいろいろ尋ねたが、自分が誰であるか、ここが何処であるか、今何をしているのか、それすら判らないのである。始めは心配したが治療の甲斐もあってか時間がたつにつれて回復し再び元氣を取り戻したので、頭に繻帯をしたままここを出発してまた歩き出したのであった。この年には記録映画を撮影したが、中に繻帯頭をして歩いている生徒の一コマがあるが、それが彼である。

私はそれから数年後再び小野勤務についた時、小野病院を尋ねて数年前のお礼を申し述べたのであった。」と。

—不幸中の幸いと言う言葉がある—

第十話

強行遠足は精神鍛練の場であると云う話（戦前）

「君、この強行遠足と言うものは歩く鍛練と言うより寧ろ精神の鍛練に役立つものだよ」とある先輩は次の例を挙げて語られたのである。

「昔のことで、今の梨大の前身だった山梨高等工業学校に在学していたある本校卒業生が嘗て本校5年生当時の強行遠足で頑張りに頑張り通して、遂には松本（120km）へ到着したがその述懐に曰く（人生は唯頑張りあるのみ）の哲学を悟ったと言う。

また当時の第一高等学校在学中だったやはりある本校卒業生が帰省した時、本校のある先生に語った

話にこう言う話がある。

「野外教練のある日、同一学年の者は皆疲労困憊して落伍したが、自分は嘗ての強行遠足のことを思い出して猛然たる勇気を振り起こし、とうとう最後まで頑張り通した」と言うのである。

「どうだね君、百の金言も何れの名訓も机上の空論では価値がないよ、真の体験から得た教訓はまことに尊く強いものだね」と言って話を結んだのであった……。

—不言実行と言う言葉がある—

第十一話

韋駄天も顔負けしたと云う話（戦前）

「何回の時だったか忘れたがまだ戦時中の時だった」と大関先生はまた話し出した、「矢張り信濃大町コースであったが、その時は下諏訪と岡谷との間は道路修理のため、他の道を選び、リング畑の中にある道を歩かせたのである。丁度リングはいい加減に熟れていて、しかもその香りがまことに食欲をそそったものだ。生徒達はてんでに甘そうなリングを睨みながら通ったのであるが、ところが、ところである。ある一人の生徒が遂に誘惑に負けて、一つ失敬して早速大口をあけて、ばくりと喰いついた途端、運悪くも畑の主人に発見されてしまったのである」

「この盗人野郎奴、どこのどいつだ、警察へ知らせるぞ」と忽ち雷の如き声で大喝されたのである。

「さあその生徒は吃驚仰天、それこそ文字通り慌てふためき、杖はその場に投げ捨て、今までびっこを引いてきたのも何のその、それこそ韋駄天の如く雲を霞と逃げ出したと言うことである」と。

最後に大関先生はおかしくてたまらないと言った表情で言う。「盗むことは悪いがそれもほんの出来心だ、それよりも今までびっこを引いて歩いてきたのが、怒鳴られた途端物凄い勢いで逃げ出したと言うところが、何とも云えぬ滑稽さと面白さがあるではないか」と。

—渴しても盗泉の水は飲まずと言う言葉がある—

第十二話

危機に立った強行遠足の話（戦後間もないころ）

終戦後、思想の自由の影響からか、季節には関係なく赤色台風が頻繁に発生したが、いつしかその台風が本校にも来襲し、先ず教室がもまれ、その余波を受けてか職員室もがたがたゆれ出したのである。中でもねらわれたのが強行遠足であった。このような時代に今更強行遠足などと言うものは無益だ。そのような怪物は退治してしまえと言うのであった。正に強行遠足大反対の旋風が巻きあがったのである。そこで甲論乙駁、是か否か事態はまことに急を告げたのであったが、時の同窓会はあらゆる障害を打破し断乎として実施を主張したのである。また心ある大部分の生徒、職員もこれに同調して実施することに傾いたので、さしもの荒れ狂った台風も甲一の鉄筋コンクリートの壁の前には頭を垂れ、遙か彼方に進路を変え、消え去って行ったのである。とはある同窓生の話しである。

—備えあれば憂いなしと言う言葉がある—

第十三話

眠る大人は育たなかったと云う話（昭和22年）

「終戦後昭和22年（第23回）の時で、この時はまだ併設中学校時代で私の5年生の時のことであった」とある卒業生が語るのであった。「私は5年生として最後の強行遠足でもあるし、また最後の思い出として立派な記録を残して卒業したいと思い、当日は張切って出発したのである。当時は昼の12時に学校を出発したのであるから、脚の早い者は国界橋あたりで暗くなりかけてきたものである。既に晩秋と云うか初冬と云うか寒さはひしひしと身に沁みてきた。仰げば一点の雲もなく晴れ渡った空には無数の星が俄かに輝きを増してきたのである。吐く息もライトの光茫の中に消えて行く。あたりは全くの闇となり、唯自分の足音と杖の音が自分の存在を明らかにしているに過ぎなかった。さて某救護所へ到着した。ところが係先生の姿が見えないのである。そこで大声を張りあげて到着したことを告げると奥の方から眠たげな顔をして先生が出てきたので早速検印をして

いただき、またそのまま歩き出したのであった。

その際先生がこう言ったのである。「君の到着があまりに早過ぎたのだ」と。然し私としてはこう思ったのである。「私達がこうして夜を徹して疲れも我慢して歩いているのに、先生達は炬燵にうもれて眠り、しかも検印所の準備も間に合わぬと言うのはあまりに無責任ではないか、もう少しは私達の苦勞を察してもらいたいたものだ」と。「私は行く先々で何回かこのような目に違いながら私は私の最善を尽して松川へ到着したのであった。ここへ到着した者は、私の外に同じ5年生であった某君と2人だけであった。ここがこの回で最高記録であった」と。そして更に話を続けてこう結んだのである。「何回か不愉快な思いをしたが、こうして検印所の先生方を起こしながら歩いたことは、今にして思えば懐かしい思い出の種となったのである」と。

—油断大敵と言う言葉がある—

第十四話

女が三人以上集まれば何と云うか（？）

と云う話（昭和26年か）

「信濃大町コースで女子は台ヶ原終点の時のことです」とある先生は私に茶をつぎながら話すのである。

「女子の出発は朝の8時で、距離もあまり遠くならなかったら殆どの生徒が到着し、この救護所（現白州町農協）は時ならぬ賑わいを見せたものです。殊に女の字を3つ重ねると何とやら読むそうですが、それが200名位の生徒だから凡そご想像がつくことでしょう。それに尚男子の応援をしたくて（男子の出発はその日の昼の12時でした）ここに居残る者の整理と日野春駅へ輸送する者の整理とでまた一仕事と言うわけで、それこそ天手鼓舞と言うのはこのことを言ったのでしょう」と。

因にこの地点は交通が不便であったことから、生徒をトラックで日野春駅まで輸送したもので、この不便を解消するために次回は日野春を終点地に改めたのである。

—三人寄れば文殊の知恵と言う言葉もある—

第十五話

狐はばかさなかったと云う話（昭和27年）

「昭和27年頃であったと思うが」と本校の某先生は語り出した。「私は全線巡視係として自転車で巡視することにした。途中事故者の救護や各救護所間の連絡、または生徒を激励しつつ行きつ戻りつ巡視にあたったのである。

ご存知の通り途中には富士見峠、善知鳥峠と云う難所がある。そういうところは自転車の尻を押して登ったものだ。何にしる夜中を通して乗り続けたものだから、すっかり尻の皮をむいてしまったのである。さてそれからと言うものはお尻をあげたり、片尻をずらしたりしてペダルを踏んだ仕末、それでも最後まで頑張って、先頭を松川（141.3km）まで誘導したのである。あの時は全く参った参った」お尻をなぜながら話したものである。また善知鳥峠でのことを、こうも話してくれたのである。

「夜中自転車で善知鳥峠へさしかかった時のことであるが、その時ライトの光芒の中にさんさんとして降りそそぐ細かな銀の雨粒を見た。おや雨が降ってきたのかと思って木の間越しに大空を見上げたと、雲一つない澄み切った黒い空にキラキラと星の輝いているのを見た。はてあやしげな、これは狐にばかされているのではないかと昔風に思いながら上衣をなげて見ると矢張りしっとりと濡れていた。ところが峠を下り、平地へさしかかった頃、雨粒もいつしか消え去り、寒気がひとしほ身に沁みできた。あとでこれは夜露のおりる現象だと知ったが、これはまことに印象的な光景であった」と。

—艱難汝を珠にすと言う言葉がある—

第十六話

女生徒の応援に力を得たと云う話（昭和27、8年頃）

「信濃大町コースで女子の終点が日野春であった頃の話である」とある卒業生は語った。

「女生徒は日野春で検印を済ませてから、わざわざ牧の原へ降りて来て男子の応援をすることを慣例としていた。私は女生徒が応援に見える時刻を考えて歩行計画をたてたものである。いよいよ当日のこ

と、私は勇躍して牧の原目指して出発したのである。可愛いあの子が待っていると思えば自然に足が早くなるから不思議だ。さていよいよ牧の原だ、心はずんだ、あの子のためにもあまりへばった姿は見られたくないものだ。私は応援の拍手に送られながら胸を張って通ったのである、可愛いあの子に感謝の目くばせをしながら……。

然しそれから後は急に虚脱感に襲われた。俄かに疲労も出て来て、途中で中止しようかとさえ思ったが、待てしばし、彼女のためにも頑張って歩こうと思ひ直して再び心を振り立たせ遂に松本まで歩いたのであった」と。

—一女の髪の毛は象をもつなぐと言う言葉がある—

第十七話

人間が機械になったと云う話（昭和32年）

「信濃大町コース時代のこと、私は松本、豊科間の巡視係をしていた時のことである」とある先生は話し出したのである。「本拠を松本に置き、私はここで先頭の到着を待っていた。ところが、予想より早く先頭が現われたのである。誰かと見れば岩間孝吉君である。当救護所では早速味噌汁の接待をして労をねぎらったのであるが、彼は寸息した後すぐに出発すると言う。私は自転車を宿から借り受けて引きながら彼を誘導して行ったのであるが、流石の彼もあまり走ることはしなかったのだが相当のスピードで歩いた。私は始め自転車を引いて歩きながら誘導していたが、ともすると私の方が遅れがちになるので到頭乗って誘導することにした位である。途中の彼は小用を足す時も、水を飲む時も決して停止することではなく絶えず足踏みをしながらであった」と言う。これは一旦停止すると調子が狂ってしまうからである。人間が一つの機械になったのである、正に正確な時計の歯車のように。

—倒れて後止むと言う言葉がある—

第十八話

勞しても効がなかったと云う話（昭和32年）

「大町コース時代のことである」と本校のある若

い先生は、在学当時のことを感慨深げにこう語ってくれた。

「私は岩間君（最長記録保持者）とは途中で別れ、やっとの思いで豊科へ到着した。然し私はまだ歩ける自信があったので先へ進もうと思い、この先に救護所があるかどうか係の先生に尋ねたところ有明まではあると言う。そこで私は意を強うして、とうとう松川まで歩いたのであるが途中誰にも逢わず心細くなってしまったのである。そこでここから穂高まで引返して来て電車に乗って帰ったのである。今考えれば馬鹿なことをしたものだ。」といかにも残念そうな顔をして話してくれたのである。

尚、当時は豊科までしか救護所は置いてなかった。それより先は誘導係が先頭の到着する地点まで誘導したのである。

—骨折り損のくたびれもうけと言う言葉がある—

第十九話

神と共に走り続けた岩間孝吉君（昭和32年）

彼は昭和32年度の卒業生である。甲府市平和通りの「岩間農機」が彼の生家である。彼は双生の兄弟で兄の方である。弟を正治と言う。両君とも実には仲が良く共にスポーツマンで、兄はサッカー部、弟は体操部にそれぞれ所属し人一倍熱心に練習に参加していた。練習終了後は、ややもすれば帰心矢の如しで他の部員は速速く帰宅してしまうのであったが、この兄弟は部こそ違え、一番最後まで居残って後仕末をして帰るのであった。この誠実さと真面目な態度とは専ら学校中の評判であった。また自宅にあっては毎日兄弟揃って町の道路の清掃を続けていたのである。これが忽ち町内の美談となり、その善行が新聞にも掲載されて話題をまいたのであった。学校でもこのことを知り、卒業式の際特に兄弟の善行に対して表彰状を授与したのである。彼とは実にこのような人柄であった。

さて強行遠足の彼のことを語らねばならぬ。

彼と同級生で同じサッカー部員であった現本校教諭〇〇先生に彼の話を聞いて見た。

「私の3年生の時である。私は学校を出発してか

ら概ね先頭グループと行動を共にしていたがその途中後から追ってきた岩間君と一緒に台ヶ原辺まで走り続けた。私は体には自信があったが、岩間君はボールを蹴る時でさえよろよろする位細いよわわしい体つきをしていた。そこでこのまま走り続けたら彼の体は参ってしまうのではないかと心配したので「歩いて行こうか」と彼に問うたのである。ところが「走ることもなんか平気だ。僕には神様がついてるので絶対大丈夫だ」と答えたのである。この言葉は一見非常に奇異に聞えるが、実は彼はクリスチャンだったのである。

彼は「自分は神の下僕である。自分はいつも神と共に在りどんな苦しい時でも神は自分を励ましてくれる」と信じていたのである。

このような信念で彼は神と共にひた走りに走り続けて遂には築場（167.1キロ）へ到着し、ここに強行遠足史上空前の大記録を打ち樹てたのであった。私は彼とは途中で別れ、松川までは行ったが、また引きかえして穂高から電車に乗り帰宅した。弟の正治君の方は確か豊科まで行ったように記憶している。」とこのように語ってくれたのである。以上の一編の短い物語りの中から彼の片鱗がうかがわれるではないか。

第二十話

牛君に脱まれたと云う話（昭和30年頃）

信濃大町コース時代のことである。何年頃からか予行練習をすることになっていた。この予行は体育科が中心となり企画準備がなされ、その目的とするものは本番に準じた実施要項、諸規定を設けてあるので、その要領を会得させるとともに予め自己の体力を認識させ、それに基く歩行計画をたてさせるのであった。

コースは年次とともに変遷したが後代に至って、交通安全のためまえから釜無川→笛吹川→荒川等の堤を利用して歩行させたのである。「実施に先立ってコースの調査をした時の話である」とある先生は話した。

「私は高野恵美子先生のスクーターの後部へ乗せ

てもらい途中の調査をなしつつ笛吹堤へ差ししかかったのである。すると牛が何頭も点々として道の真中で草を食べているではないか。恰かも通せんぼをしている様である。私達が近づくと、こちらを向き角を立てて睨むのである。そして耳を動かして示威運動(?)をするのである。これには弱りました。そこでためしに警笛を鳴らして見るとその牛君は、よけるどころか(これは人間にしか通用しないことを知った)さも煩さそうにじっとこちらを見るばかりで、臆でも動こうとしない。馬の耳に念仏と言うが牛の耳には何と言うのであろうか。丁度その時、主人と覚しき人物が、堤下の畑で仕事をしているのを発見したので大声で呼びかけた。

「もしもし、この牛をどかしてくれないか」と。すると主人の曰く「その牛はおとなしいから大丈夫だよ」とこれまた大声で答えたのである。しかしそうは言われたもののうっかり近づけないのである。人を噛む犬でも飼主にはおとなしいものだ。まして相手は角を持っている大物である。赤の他人に、はたしておとなしいかどうかわかったものではない。まだ時々胡散臭そうにこちらを睨む牛君のあの目つきが気に喰わぬのである。そこでしばし牛の様子を見てあれば、野放しではなく何と綱が堤下へ伸びているではないか、そこで一策を案じ堤下へ降りて遠くからその綱を手繰り寄せて牛君を堤下へ誘導した。そしてその際に爆音も勇ましく脱兎の勢で通過したものであった。行く先々このようなことを2、3回繰り返して、やっとの思いで無事笛吹堤をパスして帰校したのであった」と。

人にはそれぞれ知られぬ苦勞があるものではあるが、その時の2人の困った様子が目に見えるようではないか。

—窮すれば通ずと言う言葉がある—

第二十一話

女生徒が大いにハッスルしたと云う話(昭和30年)

信濃大町コース時代のことで、女子のコースが富士見まで延長された頃の話である。前回までは日野春が終点であったが、これでは歩き足りないので、

コースをもっと延長して欲しいと言う女生徒の要望があった。そこで出発時刻と帰りの列車時刻等を検討した結果、富士見迄延長することに決定したのであった。即ち朝8:00に学校出発、約6時間の制限時間を設け、富士見駅午後3時30分頃の列車で帰宅できるようにしたのである。さて当日のこと、女生徒は男生徒より一足お先に出発し(男子はその日の正午出発であった)、殆んどの生徒は終点富士見へ到着したのである。そのうちでも元気な者は救護所のお手伝をしたりまた続々と通過する男生徒の応援をしたりして、まことに美しい情景を見せたのである。

先生達は「お蔭で大助かりだったよ」と言い、男子は「応援のお蔭で遠くへ行くことが出来た」と大いに感激しながら語ったと言うことである。

—内助の功と言う言葉がある—

第二十二話

道路標識が丁寧だったと云う話(昭和30年代か)

「信濃大町コース時代のこと。ある生徒が岡谷入口附近で、コースを間違えてしまい大部遠廻りして岡谷救護所へ辿り着いた。その生徒は不満な顔をして係にそのことを訴えたのである。私は全線巡視係としてここに小休止していてその場に居合わせていたのでその訴えを聞いて早速現場へ急行したのである。

成程これでは間違うのも無理はないと思った。何故ならばそれは石灰で閉止線(直線)の上に×が識されていたのである。物は考えようだが、その生徒は閉止線が×で取り消されているものと考えたのであろう。かつては閉止を×で標識した時代もあったが、この時は既に×は用いないことになっていた筈であった。あまり物事も丁寧過ぎると頭に何とやらつくと言う、今ではそのようなことはない。」とはある先生のお話であった。

—千慮の一矢と言う言葉がある—

第二十三話

捕えてみたら我が子なりと云う話（昭和30年代か）

信濃大町コースで茅野手前の中央線ガード附近での出来事である。全日制のある生徒が突然強盗に襲われ、有り金を奪われたのである。然しその際帰りの汽車賃だけは返してくれたと言うが、賊にも一片の情があったと言うものだろう。一人間の性善なりと言う言葉がある一被害生徒は早速茅野救護所の係員に報告した上警察署へも届け出たので時を移さず調査が開始されたのであった。調査にあたった警官の一人がこう言ったそうである。

「その時の状況（人相、服装、年齢）等を尋ねたところ、よく記憶していて適確に答えてくれたので捜査は非常に役立った。しかしよくそこまで冷静に観察できたものだ。流石は甲府一高の生徒だけはある」と大変に褒められ、とんだところで甲府一高の名を挙げたのであるが然しあとが、悪かったのである。更に警察官が言うには「そう言う悪い奴は当地にはいない筈だ。犯人はどうも山梨の人間のようにだ」と。これには関係者一同驚いたが、その後の捜査によって犯人が判明し、事実はその通りだったので今度は甲府一高の黒星となったのである。

—罪を憎んで人を憎まずと言う言葉がある—

第二十四話

急がば廻れと云う話（昭和30年代か）

「信濃大町コース時代のことである」とある先輩はこう話してくれた。

「いつの時代にもさぼる生徒はいるものだ。私と友人3人で穴山まで来たが寒さと疲労とで歩くのが嫌いになってしまった。そこで自発的（？）に落伍し道なき山を横断しようとした。ところが方向を見失い山中をさまよい歩き、それこそほんとうにへとへとになって、やっと駅へたどりついたのだった。」と言う。

「こんな苦勞するならもっと先へ行けたのに、悪いことはできんものだ。急がば廻れと言うことがよくわかったよ」としみじみとした口調で話したのである。

—後悔は先に立たずと言う言葉がある—

第二十五話

だてには年はとらなかつたと云う話（昭和30年代か）

矢張り信濃大町コース時代のことである。長沢の住人である奥水老人が、いつも特別参加して若者を凌ぐ元気さで歩いたものだった。両手に竹の杖を持ち草鞋履きで一步一步確実に踏みしめて歩く姿は今でも目に映るようだ。

生徒に対しては教訓としたものだ。そしてある強行遠足の出発式の際、表彰状と記念品を贈呈してその労をねぎらったのであるが、数年前自宅に於いてこの名物老人は天寿を全うして大往生を遂げたのであるが、まことに奇篤な老人であった。学校からは時の窪田丙牛郎教頭と山田茂、広瀬直瀬両先生とが葬儀に参列し弔意を表してきたのであった。

—老いてもますます盛んと言う言葉がある—

第二十六話

上には上の歩行計画があったと云う話

（昭和30年代か）

信濃大町コースのこと。大町へ到着しその回の最高記録を印したある生徒の話である。彼の歩行計画はこうだ。先ず本番に先立って現地を確認し、それぞれの地点に予め携行品等を預けて置いたそう。さていよいよ歩行の時には、食事、防寒具、草鞋等必要な際には、その地点で用が足りたのである。

それこそ徒手空拳の身軽で歩いたと言うのである。私はその話を聞いて全く恐れ入ってしまったものだった。」と本校のある先生が話したのである。

—備えあれば憂いなしと言う言葉がある—

第二十七話

失敗は成功の基であると云う話（昭和30年代か）

信濃大町コースでの出来事であった。全線巡視者が夜中に辰野から小野へ向ったのであるが、途中にあるべき小野救護所が見つからなかった。おかしいと思いながらも、そのまま善知鳥峠へと向ったのである。しばらく走り続けたが、どうも様子が変だ、

どうも見覚えがないところだ。ふとバスの停留所の看板を見ると伊那と言う頭文字があるではないか。これはいよいよ道を間違えたに相違ないと前進を躊躇している所へ、折から前方からライトをつけた自動車がやってきたので手をあげて停止してもらった。そこで道を尋ねると、この道は伊那街道だと知らされたのである。矢張り間違えていたのである。親切にもその車に先導してもらって元の地点に戻ったのであった。この間約1時間を要したのであった。そもそも辰野から伊那方面へ行く道と、うとう峠を経て塩尻に行く分岐点のことだが、北上する場合は、左側を通ると広い道で自然にカーブしていて、知らぬ間に伊那方面へ行くように出来ているのである。従っていつ間違えるともなく間違えてしまったのであった。あとでこの失敗を話したところ我々の車ばかりでなく、他の2、3台も同じような失敗をしたのを知って大笑いしたものである。」とその時の係の先生は笑いながらこう語ったのである。

—前轍を踏むと言う言葉がある—

第二十八話

強行遠足は好ましくないと云う話(昭和35年頃)

昭和35(?)頃、時の教育長から「強行遠足は諸般の事情に鑑みて実施することは好ましくない。」と言う通達が各学校にきた。当時県下で実施していた高校は相当数あったがこの通達により2、3校を残して大部分は姿を消してしまったのである。本校に於いてもこの通達を巡って、いろいろ検討審議が為された結果引続いて実施することに腹を決めたのであった。思えば幾度かの存亡の危機に立ったが、よくこれに耐えて、今日迄連綿と伝えられてきたことに対して今更ながら強行遠足の持つ意義の偉大さに心打たれたのである。

—長いものには巻かれると言う言葉がある—

第二十九話

強行遠足の副産物と云う話(昭和37年)

第37回と言えば信濃大町コースを小諸コースに変更した最初の年である。そして男子は松原湖を終点

としたのである。

これより先、実行委員会に於いて、終点を海の口にするか、松原湖にするかについて論議が分れたが、私は何にもない平凡な海の手より景勝地である松原湖を選んだらどうかと提案した結果同意を得て松原湖に決定したのであった。

「さてその松原湖での出来事であった」と関係者であった某先生は語り出したのである。

「私は男子出発係を勤務の後、箕輪新町で女子の出発を指示してから、ここに待機していた巡視車に乗って松原湖に向った。私は以前にこの湖でスケートの合宿練習をしたことをなつかしみながら湖畔にある救護所に着いたのである。見ればなかなか眺望の良い場所である。周辺の山々は松の緑と紅葉があやなしそれが紺碧の鏡のような静かな湖面に映えていた。

この救護所の主任は小宮山先生であった。生徒はと見ればここが終点地と言うことからか、またはこの美しい景色に魅惑されてか、それともバス待ちが知らぬが、どっかと腰を据え動かなくなってしまうのである。この時2人の卒業生が参加していたのであるが、そのうちの一人が主任にこう言うのである。「我々はすっかり疲れ切っている。駅までの乗物を何とか心配してくれ」と。また「そのような手配のしてないのは無責任も甚だしいではないか」とも言うのである。その卒業生の抗議と言い、その出過ぎた態度と言い、流石の温厚な主任もいささか立腹の様子であったが、それでも折り良く停車していた救護車に駅まで輸送するよう依頼し尚後の残留者に対してはバスを待つように指示したのである。

私はちょうどその場に居合わせていてこの様子を見ていたのだが、一応注意して置いた方がよからうと考えその卒業生を呼んで言い聞かせたのである。

「君等卒業生が参加してくれることは大歓迎だが、学校の計画の内容も知らずに勝手な解釈をしてはいけない。生徒の方ではどうしたらよいかは知っている筈だ。知らないのは君だけだ。君が二度とこのような出過ぎた真似をしたら次は遠慮してもらわねばならない」とたしなめたのである。

だがこうは言ったものの、私は個人的には乗物を探しに麓へ下って行ったが適当な乗物は見つからず、再びここへとって返したのであった。ところがこの時には既に残留生徒は全員バスで駅へ向った後であった。

私はこれでやれやれほっとした気持にはなったが、何となく後味が悪く不愉快ではあった。だが私は松原湖を主張しただけに、今ここでトラブルが起ってはずいと思っていたが幸い無事に済んでよかった」と話し更に続けてこう語るのであった。

「その後暫くたったある日のこと、その卒業生が来校した折、当時の出過ぎた行為を私に陳謝にきたが、これは当然であるとは言いながらも今の青年にはなかなかできないことである。その点流石は甲府一高の卒業生であり、またこの強行遠足を通しての精神の現われであろうかと私は私なりの感じ方で感心したものである」と当時を回想しながらこう話を結んだのであった。

—あやまちを改むるに憚ること勿れ—
—と言う言葉がある—

第三十話

強行遠足がレクリエーション化されようとした、

と云う話（昭和37年）

昭和37年（37回）は前回までの信濃大町コースを廃して、現小諸コースに変更した年であり、またこれに伴って、いろいろな新しいころみ企画されたのである。

その一つの計画としては「清泉寮を本部として、ここを一大レクリエーションの会場にしよう」と言うのである。即ち「模擬店を設けたり、プラスバンド等を準備して演奏会を開きまたフォークダンス、ソフトボール等をなして一日を楽しく過そう」と言うのであった。

これより先のこと、新コース調査班（校長以下教師数名）はその途次清泉寮に立寄り実状を調査したのであるが、前庭には広大な芝生があり、また野外ステージ等も備えてあり、且つ他のロッジ等を合わせると500名位の収容力があることがわかった。こ

のようなことから「強行遠足とは別に、生徒の野外（校外）研修場としてはすばらしい環境である。来年は是非実現させたいものだ」と話し合ったものである。（翌年は3年生を対象として、ここで研修会を開いたのである）

さて実行委員会の席上でこのような話題が発展し、この清泉寮が強行遠足の本部ときまり、レクリエーション会場に転化された形になってしまったのである。その二つとしては「固苦しいルールは廃して自由に歩かせたらどうか」と言う意見が出たのである。

委員会ではこの二つの論点を中心として甲論乙駁、正に保守と革新両陣営の争いのような観を呈したのである。結果としては第一の「清泉寮を本部としてレクリエーションをすること」は、初のころみとしてその反響を見ることにして決定された。第二は「自由に歩かせる」と言う点であるが、これまでしたら強行遠足は全くのレクリエーション化することであり賛成出来なかったのである。とにかく参加生徒1,500名以上の集団歩行を野放しにするわけには行かないのである。従って生徒を安全に歩行させるためにも、従来以上の厳格な諸要項、諸規定を設定したのであった。

さて当日のことである、生徒は清泉寮本部レクリエーションには意外に関心を持たず、大部分の生徒は歩くことに意義を感じてか、終地点松原湖を目指して出発して行ったのであるが、却って清里駅、清泉寮間の石ころ道を往復しなければならなかったことに不満を持ったのであった。

かくして最初のこのころみは不評に終わったのであるが、今回の反省に立って翌年は本部は野辺山に移し、コースも中込まで延長するなど本来の強行遠足の姿に立戻ったことは何よりであった。

—笛吹けと踊らずと言う言葉がある—

第三十一話

女生徒は勉強がお好きと云う話（昭和39年）

小諸コースでのこと、その時の女子の出発点は若神子小学校グランドからであった。ある先生が後尾順行係として生徒の後尾を纏めて順行した時の話で

ある。

「出発後大部分の生徒は先を争って歩いて行ったのであるが、中にはつんと唯一人一番最後を歩いて行く生徒がいた。見ると教科書(?)を読みながら超然として歩いているではないか。これには永年強行遠足の勤務を経験している私だが驚いた。一体どう言う神経の持主かと、その精神状態を疑った次第だが、いづれにしても勉強好き(がり勉とも言う)な点では間違いなさそうだったと思った。お蔭でその生徒の護衛で箕輪新町までおつき合いをされてしまった」と言う話であった。

—牛にひかれて善光寺詣りと言う言葉がある—

第三十二話

長野県人は非常に親切であったと云う話(昭和39年)

小諸コースの終点中込でのことである。駅名は中込であるが佐久市のことである。ここでは強行遠足を全面的に歓迎してくれたのである。即ち駅前には「歓迎、甲府一高強行遠足」と書いた大横断幕を掲げてあり、市教育委員会では宣伝カーを繰り出して市中の宣伝に巡りまた婦人会員も出動し、白エプロン姿も甲斐甲斐しく、生徒の接待やら疲れた生徒のマッサージ、果ては汗で濡れた下着などを乾かしてくれたりしたのである、その他、ある商店では生徒のために多量のリングを寄贈してくれたのである。

この状況を見ていた関係者一同は大感激したものであった。このような一例を挙げても長野県人は山梨県人と違って非常に親切なところがあるのである。

松本コース時代に於いても、長野県側に入ると非常にその親切さが目立つのである。今仮に長野県から山梨県側へ入りした場合、果たしてこれだけの親切をしてくれるだろうか、同じ山梨県人である我々は、なさないがこのような疑問を持ったのであった。

—県民性の相違—

第三十三話

強行遠足を再認識したと云う話(昭和30年代末か)

数年前のことである。一部の教師によって学校行

事簡素化運動が展開された時のことである。初めの主旨は変転し、いつしか勉学一本の方向に誘導されていったのである。曰く、「一切の学校行事(修学旅行、文化祭、諸大会、強行遠足等々)を廃し、その時間を勉学にあてれば大学入試合格は疑いない、また勉強さえしていたら、立派な人間が形成できる」と言うのである。これではいささか教育の本義にもとるような主旨であったので、心ある教師の批判を受けたわけであるが、この事はいつか生徒の知るところとなり、或る日の生徒総会に於いて猛烈な反対にあい、いつしかこの運動は自滅してしまったのである。この裏には強行遠足反対の運動も秘められていたのであったが、生徒の総意による強行遠足支持はここに改めて再認識されたのであった。

—雨降って地固ると言う言葉がある—

第三十四話

長野県知事が感動したと云う話(昭和40年)

第40回の時である。ある3年生の男子生徒が長野県側へ入ってからというもの沿道の人達からいろいろと親切にされたことに感動し、帰ってから長野県知事に感謝の礼状を出したと言うのである。ところで長野県知事から折り返し学校長宛にその返事がきたことから、このことが判明し、明るい話題を提供してくれたのである。

ここに知事からの文面を御紹介する(現文のままである)

「謹啓

晩秋の候、貴台益々御清栄の由およろこび申し上げます。さて突然ですが、このたび貴校では恒例の強行遠足が成功裡に実施されましたが、3年生の2生徒から長野県側の沿道の町村人の応援につき感謝のお便りをいただきました。

貴校は古き良き伝統と質実剛健の校風をもって教育方針とされ、これに基づき例年強行遠足を実施されておられるやに承っておりますが、この行事が生徒の心身の鍛練に寄与することまことに大きいものがあると存じ、これが成功裡に終止されたことを心からおよろこび申し上げる次第であります。また来

年も是非長野県へおでかけくださるようお待ちいたしております。

終りに貴校の御発展を祈念し一生徒に対する御返事といたします。

昭和40年10月26日

広瀬勝雄殿

長野県知事 西沢権一郎

以上の文面に現われているように一生徒の心きいた行為から両県を通じて心の暖まるような交流が始められるとしたら、ただ強行遠足を通しての甲府一高ばかりでなく、広く山梨県民のためにも幸いなことであろう。

尚学校としては御厄介になった関係者一同には礼状を出し感謝の意を表してはいるのだが知事にまでは及ばなかったのである。

―背負った子に教えられると言う言葉がある―

第三十五話

「スタジオ102」の効力があつたと云う話

(昭和40年)

小諸コースでの出来事であった。学校長と私を乗せた巡察車が松原湖付近に差しかけたところ、歩いていた一女生徒から連絡を受けた。それによると「ある女生徒が塩尻の陸橋付近で倒れている」と言うのである。これは大変だとばかり直ちに塩尻に引き返して探してみたが見えないのである。そこで付近の人家を一軒一軒尋ねて廻ったが、遂にその所在をつきとめることができなかったのである。

「これはとんだ見当違いのところを探しているのではないだろうか、もう一度連絡してくれた生徒に確めて見た方がよからう」と言うことになり、その生徒の後を追いつつ、とうとう小海救護所(女子終点地)へ到着してしまった。

幸いその生徒はこの救護所に到着し、休憩していたところだったので、更に詳しく話を聞こうとしたが彼女はすっかり疲れ切っており「細かいところは覚えていない」と言う。これは困ったと思ったが念のために、そこに休憩していた他の女生徒に尋ねたところ、「途中まで一緒に歩いてきたので顔も場所

もよく覚えている」と言う生徒が現われたのである。早速当所にあった自動車を借用し、その生徒を乗せ、居合わせていた某先生に添乗して貰い捜査に向わせたのである。

私共の巡察車はまだ先のこともあるので、当所係に後事を託して小諸終点地へ向ったのであった。それから後の報告によれば、時を同じくして第5号巡視車も現地通過の際この事を知り、付近の人達の協力を求めたところ、その朝は「スタジオ102」で甲一の強行遠足を知り、極めて親切に協力してくれ、はては有線放送によってその所在を確めてもらった結果、その生徒はその後間もなく元気を回復して既に出発したと言うことであった。

小海からの捜査員は途中でこの生徒に会ったので、同行して小海に無事にゴールインしたと言う話であった。

―またい伝第12章、迷える一匹の羊を救う―

第三十六話

全国に紹介された強行遠足と云う話(昭和40年)

「私は、創立58周年記念行事の一環として行われる強行遠足は本年で40回数え、全国にも比類のない歴史を持っているだけに、これを機会にスタジオ102によって全国に紹介してもらったらどうだろうか」と言う話を持ち出したのである。」とある先生は話し出した。「そこで早速後藤教頭がある有力者を通じてNHKへ交渉を開始したところ、結果としてはNHK甲府局で取材して放送することになった。そして甲府局担当者と細部の打合せがなされたのである。そのある日のことである。甲府局取材班が是非現地を見たいと言う申し入れがあったので私が同乗して案内役を務めたのであった。」

「先ず通過人員の多い場所と時刻の関係から取材目標地として若神子、海の口を選んだのである。

最初に若神子に至り現地の状況を視察した上、無線のテストをしたが上々であった。続いて清里駅と国界橋間の見晴しのよいところでテスト。これまた異状はなかった。次は野辺山駅前でテストしたのであるが、ここでは雑音が入り過ぎお互いの会話を聞

き取るのが困難な状態であった。恐らくこれより先は駄目だろうと言うことであったが、ともかく海の口へ直行しようと言うことになった。海の口は千曲川に添った谷あいの町である。羊腸の如く曲りくねった坂道を降り海の口へ到着した。もう昼である。食堂で食事をとった後テストを開始したが全然甲府局からの応答がないので、無線では不可能であることが確められた。従って画像の現地中継は出来ないで、有線による声の実況放送をすることにしたのである。

さて当日（15日）のことである。午後7時には先ずスタート及び校門を出発する光景を、次いで午後9時頃から11時頃までは若神子救護所の生徒通過のシーンを録画したのであるが、時を同じうして記念記録映画撮影とが重なり、夜中にライトに照し出された救護所一帯は時ならぬ賑いを見せたのであった。

翌日の午前7時頃には取材班は海の口へ飛び、生徒の通過状況等の実況放送を流したのであった。

「さてこのスタジオ102は日曜日を除き、毎朝7時25分から開始されているのであるが、当日（16日）の甲府スタジオではテストが何回も繰返されていたのである。山田アナウンサーの顔も心もち上気しており、出演者の広瀬校長、OBの嶋田武氏の顔もいささが緊張していた。私は校長と同道した関係から甲府局に来て、スタジオの2階のガラス越しに、このテスト風景を見守っていた。そして本番になるのを今か今かと待ち構えていたのである。

時が来た。いよいよ本番である。最初に小諸コースの地図を指しながら語るアナウンサーの声が流れてきたのである。この地図によって本コースの概略が説明された後、出発と若神子救護所風景が映し出された。その後校長と嶋田氏との談話があってから続いて海の口からの現地放送があって、ここに無事終了したのであった。

これより先、取材係との打合せのあった際、私は小諸コースばかりでなく大正13年以来今日に至るまでの歴史の概略をも放送してもらいたいと要望したのであるが、放送時間に制約があるので出来ないと言うことであった。

今ここに40回からの各種の統計、コースの変遷等を収録し放送されたとすれば、この効果は倍増されたのではないかと惜しまれてならなかった。

しかしかくしてこの強行遠足は全国に紹介されたわけであるが、その反響として各地から照会の手紙がぞくぞく舞い込んできて、その応待にうれしい悲鳴をあげたものである。

その一例として、遠くは福岡の某小学校の校長が本校に見えられたので、私はその内容につき、いろいろと説明した質問にも応じたのだが、その校長は非常に感激して「来年はうちの先生を見学のため派遣するのでよろしく御指導願いたい」と申し添えて帰られたのであった。

一瞬は千里と言う言葉がある――

第三十七話

可愛い虎の子が戻ったと云う話

「第40回の時であった」と某先生は語り出したのである。

「私は全線巡視係として、小諸付近へ差しかかった時、先頭を行く内藤君（1年生）に逢ったのである。見れば汗びっしょり濡れながら歩いているではないか、これはいかんと咄嗟に私は彼にシャツを買って与えるべく洋品店を探したのであるが、何にしる朝の6時頃である。戸の開いている店が無いのであった。しかし尚も探し続けているうち、やっと戸を開けている店があったのであわてて飛び込みシャツを一枚買ったのである。その際1,000円札を出したが釣がないと言う。そこで私はあちこちのポケットを探してやっと小銭を見つけて払い、そのまま店を飛び出し内藤君の後を追ったのである」と。

「さてその後のことであるが」と先生は笑いながら再び話し出したのである。「私は買物をしようと思って財布をあげると、どうしても1,000円不足しているのである。おかしいなと思っているうち、ふっと先刻の商店のことを思い出したのである。ああそうだ、1,000円札を出したまま受取らずに飛び出して来てしまったことに気がついたのである。そこで早速戻って見るとその時はどこの商店も皆戸を開け

ていたので見当がつかなくなりましたが、それでもやつのこと、その商店を探し当ててその話をしたところ、店の人もそのことをあとで気づき一応警察署へ届けて置いたと言う話であった。とにかくその1,000円札はかくして無事に私の手に戻ったのであった」と言う次第。

「情は人のためならずと言う言葉がある」

第三十八話

長野県人は義理堅かったと云う話（昭和40年）

「小諸コース第40回の時には私は野辺山本部に勤務していたが、その翌朝のことなのだが」と某先生は話し出した。

「俄かに近所の人達が集ってきて、盛んに生徒のために拍手を送り声援してくれるではないか。これにはいささか面喰って一体これはどうしたわけかと怪しんで、その理由を聞いて見ると「今朝のスタジオ102で甲府一高の強行遠足を知った。その中で特に長野県人は親切であると言う談話があったが、それを聞けば私達は家の中にじっとしてはいられなくなったので、かくて応援に駆けつけたのである。」とは近所の人達の弁であった。「おそらく全線にわたってこのようなことがあったのではなからうか」と先生は「スタジオ102」の反響について話されたのである。

第三十九話

強行遠足資料の発見（昭和40年）

昭和33年頃から交通事情の悪化にともない伝統の強行遠足に対する批判がボツボツ学校内外で聞かれはじめ昭和36年には甲府商業高校の女生徒が強歩中に病気のため死亡するなどの事故で強行遠足に対する是非の論議が大きくクローズアップされ世論はもとより職員会議、PTA、同窓会など賛否両論が沸騰した。

私はかねてから伝統の強行遠足は24時間自由に歩けるだけ歩くと言うことで始まり30余回行なわれて来たが、はたして一人平均どれくらい歩いたのだろうか、延軒程にしてどれくらいになったのか、戦争の

影響が歩行距離の上でみられるか、昭和初期と現在との生徒の体力、精神力の差をみる事が出来るかなどの興味と関心を強くもっていたので強行遠足についてのあらゆる資料を整理してみたいと思い、記録をさがしてみたが、昭和16年の第18回の記録を主としたもの、昭和18年の記録を主としたものの強行遠足出版物の他は見当らない。

そこで校長先生にお話しして資料さがしをはじめた。昭和24年以後の成績記録綴りは職員室の教務係の戸棚に大切に保存されていたのですぐに探し出すことが出来たが、それ以前のものはない。そこで古くから本校においでになる先生方にお尋ねしたところ本館東の倉庫（階段下）か図書館の倉庫ではないかとの話なので東倉庫を探してみると昭和21年から23年までのものが出て来た。しかし、それ以前即ち戦前のものは見当らない。図書館も探してみたが、あるいは戦災の折にでも焼失してしまったのではないかと思い意気消沈してしまったが、東倉庫には永久保存の学籍簿など多数の書類が山積しているので、あるいはそれらの中に一緒に保存されていないかと気を取り直して冬休みに入ってから今一度東倉庫の中を探してみると戸棚の一番奥の古い学籍簿の下に大正15年（第3回）から昭和19年までの成績記録綴りが整然と積み重ねられていた。昭和16年の印刷物から予想してどこかに保存されているのではないかとってはいたが、途中一回の紛失もなく全成績記録綴りを発見した時には喜びと共にこれほどまで完全に保存しておいて下さった先生方のご努力に感激するとともに強行遠足を貫ぬく言い現わしようのない精神にただただ頭の下がる思いがした。

尚記録映画については従来昭和17年撮影のものと昭和33年撮影の「若き脚の記録」のみと思っていたが昨秋強行遠足の記録綴りの中から昭和25年「70周年記念強行遠足」というシナリオが出て来たので校内の先生方にお尋ねしたのだがはっきりしないため、石丸午郎先生、小木曾先生にお尋ねして、撮影したことがはっきりしたので図書館を探したところ「70周年記念強行遠足」の外に昭和11年撮影のフィルム（強行遠足の映画ではもっとも古いもの）まで

発見して早速映写したところ非常に立派な記録映画なので喜びかつ驚嘆した次第。

第四十話

回数が途中でズレた理由（昭和40年）

強行遠足は大正13年に始まり昭和40年までの42年間に途中2回中止しただけで40回実施されたわけで昨年までの成績記録綴りも37冊（第1回第2回なし）あるのに本年が39回とはどうしたことだろうと思って調べてみると、第21回（昭和19年）記録綴りの表紙に「戦時中につき盆地一周とす」と記されて回数からはずされている。したがって終戦の翌年21年が21回になり（20年は終戦と食糧事情などのため実施せず）以後33年が33回（34年は台風被害のため実施せず）35年が34回39年が38回となって居た。ところが昭和19年は表紙の記載と中味は異なり、戦時中であつたので（3、4、5年生は学徒動員のため学校に不在）1、2年生だけで小野まで実施しているので本年回数に加えた。そのために回数が一回ずつズレてしまった。戦後の混乱のための手違いと思われる。従って本年は強行遠足の予行は第39回で、本強行遠足は40回で実施した次第である。

第四十一話

車は出て行く埃は残ると云う話

「松本コース時代のこと、私は巡視係として真夜中に唯一人で茅野路切付近を巡視していた時のことであつた。そこへ最高首脳者の乗っていた自動車を通りかかったが、徐行するでもなく、そのまま白い埃を立てて走り去って行ってしまった」とある先生はその時の情景を思い出しながら語り出したのである。

「唯一人真夜中にこんな道を歩いている者は外にはない筈で、嫌でも目につく筈だ。それが職員であろうと生徒であろうとちょっと位徐行して御苦労さんの一言でも言ってくれたらどうだ。とにかくその時は非常に不愉快になって家へ帰ってしまいたくなつた。生徒などは尚更強く感ずるのではないだろうか。だから今までにも自動車へ石を投げられたと言うこ

ともあったのだ」とはやくことひとしきり。御尤もなことである。近年では生徒をより安全に歩行させるためPTA、同窓生より救護、巡視用として何台かの自動車の協力を得て出勤し生徒のよき伴侶として役立てているのである。

—我が身をつねって人の痛さを知れと言う

言葉がある—

第四十二話

歩き方にはいろいろあると云う話

大町方面コース、24時間制の時代のこと。ある生徒の曰く「韭崎まで24時間かかって歩いてよいのか」と。そこである教師反問して曰く。「君はどんな方法で歩こうと言うのか、一歩前進して二歩後退か、または蛇行して歩くのか、それもと兎と亀の話のように、途中でちょっと一休みか」と。

—昔はこのような傑作な人物もいた。—

第四十三話

しじみ汁と草鞋で占ったと云う話

しじみ汁と草鞋と言うと強行遠足には欠くことのできないもので、強行遠足の象徴とも言えるのである。

さて信濃大町方面コース時代のことであるが、いつの年次からか岡谷が本部となりここでしじみ汁を接待したものであつた。初めのうちはこのしじみ汁は特に諏訪湖産のものを買入れたものだったが、その後には諏訪湖産は少くなり、大部分は千葉方面のものを買入れたと言うことである。味は何と言っても諏訪湖産に限るのである。

当時は味噌汁ばかりではなく、途中に於いてはお茶は勿論のこと砂糖入りの甘い麦湯などの接待もしたのであるが、何と言っても岡谷本部のしじみ汁の味はまた格別である。生徒はこのしじみ汁の味力（？）に引かれて遂には歩を岡谷まで伸ばしたものである。ところが早いうちの中身の入ったものであつたが遅くなると貝殻ばかりの代物となってしまうが、それでも汁は本物である。この外ただの味噌汁は台ヶ原、塩尻、松本にもあったのである。

さて生徒は昼には学校を出発し夕方には台ヶ原につき、ここで中休をしつつ味噌汁を吸う。次にはとう峠の難所を越えて麓の塩尻救護所につき、やれやれ一服と言うわけでここでは豆腐の味噌汁を飲み元気を回復、あと16キロある松本を目指して一気に歩くのである。松本でもまた味噌汁である。

ここまで来れば一応は目的を達したと言うので中止する者もあり、まだ頑張っ^てて遠く行くのだと言う者もあり、正に根性の分岐点とも言える要衝の地であった。1杯15円也の味噌汁を2、3杯平げ、身ごしらえを直し、再び元気よく大町方面を目指して出発して行く生徒に対しては最後の激励なる拍手を送りその門出を祝ったものであった。

最近に於いては小諸方面コースでは清里に味噌汁、野辺山本部ではしじみ汁の接待をしているが、長野県側に入ると沿道の人々が牛乳、パン、リンゴ等の接待をしてくれたりしてその親切には心打たれたものであった。

さて次に草鞋のことを語らねばならぬ。現在では草鞋の入手が困難であるとともに、不慣れなものを履くよりも、履き慣れた運動靴を使用するよう指導しているが、従前では強行遠足と言え^ば草鞋はつきものであった。従ってこの草鞋を買うべく方々を駆けずり廻ったのである。遠くは市外地まで買いあさりに行ったものである。その後この不便を補うため購買部で販売したり、また救護所にも若干の用意をして置いたものである。尚驚いたことには甲一の強行遠足をあて込んで沿道で販売する小店も出る仕末であった。

さて当日の生徒の出立ちはと見てあれば軍帽ならぬ制帽にあご紐をかけ軍服ならぬ制服にはゲートル巻の草鞋かけ、肩からは水筒、雑囊を十字にあやなし、腰とは見れば予備の草鞋を3、4足ぶら下げ、手には銃剣ならぬ竹の杖を持ち、まことに颯爽たる姿と見受けたのである。（後代に至り、そのいでたちも次第に変わり、現在では学帽、制服上衣、白ズボン、運動靴という、いたって身軽な服装となったのである）ところでその草鞋のことである。各救護所では履き捨てられた草鞋が山のように残るのである。

それを処理する先生方の苦勞も大変であったが、その反面数の多い程また張り合いがあったと言うものである。岡谷本部に於いても亦然りであった。

ここへ到着した生徒は先ずしじみ汁を飲んだ後少憩し、新しい草鞋に履き換え足まわりを嚴重にして出発して行くのであるから、汁の方は少くなり古草鞋の方はふえる一方である。従ってしじみ汁と草鞋は正に逆比例するものである。この様子で、その年の盛衰を占なったものであると言うことである。まことに今昔の感があるではないか。

第四十四話

世相が変わったと云う話（昭和37年）

「信濃大町コースで夜中の12時に出発した時代のことである。私も生徒の一人として参加したのであるが」と本校のある先生は語り出した。「昔は毎年11月3日の夜12時、4日の零時に出発したのである。従って荊崎は真夜中に通過するのであるから、町の人達は既に深い眠りについていて静かであった。悪戯するにはもって来いのチャンスであった。例えば町の入口にある商店の看板を遠く離れた町はずれに移動させたり、葬儀屋の看板を医者の玄関先へ置いたりした。そして翌朝になって町の人達の驚く顔を想像して悦に入ったものだ。当時は世相もまことにのんびりしていた時代だったし、このいたずらも単なる愛嬌(?)として行われ、年中行事の一つにもなっていたので町の人達もまたかと諦め(?)ていたのかも知れないが、特別文句は出なかったように記憶している」と。

その後時代を経て、正午に出発するようになってからは、いつしかこの行事も忘れかけた形となったのである。ところが小諸コースに変更された最初の年（昭和37年）には出発が夜だった関係から再びチャンスがおとずれたのであった。生徒という者はいつの時代でも同じようなことを考えるものだ。それとも先輩から聞いたのかは不明だが、突然この行事が再現されたのである。しかし今回のものは少々質の悪いいたずらが含まれていた^{ので}忽ち土地の悪評を受け、また新聞にも書き立てられ、強行遠足に一つ

の黒星をつけてしまったのであった。あわてたのは関係者一同である。私は関係者の一人として、来年は少し早めに葦崎を通過させるよう出発時刻を改正した方がよいと考えたのである。

また私は一計を案じて生徒にはこう話したのである。

「塩崎や葦崎の人達は今年の悪戯にこりて、来年は警防団を組織し新維棒を持って警戒しているそうだ。今度いたずらすると殴り殺されてしまうぞ」と、いささか冗談を交えた話をして聞かせた次第である。このことがあったからかは知らぬが翌年からは再びこのような不仕末はなく、立派な強行遠足が出来たようになった。

—先んずれば人を制すと言う言葉がある—

第四十五話

土方と間違えられたと云う話

「小諸コースの道路調査に出掛けた時のことであるが」と前置きして本校のある先生は次のように語り出した。

「調査員と私と外に2人の先生で自動車に出掛けた。途中を調査しながら弘法坂を登り切った平坦なところへ来ると、後から来た自動車が私達の車の左側をすれすれに猛烈な勢いで追越して行った。そこで至って気の強い某先生が「気をつけろ」と大声で怒鳴りつけたのであった。

私達が三軒家へ着くと、そこに先刻の車が停車していて私達を待ち構えていたのである。見ると土方風の屈強の男達であって、腕をまくりあげ入墨をちらつかせながら凄んで言うのである。

「お前さんも同業のようだが、ちとばかり仁義に欠けちゃいねえか、俺達は齊藤組のもんだが、文句があるなら言ってみな」と。正に風雲急を告げんとしていたが、私は齊藤組と言う言葉を聞いて、咄嗟に彼等にこう言ったのである。「ああ君達は保文君の組の者か、あの男ならよく知っている、よろしく言ってくれ」と。

これを聞いた彼等の狼狽振りはまことに滑稽千万であった。今までの勢いはどこへやら、退屈の体で

私達の目の前から姿を消していったのであった。

「しかしあの時は全く恐かったが、あとで可笑しいやらで何となく胸がスーッとした」と笑いながら語ったのである。

因に齊藤保文君はその先生の親しい教え子で、ボクシングの選手であり、その兄が齊藤組の社長である。

—虎の威を借る狐と言う言葉がある—

第四十六話

文明の利器は大いに活用すべしと云う話

いつの時代からか全線巡視係と言う勤務があった。これは名の通り全コースを巡視すると共に事故者の救護収容、交通指導、連絡等に当たるのである。まだ最近のように自動車を利用しなかった時代には、自転車であったりまたは汽車、バス、徒歩を折り込んで巡視したものである。しかも一休一睡もせず動き廻ったのである。もっとも生徒も徹夜で歩くことを考えれば我々とても安閑としていられないのである。然してこの巡視の最大の任務は何と言っても事故者の救護収容にある故、自転車などでは収容することは不可能であり、ましてや徒歩の場合は運搬すら困難である。急を要する事故者の場合はまことに不便であった。

かつては自動車利用は生徒に悪感情を持たせるものであると、無用の長物視し且つは生徒に遠慮して利用されなかったのである。然しこの悪感情の云々は自動車の利用如何によるものであって近代の文明の時代にこの利器を利用しない法はないのである。殊にこの機動力を利用することは救急を要する場合に於いては然りである。最近に至りこの意義を理解する者が多くなってきたのは何よりである。特に安全歩行を建前とするこの強行遠足には、学校側からは勿論のこと、PTA、同窓生の方々からの協力により何台かの救護車が動員され、万全の配備がなされているのである。

さて一方運転者にとっては大変な労力である。一見車に乗っているのに楽に見えるが決してそうでは

ない。長いコースを徹夜で走り廻る上に安全運転で緊張また緊張の連続でその神経疲労と言うものは並大抵なことではなく経験のない者には想像がつかないだろう。巡視にあたっても決してスムーズに行われたわけではない。ある時はパンクしたり、エンジンの調子が悪く油だらけになって応急修理をしたり、または相手の車に接触されその修理の交渉に手間どったり或は事故者の連絡を受けて出動したり、救護所の苦情を調整したりするなど、いろいろな間の手が入ったりするのである。

ところで、どの勤務も楽なものはないのであるが、私も幾度か経験した一人であるが、その苦勞は人一倍味わっているのである。最近では体の不調から運転はせず、もっぱら若い元気のある先生方をお願いしている次第であるが、その元気のある若い先生方でさえこう言っているのである。

「勤務が終って自宅に帰り着くや否や、いままでの緊張が弛み俄にがっくりときて、それこそ無我夢中で眠りこけたものだ」と。

——論より証拠と言う言葉がある——

第四十七話

昭和にも怪談があったと云う話

「疲れた足を引きずりながらやうとある救護所に着いた。やれやれと言う思いで「〇〇まであと何キロメートルありますか」と聞くと「6キロある」と係の先生が答えてくれた。それに勇気づけられてまた歩き出したが途中でまた救護所に着いたので、同じことを聞くと今度は「7キロある」と答えた。これには泣かされたものだ。歩けば歩く程道が遠くなるのである。まさに昭和の怪談である。

「この道はいつかきた道、ああそうだよ遠い遠い道だよとからたちの花の文句をもじって、こう歌いながら、最後の元気をふりしぼって、それでも無事に〇〇へ到着することができた」とはある先輩の懐しくも怪しげなお話の一席。

第四十八話

まことに遺憾に存じますと云う話

暗黒の中から数流の白い襪が忽然として電灯の光茫の中に現われた。

まさかこの時刻にデモ行進でもあるまいとじっと目を凝らしてよくよく視ると何と生徒の集団であった。出発の際には影も形も見えなかった襪である。この襪には「風林火山」「甲一生頑張り」の文字が見え、なかなか勇ましい光景であった。だが私は直ちに彼等からその襪を押収したのである。まことに無情のようではあったが私はこれでいいのだと考えたからである。何故ならば、真剣に歩こうとする生徒は出来る限りの軽装で、歩き易い体勢を整えているのである。従ってこのように襪を持って果たして自己の最善を尽し得るかどうか。またこのようなことが強行遠足の真意に叶うことかどうか、或はこのようにことを許したならば、来年からは恐らく奇を衒う生徒が我も我もと持ち歩くようになり恰かもお祭り騒ぎに情するであろうことを恐れたからである。私は強行遠足の長い歴史のなかで未だ嘗てこのようなことを見たことも聞いたこともないのである。

私は中学時代決して優秀(?)ではなかったが劣悪でも無かったと自認している。その時代の私の気持も彼等とは恐らく五十歩百歩の類であったろう。だから彼等のそう言う気持がわからぬでもないが、逆言すればわかるが故に尚このようなことは許せないのである。また巡察係としての立場から見ても尚更のことである……。

私はここを巡察車で出発し次へ前進して行ったがその途中でまたまた襪を持った生徒が道端に休んでいるのを発見しここでも襪を押収したのである。この時この生徒は言ったのである「僕等は仲間の意気を盛んにさせるため、また応援をするため持ってきたのである」と。

然しながらこの生徒は氣息奄奄として道端にエンコしているのである。而も殿の方である。これではどちらが応援してもらっているのかわからぬ状態ではある。他の生徒は彼等の前を通過するのだが唯一人として彼等を一顧だにしない。寧ろ侮蔑の目で見ても過ぎ去って行くのであった……。

またこの生徒は言うのであった「酒を飲むことよ

り、この方がまだよいことではないか」と、然しこれは「目鼻鼻を笑う」の類である。また「他校でもやっているではないか」とも言うのである。私は「他校の真意が何処にあるかは知らぬが甲一には甲一としての長い伝統がありまた精神が存する。敢えて他校の真似をする理由は更々に無いのである」と。

このようなことがあったが、この強行遠足が無事に終しまを告げたある日のこと、私は彼等を職員室に呼び、その真意を糾し、その非を問うたのである。ところで恐らくこの問いに対して反発するだろうと予想していたところ、そのような気配もなく素直にその非を悟り、あやまちを詫言て帰ったのであった。流石は甲一生である。物わかりは良かったのである。これならば来年の強行遠足は立派に出来るだろうと一安心したのである。

「甲一の強行遠足はこのようにきびしいのである。だからこそ40回の歴史が維持されてきたのだ。またこのようなきびしさが今後の強歩を継続させて行ける所以のものだ」と〇〇先生は語ったのであった。

一親の心子知らずと言う言葉がある—

第四十九話

あんよは下手だったと云う話

「人間歩けば多少疲れるのは当然だが、然し夜中を通して歩く強行遠足の疲労は格別なものだ。私が松本まで行った同級生と行を共にした時の話である」とある先輩は語り出した。

「始めは相当のスピードで歩いたので国界橋あたりで夜があけ、東の空があかね色に染り寒気はひとしお身に沁みだしたことを覚えている。さて前の者をもぐんぐん追抜いて行ったのだが、元来私は歩くことは下手な方であるから遂に富士見で参ってしまい、ここで友と袂を分ち一番の上り列車に乗り込んだのである。途中汽車の窓から沿道を見るとまだぞくぞくと歩いて行く仲間が見えた。そこでこのまま帰ったのでは申し訳ないと思い、窓から首を出して応援をしてやったのである。まことにいい気なものである。

いよいよ甲府駅へ着いた。下車するのだが歩き出

す時の足の痛いこと痛いこと。陸橋をやつとの思いで上りまた下りる時のつらさ、手すりにしがみついで下りたものだ。私の家は上府中だったので、駅からびっこを引きながらまことにみじめな格好で朝日通りをのぼったのであるが、丁度運悪く通勤の連中と向い合う形となった。彼等は私の格好を見てげらげら笑うのである。杖にぶら下がるようにして腰をかかめ、びっこを引きながらよたよた歩く姿は確かに立派には見えないのであろう。普通なら10分位かかる距離を凡そ1時間位かかってやっと家の玄関にたどり着いたが、その瞬間気がゆるんでぶっ倒れてしまった」と彼はまだ足でも痛むかのような顔をして話してくれたのである。

—限り身のある力ためさんと言う歌がある—

第五十話

強行遠足の母胎（大正末期）

大正末期の甲府中学の年中行事は、4年の関西旅行と3年の岳麓方面への剛健旅行とであった。関西旅行は1年入学の時から積立金をし、文字通り指折り数えて待ちこがれるのに対して、剛健旅行の方は非常な決意のもとにとりかかったのであった。と言うのは第1日に右左口峠→女坂→精進（泊）2日目には青木ヶ原を貫通して船津泊り、3日目は8号線の開通以前のこととて旧御坂峠越えに石和から帰甲したので、この2泊3日の旅がすべて徒歩で、乗物を利用したくてもどうするわけにもゆかなかった。だから若し途中で崩れ様ものなら、本人は勿論一行に一方ならぬ迷惑をかけることになる。だから一端出発したら石に噛じりついてゴールまではたどりつかねばならなかった。引率の先生も健脚だったが、生徒も悲壮な決意で参加したものであった。学校側も健脚鍛練の旗じるしの下に実施したし、生徒も学校側の主張を遵奉して疑わなかった。そして3年でこの関門をくぐりぬけることによって、関西旅行が出来ると言う風に解釈していた。

私達の岳麓旅行も3年の5月中旬だったと記憶している。樹海の新緑も残雪の富士山の姿も、美しくはなかったが、それよりもなによりも、女坂の

には全く嘘のような静けさに立ち返ってしまった。みんなは無事に松本目指して門出したのである。校門の前には無残にも踏みにじられた一個の弁当を除く他は、全く無事に長途の強歩に旅出たのである。ここに私は学校当局の並々ならぬ苦心の跡を発見した。若し文字通り同時に校門を出発させたならば必ずや若干名の怪我人を出したであろうが、主任の先生方が一々名前を呼びながらカードを渡されるあの僅かな時間—私の時計では僅かに1分45秒であったが—あの間隙があればこそ、みんなが無事に出発出来たのだと思うと、^{うさぎ}道は20年間の尊い経験に頭が下るのである。

我々は行事をやるごとに常に感じることはあるが—どんなに小さい行事をやるにも必ずその裏には地下百尺に働く人々の眼に見えない御苦労を見逃すわけにはゆかない。私はこの甲中の強歩遠足の遂行についても其陰に孜々として没我の境地で働いて居らる先生方の並々ならぬ御苦心のほどを見逃すわけにはゆかないのである。実施前の実地調査、地方官憲其他との交渉、企画、湯茶、味噌汁、うどんの心遣等々考えれば考えるほど際限がない。これというのも一重に先生方が校長を中心として一致団結して居られればこそやれる事なのである。更に考えさせらることは、同窓生諸子の援助と市民の方々の絶大なる声援とである。20年の栄えある行事とは云え、万一これ等の方々の並々ならぬ御後援がなかったならば、私はこれほど整然と、これほど旨くいかないだろうと思った。

第五十五話

かくして長途に上る話

天候係の予報及び天気図の研究によって、いよいよ11月4日に挙行と決定すると、職員も生徒も3日の式後帰宅就寝する。電燈灯る頃になると、交通不便の者は、漸次学校控所の特設休憩所に集まる。23時半頃には制服制帽に巻ゲートル、草鞋姿凛々しく、弁当を背負い杖を握った1千の健児が、電燈煌々たる校庭に集う、見送りの父兄も亦、頗る多い。

第一鐘によって所定の位置に集合し、国民儀礼を

行い、第二鐘はは4日午前零時！ 鳴りひびく日新鐘、轟く陣太鼓、明るい篝火、生徒はカードを各組の監督から受けると、それをポケットに入れる暇も惜しんで握ったまま校門を走り出る。興奮した生徒の群、写真班のフラッシュ、救護自転車の出発、こうした雑沓を以て、この大群は関屋往還を西進する。健児達は北斗星を仰いで西へ西へとひた歩み—見送りの父兄もほつほつと去る、やがて学校は元の闇の中に寂然と立っている。

第五十六話

草鞋と竹の杖でさっそうと

昭和17年版によれば、「制服、制帽、靴、ズック靴または草鞋（下駄は不可）を穿き、ゲートル着用、下着にて防寒の用意をする事。マント外套は不可。弁当は二食以上必ず携行すべし。救急薬品はなるべく持参すること。手袋、油紙（洋傘）も携帯する」とあり、「下駄、マント」をとくに書き出している。

昭和30年の「強行遠足注意事項」では、「軽装のこと、白ズボン着用、防寒具としてジャケット、えりまき、手袋を必要とする。制帽は必ず着用、生徒らしい服装をすること、はきものはわらじ、ズックがよい」とあり、「わらじ」も残っている。

大正末期、つまり初回のころは「制服制帽、ゲートル巻、握り飯を首に巻きつけ、草鞋履きで腰には予備草鞋2足をぶらさげるといったまことに勇ましい姿」であったという記録。また、「制帽にあご紐をかけ、制服にはゲートル巻の草鞋がけ肩からは水筒、雑糞を十字にあやなし、腰はとみれば予備の草鞋を3、4足ぶら下げ、手には竹の杖を持ちまことに颯爽たる姿」との記述がある。

第五十七話

夜光テープとタスキの話（昭和50年代）

昭和52年、白田警察署長を校長先生がごあいさつに訪問した折に、夜間の交通量が増えだした、安全対策のために白ズボンは当然着用ですが、帽子と白ズボンに夜光テープを付けて欲しいと要請があり、当時は紙の夜光テープしかなく、それを縫い付けて

行なった。

昭和56年臼田警察署交通課長から、本番5日前に呼び出しの連絡があり、道路使用許可を許可する条件に、夜光反射付きのタスキを全員着用義務を言われた。さあ、大変だ！ 係は直ちに県内の業者に照会したが取り扱っている問屋がわからず、結局、臼田の交通協会の紹介で松本市の業者に依頼し、1,500本を前日学校に運んでもらい配布に間に合わせることができた。今日のような宅配便はない時代でした。

第五十八話

OBが国鉄を動かした話（昭和57年）

昭和57年の夏、本州直撃の二つの台風は長野県を縦断し千曲川が氾濫して、小海線が5ヵ所で水没や路肩崩落で線路が欠損したり宙吊りになった。国鉄中込運輸長室の連絡では、国道141号線は不通箇所ゼロだが、松原湖駅から川上駅の間で3ヵ所は被害が大きく、復旧には早くても3か月、11月上旬までかかるとのこと。校長先生に報告すると「終点は変わらず、様子を見て判断する。」と指示がでた。男女が小海線に代えてバス運送となると膨大な出費になるので頭を抱えてしまった。

が、その工場がなんと順調に進み2か月で完成したのです。国鉄中込運輸長室にあいさつに行った折「あなたの学校の同窓生は凄いい力を持っている人がいるのですね、小海線の赤字路線がこんなに早く工事されるとは不思議ですよ」この不思議な力を貸してくれた人は誰だったのでしょうか。事実いたのでしょうか、校長は知っていたのでしょうか、今でも解らない「終点は変わらず」の校長先生の決断の心？

第五十九話

墓地に気をつけて！と云う話（昭和50年代）

昭和52～58年代は、コースの40%が未舗装で、国道141号線が道路工事や佐久市中込周辺の都市区画整備に伴ない、コースや検印所がよく変わった。昭和58年どう迂回路を考えても、千曲川沿いの墓地を巻いた道を通ることになった。暗闇のため誘導係を

男子教師が担当した。生徒たちは回りが暗く墓地とは解らず平気な顔をして通過、係の先生は不気味で怖さを堪えての立番にたまにかねて「右手はお墓！ 気をつけて！」と大声をあげて誘導したとの報告があった。それにしても大変な不評をかったコースでした。

第六十話

松原湖～小海の迂回路の話（昭和60年）

例外中の例外だろうが、昭和60年に出発後、先導車が夜間になってから、141号線に長距離便大型トラックの交通量が多すぎて危険と判断し、急遽関係する検印所主任と本部と共に協議し、少しでも安全路を取るため、松原湖～小海間を迂回路へと離れ業をした。台風で国道18号一車線走行の影響で混雑したためだったのだ。

第六十一話

道路清掃の話（昭和61年）

昭和61年、人がほとんど利用していない市場坂（市場～海の口間）歩道の空き缶拾いと雑草除去を行なうため、生徒・職員の清掃ボランティアを100人程募り行なった。校長の陣頭指揮や地元の人達の声援もあり、張り切って行ない、4時間の作業をし、バスにゴミ袋をどっさり積みこみ帰校した。

第六十二話

氷点下の気温と濃霧の話（昭和61年）

昭和61年かいじ国体を成功させるために、強行遠足をいつ行うかを調査するため、9月と11月に野辺山他3ヵ所で気温と交通量を昼夜かけて調査した。9月下旬は濃霧がひどく、11月は氷点下の気温と濃霧に露がおりていた。条件は厳しいが11月上旬に実施が決定し心配したが、当日は暖かく好条件で胸をなぜ下ろした。

第六十三話

垂れ幕のこと（昭和63年）

昭和63年度も強行遠足が近づくと、恒例の垂れ幕

が各クラスから、校庭に向けて何本も吊され出した。今はその数が少なく、寂しい感がするが、その因の一つに、私が担任をしたクラスの「下血しちよし、終点まで」という垂れ幕であった。当時、昭和天皇が病に伏せられ、連日マスコミでは陛下の病状が報じられ、その中で「下血」の文字と言葉が氾濫していた。現在、高知県知事の橋本大二郎さんがNHKの宮内庁記者として、陛下の病状をソフトにテレビで報道していたので、覚えている人も多だろう。

この垂れ幕が出発式の時、テレビに撮られて県下に流された。案の定この反響は大きくて、その晩学校に宿直の係に日本をこよなく愛する方から、「とんでもないことを書く不届きな者がいる学校だ。このように不謹慎なことを生徒が書くとは思えない。恐らく指導した教員がいるはずだ。その者を出せ。」と言った内容の電話が数本かかって来た。そこで、宿直の係は驚いて野辺山の本部に連絡を入れて、望月校長に連絡をとった。この事件は強行遠足が終わっても、しばらく尾を引き、校長の所へは何回かの抗議の電話と、直接やって来て「その担任を出せ」との強い姿勢であった事を、この事件が収まってから聞いた。

それにしても陛下を日々敬愛する私の生徒が、このような事を書くとは皮肉である。たとえ悪気がなく、パロディのつもりで書いたとはいえ、このように大きくなって、あちこちに迷惑をかけたことは、指導者として申し訳ない事で、個人的に謹慎をしばらくしていた。

ところで、望月校長はこの事実を私に直接話されもせず、当然怒りもせず、後で噂で知った時、望月先生に伺ったところ、やはり何も言わず、笑っていたことが強く印象に残っている。立派な指導者とは、部下の不始末を自分のこととして、責任をとることなのかと深く敬服した。

第六十四話

中止する方がはるかに大変だったと云う話（平成2年）

平成2年強行遠足中止で大揺れ。生徒会代表が校長室前に座り込み、一時は騒然となったが、臨時生

徒総会の中で校長から中止の経過と理由を説明して終結をさせた。

しかし、翌週の土・日曜日を使い、3・2年生男子生徒10数人の有志グループが、何組かに分かれて小諸に向かい、一部保護者が車で付き添いながら行くグループもあるとの情報が学校に入った。万一事故があれば強行遠足が出来なくなるぞと、危機感を感じた教職員代表とPTA役員代表がコースに出て「次年度に継承する行事を君たちのために潰すな」「公道でしょう。歩いて行けないのですか」「進路の推薦に影響しても構いません、せめて清里まで行かせてください」と涙で訴える生徒を説得し、理解させ帰宅させた。中には野辺山や白田まで列車で行って歩きだしたグループも出たようだ。3年生にとってはこれほどまでして行きたい小諸道でした。

その後、沿道の関係者から小諸や白田に40人以上の数の生徒が来たことを伺った。判断の仕方に一矢打たれ、考えさせられる年だった。

第六十五話

トン汁がシジミ汁に負けたと云う話

野辺山本部の2つ先にある「海の口」検印所では、その昔、と言ってもつい数年前までのことですが、それはそれは美味しいトン汁が出されていて、生徒にはもっぱらの評判でした。明け方の冷気で消耗しきった体を内側から暖めてくれる一椀のトン汁は、お母さんたちの愛情が染み込んでいて、まさに値千金だったようです。生徒たちは、2～3時間前に昔ながらのシジミ汁に舌鼓を打ってきたはずなのに、初めて汁物にありつけたかのようにモノすごい迫力で舌を打ち続けていました。

トン汁かシジミ汁か——甲論乙駁さまざまですが、人気を二分する程に騒がれ始めたトン汁を、本家本元のシジミ汁が許しておく訳がありません。とうとう手厳しい断罪の命が下り、多くの一高健児に惜しまれながらも、海の口から姿を消す羽目になりました。翌年からは、打ってかわって空っ茶とアメン玉というきわめて質素な接待に成り下がってゆきました。強行遠足の原点を考えれば、至極当然の運命だ

とも言えましょう。それにしても惜しまれていたトン汁でした。

第六十六話

「まぼろし」の蜂さわぎ（平成7年）

それはちょうど三軒屋検印所の設営作業が終わった午後3時ころであったろうか。コースの巡視の父兄から、三軒屋からちょうど2km手前の左側頭上4mのところに直径30cmくらいのスズメバチの巣があると報告があった。走らない人にとっては心配なく、走る人にとっては不安になるような高さであった。

本部に連絡をすると、そちらで対応してくれとのことであった。みんなで相談をしていると、毎年世話になっている小清水さんが、蜂とり名人宅に電話をしてくれた。名人は、夜来てくれるだろうとのことであった。夜また電話をすると、朝女子が走るので今取るとあぶないとのことと蜂とり名人との話は終わってしまった。このころになると、男子が検印所を通過しはじめ、すっかり蜂の巣のことはわすれてしまった。朝、巣の手前に父兄に立っていてもらい女子に静かに通ってもらおうと思っていた。昼間巣を見ている父兄の中には心配で朝まで対応を考えていた人がいたそうだ。女子が、ワイワイ、キャーキャーと通って蜂が静かに通してくれるとは思っていなかったそうだ。

朝みんなで相談をすると中の1人が、トンネルを作る案を出した。小清水さんの家のビニールハウスの鉄パイプとビニールシートで作ることになった。巣から30mくらいの所でよく見ると蜂が5,6匹飛びまわっていた。パイプを持って近づくと、動きが急にはげしくなった。名案もこれまで。何年か前に雨のため中止になったことが頭に浮かんできた。「蜂の巣で中止」長い歴史の中の1ページになるのかとふと思った。しかし、「自動車で生徒を運びましょう。」の一言で父兄の顔が急に明るくなった。女子全員で、車5台で各々20回も運べばすむのかと思った。

距離にして合計40kmくらいになった。終しま後、今までの走行距離の累計はどうなるのかと考えてしまった。しかし、強行遠足なら強行突破の距離を入

れてもおかしくないだろうと父兄に感謝しているころである。

第六十七話

野辺山貝塚？

10年ほど前は、若い男性教員の勤務場所は野辺山検印所と決まっていた。それは、野辺山名物しじみ汁の殻を埋める穴を掘る為であった。しかし、掘り始めると、いたる所からしじみの殻が現れ穴掘り作業は難航した。強行遠足の歴史を感じるとともに、私が強行遠足に携わった第1歩であった。

第六十八話

検印カードがない！（平成6年）

第68回強行遠足での出来事。野辺山本部勤務の教頭先生が、この年初めて女子のスタートに参加することになった。本部勤務であった私は、教頭先生を車に乗せて女子出発地点の須玉小へ向かった。いざスタート。ま・・・まてよ検印カードがない。検印カードのないまま女子はスタートしていった。・・・検印カードは次の津金検印所で全員無事配布しました。（今だからいえる話）

第六十九話

野辺山の気温調査（昭和61年）

今から10年前、かいじ国体の為、第61回強行遠足は11月に実施される事となった。その前年11月に野辺山の気温調査を行うことになった。10月でも野辺山は、夜から明け方にかけてかなり冷えこむ。11月にはたして強行遠足が実施できるのか、野辺山付近の気温はどのくらいになるのかが話題となった。そして私は気温調査の命を受け同僚（残念ながら女性ではなかった）と二人で気温調査に出かけた。最高地点の踏切の近くで温度計を外にぶら下げ数時間おきに気温を計った。そして夜が明けた。かなりの冷えこみであったように記憶している。生徒には凍死の恐れもあると脅かした。・・・

そして第61回強行遠足当日は非常に暖かな日であった。

第七十話

これも強行遠足の功德？

S君は1年生の63回大会で1位で小諸到着、2年生の64回大会では、さらに速い記録で1位で小諸に到着した。3年生の時は、3年間連続1位到着をめざして準備と訓練を重ねた。

満を持して待ちに待った大会は、雨天のため中止となった。次の日は奇しくも快晴となった。思いをこめてきたS君の気持ちはどうしても納まらなかった。次の日定められた時間に出発した。強行遠足に定められた規則と注意を守り、同じ学生服・白ズボンの古風ないでたちで一人黙々と走った。2年生の時の記録を塗り替える所要時間で小諸に到着した。

翌日M新聞地方版に写真入りのトップ記事でS君が紹介された。

2か月後、S君はこの記事の威力もあってかA大学の推薦入試に見事合格した。S君自身がM新聞に取材要請したとかしなかったとか、しばらく話題になったが、定かなことはわからない。



佐野智子 画